

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(16)

－畑地帯総合整備事業(担い手育成型)手久津久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

崩り遺跡 I

第2分冊 中世遺構・図版編

2018年1月

喜界町教育委員会

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（16）

－畑地帯総合整備事業（担い手育成型）手久津久地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

崩り遺跡Ⅰ

第2分冊 中世遺構・凶版編

2018年1月

喜界町教育委員会

第2分冊 目次

第2分冊

第Ⅲ章 調査の方法と成果

報告書抄録…………… 221

第4節 発見された中世の遺構・遺物……………	1
（1）掘立柱建物跡（SB）……………	6
（2）土坑墓……………	36
（3）土坑（SK）……………	38
（4）焼土跡……………	42
（5）溝状遺構（SD）……………	44
（6）畝状遺構……………	45
（7）石列……………	47
（8）製鉄関連遺構……………	48
（9）遺構内・包含層からの出土遺物……………	50

第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 崩り遺跡製鉄関連遺物について……………	83
第2節 崩り遺跡出土ガラス玉の調査……………	86
第3節 崩り遺跡の平成23～24年度調査で採取 された脊椎動物遺体出土の動物遺体……………	87
第4節 崩り遺跡出土の植物遺体分析……………	122
第5節 崩り遺跡出土炭化物の放射性炭素年代 測定（AMS法）及び樹種同定……………	133
（1）土坑墓1号……………	133
（2）焼土跡05号, 掘立柱建物跡6号P16(P606)……………	137
（3）フローテーション出土炭化物の放射性 炭素年代測定……………	141

第Ⅴ章 基礎資料

ピット内出土遺物一覧……………	147
包含層出土遺物一覧……………	152
1/200 詳細遺構配置図……………	153

第Ⅵ章 まとめ…………… 163

第1節 縄文時代の遺構・遺物……………	163
第2節 中世の遺構・遺物……………	175
第3節 総括……………	181

写真図版……………	185
-----------	-----

第2分冊挿図目次

第148図	基本層位略図	1	第191図	SB38実測図	32
第149図	崩り遺跡調査区略図	1	第192図	SB39実測図	33
第150図	崩り遺跡調査区全体図	2	第193図	SB40実測図	34
第151図	崩り遺跡北側詳細図	3	第194図	SB41実測図	35
第152図	崩り遺跡中央部詳細図	4	第195図	土坑墓位置図	36
第153図	崩り遺跡南側詳細図	5	第196図	土坑墓1号実測図	36
第154図	SB01実測図	6	第197図	土坑墓2号実測図	37
第155図	SB02実測図	7	第198図	SK17実測図	38
第156図	SB03実測図	8	第199図	SK18実測図	39
第157図	SB04実測図	9	第200図	SK19実測図	39
第158図	SB05実測図	10	第201図	SK20実測図	39
第159図	SB06実測図	11	第202図	SK21実測図	39
第160図	SB07実測図	12	第203図	SK22実測図	39
第161図	SB08実測図	13	第204図	SK23実測図	39
第162図	SB09実測図	13	第205図	SK24実測図	40
第163図	SB10実測図	14	第206図	SK25実測図	40
第164図	SB11実測図	15	第207図	SK26実測図	40
第165図	SB12実測図	16	第208図	SK27実測図	40
第166図	SB13実測図	16	第209図	SK28実測図	40
第167図	SB14実測図	16	第210図	SK29実測図	40
第168図	SB15実測図	16	第211図	SK30実測図	41
第169図	SB16実測図	17	第212図	SK31実測図	41
第170図	SB17実測図	17	第213図	焼土跡01号実測図	42
第171図	SB18実測図	18	第214図	焼土跡02号実測図	42
第172図	SB19実測図	19	第215図	焼土跡03号実測図	42
第173図	SB20実測図	19	第216図	焼土跡04号実測図	43
第174図	SB21実測図	20	第217図	焼土跡05号実測図	43
第175図	SB22実測図	21	第218図	焼土跡06号実測図	43
第176図	SB23実測図	22	第219図	焼土跡07号実測図	43
第177図	SB24実測図	22	第220図	焼土跡08号実測図	43
第178図	SB25実測図	23	第221図	焼土跡09号実測図	43
第179図	SB26実測図	24	第222図	SD16号実測図	44
第180図	SB27実測図	24	第223図	畝状遺構1号～17号実測図	45
第181図	SB28実測図	25	第224図	畝状遺構18号～35号実測図	46
第182図	SB29実測図	26	第225図	石列1号実測図	47
第183図	SB30実測図	26	第226図	SK32（製鉄関連遺構）実測図	48
第184図	SB31実測図	27	第227図	SD17（製鉄関連遺構）実測図	49
第185図	SB32実測図	28	第228図	SB03出土遺物	50
第186図	SB33実測図	28	第229図	SB06出土遺物	50
第187図	SB34実測図	29	第230図	SB07出土遺物	50
第188図	SB35実測図	30	第231図	SB10出土遺物	50
第189図	SB36実測図	30	第232図	SB13出土遺物	51
第190図	SB37実測図	31	第233図	SB18出土遺物	51
			第234図	SB19出土遺物	51
			第235図	SB21出土遺物	52
			第236図	SB22出土遺物	52

第237図	SB25出土遺物	53	第278図	崩り遺跡平成23～24年度調査において ピックアップによって採集された魚類遺体の組 成 (NISP比)	103
第238図	SB26出土遺物	53	第279図	崩り遺跡平成23～24年度調査において ピックアップによって採集された魚類遺体の組 成 (MNI比)	103
第239図	SB27出土遺物	53	第280図	崩り遺跡平成23～24年度調査において 水洗選別によって採集された魚類遺体の組成 (NISP比)	117
第240図	SB28出土遺物	53	第281図	崩り遺跡平成23～24年度調査において 水洗選別によって採集された魚類遺体の組成 (MNI比)	117
第241図	SB38出土遺物	53	第282図	暦年較正結果	139
第242図	SB39出土遺物	54	第283図	詳細遺構配置図全体図	153
第243図	SB40出土遺物	54	第284図	詳細遺構配置図 (1)	154
第244図	土坑墓1号出土遺物	55	第285図	詳細遺構配置図 (2)	155
第245図	土坑墓2号出土遺物	55	第286図	詳細遺構配置図 (3)	156
第246図	SK18出土遺物	56	第287図	詳細遺構配置図 (4)	157
第247図	SK20出土遺物	56	第288図	詳細遺構配置図 (5)	158
第248図	SK25出土遺物	57	第289図	詳細遺構配置図 (6)	159
第249図	石列1号出土遺物	58	第290図	詳細遺構配置図 (7)	160
第250図	焼土跡01号出土遺物	58	第291図	詳細遺構配置図 (8)	161
第251図	SD17 (製鉄関連遺構) 出土遺物 (1)	59	第292図	詳細遺構配置図 (9)	162
第252図	SD17 (製鉄関連遺構) 出土遺物 (2)	60	第293図	平面・底面形状の重複状況	172
第253図	ピット内出土遺物 (1)	61	第294図	土器の出土傾向による遺構の色分け (遺跡南側)	173
第254図	ピット内出土遺物 (2)	62	第295図	掘立柱建物跡主軸方向 (北側)	175
第255図	ピット内出土遺物 (3)	63	第296図	崩り遺跡北側遺構詳細図	175
第256図	ピット内出土遺物 (4)	64	第297図	崩り遺跡中央部遺構詳細図	176
第257図	Ⅲ層出土遺物 (1)	65	第298図	掘立柱建物跡主軸方向 (中央部)	177
第258図	Ⅲ層出土遺物 (2)	66	第299図	掘立柱建物跡主軸方向 (南側)	177
第259図	Ⅳ層出土遺物	67	第300図	SB床面積 (中央部範囲1)	177
第260図	Ⅵ層出土遺物 (1)	68	第301図	SB床面積 (中央部範囲2)	177
第261図	Ⅵ層出土遺物 (2)	69	第302図	SB床面積 (南側)	177
第262図	Ⅵ層出土遺物 (3)	70	第303図	崩り遺跡南側遺構詳細図	178
第263図	Ⅶ層出土遺物 (1)	72	第304図	中世主要遺物	180
第264図	Ⅶ層出土遺物 (2)	73	第305図	白磁地区別内訳	180
第265図	Ⅶ層出土遺物 (3)	74	第306図	青磁地区別内訳	180
第266図	Ⅶ層出土遺物 (4)	75	第307図	カムイヤキ地区別内訳	180
第267図	炉壁863	83	第308図	喜界島阿伝地区に見られる屋敷構造	181
第268図	流動滓	84			
第269図	出滓孔付近の流動滓	84			
第270図	出滓孔付近の流動滓 (断面)	84			
第271図	空洞・発泡痕跡のある流動滓	84			
第272図	中・南九州の古代・中世製鉄炉	85			
第273図	崩り遺跡製鉄炉の復元略図	85			
第274図	崩り遺跡M-3区Ⅲ-a層出土ガラス玉	86			
第275図	蛍光X線スペクトル	86			
第276図	崩り遺跡平成23～24年度調査において ピックアップによって採集された脊椎動物遺体 の組成 (NISP比)	103			
第277図	崩り遺跡平成23～24年度調査において ピックアップによって採集された脊椎動物遺体 の組成 (MNI比)	103			

表目次

第112表	SB01計測表	6	第155表	焼土跡一覧	42
第113表	SB02計測表	7	第156表	SD16観察表	44
第114表	SB03計測表	8	第157表	石列1号観察表	47
第115表	SB04計測表	9	第158表	SK32（製鉄関連遺構）一覧	48
第116表	SB05計測表	10	第159表	SD17（製鉄関連遺構）観察表	49
第117表	SB06計測表	11	第160表	崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(1)	76
第118表	SB07計測表	12	第161表	崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(2)	77
第119表	SB08計測表	13	第162表	崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(3)	78
第120表	SB09計測表	13	第163表	崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(4)	79
第121表	SB10計測表	14	第164表	崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(5)	80
第122表	SB11計測表	15	第165表	崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(6)	81
第123表	SB12計測表	16	第166表	蛍光X線分析法の測定条件	86
第124表	SB13計測表	16	第167表	蛍光X線分析結果	86
第125表	SB14計測表	16	第168表	崩り遺跡平成23～24年度調査において 採集された脊椎動物遺体の種名一覧	91
第126表	SB15計測表	17	第169表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(1)	92
第127表	SB16計測表	17	第170表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(2)	93
第128表	SB17計測表	17	第171表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(3)	94
第129表	SB18計測表	18	第172表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(4)	95
第130表	SB19計測表	19	第173表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(5)	96
第131表	SB20計測表	21	第174表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(6)	97
第132表	SB21計測表	21	第175表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(7)	98
第133表	SB22計測表	21	第176表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の集計結果(1)	99
第134表	SB23計測表	22	第177表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の集計結果(2)	100
第135表	SB24計測表	22	第178表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の集計結果(3)	101
第136表	SB25計測表	23	第179表	崩り遺跡平成23～24年度調査においてピック アップによって採集された脊椎動物遺体の組成	102
第137表	SB26計測表	25	第180表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗 選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(1)	104
第138表	SB27計測表	25	第181表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗 選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(2)	105
第139表	SB28計測表	25	第182表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗 選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(3)	106
第140表	SB29計測表	26	第183表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗 選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(4)	107
第141表	SB30計測表	26			
第142表	SB31計測表	27			
第143表	SB32計測表	29			
第144表	SB33計測表	29			
第145表	SB34計測表	29			
第146表	SB35計測表	31			
第147表	SB36計測表	31			
第148表	SB37計測表	31			
第149表	SB38計測表	32			
第150表	SB39計測表	33			
第151表	SB40計測表	34			
第152表	SB41計測表	35			
第153表	土坑墓出土遺物一覧	37			
第154表	SK中世一覧	38			

第184表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(5)…	108	第221表	中世(11C～12C)?ピット・包含層分析結果…	128
第185表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(6)…	109	第222表	ピット(13～15C?)出土の植物遺体…	129
第186表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(7)…	110	第223表	土坑出土の植物遺体…	129
第187表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(8)…	111	第224表	焼土(15C末～17C初)分析結果…	129
第188表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の集計結果(1)…	112	第225表	畝・溝出土の植物遺体…	129
第189表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の集計結果(2)…	113	第226表	中世などその他のサンプルのまとめ…	130
第190表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の集計結果(3)…	114	第227表	オオムギのサイズ…	130
第191表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の集計結果(4)…	115	第228表	コムギのサイズ…	130
第192表	崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の組成…	116	第229表	放射性炭素年代測定結果(土坑墓1号)…	134
第193表	SH04出土の植物遺体…	124	第230表	暦年較正結果(土坑墓1号)…	134
第194表	SH05出土の植物遺体…	124	第231表	放射性炭素年代測定および樹種同定結果(焼土跡05号・P0606)…	138
第195表	SH09出土の植物遺体…	124	第232表	暦年較正結果(焼土跡05号・P0606)…	138
第196表	SH10出土の植物遺体…	124	第233表	放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)(フローテーション)…	142
第197表	SH11出土の植物遺体…	125	第234表	放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BP)(フローテーション)…	143
第198表	SH12出土の植物遺体…	125	第235表	放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BC/AD)(フローテーション)…	143
第199表	SH13出土の植物遺体…	125	第236表	ピット内出土遺物(1)…	147
第200表	SH14出土の植物遺体…	125	第237表	ピット内出土遺物(2)…	147
第201表	SH15出土の植物遺体…	125	第238表	ピット内出土遺物(3)…	148
第202表	SH17出土の植物遺体…	125	第239表	ピット内出土遺物(4)…	148
第203表	SH18出土の植物遺体…	125	第240表	ピット内出土遺物(5)…	149
第204表	SH21出土の植物遺体…	126	第241表	ピット内出土遺物(6)…	149
第205表	SH22出土の植物遺体…	126	第242表	ピット内出土遺物(7)…	150
第206表	SH24出土の植物遺体…	126	第243表	ピット内出土遺物(8)…	150
第207表	SH27出土の植物遺体…	126	第244表	ピット内出土遺物(9)…	151
第208表	SK01出土の植物遺体…	126	第245表	包含層(Ⅲ層～Ⅴ層)出土遺物(1)…	152
第209表	SK03出土の植物遺体…	126	第246表	包含層(Ⅲ層～Ⅴ層)出土遺物(2)…	152
第210表	SK04出土の植物遺体…	126	第247表	包含層(Ⅵ層・Ⅶ層)出土遺物(1)…	152
第211表	SK06出土の植物遺体…	126	第248表	包含層(Ⅵ層・Ⅶ層)出土遺物(2)…	152
第212表	SK09出土の植物遺体…	127	第249表	遺構内出土土器の共伴状況一覧(遺構内層別)…	164
第213表	その他包含層出土の植物遺体…	127	第250表	遺構内共伴土器から見る土器出土傾向型…	165
第214表	植物遺体の検出されなかったサンプル…	127	第251表	石器類の利用石材一覧…	168
第215表	縄文後期(まとめ)…	127	第252表	土器出土傾向別に見た竪穴状遺構出土石器の構成比率…	170
第216表	ピット出土の植物遺体…	128			
第217表	土坑墓1号出土の植物遺体…	128			
第218表	土坑墓2号出土の植物遺体…	128			
第219表	土坑出土の植物遺体…	128			
第220表	焼土など(11～12C)分析結果…	128			

図版目次

図版1	185	図版7	191
崩り遺跡空中写真（遠景）		土坑墓1号（手前）・2号（奥）	
図版2	186	土坑墓2号副葬品出土状況	
崩り遺跡空中写真（南側）		土坑墓1号副葬品出土状況	
土層断面（中央部A-A'）		竹中正巳氏指導風景	
土層断面（中央部B-B'）		SD17（製鉄関連遺構）鉄滓出土状況	
土層断面（北側E-E'）		SD17（製鉄関連遺構）盛土保存前状況	
土層断面清掃作業風景		図版8	192
図版3	187	製鉄関連遺構空中写真（SD17・SK32）	
崩り遺跡南側竪穴状遺構集中箇所空中写真		SK32（製鉄関連遺構）鉄滓出土状況	
SH01石器出土状況		製鉄関連遺構調査風景	
SH01ベルト残完掘状況		村上恭通氏・大澤正己氏による製鉄関連遺構実見風景	
SH04・SH27検出状況		平成23年度発掘調査作業員	
SH04（左）・SH27（右）完掘状況		図版9	193
図版4	188	SH01出土遺物	
SH05焼土面断面確認状況		SH02出土遺物	
SH05完掘状況		SH03出土遺物（1）	
SH08（右）・SH09（左）ベルト残完掘状況		図版10	194
SH10完掘状況		SH03出土遺物（2）	
SH11・SH12調査風景		SH04出土遺物（1）	
SH11土器出土状況		図版11	195
SH11（手前）SH12（奥）完掘状況		SH04出土遺物（2）	
図版5	189	SH05出土遺物（1）	
SH13検出状況		図版12	196
SH13遺物残完掘状況		SH05出土遺物（2）	
SH16～SH21完掘状況		図版13	197
SH24（右）・SH25（左）焼土面確認状況		SH05出土遺物（3）	
竪穴状遺構調査風景		SH06出土遺物	
竪穴状遺構集中箇所遠景		SH07出土遺物	
SK10 焼土面確認状況		SH06・07出土遺物	
SK14断面確認状況		図版14	198
図版6	190	SH08出土遺物	
崩り遺跡空中写真（中央部）		SH08・09出土遺物	
SB31完掘状況		SH10出土遺物	
畝状遺構遠景		SH11出土遺物	
焼土跡01半裁断面確認状況		図版15	199
焼土跡04半裁断面確認状況		SH12出土遺物	

図版16	200	SK06出土遺物
SH13出土石器		
SH13出土遺物		
図版17	201	図版27
SH14出土遺物		SK07出土遺物
SH15出土遺物		SK07出土石器
図版18	202	SK12出土遺物
SH16出土遺物		SK14出土遺物
SH17出土遺物		SK16出土遺物
図版19	203	SD06出土遺物
SH18出土遺物		SD01出土遺物
図版20	204	図版28
SH18出土石器		SB出土遺物
SH19出土石器		図版29
図版21	205	土坑墓1号・2号出土遺物
SH19出土遺物		土坑墓2号出土遺物
図版22	206	SK18出土遺物
SH21出土遺物		SK20出土遺物
SH16～21出土遺物		図版30
図版23	207	製鉄関連遺構 (SD17) 出土炉壁
SH22出土遺物		製鉄関連遺構 (SD17) 出土遺物 (1)
SH23出土遺物		図版31
図版24	208	製鉄関連遺構 (SD17) 出土鉄滓
SH24出土遺物		製鉄関連遺構 (SD17) 出土遺物 (2)
SH25出土遺物		ピット出土遺物 (1)
SH25出土石器		図版32
SH26出土遺物		ピット出土遺物 (2)
SH一括出土遺物		図版33
SK01出土遺物		Ⅲ層出土遺物
図版25	209	図版34
SK02出土遺物		Ⅳ層出土遺物
SK03出土遺物		Ⅵ層出土遺物 (1)
SK03出土石器		図版35
図版26	210	Ⅵ層出土遺物 (2)
SK04出土遺物		Ⅶ層出土遺物 (1)
SK05出土遺物		図版36
		Ⅶ層出土遺物 (2)
		Ⅶ層出土石器

第三章 調査の方法と成果

第4節 発見された中世の遺構・遺物

確認された中世と考えられる遺構は、掘立柱建物跡 41 基、土坑墓 2 基、土坑 15 基、溝状遺構 1 基、畝状遺構 35 条、焼土跡 9 基、石列 1 基、製鉄関連遺構（土坑 1 基、溝状遺構 1 基）である。遺構は、おおおよそ調査区全体で検出した。

調査区の範囲内の堆積状況には差が見られるが、中世の遺物が出土するのはⅢ層とⅣ層であった。Ⅳ層については、凹地に堆積しており、また、堅くしまっておりこの層は整地された可能性がある。遺構の検出は、遺跡北側（第 151 図）では、ほとんどの遺構がⅢ層を掘り下げた後のⅤ層直上であった。遺跡中央部（第 152 図）については、表土（Ⅰ層）除去後のⅣ層やⅦ層上面での検出であった。遺跡南側（第 153 図）については、表土（Ⅰ層）除去後の地山面（Ⅷ層）での検出であった。

これらの遺構からは、白磁 17 点や青磁 10 点、滑石混入土器が 88 点、滑石製石鍋が 40 点（2,173g）、滑石二次加工品が 16 点（602g）、鞆の羽口 16 点、銅製品 1 点（6g）鉄製品 16 点（59g）、鉄滓 200 点（3,048g）、貝製品 1 点などが出土した。

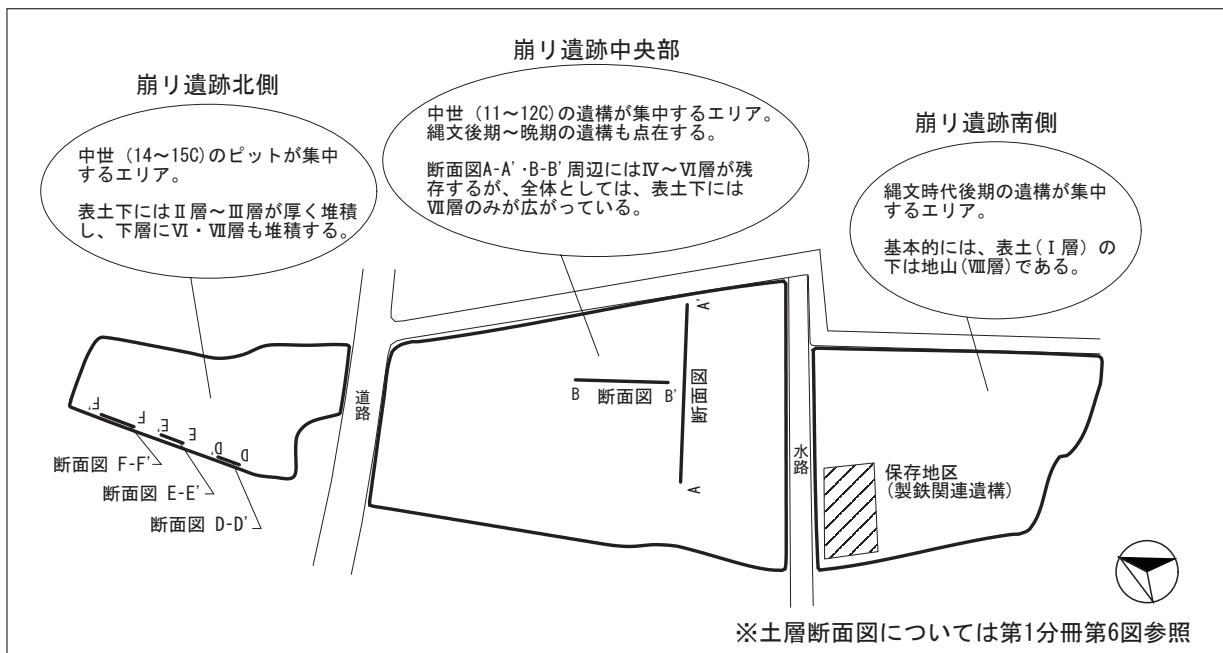
掘立柱建物跡や土坑墓、土坑、溝状遺構、畝状遺構、ピットから採取した土壌サンプルをフローテーションによって処理を行った結果、オオムギやコムギ、イネ、アワなどの炭化種子が検出された（第Ⅳ章第 4 節参照）。また、これらの炭化種子のうち、調査区中央部に位置する土坑墓 1 号と土坑墓 2 号（O-15 区）、遺跡北側に位置する P0980（V-28 区）、P1074（U-27 区）、P1201（V-28 区）から検出したものを用いて年

代測定を行った。土坑墓 1 号の測定値は、¹⁴C 年代（yrBP）830±20 で、土坑墓 2 号は 2 点行い 820±20 と 850±20 であった。また、P0980 は 600±20 で、P1074 は 560±20、P1201 は 610±20 の値を得た（第Ⅳ章 5 節（3）参照）。

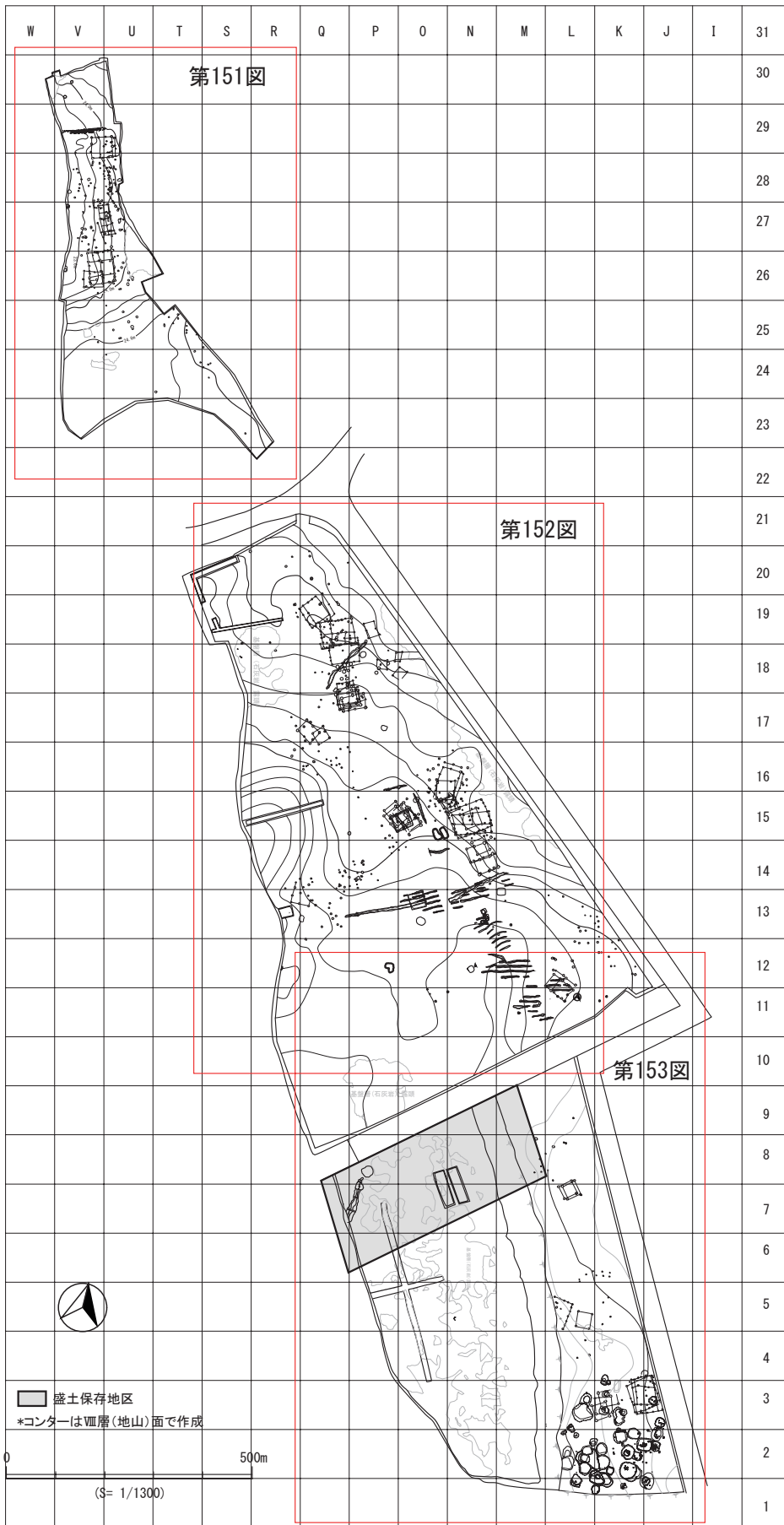
このほか、土坑墓 1 号（O-15 区）の 4 号人骨、焼土跡 05 号（V-31 区）、掘立柱建物跡 6 号 P16（P0606）（Q-19 区）より採取した炭化物を用い、放射性炭素年代測定と樹種同定を行った。土坑墓 1 号の 4 号人骨は、放射性年代が ¹⁴C 年代（yrBP）910±20 の値と樹種はスイカズラ属と同定された。焼土跡 05 号は 340±20 の値と樹種は広葉樹、掘立柱建物跡 06 号 P16（P0606）は 990±20 の値と樹種はマツ属複雑管束属と同定された（第Ⅳ章 5 節（1）（2）参照）。

Ⅰ層	表土
Ⅱ層	近世
Ⅲ層	中世（14～15C）
Ⅳ層	中世（11～12C）
Ⅴ層	Ⅳ～Ⅵ層の漸移層
Ⅵ層	縄文（後～晩期）
Ⅶ層	縄文（後～晩期）
Ⅷ層	マージ（地山）
Ⅸ層	基盤岩

第 148 図 基本層位略図



第149図 崩り遺跡調査区略図



第 150 図 崩り遺跡調査区全体図



第151図 崩り遺跡北側詳細図



第 152 図 崩り遺跡中央部詳細図

(1) 掘立柱建物跡 (SB)

中世と考えられる掘立柱建物跡 (以下「SB」) は、遺跡北側で4棟 (SB01～SB04)、中央部～南側で37棟 (SB05～SB41) 検出された。北側に位置するSB01～SB04は、柱穴内からは時代を特定できる遺物は出土していないが、検出面が同じピットから草花文を施した外反する龍泉窯系青磁等が出土することや周囲のピットの年代測定結果などから、14世紀後半～15世紀前半の遺構と想定される。検出面は、III層直下に堆積する層 (SB01・SB03・SB04がV層の上面、SB02は地山面) での検出であった。

中央部から南側に広がる37棟 (SB05～SB41) は、掘立柱建物内の柱穴や周りのピットから白磁玉縁椀や滑石製石鍋、カムイヤキA群などが主に出土することから11世紀後半～12世紀の遺構と想定される。検出面は、SB31がIV層を掘り下げた後のV層上面での検出であったが、その他のSBはすべてI層 (表土) 直下の層 (SB5はV層上面、SB06・07・13がVI層上面、SB08～11がVII層上面、SB12・14～17・30・

32～40が地山面、SB18～29・41がIV層上面) であった。

なお、実測図のピット番号は、SBごとにP1からふっている。その番号の下にあるカッコ付き番号は、調査時に付けた遺跡全体での通しピット番号である。

以下、SBの詳細を述べることとする。

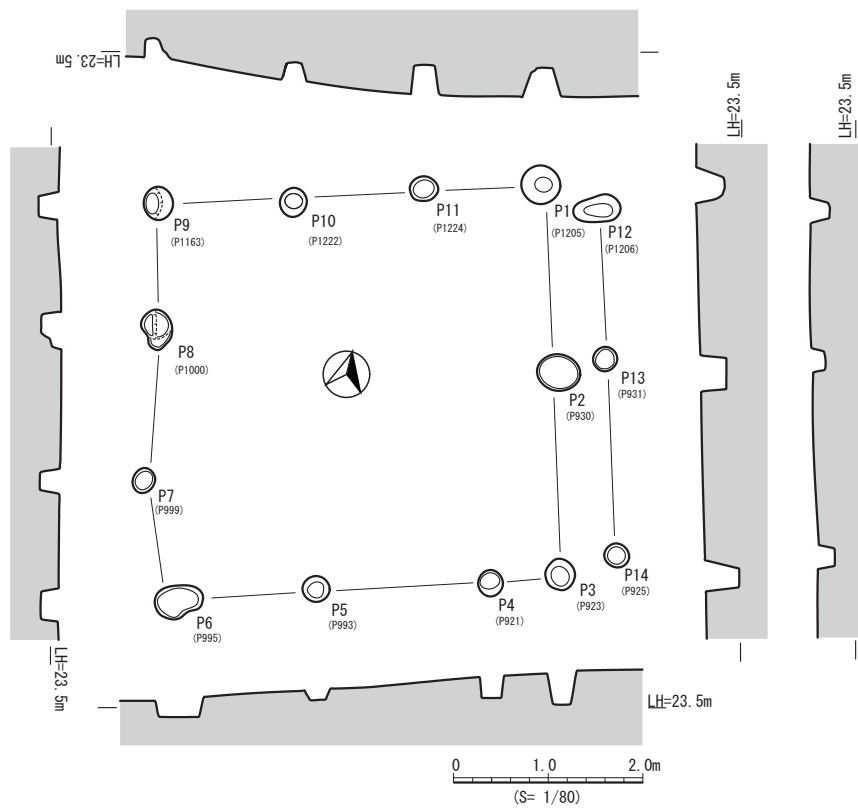
掘立柱建物跡1号 (SB01) (第154図・第112表)

検出状況: U・V-29・30区で検出した、3×3間の建物跡である。東側に柱穴が並んでおり、底になる可能性が高い。他のSBや遺構との重複は見られず、単独で検出された。柱穴の大きさの平均は、直径約0.35mで深さは約0.25mである。

出土遺物: P5から石器1点、ウシの骨1点が出土した。

掘立柱建物跡2号 (SB02) (第155図・第113表)

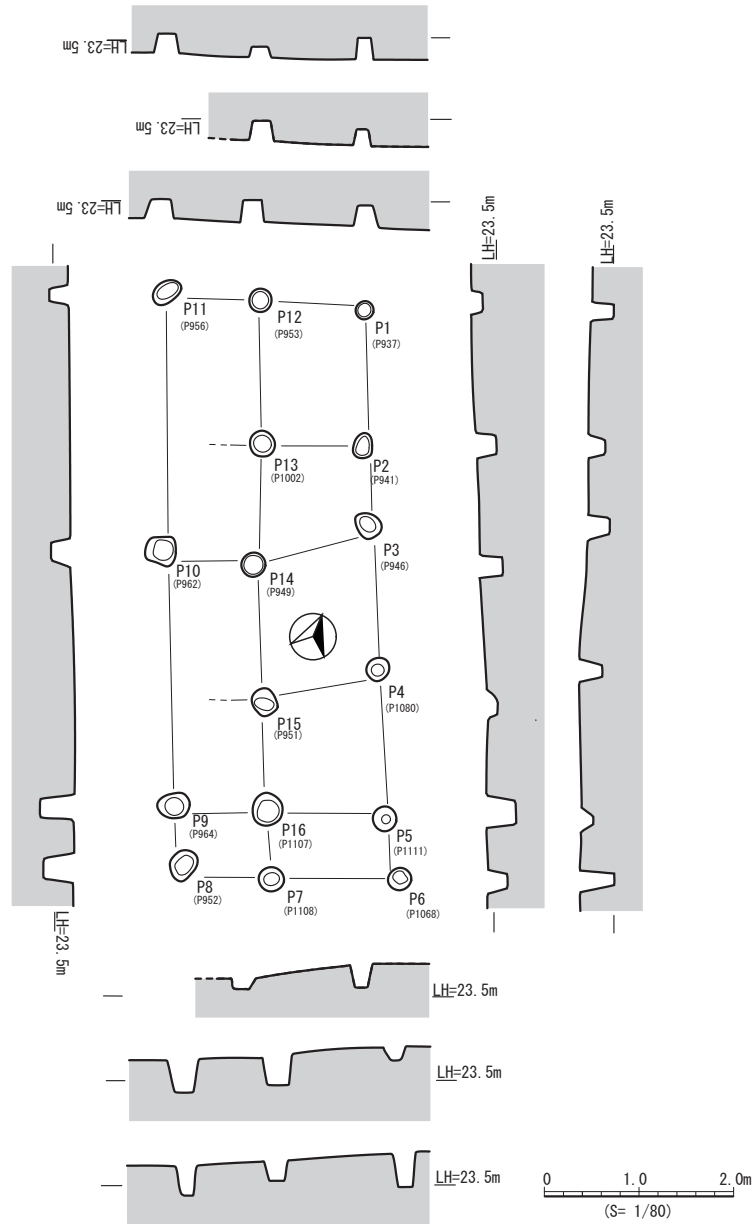
検出状況: U・V-28区で検出した、5×2間の建物跡である。他のSBや遺構との重複は見られず、単独で検出された。柱穴の大きさの平均は、直径約0.25mで深さは約0.25mである。



第154図 SB01 実測図

第112表 SB01計測表

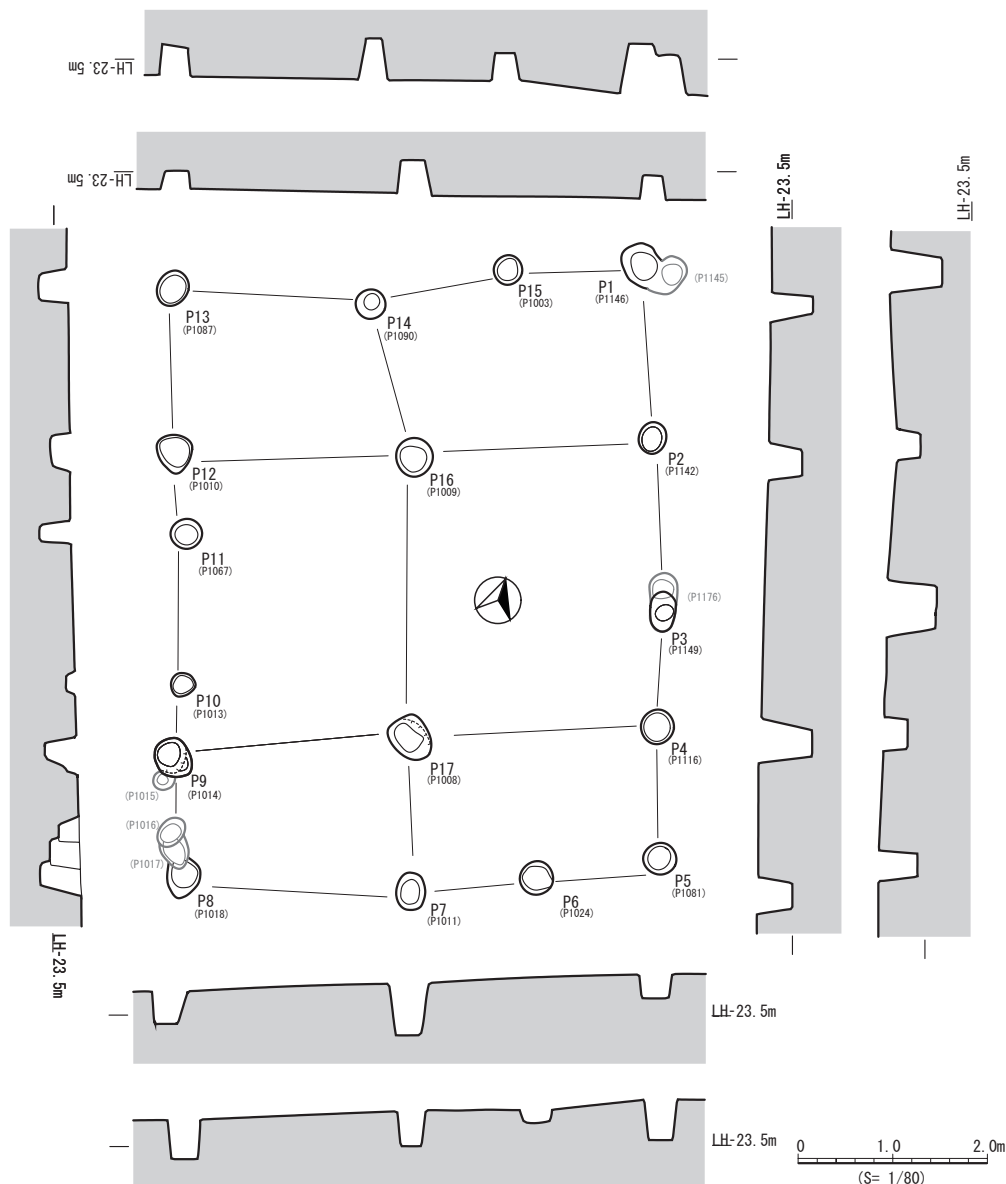
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P9	418	平均	139.3	P1-P3	418	平均	209	方角: N 17° W 面積: 17.6㎡	P5: 石器(1) P8: ウシ(1)
P3-P6	414	平均	138	P6-P9	426	平均	142		
				P12-P14	366	平均	183		
P1-P11	128	P3-P4	76	P1-P2	200	P6-P7	130		
P11-P10	140	P4-P5	186	P2-P3	218	P7-P8	166		
P10-P9	150	P5-P6	152			P8-P9	130		
				P12-P13	158				
				P13-P14	208				



第155図 SB02実測図

第113表 SB02計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P11	212	平均	106	P1-P6	602	平均	120.4	方角:N 24° W 面積:13.2㎡	P7:ベラ科(1) P10:オオムギ(1), ブダイ科(2), ニザダイ科(1) P13:チョウセンサザエ(1), ヤコウガイ(2) P14:マガキガイ(1)
P6-P8	232	平均	116	P8-P11	608	平均	202.6		
P2-P13	108	平均	108	P12-P7	614	平均	122.8		
P3-P10	224	平均	112						
P4-P15	126	平均	126						
P5-P9	224	平均	112						
P1-P12	112	P6-P7	136	P1-P2	146	P8-P9	62		
P12-P11	100	P7-P8	96	P2-P3	82	P9-P10	272		
				P3-P4	154	P10-P11	274		
				P4-P5	158				
				P5-P6	62				
P2-P13	108	P4-P15	126	P12-P13	152				
P3-P14	128	P5-P16	126	P13-P14	128				
P14-P10	96	P16-P9	98	P14-P15	148				
				P15-P16	114				
				P16-P7	72				

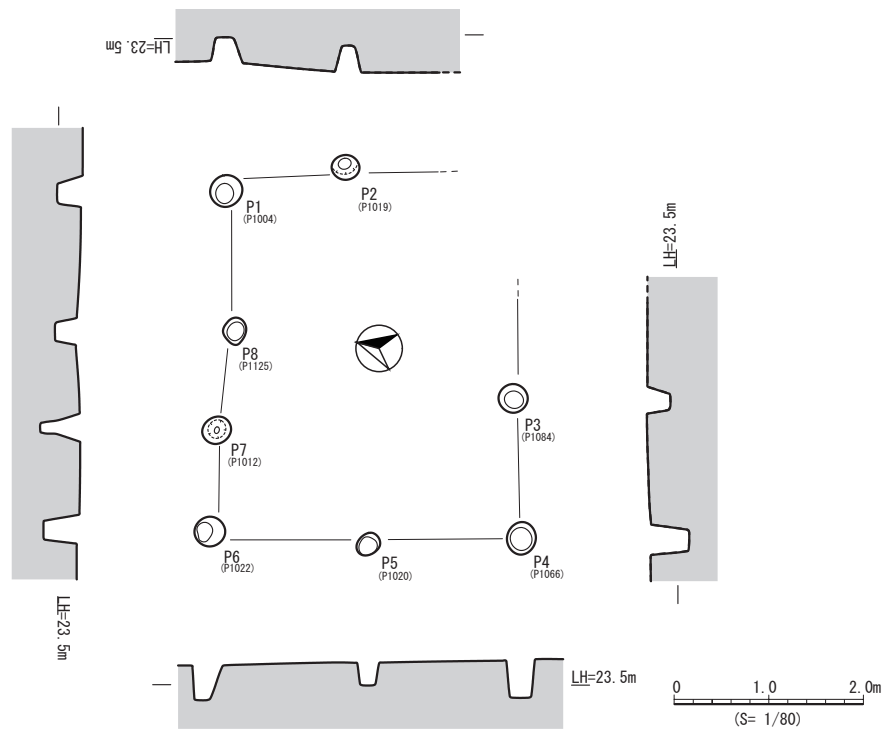


第156図 SB03実測図

第114表 SB03計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P13	504	平均	168	P1-P5	626	平均	156.5	方角:N 21° W 面積:32m ²	P1:巻貝(1), マハタ型(1), ハタ科(1) P3:滑石混入土器(1), タカラガイ(1), ソデボラ科(1), 二枚貝(2) P4:ヤコウガイ(2) P7:タイ型(1) P11:石器(1), タカラガイ(2), ホソスジイナミガイ(1) P12:石器(1) P13:タカラガイ(1), 巻貝(1), 二枚貝(4) P14:巻貝(3), 二枚貝(2), ウシ/ウマ(1) P15:フエフキダイ科(1) P17:ヤコウガイ(1), マガキガイ(1), 二枚貝(1)
P5-P8	508	平均	169.3	P8-P13	620	平均	124		
P2-P16	254	平均	168.7	P14-P7	628	平均	209.3		
P4-P9	516	平均	172						
P1-P15	142	P5-P6	132	P1-P2	184	P8-P9	128		
P15-P14	148	P6-P7	134	P2-P3	186	P9-P10	76		
P14-P13	214	P7-P8	242	P3-P4	122	P10-P11	158		
				P4-P5	138	P11-P12	90		
						P12-P13	174		
P2-P16	252	P4-P17	264	P14-P16	172				
P16-P12	254	P17-P9	254	P16-P17	296				
				P17-P7	164				

出土遺物：チョウセンサザエやヤコウガイ、マガキガイなどの貝類4点、ベラ科やブダイ科などの魚骨4点が出土した。また、P10から採取した土壌サンプルをフローテーションによって処理を行った結果、オオムギの炭化種子1点が出土された。



第 157 図 SB04 実測図

第115表 SB04計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	132	平均	132	P1-P6	362	平均	120.6	方角:N 79° E 面積:12.3㎡	P3:ウシ(1)
P4-P6	338	平均	169	P3-P4	148	平均	148		P4:ヤコウガイ(1)
P1-P2	132	P4-P5 P5-P6	164 174	P1-P8	146	P3-P4	148		P6:ヤコウガイ(1)
				P8-P7	106				
				P7-P6	110				

掘立柱建物跡 3 号 (SB03) (第 156 図・第 114 表)

検出状況: U・V-27 区で検出した、5×3 間の建物跡である。SB04 と重複している。柱穴は、最大のもので直径約 0.5m、深さ約 0.55m あるが、平均では直径約 0.25m で深さは約 0.30m である。

出土遺物: タカラガイやヤコウガイなどの貝類が 24 点、ウシ/ウマの獣骨 1 点、ハタ科など魚骨が 3 点出土している。また、滑石混入土器 1 点と石器 2 点が出土し、そのうち石器 1 点を実測した。

掘立柱建物跡 5 号 (SB05) (第 158 図・第 116 表)

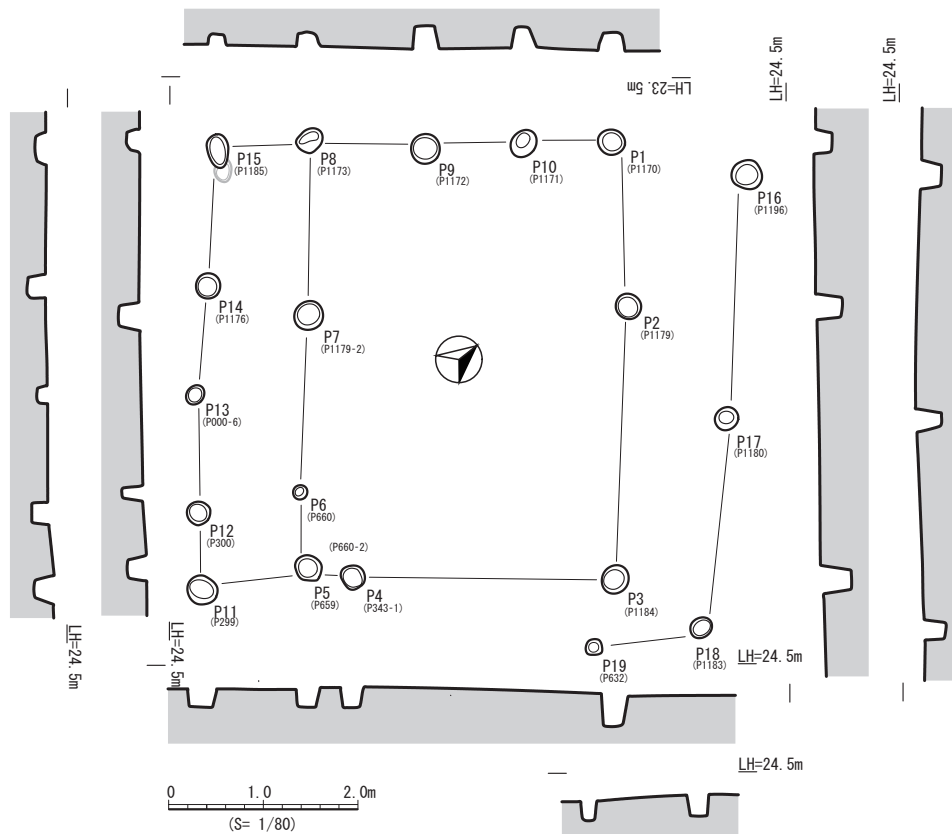
検出状況: Q-19 区で検出した、4×4 間の建物跡である。東側に柱穴が並んでおり、底になる可能性が高い。他の SB や遺構との重複は見られず、単独で検出された。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.3m で深さは約 0.25m である。

出土遺物: 白磁 1 点や土器 6 点、ヤコウガイ 1 点などが出土した。

掘立柱建物跡 4 号 (SB04) (第 157 図・第 115 表)

検出状況: V-27 区で検出した、3×2 間の建物跡である。SB03 と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.3m で深さは約 0.3m である。なお、南東の角の柱穴は検出できなかった。

出土遺物: ヤコウガイが 2 点とウシの骨 1 点が出土した。



第 158 図 SB05 実測図

第116表 SB05計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P15	420	平均	105	P1-P3	464	平均	232	方角:N 53° W 面積:20.3m ²	P3:ヤコウガイ(1) P5:土器(3), 粘土塊(1) P16:白磁(1), 土器(3), 粘土塊(1)
P3-P11	440	平均	146.6	P5-P8	457	平均	152.3		
P18-P19	114	平均	114	P11-P15	465	平均	116.2		
				P16-P18	482	平均	241.5		
P1-P10	94	P3-P4	278	P1-P2	174	P5-P6	81		
P10-P9	104	P4-P5	48	P2-P3	290	P6-P7	188		
P9-P8	124	P5-P11	114			P7-P8	188		
P8-P15	98								
		P18-P19	114	P11-P12	82	P16-P17	258		
				P12-P13	124	P17-P18	225		
				P13-P14	114				
				P14-P15	145				

掘立柱建物跡 6号 (SB06) (第 159 図・第 117 表)

検出状況: Q-19 区で検出した, 8×6 間の建物跡であるが, 東西で柱数が異なる。SB07 と重複しており, P2 (P381-2) と P4 (P293) は, それぞれ SB07 の P15 (P381-1) と P14 (P346) に切られていることから, SB06 は SB07 よりも古い (古 SB06<SB07 新)。

柱穴の大きさや深さは様々であり, 大きいものは直径約 0.5m で深いものは 0.6m を測る。平均では直径約 0.35m で深さは約 0.3m である。

出土遺物: 白磁碗Ⅳ類 1 点のほか, 滑石製石鍋 4 点, 土器 6 点, 土師器 1 点, 鉄滓 1 点, ヤコウガイなどの貝類が 9 点出土した。そのうち白磁碗Ⅳ類 1 点と滑石製石鍋を 1 点実測した。

P16 (P606) から採取した炭化物を用い放射性年代測定及

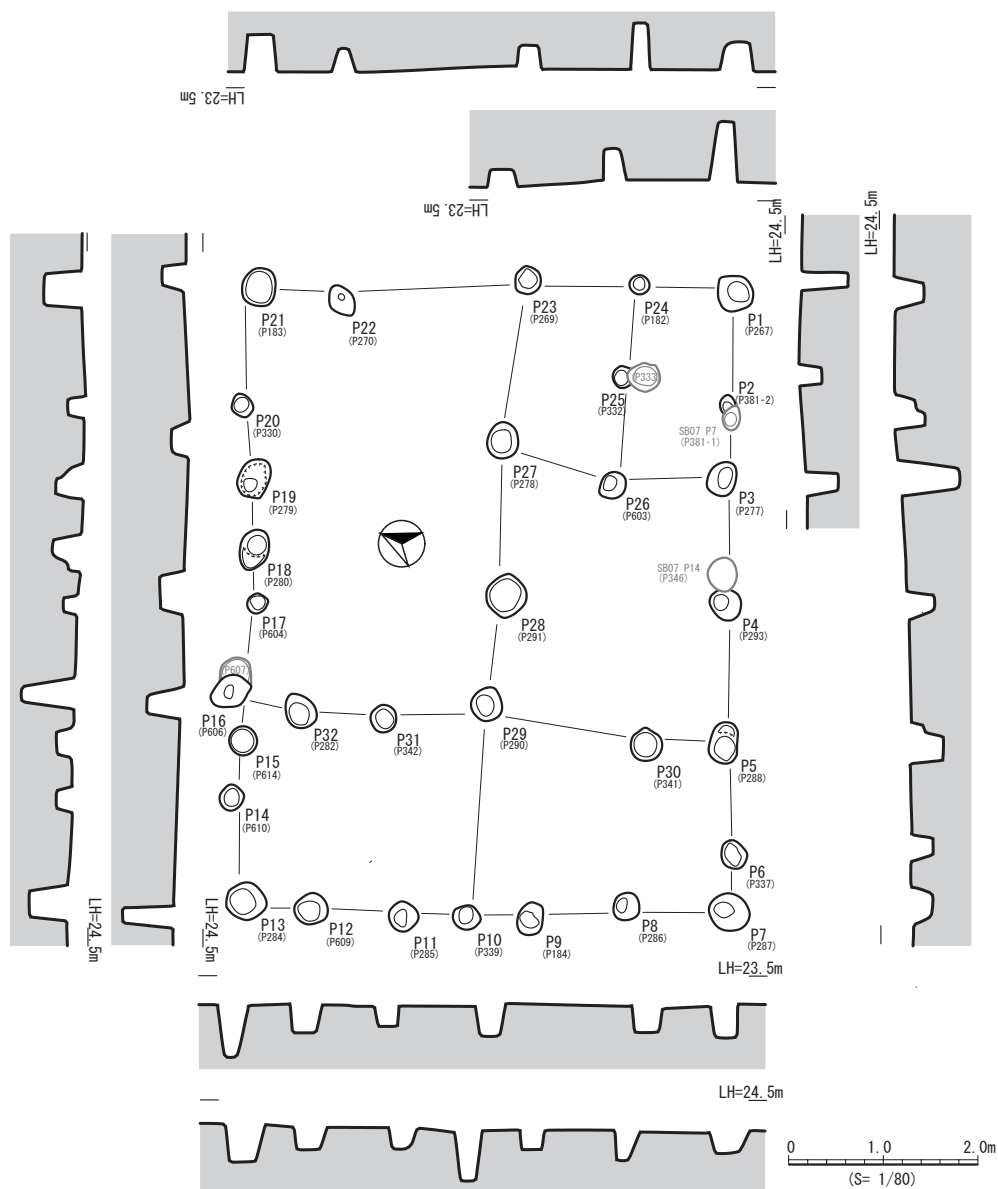
び樹種同定を行った。放射性炭素年代が ¹⁴C 年代 (yrBP) 990±30 の値と樹種はマツ属複雑維管束亜属に同定された (第IV章 5 節 (2) 参照)。

掘立柱建物跡 7号 (SB07) (第 160 図・第 118 表)

検出状況: Q-18 区で検出した, 4×4 間の建物跡である。SB06 と重複しており, SB06 で記述したとおり柱穴の切り合い関係から SB07 は SB06 より新しい (古 SB06<SB07 新)。

柱穴の大きさや深さはそれぞれであるが, 平均すると直径約 0.25m で深さは約 0.3m である。西側のピットは他の面に比べ浅い。

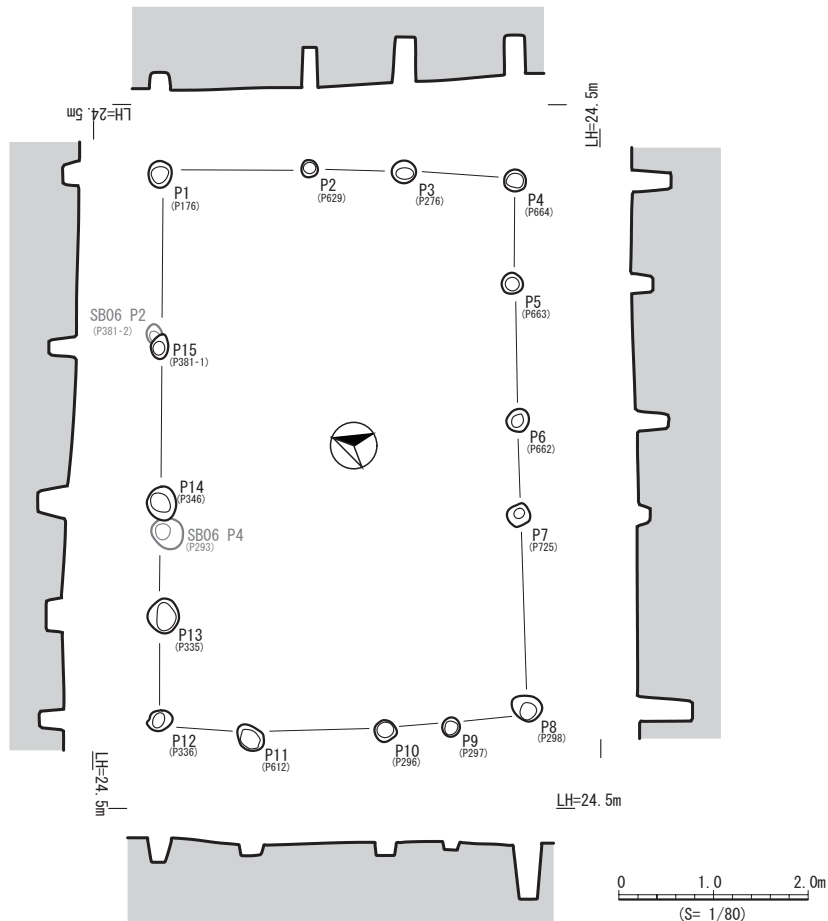
出土遺物: 兼久式土器 1 点や滑石製二次加工品 1 点, イモガイなどの貝類が 2 点出土し, そのうち兼久式土器 1 点を実測した。



第 159 図 SB06 実測図

第117表 SB06計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P21	515	平均	128.8	P1-P7	657	平均	109.5	方角: N 66° E 面積: 33.7㎡	P3: 白磁碗Ⅳ類(1), 鉄滓(1) P6: 滑石製石鍋(1) P7: 土器(1) P12: 巻貝(1) P13: 滑石製石鍋(1), 粘土塊(1), シャコガイ(1) P14: 石器(1), ヤコウガイ(1) P15: 滑石製石鍋(1), ヤコウガイ(3) P17: 滑石製石鍋(1) P18: ヤコウガイ(1), チョウセンサザエ(1) P21: 土器(2) P25: シャコガイ(1) P26: 土器(1), 土師器(1) P28: 土器(2)
P7-P13	515	平均	85.8	P13-P21	661	平均	82.6		
P3-P27	250	平均	125	P24-P26	210	平均	105		
P5-P16	533	平均	106.6	P23-P10	685	平均	171.2		
P1-P24	110	P7-P8	110	P1-P2	120	P13-P14	112		
P24-P23	115	P8-P9	100	P2-P3	80	P14-P15	63		
P23-P22	200	P9-P10	65	P3-P4	132	P15-P16	53		
P22-P21	90	P10-P11	70	P4-P5	155	P16-P17	98		
		P11-P12	100	P5-P6	110	P17-P18	61		
		P12-P13	70	P6-P7	60	P18-P19	64		
						P19-P20	86		
						P20-P21	124		
P3-P26	125	P5-P30	85	P24-P25	100	P10-P29	225		
P26-P27	125	P30-P29	175	P25-P26	110	P29-P28	120		
		P29-P31	105			P28-P27	165		
		P31-P32	90			P27-P23	175		
		P32-P16	78						



第 160 図 SB07 実測図

第118表 SB07計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	376	平均	125.3	P1-P12	580	平均	145	方角:N 70° E 面積: 22.3m ²	P4: 兼久式土器(1), 巻貝(1)
P8-P12	395	平均	98.7	P4-P8	562	平均	140.5		P6: イモガイ(1)
P1-P2	158	P8-P9	84	P1-P15	184	P4-P5	110		P14: カムイヤキ(1), 滑石二次加工品(1)
P2-P3	102	P9-P10	70	P15-P14	165	P5-P6	144		
P3-P4	116	P10-P11	143	P14-P13	121	P6-P7	98		
		P11-P12	98	P13-P12	110	P7-P8	210		

掘立柱建物跡8号 (SB08) (第161図・第119表)

検出状況:P・Q-17・18区で検出した, 3×2間の建物跡である。SB09・SB10・SB11と重複しており, P4 (P57)はSB11のP9 (P58)を切っていることから, SB08はSB11よりも新しい(古SB11<SB08新)。

また, P5 (P91)及びP6 (P633)は, それぞれSB10のP3 (P72)とP4 (P106)を切っていることから, SB08はSB10よりも新しい。(古SB10<SB08新)。

柱穴は, 一番大きいもので直径約0.45m, 一番深いもので約0.7mを測るが, 平均すると直径約0.3m, 深さ約0.35mである。北側の柱穴は比較的浅い。

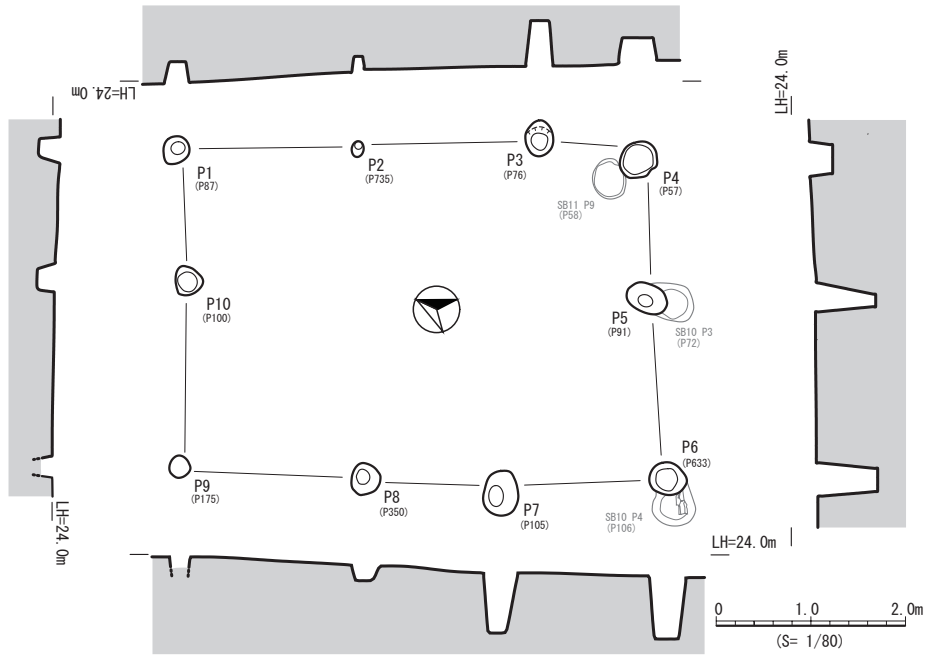
出土遺物: 土器4点や鉄滓1点, イモガイなどの貝類が4点出土した。

掘立柱建物跡9号 (SB09) (第162図・第120表)

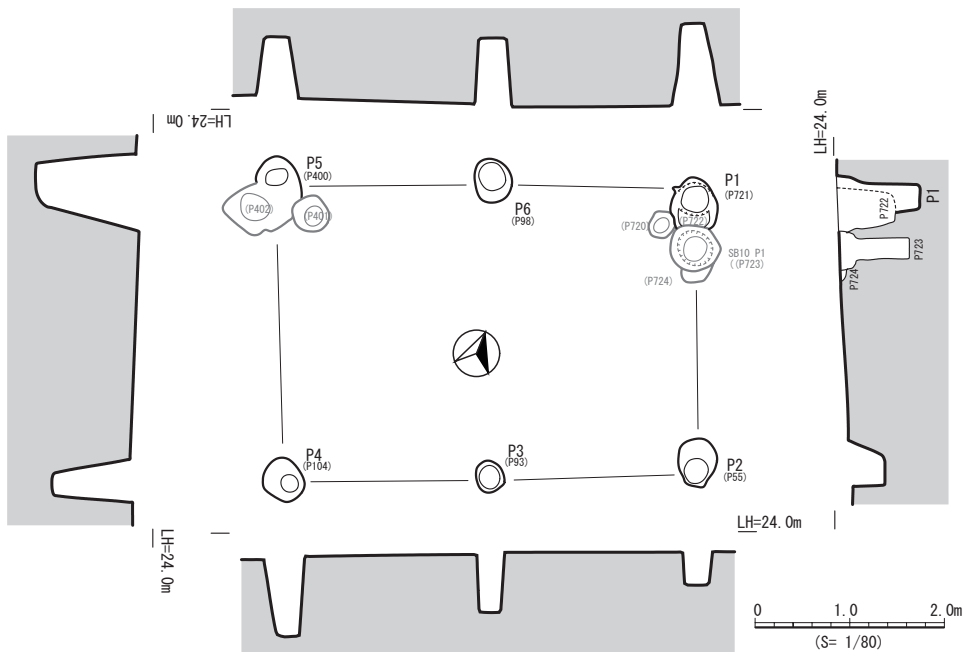
検出状況:P・Q-17・18区で検出した, 2×1間の建物跡である。SB08・SB10・SB11と重複しており, P1 (P721)は, SB10のP1 (P723)に切られていることから, SB09はSB10よりも古い(古SB09<SB10新)。

柱穴の大きさの平均は, 直径約0.45mで深さは約0.8mである。

出土遺物: カムイヤキ1点のほか, 土器が5点, チョウセンサザエやヤコウガイなどの貝類10点出土した。



第 161 図 SB08 実測図



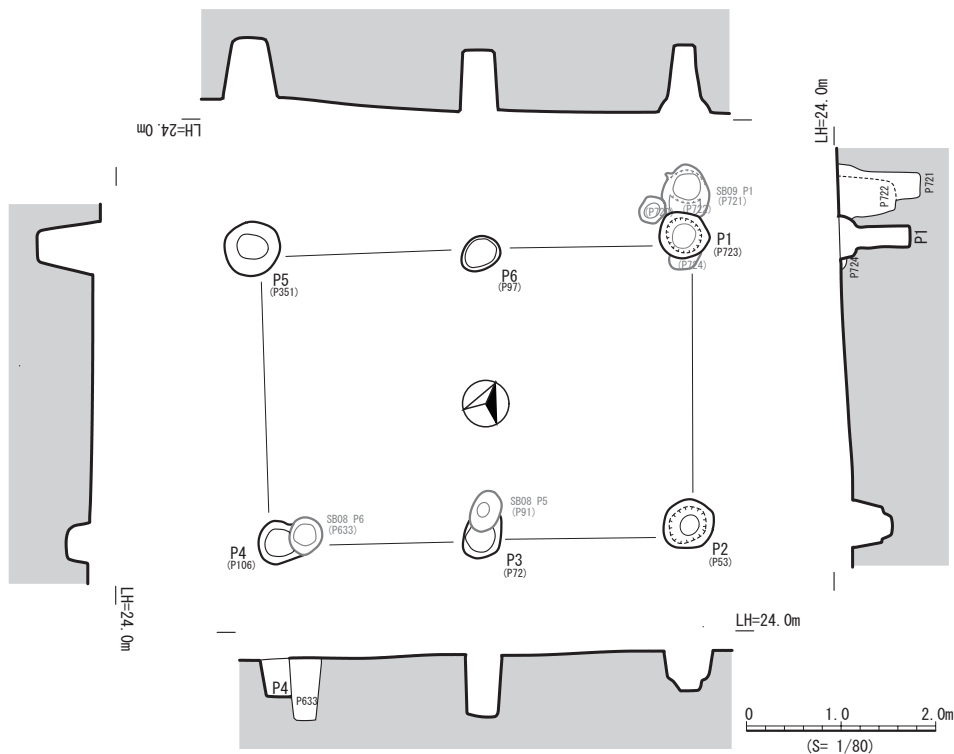
第 162 図 SB09 実測図

第119表 SB08計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P9	340	平均	170	P1-P4	487	平均	162.3	方角: N 24° W 面積: 17.5m ²	P7: 土器(1), 鉄滓(1), イモガイ(1), タカラガイ(2), マルスダレガイ(1) P9: 土器(3)
P4-P6	340	平均	170	P6-P9	517	平均	172.3		
P1-P10	142	P4-P5	150	P1-P2	190	P6-P7	193		
P10-P9	198	P5-P6	190	P2-P3	192	P7-P8	142		
				P3-P4	105	P8-P9	182		

第120表 SB09計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	288	平均	288	P1-P5	447	平均	223.5	方角: N 65° E 面積: 13.4m ²	P1: チョウセンサザエ(2), 巻貝(1) P3: カムイヤキ(1), 粘土塊(1), チョウセサザエ(1), シラクモガイ(1), ウミナナ(1) P4: 土器(2), タカラガイ(1), チョウセンサザエ(1), ヤコウガイ(1) P5: 土器(3)
P4-P5	325	平均	325	P2-P4	430	平均	215		
P1-P2	288	P4-P5	325	P1-P6	218	P2-P3	218		
				P6-P5	229	P3-P4	212		



第 163 図 SB10 実測図

第121表 SB10計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	305	平均	305	P1-P5	456	平均	228	方角:N 62° E 面積:13.5㎡	P1:土器(3)
P4-P5	315	平均	315	P2-P4	435	平均	217.5		P2:土器(1)
P1-P2	305	P4-P5	315	P1-P6	215	P2-P3	222		P4:滑石二次加工品(1)
				P6-P5	241	P3-P4	213		

掘立柱建物跡 10 号 (SB10) (第 163 図・第 121 表)

検出状況:P・Q-17・18 区で検出した、2×1 間の建物跡である。SB08・SB09・SB11 と重複しており、SB08 と SB09 で記述したとおり、柱穴の切り合い関係から SB10 は SB08 より古く、SB9 より新しい (古 SB09<SB10<SB08 新)。

柱穴の大きさの平均は、直径約 0.5m で深さは約 0.7m である。

出土遺物:土器 4 点と滑石二次加工品 1 点が出土した。このうち滑石二次加工品を実測した。

掘立柱建物跡 11 号 (SB11) (第 164 図・第 122 表)

検出状況:P・Q-17・18 区で検出した、2×2 間の建物跡である。SB08・SB09・SB10 と重複しており、SB08 で記述したとおり、柱穴の切り合い関係から SB11 は SB08 より古い。(古 SB11<SB10 新)。

柱穴の大きさの平均は、直径約 0.4m で深さは約 0.5m である。

出土遺物:土器 21 点とヤコウガイやタカラガイなどの貝類が 9 点、ブダイ科の魚骨が 1 点出土した。

掘立柱建物跡 12 号 (SB12) (第 165 図・第 123 表)

検出状況:P-19 区で検出した、2×1 間の建物跡である。他の SB や遺構との重複は見られず、単独で検出された。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.2m で深さは約 0.25m である。

出土遺物:遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡 13 号 (SB13) (第 166 図・第 124 表)

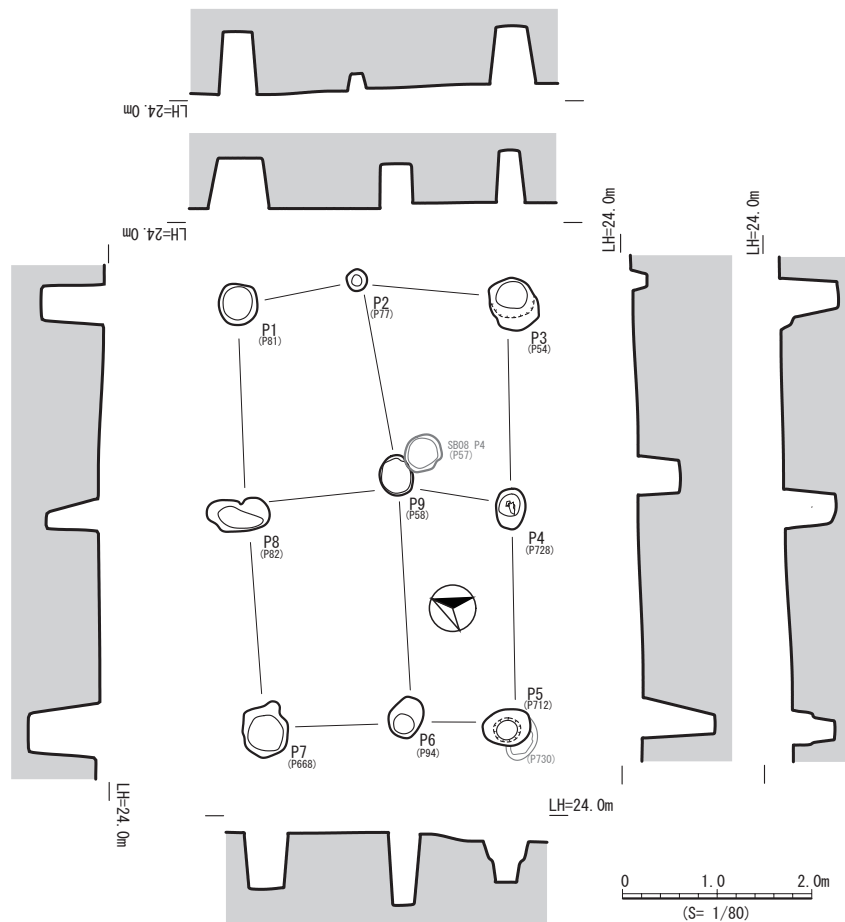
検出状況:P-18 区で検出した、1×1 間の 4 本柱建物跡である。SK23 と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.3m で深さは約 0.3m である。南西の角にあたる柱穴は検出できなかった。

出土遺物:土器 1 点と石器 1 点、貝類 1 点が出土し、このうち石器 1 点を実測した。

掘立柱建物跡 14 号 (SB14) (第 167 図・第 125 表)

検出状況:O・P-18 区で検出した、1×1 間の 4 本柱建物跡である。他の SB や遺構との重複は見られず、単独で検出された。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.3m で深さは約 0.25m である。

出土遺物:遺物は出土しなかった。



第 164 図 SB11 実測図

第122表 SB11計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	294	平均	147	P1-P7	457	平均	228.5	方角:N 67° E 面積:13.1㎡	P1:土器(1) P2:土器(1), ブダイ科(1) P4:土器(1) P5:ヤコウガイ(1), 二枚貝(1) P6:土器(12), 粘土塊(2), タカラガイ(2) マルスダレガイ(1), 巻貝(2), 二枚貝(2) P7:土器(5) P9:土器(1)
P5-P7	257	平均	128.5	P3-P5	460	平均	230		
P8-P4	300	平均	150	P2-P6	475	平均	237.5		
P1-P2	129	P5-P6	110	P1-P8	229	P3-P4	223		
P2-P3	165	P6-P7	147	P8-P7	228	P4-P5	237		
P8-P9	176			P2-P9	212				
P9-P4	124			P9-P6	263				

掘立柱建物跡 15号 (SB15) (第168図・第126表)

検出状況: O・P-18区で検出した、1×1間の4本柱建物跡である。他のSBや遺構との重複は見られず、単独で検出された。柱穴の大きさの平均は、直径約0.3mで深さは約0.15mである。柱穴はいずれも浅く、耕作などによって削平された可能性がある。南東の角にあたる柱穴は検出できなかった。

出土遺物: 遺物は出土しなかった。

出土遺物: 土器2点のほか、ヤコウガイなどの貝類が4点出土した。

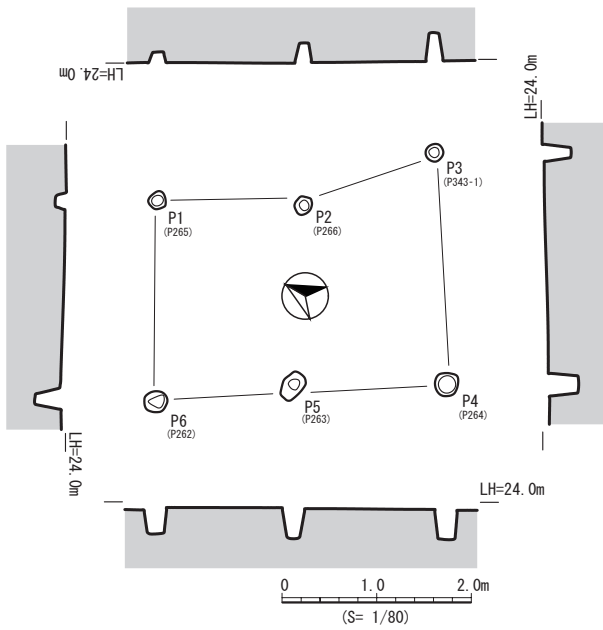
掘立柱建物跡 17号 (SB17) (第170図・第128表)

検出状況: Q-17区で検出した、1×1間の4本柱建物跡である。SB16と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約0.35mで深さは約0.3mである。

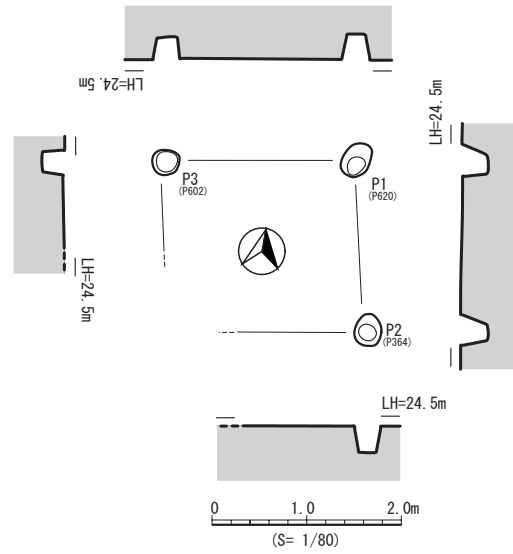
出土遺物: 遺物は出土しなかった。

掘立柱建物跡 16号 (SB16) (第169図・第127表)

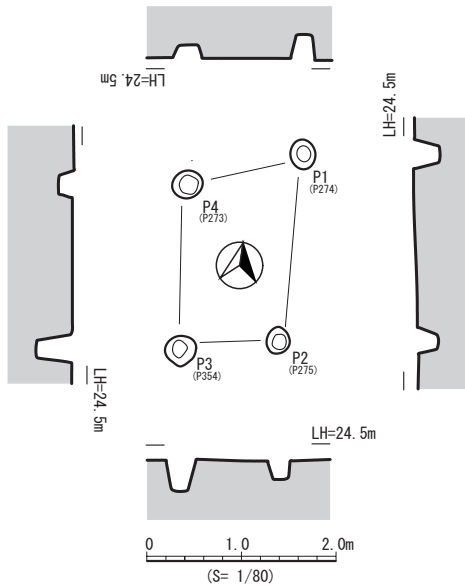
検出状況: Q-17区で検出した、2×1間の建物跡である。SB17と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約0.4mで深さは約0.4mである。



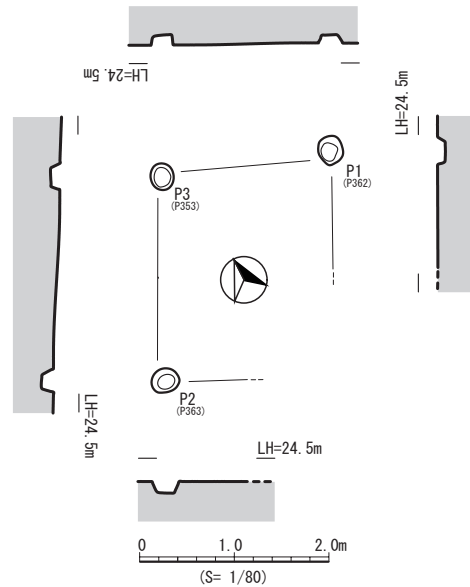
第165図 SB12 実測図



第166図 SB13 実測図



第167図 SB14 実測図



第168図 SB15 実測図

第123表 SB12計測表

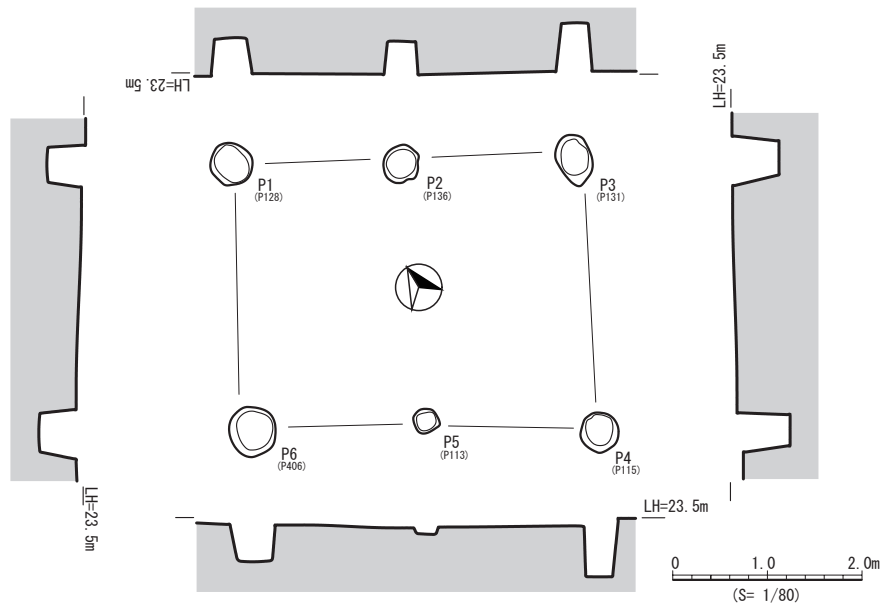
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	214	平均	214	P1-P3	304	平均	152	方角:N 35° W 面積:6.2㎡	-
P3-P4	246	平均	246	P4-P6	308	平均	154		
P1-P6	214	P3-P4	246	P1-P2	156	P4-P5	162		
				P2-P3	148	P5-P6	146		

第124表 SB13計測表

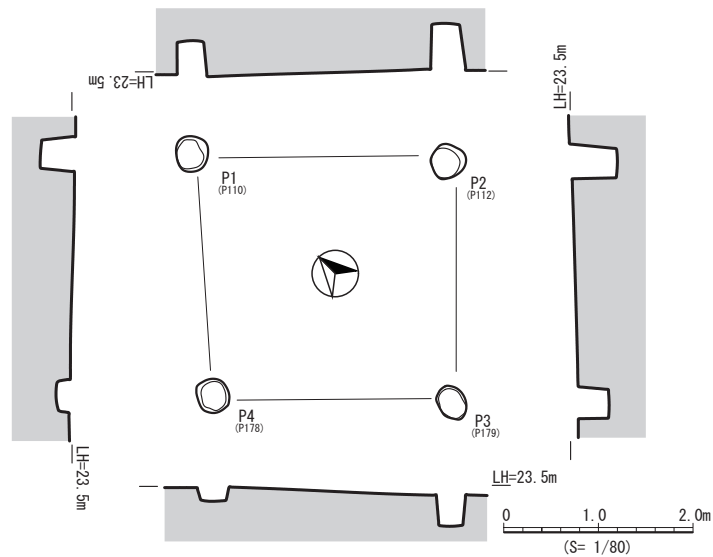
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	200	平均	200	P1-P2	176	平均	176	方角:N 80° E 面積:3.6㎡	P1:石器(1) P3:土器(1), イガレイシ(1)
P1-P3	200			P1-P2	176				

第125表 SB14計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	128	平均	128	P1-P2	200	平均	200	方角:N 6° W 面積:2.1㎡	-
P2-P3	106	平均	106	P3-P4	176	平均	176		
P1-P4	128	P2-P3	106	P1-P2	200	P3-P4	176		



第169図 SB16実測図



第170図 SB17実測図

第126表 SB15計測表

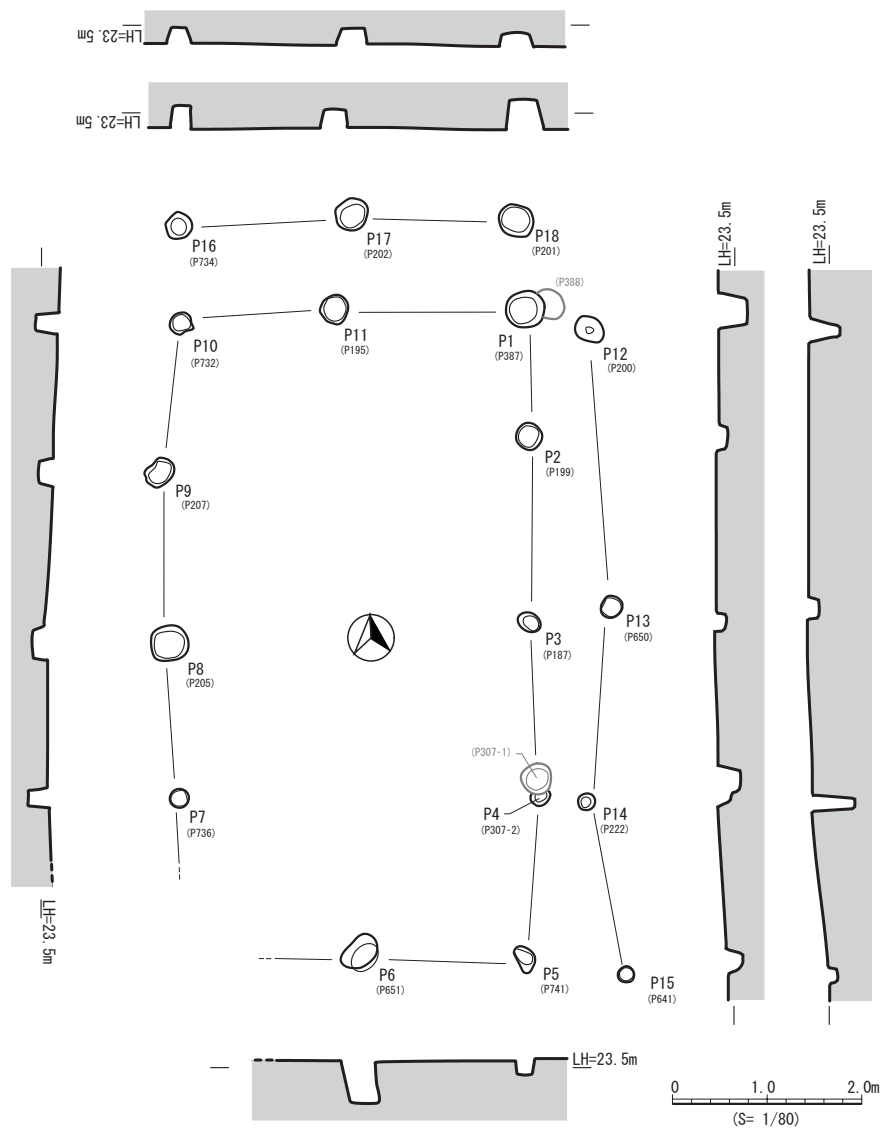
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P3	178	平均	178	P2-P3	217	平均	217	方角:N 21° E 面積:4.1m ²	-
P1-P3	178			P2-P3	217				

第127表 SB16計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	287	平均	287	P1-P3	363	平均	181.5	方角:N 61° W 面積:10.2m ²	P3:土器(2) P6:サヤガタイモ(1), マダライモ(1), ヤ コウガイ(1), レイシダマシ(1)
P3-P4	291	平均	291	P4-P6	365	平均	182.5		
P1-P6	287	P3-P4	291	P1-P2	178	P4-P5	184		
				P2-P3	185	P5-P6	181		

第128表 SB17計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	258	平均	258	P1-P2	270	平均	270	方角:N 44° W 面積:6.9m ²	-
P2-P3	254	平均	254	P3-P4	255	平均	255		
P1-P4	258	P2-P3	254	P1-P2	270	P3-P4	255		



第171図 SB18実測図

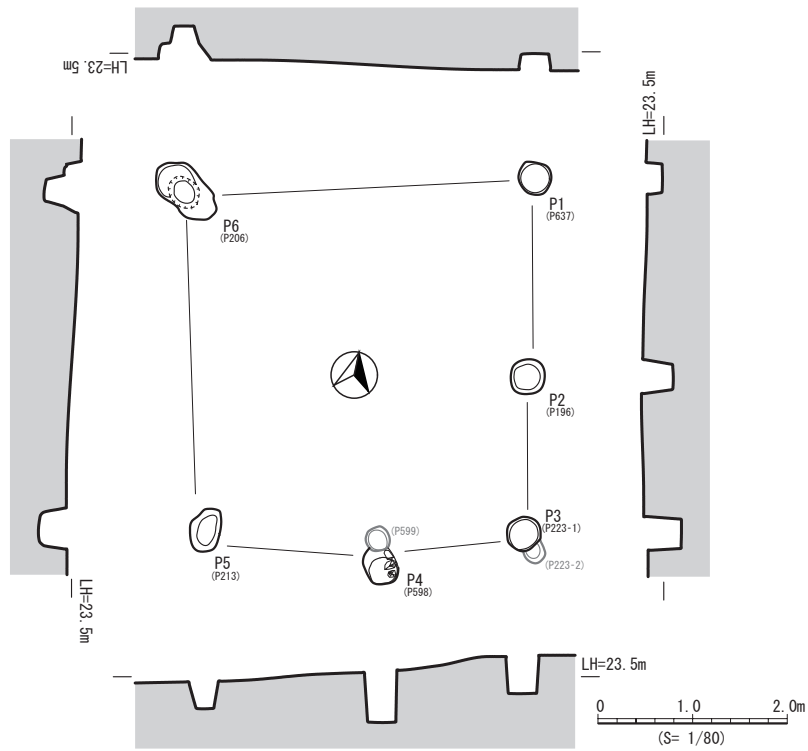
第129表 SB18計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P10	364	平均	182	P1-P5	686	平均	171.5	方角:N 3° E 面積:25.7㎡	P2:二枚貝(1) P6:鉄滓(1) P8:シロイガレイシ(1), ハナビラダカラ(1) P10:土器(3), 布目圧痕土器(1), タカラガイ(3), チョウセンサザエ(1), ビノスモドキ(1), ヤコウガイ(1), コムギ(1) フエフキダイ科(1), ウツボ科(1), タイ型(2), モンガラカワハギ科(1)
P5-P6	170	平均	170	P7-P10	507	平均	169		
P18-P16	360	平均	180	P12-P15	690	平均	230		
P1-P11	199	P5-P6	170	P1-P2	135	P7-P8	163		
P11-P10	165			P2-P3	196	P8-P9	183		
P18-P17	174			P12-P13	294				
P17-P16	186			P13-P14	209				
				P14-P15	187				

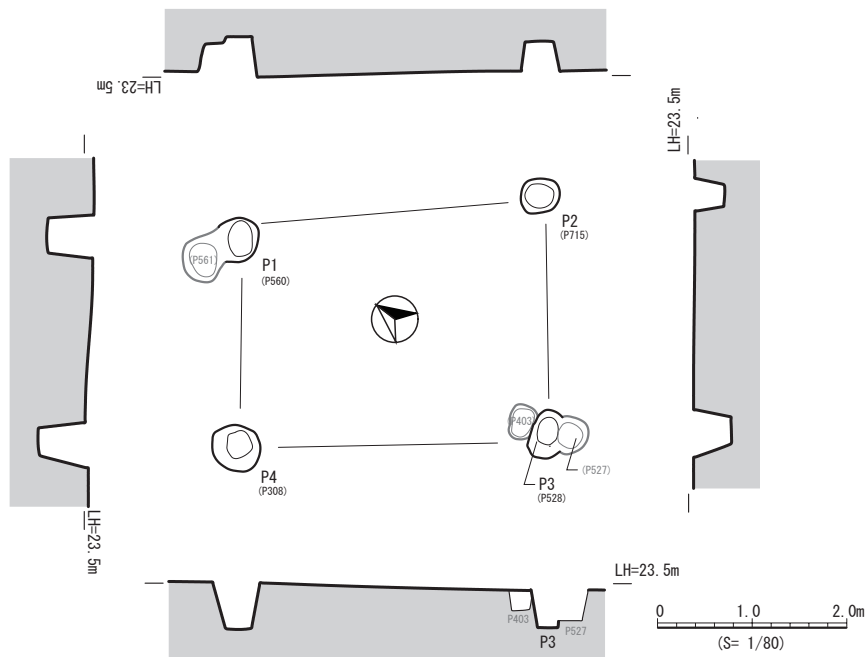
掘立柱建物跡18号 (SB18) (第171図・第129表)

検出状況: N・O-16 区で検出した, 4×2 間の建物跡である。東側と北側に柱穴が並んでおり, 底になる可能性がある。SB19・SB20 と重複している。柱穴の大きさや深さはそれぞれであり, 最大のもので直径 0.4m, 最深のもので 0.45m を測る。平均では, 直径約 0.3m で深さ約 0.3m である。P6 は斜めに掘り込まれている。

出土遺物: 土器 3 点や布目圧痕土器 1 点, 鉄滓 1 点のほか, ヤコウガイなどの貝類が 9 点, フエフキダイ科やウツボ科などの魚骨が 5 点出土した。また, P10 から採取した土壌サンプルをフローテーションによって処理を行った結果, コムギが 1 点検出された。これらのうち, 布目圧痕土器 1 点を実測した。



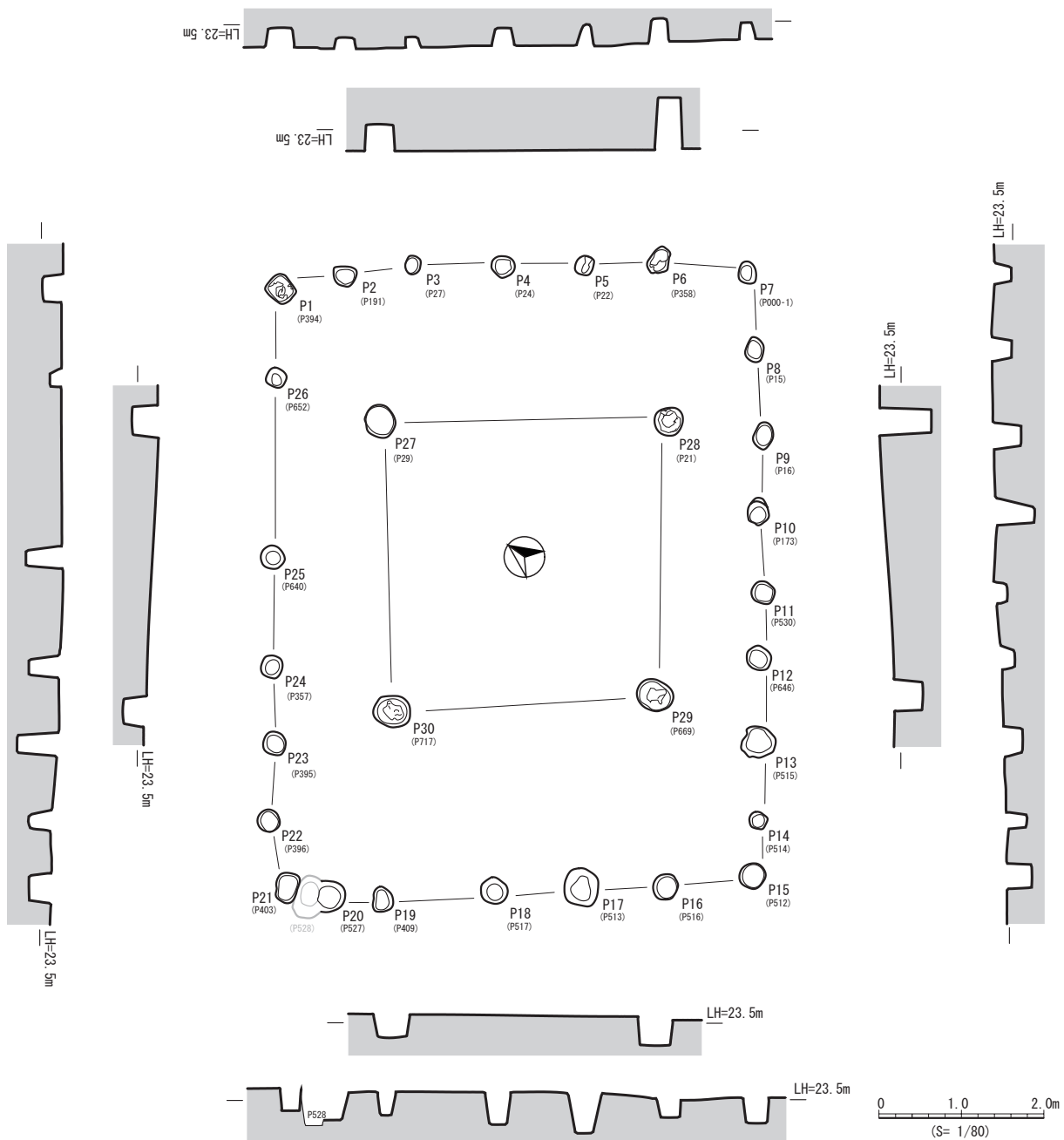
第172図 SB19 実測図



第173図 SB20 実測図

第130表 SB19計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	372	平均	372	P1-P3	376	平均	188	方角:N 11° W 面積:13.8m ²	P1:粘土塊(1), クロダイ属(1), タイ型(1)
P3-P5	347	平均	173.5	P5-P6	358	平均	358		P3:土器(1), 粘土塊(5), 鉄滓(1), ヤコウガイ(1)
P1-P6	372	P3-P4	156	P1-P2	210	P5-P6	358		P4:土器(1), 石器(3), 石製品(1), ヤナギシボリ(1)
		P4-P5	191	P2-P3	166				P5:白磁(1), 土器(3), ヤコウガイ(1)
									P6:鉄滓(3), 粘土塊(5), キヌボラ(1), タイ型(1), ペラ科(1)



第 174 図 SB21 実測図

掘立柱建物跡 19 号 (SB19) (第 172 図・第 130 表)

検出状況: N・O-16 区で検出した、2×2 間の建物跡である。SB18・SB20 と重複している。柱穴の大きさはそれぞれであるが、一番大きなものは長軸約 0.75m×短軸 0.4m を測り、また、一番深いものは約 0.55m ある。平均すると直径約 0.35m で、深さは約 0.3m である。北側及び西側の柱穴は検出できなかった。

出土遺物: 白磁 1 点や土器 5 点、石器 3 点、石製品 1 点、鉄滓 4 点、ヤコウガイなどの貝類 4 点、クロダイ属などの魚骨 4 点が出土した。このうち白磁 1 点、石器 1 点、石製品 1 点を実測した。

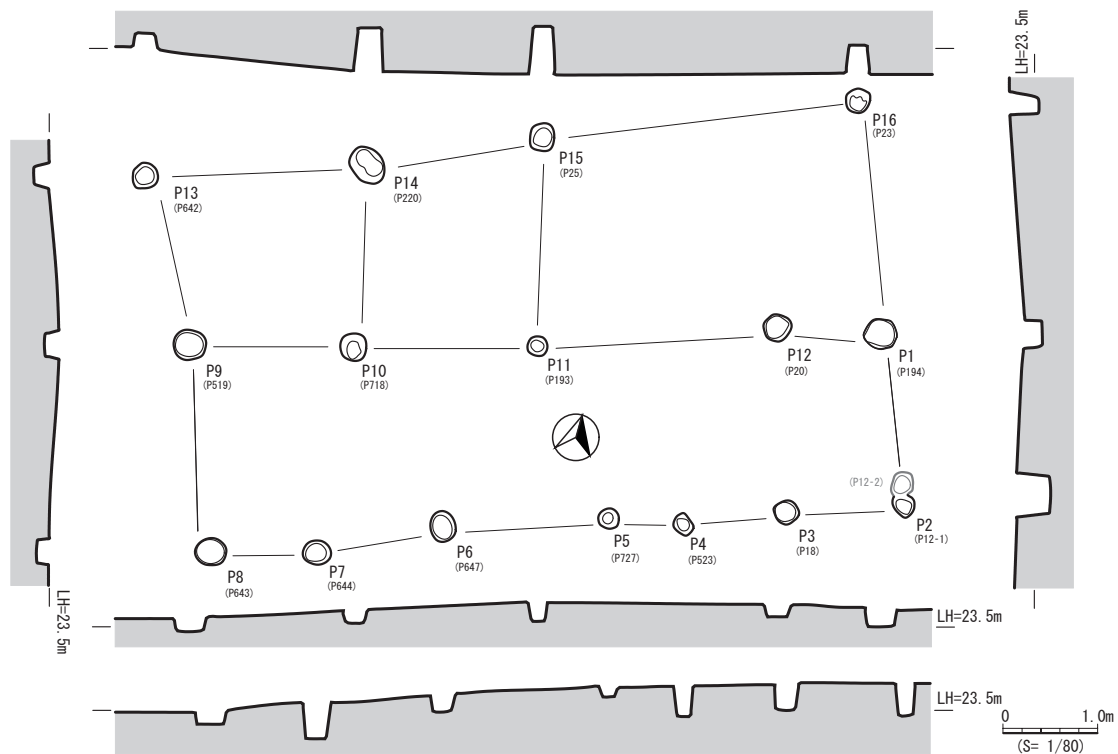
掘立柱建物跡 20 号 (SB20) (第 173 図・第 131 表)

検出状況: N・O-15 区で検出した、1×1 間の 4 本柱建物跡である。SB18・SB19・SB21 と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.45m で深さは約 0.4m である。

出土遺物: 土器 2 点や滑石混入土器 3 点、轆の羽口 1 点、鉄滓 1 点、ヤコウガイなどの貝類 7 点、アオブダイ属などの魚骨 2 点が出土した。

掘立柱建物跡 21 号 (SB21) (第 174 図・第 132 表)

検出状況: N-15 区で検出した、1×1 間の建物の周りに 26 基の柱穴が囲む建物跡である。崩り遺跡で検出された掘立柱建物の中では最大の面積を持つ。SB20・SB22 と重複している。



第 175 図 SB22 実測図

第131表 SB20計測表

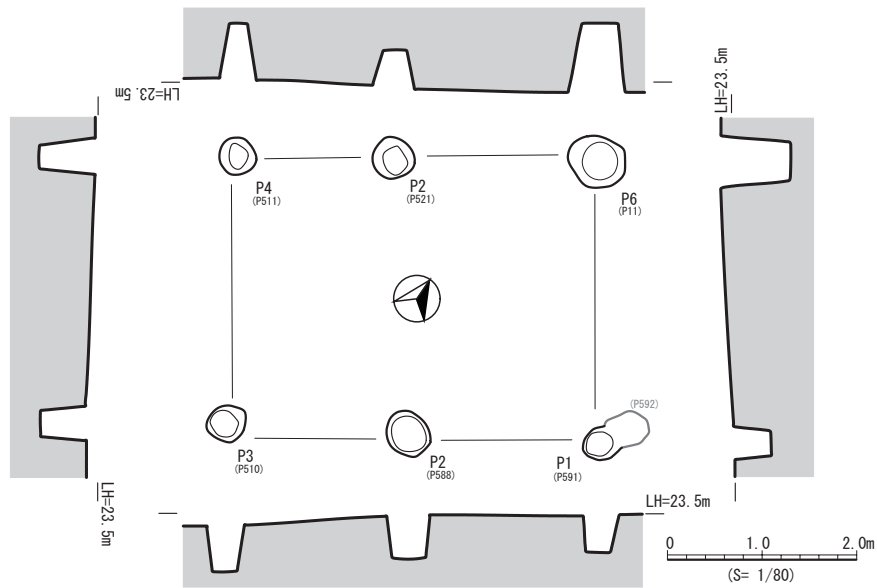
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	219	平均	219	P1-P2	320	平均	320	方角:N 41° W 面積:7.3㎡	P1:鞆の羽口(1), 粘土塊(1), タカラガイ(1), ムラサキウズ(2), ヤコウガイ(1)
P2-P3	250	平均	250	P3-P4	328	平均	328		P2:フエフキダイ科(1)
P1-P4	219	P2-P3	250	P1-P2	320	P3-P4	328		P3:土器(1), 鉄滓(1), ウツボ科(1) P4:土器(1), 滑石混入土器(3), ベニエガイ(1), ヤコウガイ(1), リュウキュウマスオ(1), アオブダイ属(1)

第132表 SB21計測表

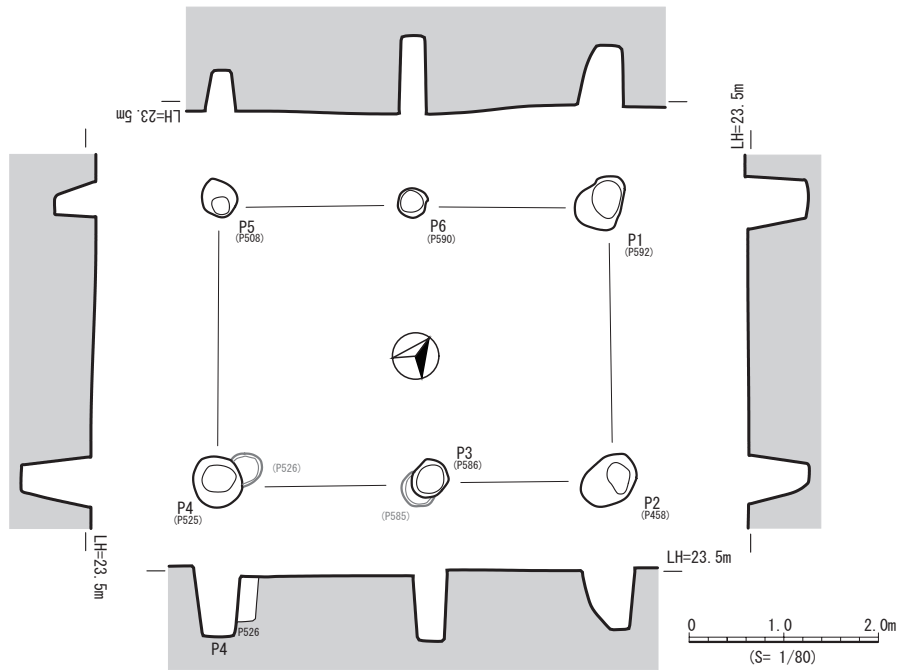
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P7	572	平均	95.3	P1-P21	731	平均	121.8	方角:N 53° E 面積:44.1㎡	P11:カムイヤキ(1)
P15-P21	571	平均	95.1	P7-P15	731	平均	91.3		P12:土器(14), チョウセンサザエ(1)
P27-P28	351	平均	351	P27-P30	354	平均	354		P13:土器(1), メイチダイ属(1)
P29-P30	319	平均	319	P28-P29	332	平均	332		P17:土器(1), 鉄製品(刀子?)(1), ヤコウガイ(1)
P1-P2	85	P15-16	107	P1-P26	110	P7-P8	95		P18:チョウセンサザエ(1), フエフキダイ科(1)
P2-P3	76	P16-P17	104	P26-P25	216	P8-P9	104		P20:土器(4), 鞆の羽口(1), ヤコウガイ(1)
P3-P4	112	P17-P18	104	P25-P24	133	P9-P10	98		P24:ヤコウガイ(1), タイ型(1)
P4-P5	102	P18-P19	140	P24-P23	93	P10-P11	96		P27:石器(1)
P5-P6	88	P19-P20	64	P23-P22	96	P11-P12	78		P28:滑石二次加工品(1), 石器(1)
P6-P7	109	P20-P21	52	P22-P21	83	P12-P13	98		P30:土器(1), ヤコウガイ(1), ブダイ属(1), モンガラカワハギ科(1)
						P13-P14	96		
						P14-P15	66		

第133表 SB22計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P2-P16	429	平均	214.5	P1-P9	739	平均	184.7	方角:N 72° E 面積:31.6㎡	P3:滑石二次加工品(1)
P8-P13	405	平均	202.5	P2-P8	740	平均	123.3		P4:石器(1)
				P16-P13	759	平均	253		P5:石器(1), マハタ型(1)
P2-P1	185	P8-P9	221	P1-P12	112	P2-P3	126		P10:ハリセンボン科(1)
P1-P16	244	P9-P13	184	P12-P11	256	P3-P4	109		P13:土器(1), 鞆の羽口(1), 礫(1), クロダイ属(1)
				P11-P10	195	P4-P5	80		
				P10-P9	176	P5-P6	175		
						P6-P7	138		
						P7-P8	112		
				P16-P15	335				
				P15-P14	186				
				P14-P13	238				



第 176 図 SB23 実測図



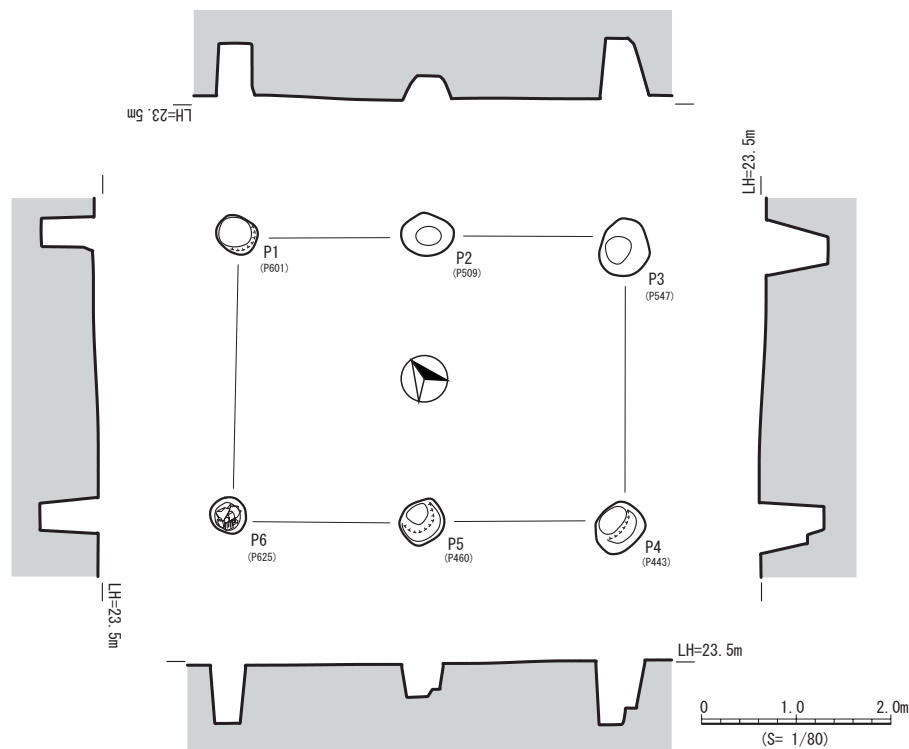
第 177 図 SB24 実測図

第134表 SB23計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	300	平均	300	P1-P3	397	平均	198.5	方角:N 56° E 面積:11.9㎡	P2:滑石混入土器(1),滑石(1), P4:土器(23),石器(2) P5:土器(1),鉄製品(1),ヤコウガイ(1) P6:滑石混入土器(1),礫(3),巻貝(1)
P3-P4	283	平均	283	P4-P6	384	平均	192		
P1-P6	300	P3-P4	283	P1-P2	202	P4-P5	166		
				P2-P3	195	P5-P6	218		

第135表 SB24計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	300	平均	300	P1-P5	411	平均	205.5	方角:N 52° E 面積:12.3㎡	P2:土器(1),鉄滓(1),ハタ科(1)
P4-P5	289	平均	289	P2-P4	427	平均	213.5		
P1-P2	300	P4-P5	289	P1-P6	209	P2-P3	201		
				P6-P5	202	P3-P4	226		



第 178 図 SB25 実測図

第 136 表 SB25 計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	302	平均	302	P1-P3	408	平均	204	方角:N 56° W 面積:12m ²	P3:土器(1), フェフキダイ科(1)
P3-P4	286	平均	286	P4-P6	406	平均	203		P4:土師器(1), 滑石製石鍋(1), イモガイ(1), チョウセンサザエ(1), ハタ科(1)
P1-P6	302	P3-P4	286	P1-P2	206	P4-P5	205		
				P2-P3	202	P5-P6	201		

中央 4 本の柱穴の大きさは、直径約 0.4m で深さは約 0.4m である。周りの 26 本の柱穴の大きさや深さはそれぞれであるが、平均では直径約 0.3m、深さ約 0.3m である。

出土遺物: カムイヤキ 1 点や土器 21 点、鞆の羽口 1 点、刀身の可能性のある鉄製品 1 点、滑石製石鍋 1 点、石器 2 点、貝類 6 点、ブダイなどの魚骨 5 点が出土した。これらのうち、カムイヤキ、鞆の羽口、鉄製品、滑石二次加工品、石器をそれぞれ 1 点ずつ実測した。

掘立柱建物跡 22 号 (SB22) (第 175 図・第 133 表)

検出状況: N-15 区で検出した、6×2 間の建物跡である。SB21 と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.35m で深さは約 0.3m である。

出土遺物: 土器 1 点や鞆の羽口 1 点、滑石二次加工品 1 点、石器 2 点、クロダイ属などの魚骨 3 点が出土した。そのうち、鞆の羽口 1 点、滑石二次加工品 1 点、石器 1 点を実測した。

掘立柱建物跡 23 号 (SB23) (第 176 図・第 134 表)

検出状況: N-14 区で検出した、2×1 間の建物跡である。SB24 及び SB41 と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約

0.4m で深さは約 0.5m である。

出土遺物: 土器 24 点や滑石混入土器 1 点、鉄製品 1 点、石器 2 点、滑石 1 点、ヤコウガイが 1 点出土した。

掘立柱建物跡 24 号 (SB24) (第 177 図・第 135 表)

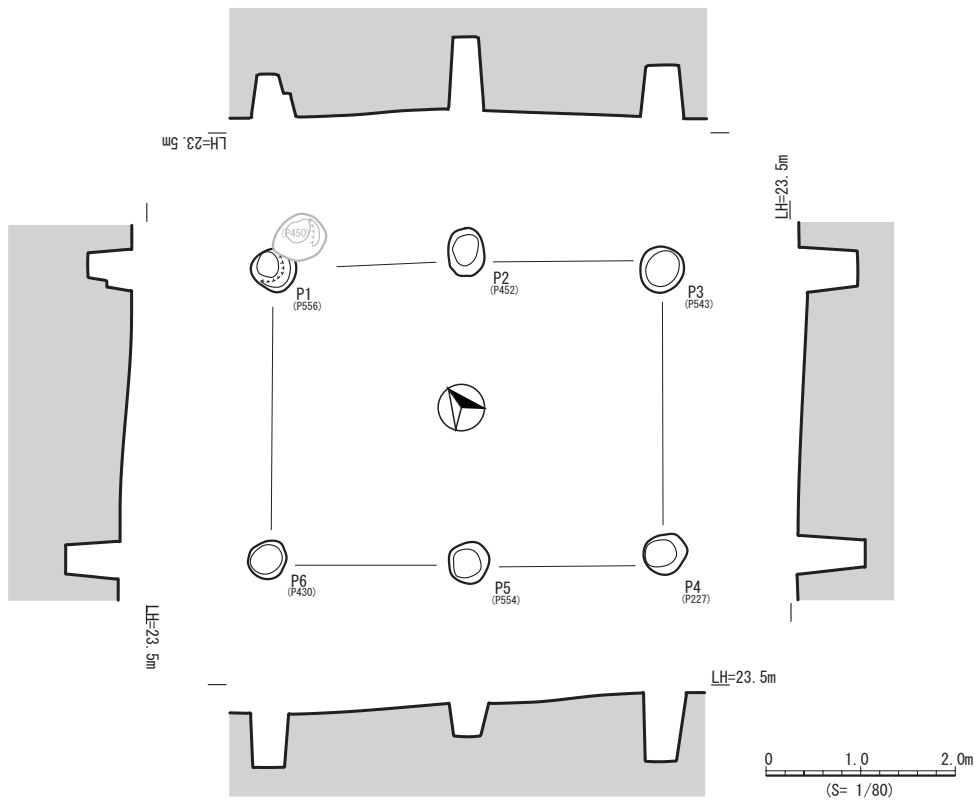
検出状況: N-14 区で検出した、2×1 間の建物跡である。SB23 と重複している。柱穴の大きさはそれぞれであるが、一番大きなものは長軸約 0.6m×短軸 0.5m を測り、また、一番深いものは約 0.8m である。平均では、直径約 0.4m で、深さは約 0.6m である。

出土遺物: 土器 1 点や鉄滓 1 点、ハタ科の魚骨 1 点が出土した。

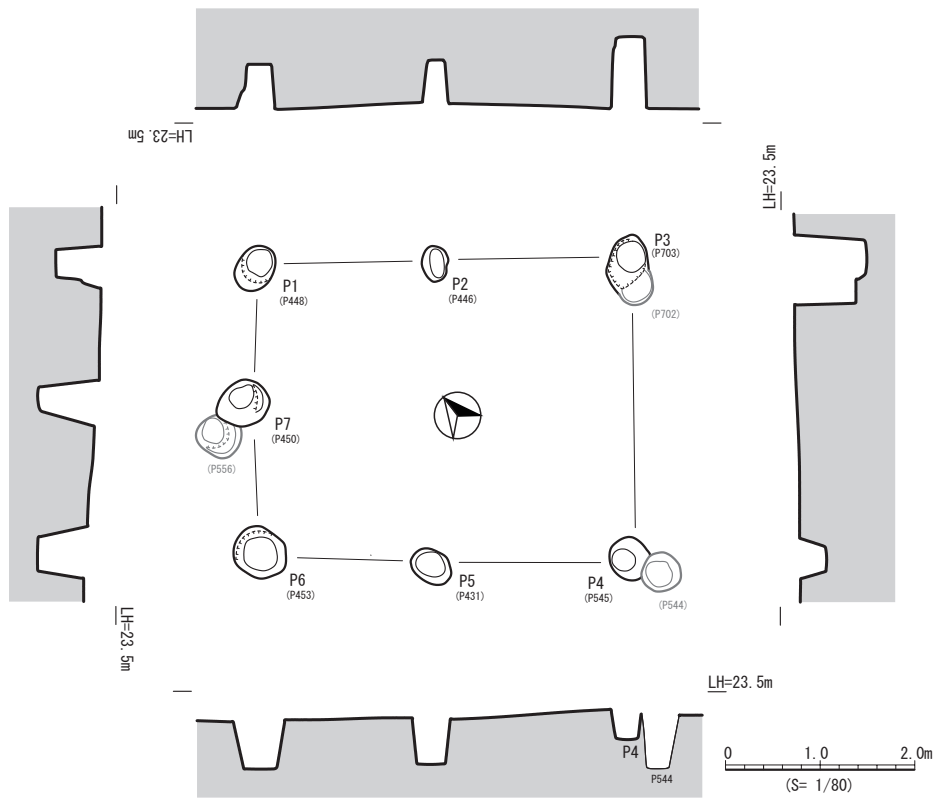
掘立柱建物跡 25 号 (SB25) (第 178 図・第 136 表)

検出状況: O・P-15 区で検出した、2×1 間の建物跡である。SB26～SB29 と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.4m で深さは約 0.5m である。

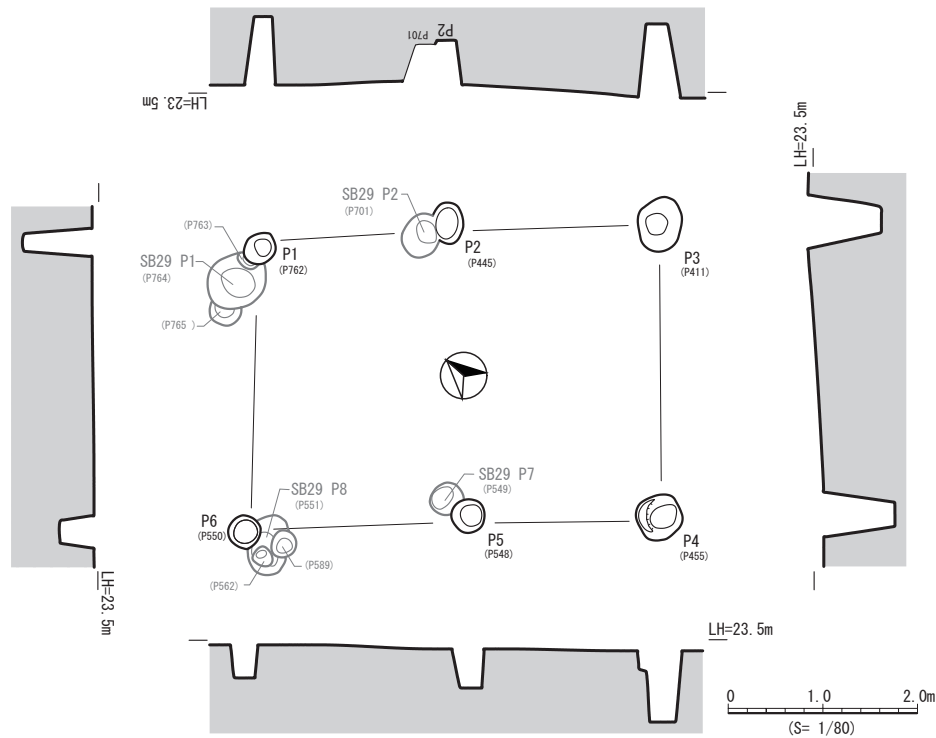
出土遺物: 土器 1 点や土師器 1 点、滑石製石鍋 1 点、イモガイなどの貝類 2 点、ハタ科などの魚骨 2 点が出土した。このうち、滑石製石鍋 1 点を実測した。



第 179 图 SB26 実測図



第 180 图 SB27 実測図



第 181 図 SB28 実測図

第137表 SB26計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	314	平均	314	P1-P3	419	平均	209.5	方角:N 16° W 面積:13.5㎡	P1:滑石二次加工品(1), 鉄滓(3), チョウセンサザエ(1), ヤコウガイ(1), オオムギ(1), プダイ科浮遊歯(3) P2:土器(1) P3:土器(2) P4:鉄滓(1), 粘土塊(3), ハリセンボン科(1) P6:ウシ(1)
P3-P4	301	平均	301	P4-P6	419	平均	209.5		
P1-P6	314	P3-P4	301	P1-P2	213	P4-P5	207		
				P2-P3	206	P5-P6	212		

第138表 SB27計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	315	平均	157.5	P1-P3	393	平均	196.5	方角:N 53° W 面積:12.6㎡	P4:滑石製石鍋(1) P5:土器(5), 滑石二次加工品(1), 滑石(1), 粘土塊(3), イモガイ(1) P7:土器(1), 鉄滓(1), 滑石(2), チョウセンサザエ(1)
P3-P4	323	平均	323	P4-P6	385	平均	192.5		
P1-P7	144	P3-P4	323	P1-P2	186	P4-P5	204		
P7-P6	171			P2-P3	207	P5-P6	181		

第139表 SB28計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P6	302	平均	302	P1-P3	416	平均	208	方角:N 44° W 面積:13.1㎡	P2:白磁(1), カムイヤキ(1) P3:土器(4), 貝(2) P4:白磁(1), 滑石(2), 鉄滓(1) P6:滑石混入土器(1), 粘土塊(2)
P3-P4	311	平均	311	P4-P6	442	平均	221		
P1-P6	302	P3-P4	311	P1-P2	196	P4-P5	202		
				P2-P3	220	P5-P6	240		

掘立柱建物跡 26 号 (SB26) (第 179 図・第 137 表)

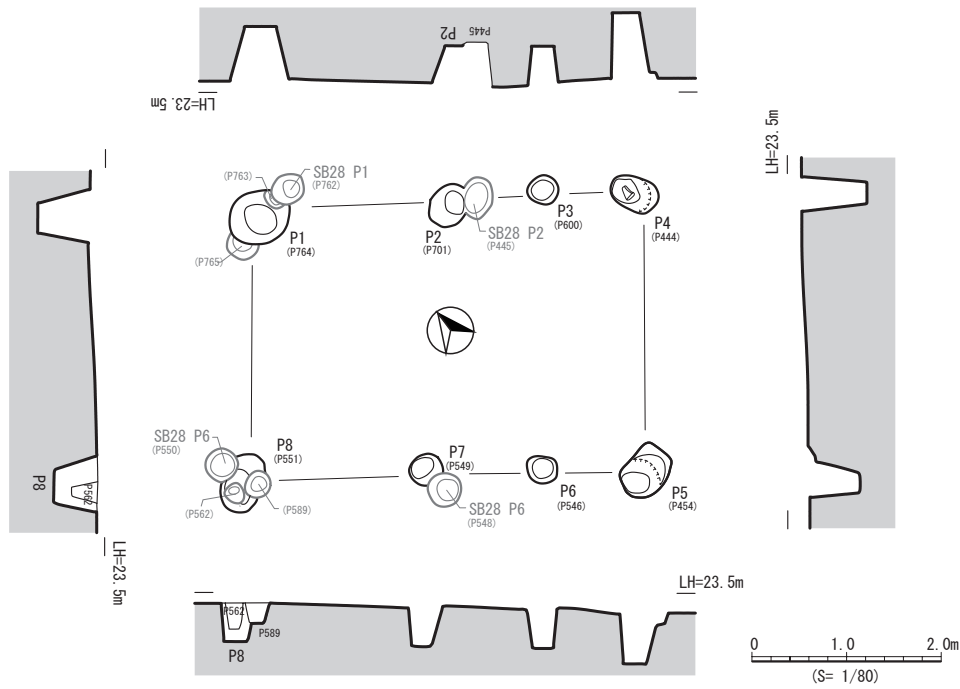
検出状況: O・P-15 区で検出した, 2×1 間の建物跡である。SB25・SB27~SB29 と重複している。柱穴の大きさの平均は, 直径約 0.45m で深さは約 0.6m である。

出土遺物: 土器 3 点や滑石二次加工品 1 点, 鉄滓 4 点, ヤコウガイなどの貝類 2 点, ウシやハリセンボン科の骨 5 点が出土した。また, P1 から採取した土壌サンプルをフローテーションによって処理を行った結果, オオムギの炭化種子 1 点が発見された。これらの出土遺物のうち, 滑石二次加工品 1 点を実測した。

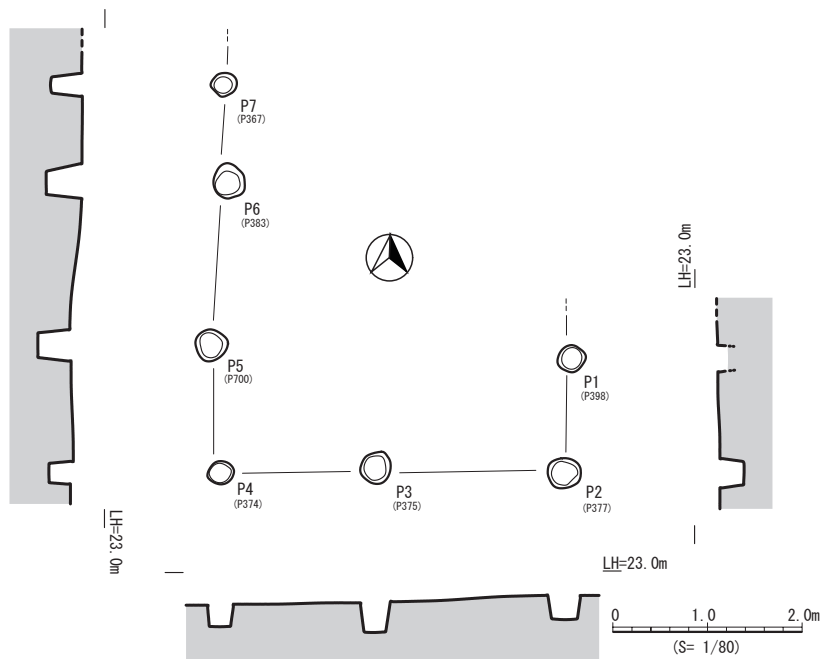
掘立柱建物跡 27 号 (SB27) (第 180 図・第 138 表)

検出状況: O・P-15 区で検出した, 2×2 間の建物跡である。SB25・SB26・SB28・SB29 と重複している。柱穴の大きさの平均は, 直径約 0.45m で深さは約 0.6m である。

出土遺物: 土器 6 点や滑石製石鍋 1 点, 滑石二次加工品 1 点, 滑石 3 点, 鉄滓 1 点, チョウセンサザエなどの貝類 2 点が出土した。このうち, 滑石製石鍋 1 点を実測した。



第 182 図 SB29 実測図



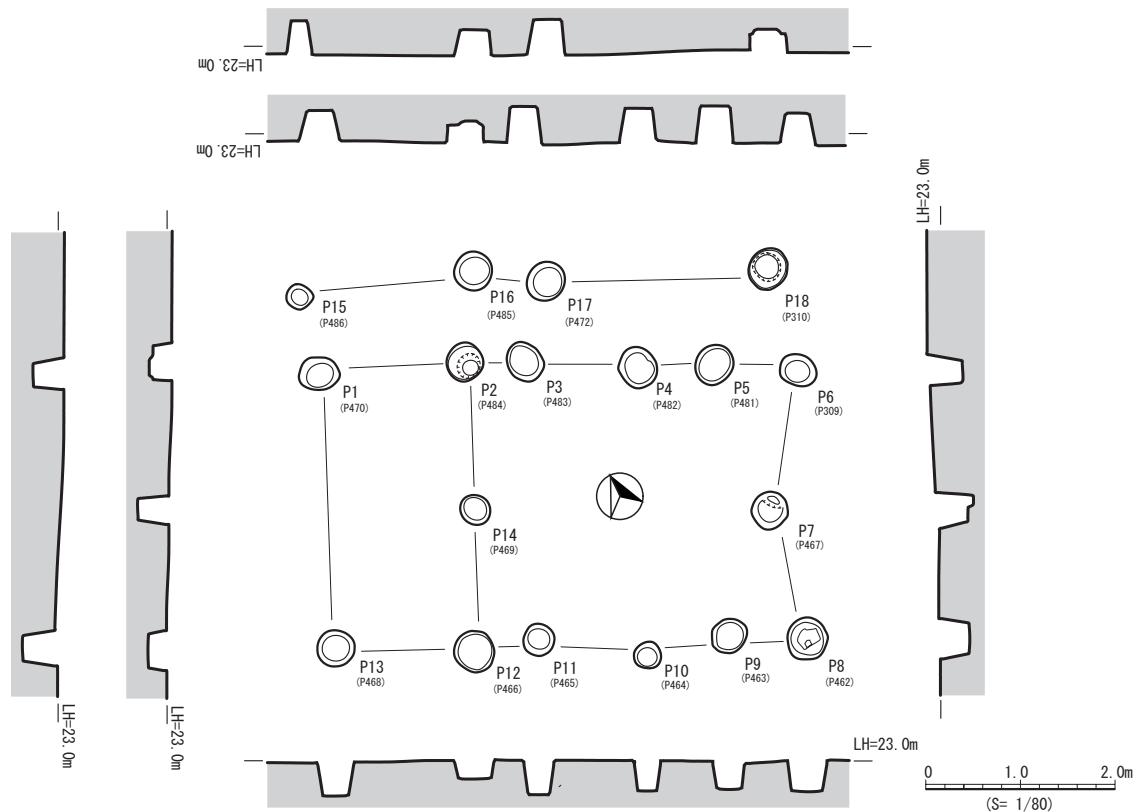
第 183 図 SB30 実測図

第140表 SB29計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P8	282	平均	282	P1-P4	387	平均	129.6	方角:N 53° W 面積:11.6㎡	P1:滑石製石鍋(1), 石器(1)
P4-P5	311	平均	311	P5-P8	417	平均	139		P2:巻貝(1)
P1-P8	282	P4-P5	311	P1-P2	207	P5-P6	98		P4:カムイヤキ(1), 土器(2), 鉄滓(1)
				P2-P3	95	P6-P7	128		P8:土器(1), 滑石混入土器(1), ウミギク科(1), フェフキダイ科(1)
				P3-P4	87	P7-P8	191		

第141表 SB30計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P2-P4	365	平均	182.5	P1-P2	121	平均	121	方角:N 2° W	P2:滑石混入土器(2)
				P4-P7	412	平均	137.3		P5:イモガイ(1), オオスミウスカワ(3), カシパン類(1), シマイボボラ(1), ノメカワニナ(1), マダライモ(1)
P2-P3	200			P1-P2	121	P4-P5	136		P6:ホソスジイナミガイ(1)
P3-P4	165					P5-P6	172		
						P6-P7	104		



第 184 図 SB31 実測図

第142表 SB31計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P13	290	平均	290	P1-P6	508	平均	101.6	方角:N 66° W 面積:14.6㎡	P1:滑石製石鍋(1)
P6-P8	291	平均	145.5	P8-P13	506	平均	101.2		P2:土器(1)
P2-P14	149	平均	151	P15-P18	499	平均	166.3		P4:鉄滓(1)
P1-P13	290	P6-P7	148	P1-P2	160	P8-P9	84		P5:土器(1)
		P7-P8	143	P2-P3	59	P9-P10	90		P6:白磁(1)
				P3-P4	120	P10-P11	116		P8:滑石製石鍋(1)
				P4-P5	80	P11-P12	68		P11:滑石製石鍋(1)
				P5-P6	89	P12-P13	148		P12:土器(1)
P2-P14	149			P15-P16	189			P13:土器(1)	
P14-P12	150			P16-P17	80			P16:フエフキダイ科(1)	
				P17-P18	230				

掘立柱建物跡 28 号 (SB28) (第 181 図・第 139 表)

検出状況: O・P-15 区で検出した、2×1 間の建物跡である。SB25～SB27・SB29 と重複しており、P1 (P762)、P5 (P548)、P6 (P550) は、それぞれ SB29 の P1 (P764)、P7 (P549)、P8 (P764) を切っていることから、SB28 は SB29 よりも新しい (古 SB29<SB28 新)。

柱穴の大きさの平均は、直径約 0.4m で深さは約 0.6m である。

出土遺物: 白磁 2 点やカムイヤキ 1 点、土器 4 点、滑石混入土器 1 点、鉄滓 1 点、貝類 2 点が出土した。これらのうち、白磁 1 点とカムイヤキ 1 点を実測した。

掘立柱建物跡 29 号 (SB29) (第 182 図・第 140 表)

検出状況: O・P-15 区で検出した、3×1 間の建物跡である。SB25～SB28 と重複しており、SB28 で記述したとおり、柱穴の切り合い関係から SB29 は SB28 より古い。(古 SB29<

SB28 新)。

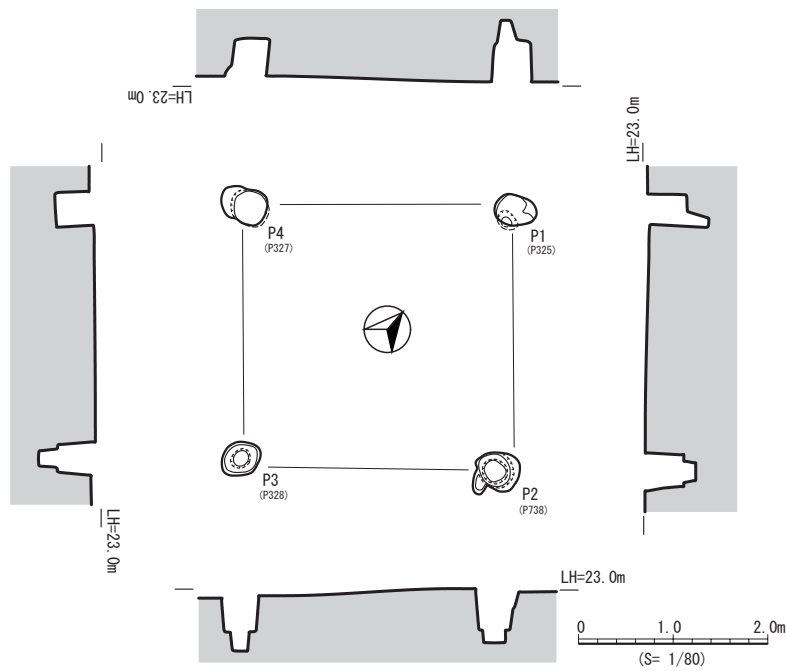
柱穴の大きさはそれぞれであるが、一番大きなものは直径約 0.6m をはかり、また、一番深のものは約 0.7m ある。平均では、直径約 0.4m、深さ約 0.5m である。

出土遺物: カムイヤキ 1 点や土器 3 点、滑石混入土器 1 点、滑石製石鍋 1 点、鉄滓 1 点、石器 1 点、ウミギク科などの貝類 2 点、フエフキダイ科の魚骨 1 点が出土した。

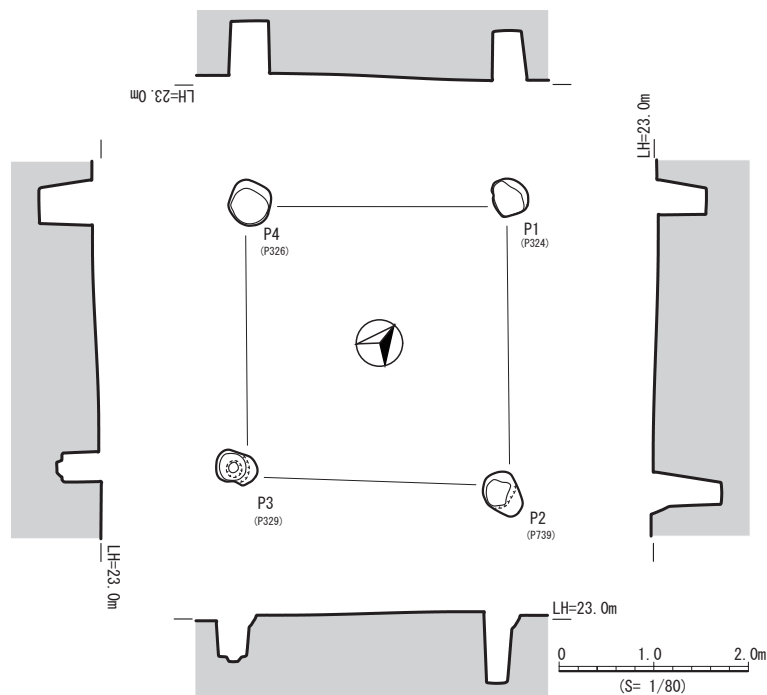
掘立柱建物跡 30 号 (SB30) (第 183 図・第 141 表)

検出状況: Q・R-13 区で検出した建物跡である。北側及び北東側のピットが検出できなかったため、規模や柱の数などの詳細は不明である。他の SB や遺構との重複は見られず、単独で検出された。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.3m で深さは約 0.3m である。

出土遺物: 滑石混入土器 2 点とイモガイなどの貝類が 9 点出土した。



第 185 図 SB32 実測図



第 186 図 SB33 実測図

掘立柱建物跡 31 号 (SB31) (第 184 図・第 142 表)

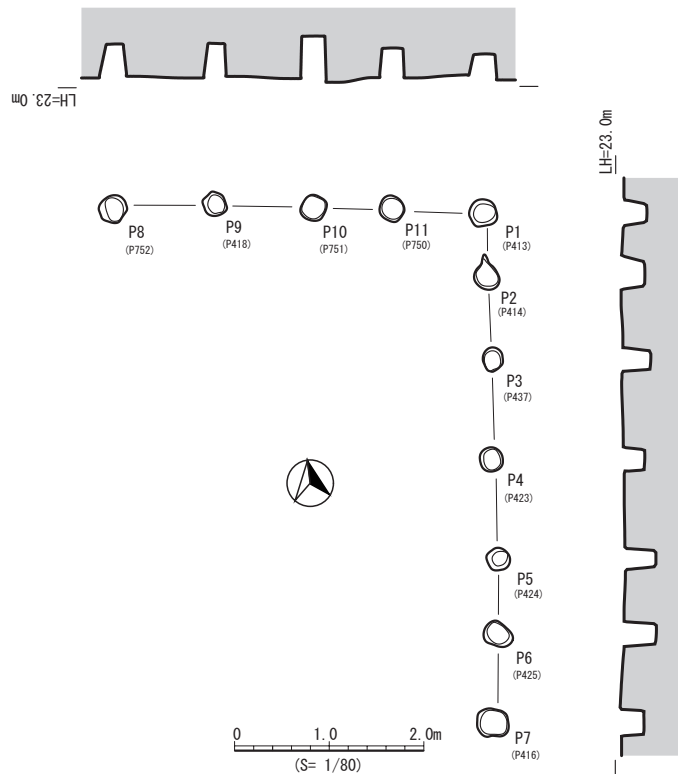
検出状況: L-11・12 区で検出した、5×2 間の建物跡である。北東側に柱穴が並んでおり、底になる可能性がある。検出は IV 層を掘り下げた後の V 層上面であり、IV 層上面で検出している掘立柱建物跡 (SB18~29) よりも古い建物と考えられる。他の SB や遺構との重複は見られず、単独で検出された。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.4m で深さは約 0.3m である。

出土遺物: 白磁 1 点や土器 4 点、滑石製石鍋 3 点、鉄滓 1 点、フエフキダイ科の魚骨 1 点が出土した。

掘立柱建物跡 32 号 (SB32) (第 185 図・第 143 表)

検出状況: L-7 区で検出した、1×1 間の 4 本柱建物跡である。SB33 と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.4m で深さは約 0.5m であり、西側の柱穴以外の 3 基は 2 段堀になっている。

出土遺物: 遺物は出土しなかった。



第 187 図 SB34 実測図

第143表 SB32計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P2	264	平均	264	P1-P4	270	平均	270	方角:N 42° W 面積:7.5m ²	-
P3-P4	265	平均	265	P2-P3	270	平均	270		
P1-P2	264	P3-P4	265	P1-P4	270	P2-P3	270		

第144表 SB33計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	282	平均	282	P1-P2	311	平均	311	方角:N 33° W 面積:8.1m ²	-
P2-P3	282	平均	282	P3-P4	282	平均	282		
P1-P4	282	P2-P3	282	P1-P2	311	P3-P4	282		

第145表 SB34計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P8	392	平均	98	P1-P7	538	平均	89.6	方角:N 6° E	P3:土器(8) P7:ハリセンボン科(1)
P1-P11	96			P1-P2	65				
P11-P10	86			P2-P3	91				
P10-P9	102			P3-P4	104				
P9-P8	108			P4-P5	103				
				P5-P6	81				
				P6-P7	94				

掘立柱建物跡 33 号 (SB33) (第 186 図・第 144 表)

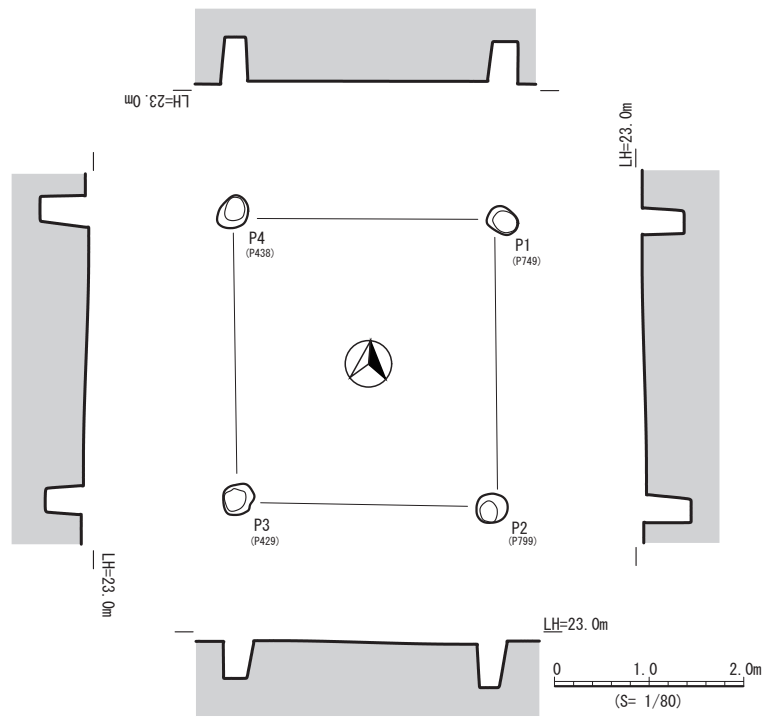
検出状況:L-7 区で検出した、1×1 間の 4 本柱建物跡である。SB32 と重複している。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.4m で深さは約 0.55m である。

出土遺物: 遺物は出土しなかった。

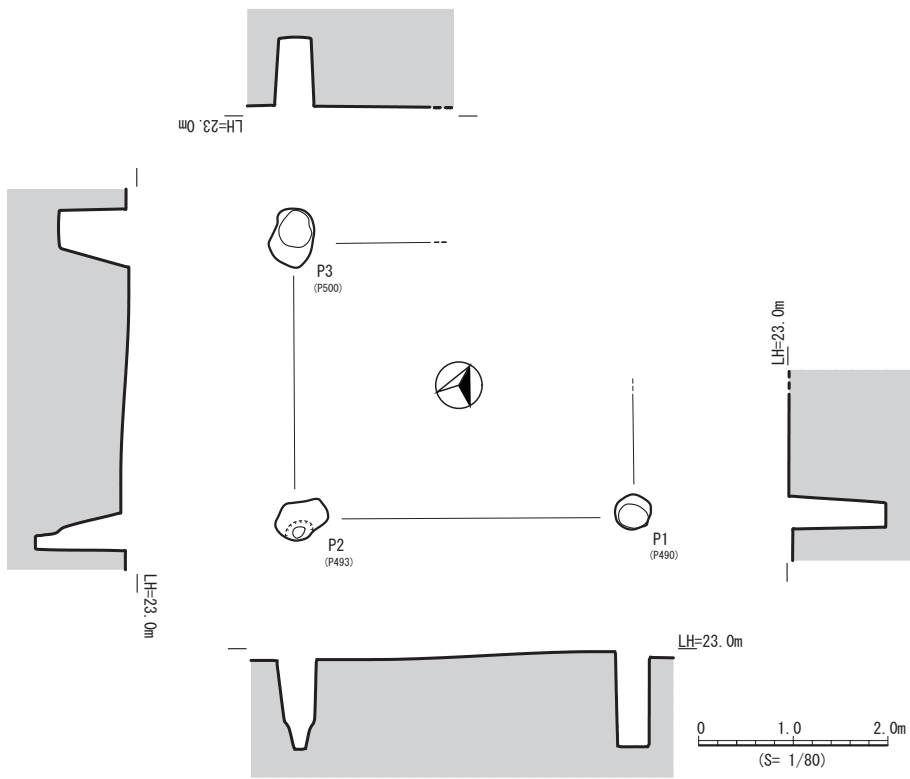
掘立柱建物跡 34 号 (SB34) (第 187 図・第 145 表)

検出状況: L-5 区で検出した建物跡である。西側部分が刃の段差で削られ消滅しているが、残存部から 6×4 間の建物跡と推定される。他の SB や遺構との重複は見られず、単独で検出された。柱穴の大きさの平均は、直径約 0.3m で深さは約 0.3m である。

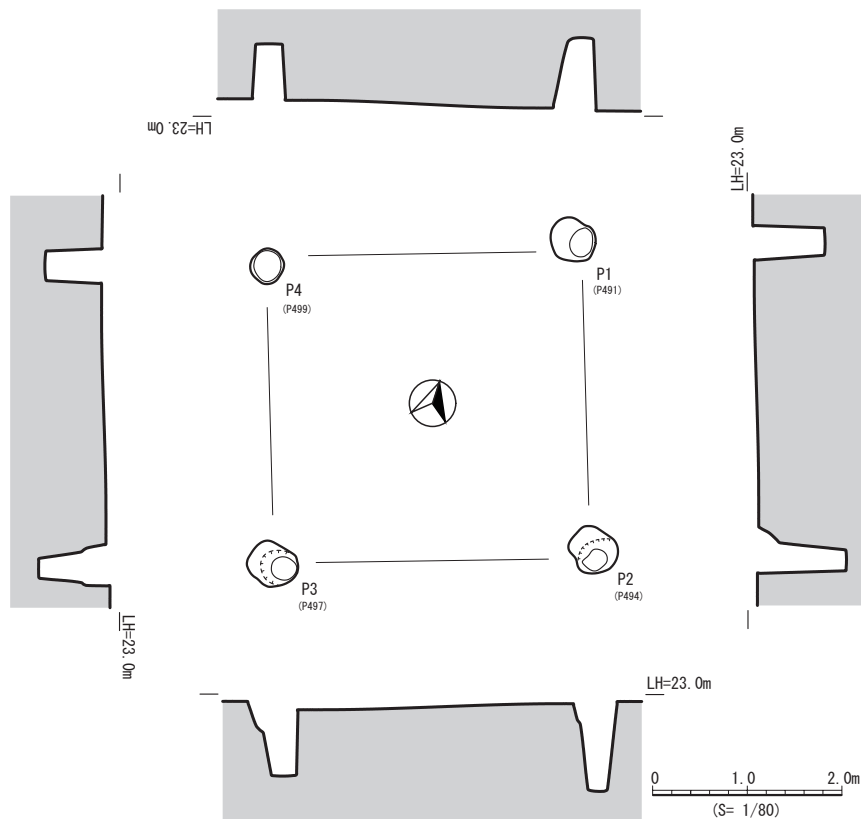
出土遺物: 土器が 8 点とハリセンボン科の魚骨 1 点が出土した。



第 188 图 SB35 実測図



第 189 图 SB36 実測図



第190図 SB37実測図

第146表 SB35計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	287	平均	287	P1-P2	307	平均	307	方角:N 4° W 面積:8.6㎡	P2:滑石(1) P4:土器(2)
P2-P3	269	平均	269	P3-P4	309	平均	309		
P1-P4	287	P2-P3	269	P1-P2	307	P3-P4	309		

第147表 SB36計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P2-P3	320	平均	320	P1-P2	349	平均	349	方角:N 58° E 面積:11.1㎡	P1:土器(7), 土師器(2) P3:土器(17)
P2-P3	320			P1-P2	349				

第148表 SB37計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	335	平均	335	P1-P2	336	平均	336	方角:N 21° W 面積:11.2㎡	P1:土器(20), 土師器(1), 鉄滓(1), 粘土塊(1)
P2-P3	331	平均	331	P3-P4	321	平均	321		P2:土器(13), 土師器(1), 石器(1)
P1-P4	335	P2-P3	331	P1-P2	336	P3-P4	321		P3:土器(10), 土師器(1) P4:土器(13), 粘土塊(2)

掘立柱建物跡35号 (SB35) (第188図・第146表)

検出状況:L-5区で検出した,1×1間の4本柱建物跡である。他のSBや遺構との重複は見られず,単独で検出された。柱穴の大きさの平均は,直径約0.3mで深さは約0.4mである。
出土遺物:土器2点と滑石1点が出土した。

掘立柱建物跡36号 (SB36) (第189図・第147表)

検出状況:K-3区で検出した,1×1間の4本柱建物跡である。SB37・SB38と重複している。柱穴の大きさの平均は,直径約0.4mで深さは約0.8mである。北東側のピットは検出でき

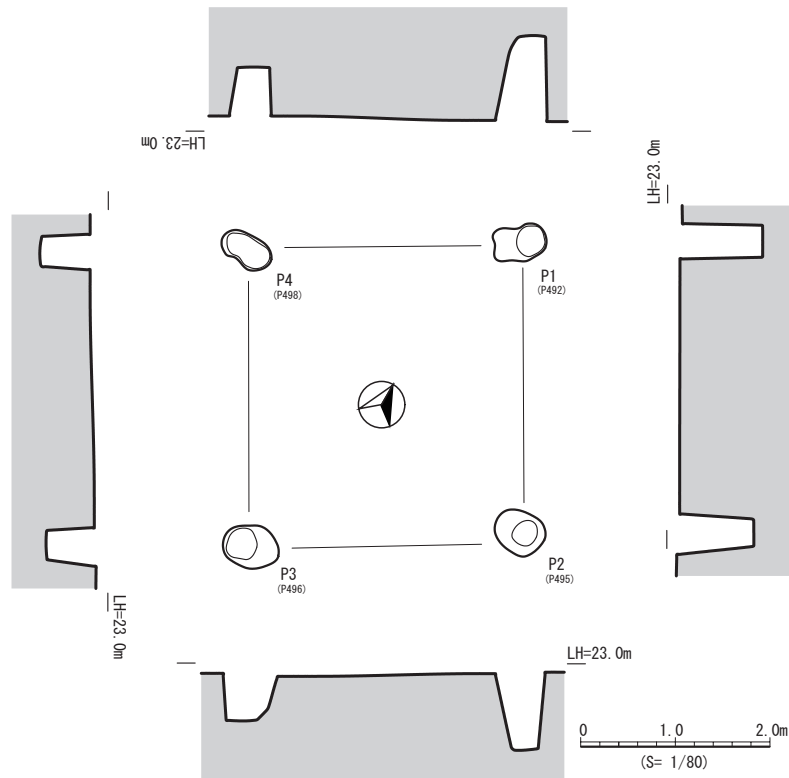
なかった。

出土遺物:土器24点と土師器2点が出土した。

掘立柱建物跡37号 (SB37) (第190図・第148表)

検出状況:K-3区で検出した,1×1間の4本柱建物跡である。SB36・SB38と重複している。柱穴の大きさの平均は,直径約0.5mで深さは約0.7mである。

出土遺物:土器56点や土師器3点,石器1点,鉄滓1点が出土した。



第191図 SB38実測図

第149表 SB38計測表

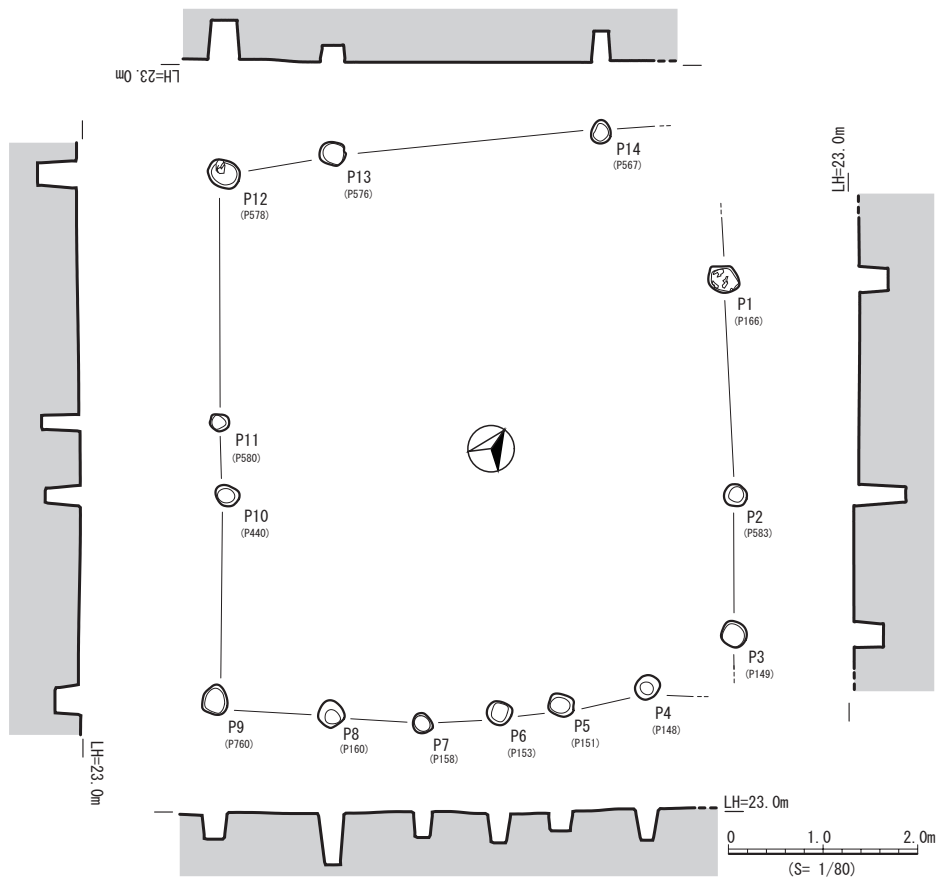
梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	296	平均	296	P1-P2	309	平均	309	方角:N 30° W 面積:9.3m ²	P1:白磁(1), カムイヤキ(1), 土器(20), 石器(1) P2:カムイヤキ(1), 土器(9) P3:白磁(1), 土器(5), 土師器(3), 滑石製石鍋(1) P4:カムイヤキ(1), 土器(26), 土師器(2)
P2-P3	303	平均	303	P3-P4	311	平均	311		
P1-P4	296	P2-P3	303	P1-P2	309	P3-P4	311		

掘立柱建物跡38号 (SB38) (第191図・第149表)

検出状況:K-3区で検出した, 1×1間の4本柱建物跡である。

SB36・SB37と重複している。柱穴の大きさの平均は, 直径約0.5mで深さは約0.6mである。

出土遺物:白磁2点やカムイヤキ3点, 土器60点, 土師器5点, 滑石製石鍋1点, 石器1点が出土した。このうち, 白磁2点, カムイヤキ2点, 土器1点, 土師器1点, 滑石製石鍋1点, 石器1点を実測した。



第 192 図 SB39 実測図

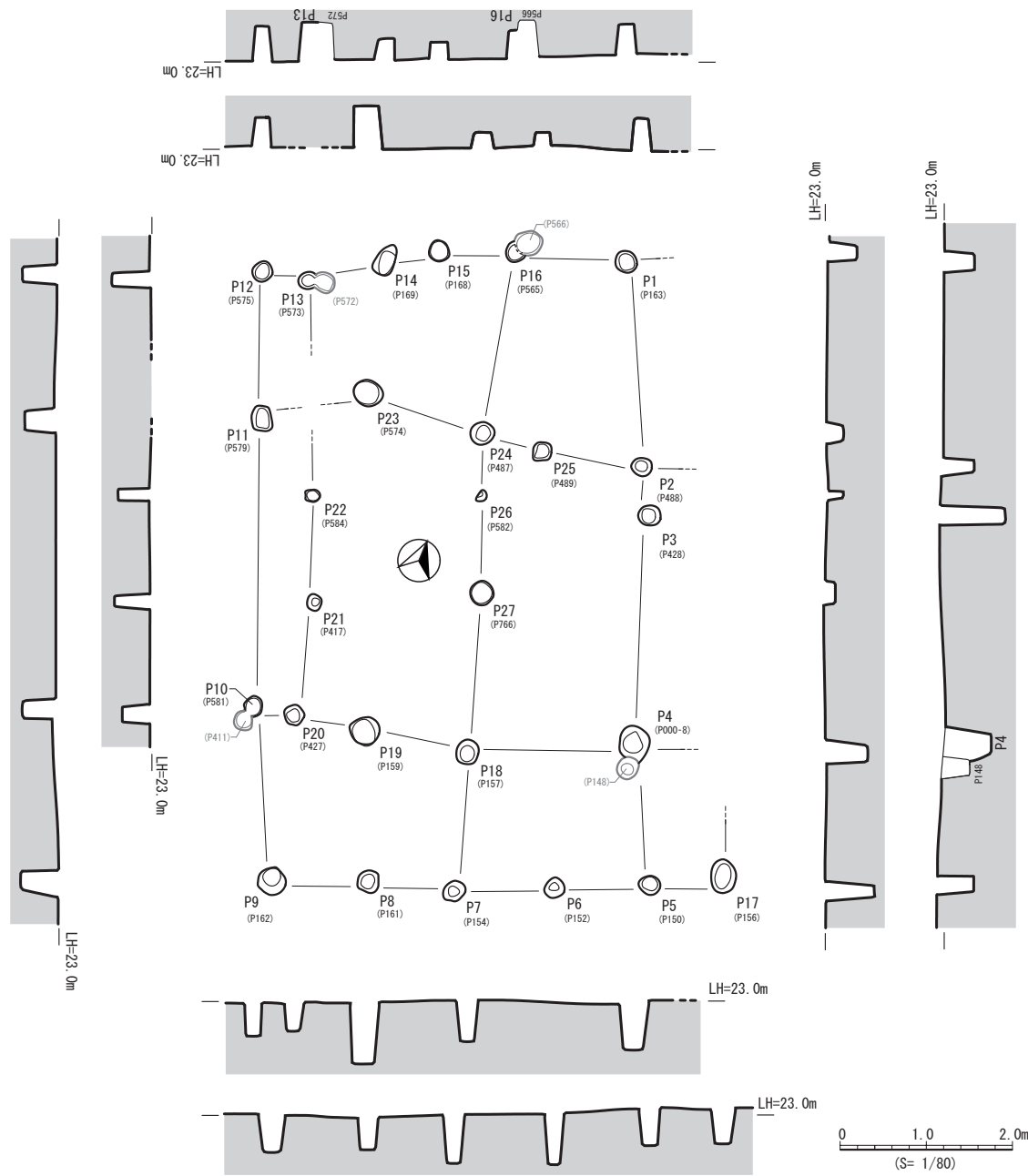
第 150 表 SB39 計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P14-P12	403	平均	201.5	P1-P3	375	平均	187.5	方角:N 34° W 面積:32m ² (推定)	P2:土器(3)
P4-P9	461	平均	92.2	P9-P12	559	平均	186.3		P3:土器(5), 轆の羽口(1)
P14-P13	284	P4-P5	93	P1-P2	225	P9-P10	216		P4:土器(3), 滑石二次加工品(1), 粘土塊(2)
P13-P12	119	P5-P6	65	P2-P3	150	P10-P11	80		
		P6-P7	83			P11-P12	263		P10:土器(5), 滑石製石鍋(1), 滑石(2)
		P7-P8	94						P11:滑石(1)
		P8-P9	126						P12:カムイヤキ(1), 石器(2)

掘立柱建物跡 39 号 (SB39) (第 192 図・第 150 表)

検出状況: J・K・3 区で検出した, 6×4 間の建物跡である。SB40 と重複している。柱穴の大きさの平均は, 直径約 0.25m で深さは約 0.4m である。北側及び東側の角にあたる柱穴は検出できなかった。

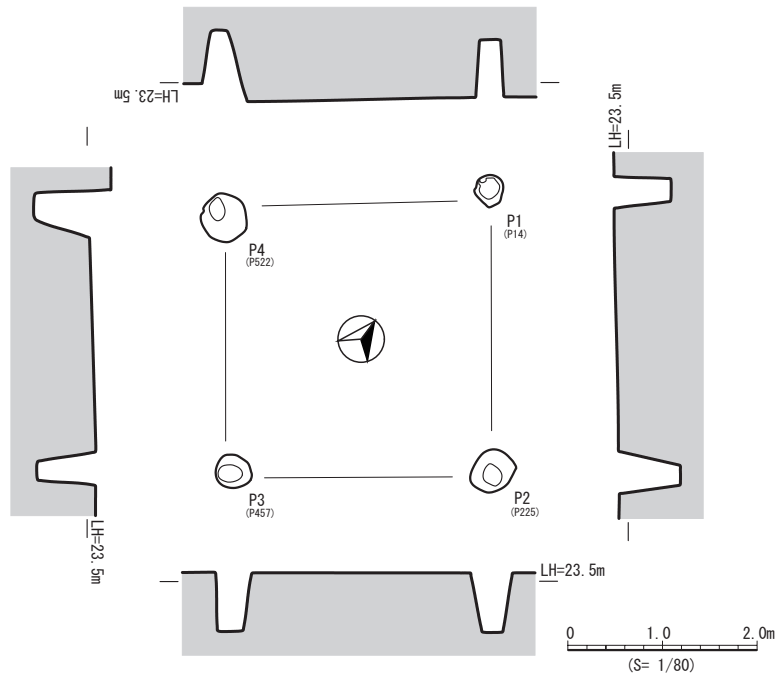
出土遺物: カムイヤキ 1 点や土器 16 点, 滑石製石鍋 1 点, 滑石 3 点, 轆の羽口 1 点, 石器 2 点が出土した。このうち, カムイヤキ, 土器, 滑石製石鍋, 石器をそれぞれ 1 点ずつ実測した。



第 193 図 SB40 実測図

第151表 SB40計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P12	429	平均	85.8	P1-P5	727	平均	181.7	方角: N 23° W 面積: 38.9m ²	P1: 土器 (9) P3: 土器 (7) P8: 土器 (1), 粘土塊 (2) P9: 土器 (8), 鉄滓 (2) P10: 石器 (2) P12: 土器 (9) P13: 土器 (7) P14: 土器 (1) P17: 土器 (2), 鞆の羽口 (1), 粘土塊 (4) P18: 土器 (3), 粘土塊 (1) P20: 土器 (6), 滑石二次加工品 (2), 滑石 (1) P21: 土器 (2)
P5-P9	441	平均	110.2	P9-P12	705	平均	235		
P2-P11	457	平均	114.2	P16-P7	744	平均	148.8		
P4-P10	447	平均	111.8	P20-P13	508	平均	169.3		
P1-P16	130	P5-P6	112	P1-P2	239	P9-P10	199		
P16-P15	89	P6-P7	117	P2-P3	60	P10-P11	335		
P15-P14	62	P7-P8	100	P3-P4	264	P11-P12	171		
P14-P13	94	P8-P9	112	P4-P5	164				
P13-P12	54								
P2-P25	118	P4-P18	193	P16-P24	212	P20-P21	135		
P25-P24	70	P18-P19	123	P24-P26	71	P21-P22	124		
P24-P23	148	P19-P20	83	P26-P27	115	P22-P13	249		
P23-P11	121	P20-P10	48	P27-P18	186				
				P18-P7	160				
P17-P5	85								



第194図 SB41実測図

第152表 SB41計測表

梁行1	寸法	梁行2	寸法	桁行1	寸法	桁行2	寸法	備考	遺物
P1-P4	305	平均	305	P1-P4	289	平均	289	方角:N 54° E 面積:8.5m ²	-
P2-P3	278	平均	278	P3-P4	280	平均	280		
P1-P4	305	P2-P3	278	P1-P4	289	P3-P4	280		

掘立柱建物跡40号 (SB40) (第193図・第151表)

検出状況: J・K-3 区で検出した、4×3 間の建物跡である。南側に柱が多い。柱穴の大きさの平均は、直径約0.25mで深さは約0.4mである。SB39と重複している。

出土遺物: 土器55点や轆の羽口1点、滑石二次加工品2点、滑石1点、鉄滓2点が出土した。このうち轆の羽口1点と滑石二次加工品2点を実測した。

掘立柱建物跡41号 (SB42) (第194図・第152表)

検出状況: N-14 区で検出した、1×1 間の建物跡である。柱穴の大きさの平均は、直径約0.45mで深さは約0.6mである。SB23と重複している。

出土遺物: 遺物は出土しなかった。

(2) 土坑墓

中世と考えられる土坑墓は、遺跡中央部 (O-15) で2基並んで検出された (土坑墓1号・2号) (第195図)。いずれの土坑墓も、焼骨・炭化物の塊とカムイヤキが検出された。遺構から滑石が出土することや、炭化物の放射性炭素年代測定の結果から11世紀後半～12世紀の遺構と想定される。検出面は、表土 (I層) を取り除いた後のIV層上面である。以下、個別の詳細を記述する。

土坑墓1号 (第196図・第153表)

形状と規模:長軸2.33m×短軸1.08m×深さ0.09mで、長方形を呈する。

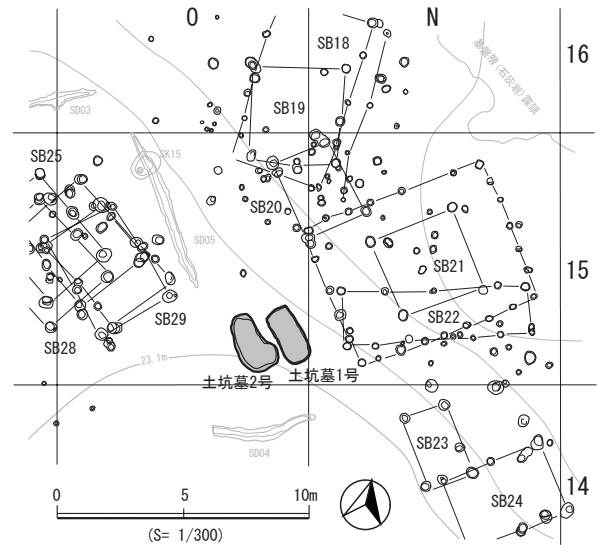
検出状況:遺構内南側から1体 (1号人骨)、北側から3体 (2号～4号人骨) の合計4体の人骨を検出した。

1号人骨は焼骨と土葬骨が混在している状態で、カムイヤキ (カムイヤキ b) の内部からみつつかっている。カムイヤキ b の東側にはもう1個体のカムイヤキ (カムイヤキ a) が床に置かれた状態で検出された。カムイヤキ a の中からは、骨は出土していない。カムイヤキ b は納骨器として利用され、カムイヤキ a は副葬品として置かれたと考えられる。

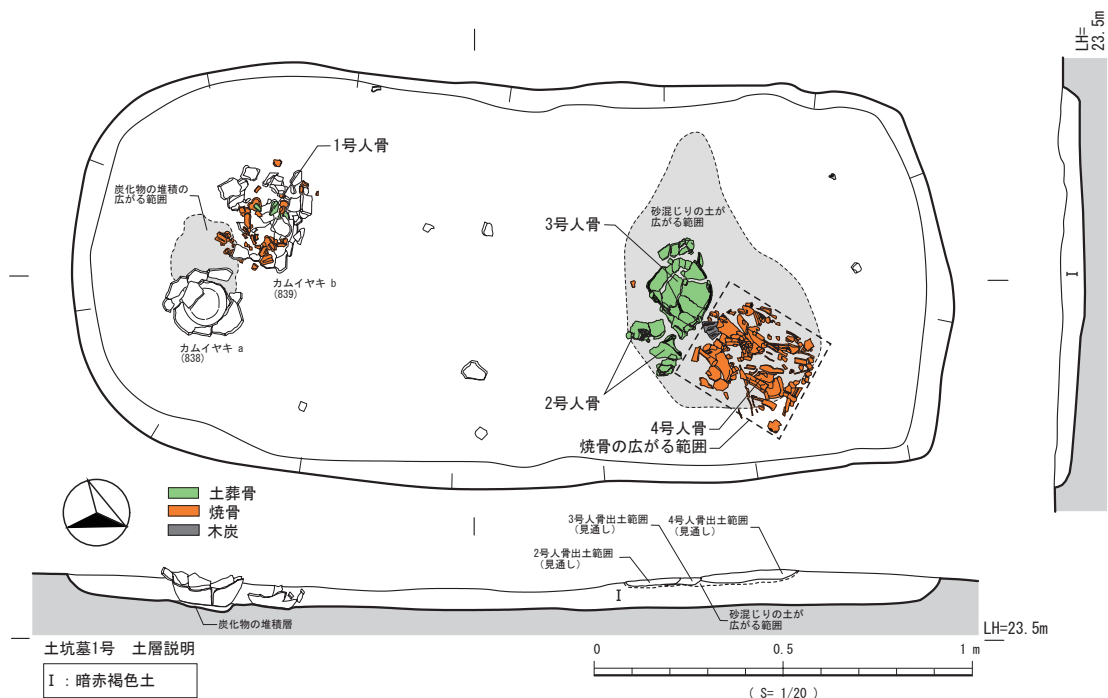
2号人骨～4号人骨の検出は、I層上面に広がる砂混じりの土の上からであり、1号人骨と時期差があると考えられる。2号人骨は焼けてない頭蓋であるが、左右の上顎骨と左側頭骨、蝶形骨が残るだけである。3号人骨は焼けていない頭蓋である。4号人骨は、焼骨と木炭が入り混じっており、方形状で検出されていることから木箱などに入られていた可能性がある。

出土遺物:上記カムイヤキ2個体の他、カムイヤキ32点、土器4点、滑石混入土器19点、滑石3点、鉄製品1点、チョウセンサザエなどの貝類17点が出土した。このうち、カムイヤキ2点を実測した。

自然遺物は、ニザダイなど魚骨やへび類などの獣骨が23点出土し、土壌サンプルから、イネ1片とオオムギ1片、ムギ類5片が出土した。このうち、ムギ類の炭化種子片を用いて年代測定を行い、 ^{14}C 年代 (yrBP) 830 ± 20 の値を得た (第IV章5節 (3) 参照)。また、4号人骨より採取した炭化物を用い、放射性炭素年代測定と樹種同定を行った。放射性炭素年代が ^{14}C 年代 (yrBP) 910 ± 20 の値と樹種はスイカズラ属と同定された (第IV章5節 (1) 参照)。



第195図 土坑墓位置図



第196図 土坑墓1号実測図

土坑墓2号 (第197図・第153表)

形状と規模:長軸2.43m×短軸1.43m×深さ0.15mで、たまご型に近い長方形を呈する。

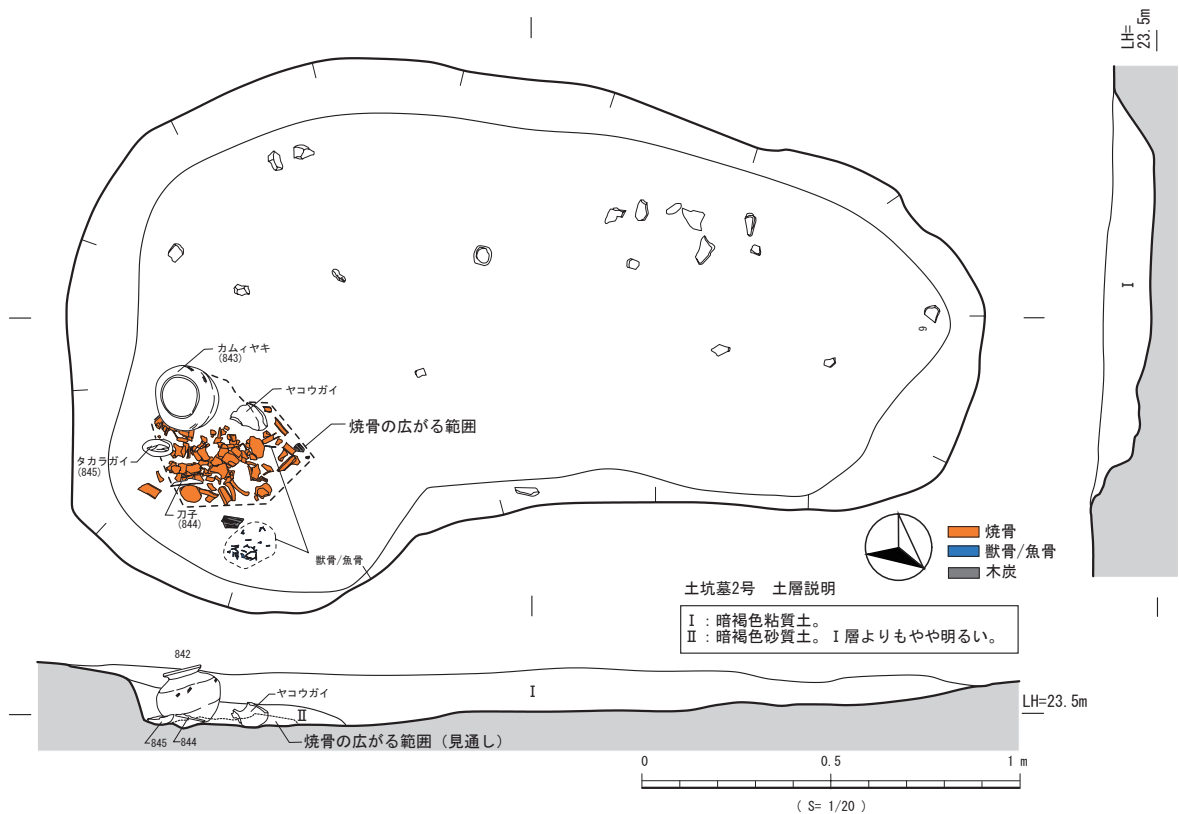
検出状況:遺構内南側から焼骨塊とともにカムイヤキ、刀子、タカラガイ、ヤコウガイを検出した。焼骨塊には木炭が混在していた。タカラガイとヤコウガイは状態が悪く触れると崩れてゆく状況であったが、加工痕などは見られなかった。また、焼骨塊の東側脇に魚骨と考えられる細い骨が散在していたが、状態が非常に悪く、同定は不可能であった。

出土遺物:上記カムイヤキや刀子、タカラガイ、ヤコウガイの他、カムイヤキ2点、土器7点、滑石混入土器8点、滑石1点、滑石製品石鍋1点、チョウセンサザエやマガキガイなどの貝類が8点出土した。このうち、カムイヤキ、土器、滑石混入土器、滑石製石鍋、刀子、タカラガイをそれぞれ1点ずつ実測した。

また、ウツボ科やブダイ科などの獣骨が5点出土し、土壌サンプルから、オオムギ3点、コムギ2点、ムギ類1片などが出土した。このうち、オオムギとムギ類の炭化種子を用いて年代測定を行い、¹⁴C年代 (yrBP) 820±20と850±20の値を得た(第IV章5節(3)参照)。

第153表 土坑出土遺物一覧

遺構名	遺物	数量		
土坑墓1号	カムイヤキ	34		
	土器	4		
	滑石混入土器	19		
	滑石	3		
	鉄製品	1		
	礫	21		
	貝	アカイガレイシ イモガイ科 キマダライガレイシ チョウセンサザエ ハナマルユキ タカラガイ ホソスジイナミガイ 巻貝	3 2 1 3 5 1 1 1	
	獣骨	コウイカ ダツ科 イノシシ? ニザダイ ヘビ類	1 3 1 17 1	
	炭化種子	イネ オオムギ ムギ類	1 1 5	
	粘土塊		6	
	土坑墓2号	カムイヤキ	3	
		土器	7	
		滑石混入土器	8	
		滑石製石鍋	1	
		滑石	1	
		鉄製品	刀子	1
		粘土塊		11
		礫		36
		貝	アッキガイ科 タカラガイ チョウセンサザエ マガキガイ ムラクモタカラ ヤコウガイ	2 1 2 1 1 3
		獣骨	フエフキダイ科 カエル/鳥類? ウツボ アオブダイ属	1 1 1 1
		炭化種子	オオムギ コムギ コムギ? ムギ類 堅果皮?	3 2 1 1 2



第197図 土坑墓2号実測図

(3) 土坑

中世の土坑（以下「SK」）は、15基検出した（第154表）。遺構は遺跡全体で検出されているが、掘立柱建物跡の周辺で検出される傾向が見られた。

遺跡北側で検出したSK27（V-27区）は、Ⅲ-g層掘り下げ後のⅢ-d層上面での検出であり、14世紀～15世紀頃の遺構と想定している。その他の13基は、遺跡中央部と南側に位置し、表土（Ⅰ層）除去後の層の上面（SH17～24がⅥ層で、SH25・26・28～31がⅧ層（地山））での検出である。埋土が周辺ピットと同じであることや出土遺物から11世紀後半～12世紀の遺構と想定している。表土直下で検出した土坑は比較的浅く、耕作などで削平を受けた可能性も考えられる。

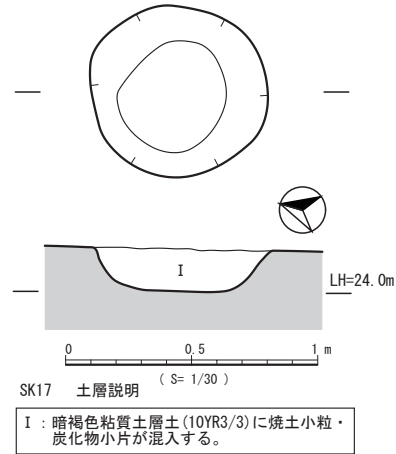
出土した遺物は、白磁1点、カムイヤキ3点、土器18点、布目圧痕土器1点、滑石混入土器38点、滑石製石鍋7点、滑石二次加工品4点、ヤコウガイなどの貝類38点などである。なお、各遺構の遺物は遺構内一括で取り上げた。

以下、SKの詳細を述べることとする。

土坑17号（SK17）（第198図）

検出状況：Q-18区で検出した。直径約0.68m×深さ0.17mで、平面形状は円形を呈する。

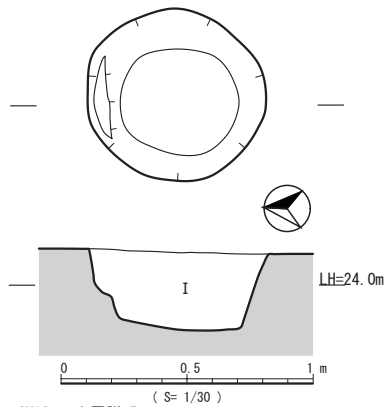
出土遺物：土器3点やイモガイ科などの貝類が17点、フエフキダイ科の魚骨が1点出土した。



第198図 SK17実測図

第154表 SK(中世)一覧

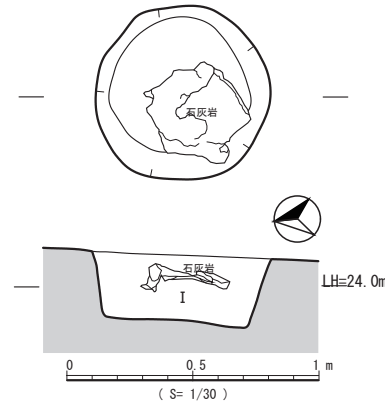
遺構名	出土区	検出面	平面形状	短軸(m)	長軸(m)	深さ(m)	出土遺物
SK17	Q-18	Ⅵ層	円形	0.68	0.68	0.17	土器(3)、粘土塊(51)、礫(91)、フエフキダイ科(1)、貝類(17) (貝類内訳:アカイガレイシ(1)、イトカケヘナリ(1)、イモガイ科(1)、キクザル類(1)、シマベッコウガイ(1)、シラスナガイ(1)、ツタノハガイ科(2)、ハナマルユキ(4)、ホソスジイナミガイ(1)、ヤクシマダカラ(1)、ヤコウガイ(1)、リュウキュウツノマタ(1)、リュウキュウマスオ(1))
SK18	Q-18	Ⅵ層	円形	0.68	0.71	0.3	白磁(1)、カムイヤキ(2)、土器(3)、滑石製石鍋(5)、滑石二次加工品(1)、石器(2)、粘土塊(8)、礫(6)、貝類(7) (貝類内訳:アラヌノメ(1)、キクザル類(1)、ツタノハガイ科(1)、ホソスジイナミガイ(1)、ムラサキウズ(1)、ヤコウガイ(1)、リュウテン科(1))
SK19	Q-18	Ⅵ層	円形	0.69	0.7	0.26	粘土塊(1)、チョウセンサザエ(1)
SK20	P-18	Ⅵ層	円形	0.62	0.65	0.19	カムイヤキ(2)、布目圧痕土器(1)、滑石混入土器(37)、滑石製石鍋(2)、滑石二次加工品(3)、滑石(1)、石器(3)、粘土塊(8)、礫(1)、貝類(2) (貝類内訳:タカラガイ(1)、ヤコウガイ(1))
SK21	Q-18	Ⅵ層	円形	0.48	0.55	0.11	土器(1)、滑石混入土器(1)、粘土塊(8)、ヤコウガイ(1)
SK22	Q-18	Ⅵ層	円形	0.49	0.52	0.18	粘土塊(26)、貝類(2) (貝類内訳:キイロタカラ(1)、ホソスジイナミガイ(1))
SK23	P-18	Ⅵ層	円形	0.59	0.62	0.15	土器(2)、粘土塊(1)
SK24	P-18	Ⅵ層	円形	0.64	0.64	0.14	土器(4)
SK25	P-18	Ⅷ層	円形	0.47	0.51	0.17	土器(5)、石器(2)、粘土塊(1)、礫(21)、貝類(2) (貝類内訳:チョウセンサザエ(1)、ヤコウガイ(1))
SK26	P-14	Ⅷ層	長方形	0.57	0.94	0.16	礫(2)
SK27	V-27	Ⅲ-d層	楕円形	0.75(推定)	1.18	1.11	礫(1)、貝類(2) (貝類内訳:ヤコウガイ(1)、リュウキュウヒバリ(1))
SK28	K-3	Ⅷ層	円形	0.8	0.86	0.26	出土遺物なし
SK29	L-3	Ⅷ層	方形	0.61	0.72	0.5	出土遺物なし
SK30	M-13・14	Ⅷ層	長方形	1.48	1.73	0.43	出土遺物なし
SK31	K-3	Ⅷ層	円形	1.24	1.33	0.21	出土遺物なし



SK18 土層説明

I : 暗褐色粘質土層土(10YR3/4)に焼土小粒・炭化物小片が混入する。

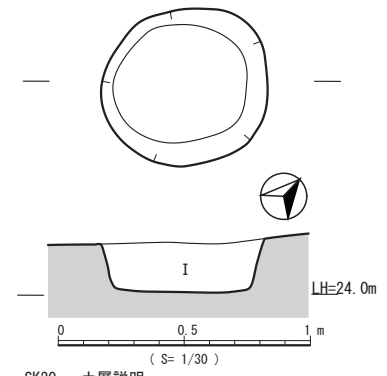
第 199 図 SK18 実測図



SK19 土層説明

I : 暗褐色粘質土層土(10YR3/3)に焼土小粒・炭化物小片が混入する。

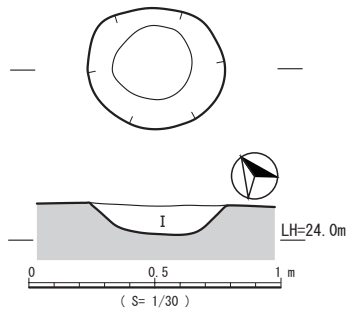
第 200 図 SK19 実測図



SK20 土層説明

I : 暗褐色粘質土層土(10YR3/3)に焼土小粒・炭化物小片が混入する。

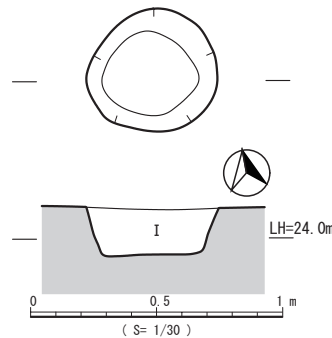
第 201 図 SK20 実測図



SK21 土層説明

I : 暗褐色粘質土層土(10YR3/3)に焼土小粒・炭化物小片が混入する。

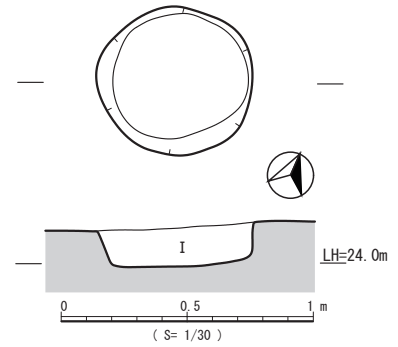
第 202 図 SK21 実測図



SK22 土層説明

I : 暗褐色粘質土層土(10YR3/3)に焼土小粒・炭化物小片が混入する。

第 203 図 SK22 実測図



SK23 土層説明

I : 暗褐色粘質土層土(10YR3/3)に焼土小粒・炭化物小片が混入する。

第 204 図 SK23 実測図

土坑 18 号 (SK18) (第 199 図)

検出状況 : Q-18 区で検出した。短軸 0.68m×長軸 0.71m×深さ 0.3mで、平面形状は円形を呈する。北側は 2 段掘りになっている。他の遺構と重複は見られず、単独で検出した。

出土遺物 : 白磁 1 点, カムイヤキ 2 点, 土器 3 点, 滑石製石鍋 5 点 (433g), 滑石二次加工品 1 点 (84g), 石器 2 点, ヤコウガイなどの貝類 7 点が出土した。このうち, 滑石製石鍋 2 点と滑石製二次加工品 1 点を実測した。

土坑 19 号 (SK19) (第 200 図)

検出状況 : Q-18 区で検出した。短軸 0.69m×長軸 0.7m×深さ 0.26mで、平面形状は円形を呈する。他の遺構と重複は見られず、単独で検出した。

出土遺物 : チョウセンサザエが 1 点出土した。

土坑 20 号 (SK20) (第 201 図)

検出状況 : P-18 区で検出した。短軸 0.62m×長軸 0.65m×深さ 0.19mで、平面形状は円形を呈する。他の遺構と重複は見

られず、単独で検出した。

出土遺物 : カムイヤキ A 群 2 点や布目圧痕土器 1 点, 滑石混入土器 37 点, 滑石製石鍋 2 点 (307g), 滑石二次加工品 3 点 (111g), 未加工の滑石 1 点 (1g), 石器 3 点, ヤコウガイなどの貝類 2 点などが出土した。このうち, カムイヤキ 1 点, 滑石混入土器 1 点, 滑石製石鍋 1 点, 滑石二次加工品 1 点, 石器 1 点を実測した。

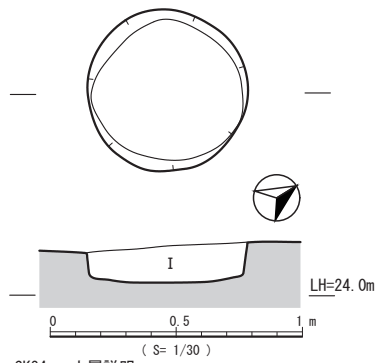
土坑 21 号 (SK21) (第 202 図)

検出状況 : Q-18 区で検出した。短軸 0.48m×長軸 0.55m×深さ 0.11mで、平面形状は円形を呈する。他の遺構と重複は見られず、単独で検出した。

出土遺物 : 土器 1 点, 滑石混入土器 1 点, ヤコウガイ 1 点が出土した。

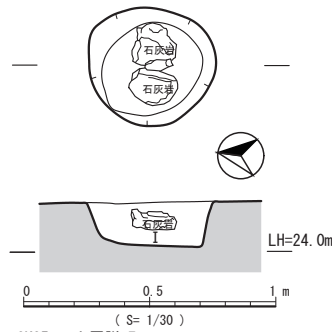
土坑 22 号 (SK22) (第 203 図)

検出状況 : Q-18 区で検出した。短軸 0.48m×長軸 0.52m×深さ 0.18mで、平面形状は円形を呈する。他の遺構と重複は



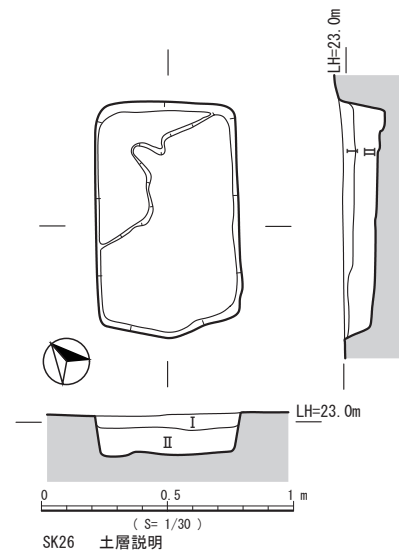
SK24 土層説明
I : 暗褐色粘質土層土 (10YR3/3) に焼土小粒・炭化物小片が混入する。

第 205 図 SK24 実測図



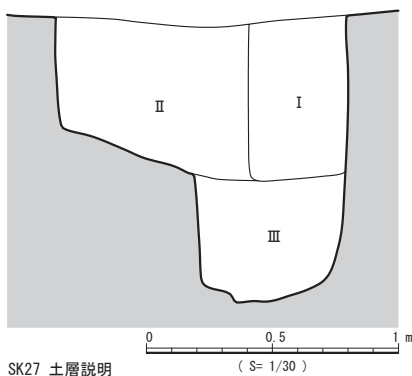
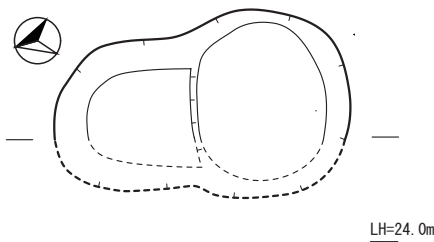
SK25 土層説明
I : 暗褐色粘質土層土 (10YR3/3) に焼土小粒・炭化物小片が混入する。

第 206 図 SK25 実測図



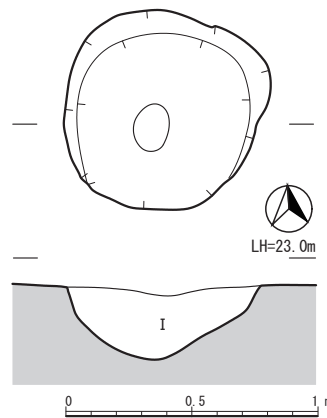
SK26 土層説明
I : 暗褐色粘質土 (10YR3/3) に焼土小粒と明褐色粘質土 (7.5YR5/6)
II : 明褐色粘質土 (7.5YR5/6) に暗褐色粘質土 (10YR3/3) がブロックでまじり混入する。I 層と II 層の境は明瞭ではない。

第 207 図 SK26 実測図



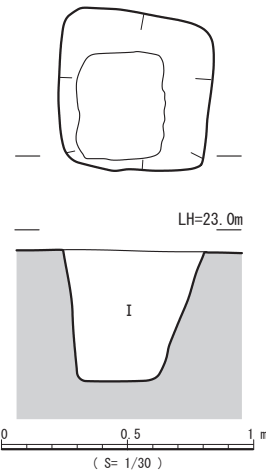
SK27 土層説明
I : 褐色粘質土に明褐色粘質がブロック状に混入する。
II : 褐色粘質土に明褐色粘質がブロック状に混入する。I 層に似ているが、明褐色土の混入の割合は少なく、分層可能。
III : 黒褐色粘質土。

第 208 図 SK27 実測図



SK28 土層説明
I : 暗褐色土に黒褐色粘質土がブロック状に混入。

第 209 図 SK28 実測図



SH29 土層説明
I : 埋土不明

第 210 図 SK29 実測図

見られず、単独で検出した。

出土遺物：キョウタカラなどの貝類が 2 点出土した。

土坑 23 号 (SK23) (第 204 図)

検出状況：P-18 区で検出した。短軸 0.59m×長軸 0.62m×深さ 0.15m で、平面形状は円形を呈する。他の遺構と重複は見られず、単独で検出した。

出土遺物：土器 2 点が出土した。

土坑 24 号 (SK24) (第 205 図)

検出状況：P-18 区で検出した。直径約 0.64m×深さ 0.14m で、平面形状は円形を呈する。他の遺構と重複は見られず、単独

で検出した。

出土遺物：土器 4 点が出土した。

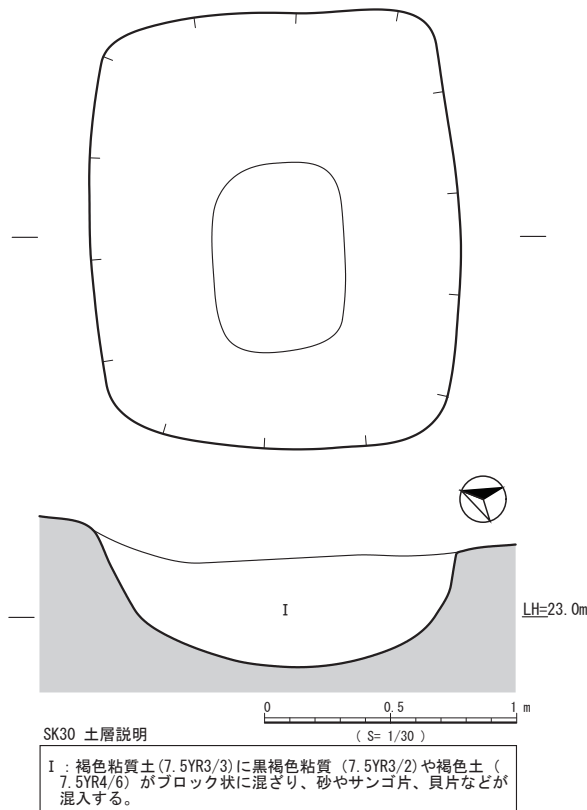
土坑 25 号 (SK25) (第 206 図)

検出状況：P-18 区で検出した。短軸 0.47m×長軸 0.51m×深さ 0.17m で、平面形状は円形を呈する。他の遺構と重複は見られず、単独で検出した。

出土遺物：土器 5 点、石器 2 点、チョウセンサザエなどの貝類が 2 点出土した。

土坑 26 号 (SK26) (第 207 図)

検出状況：P-14 区で検出した。短軸 0.57m×長軸 0.94m×



第 211 図 SK30 実測図

深さ 0.16m で、平面形状は長方形を呈する。北側にわずかに段差があり、2 段掘りになっている。他の遺構と重複は見られず、単独で検出した。

出土遺物：礫が 2 点出土したが、他の遺物は出土しなかった。

土坑 27 号 (SK27) (第 208 図)

検出状況：V-27 区で検出した。短軸 0.75m (推定) × 長軸 1.18m × 深さ 1.11m で、平面形状は楕円形に近い形状を呈する。2 段掘りになっており、堆積状況から、一度土坑南側 (Ⅲ層) を掘ったのち、Ⅱ層の堆積する北側を掘り、再度Ⅰ層の堆積する南側を掘ったという複数回にわたる利用が想定される。

他の遺構と重複は見られず、単独で検出した。

出土遺物：ヤコウガイなどの貝類が 2 点出土した。

土坑 28 号 (SK28) (第 209 図)

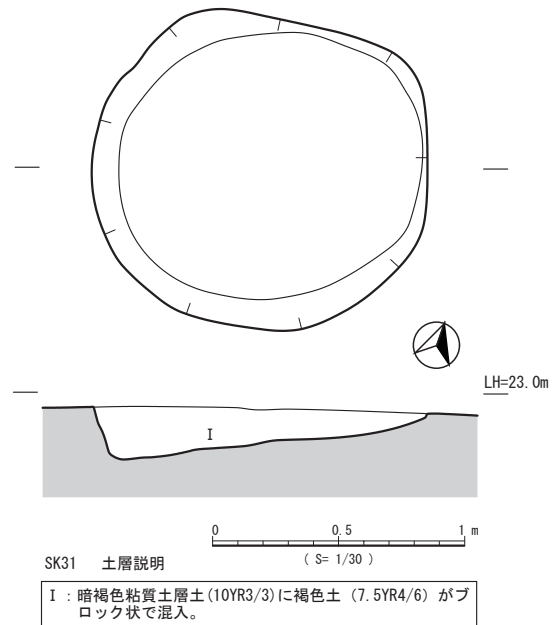
検出状況：K-3 区で検出した。短軸 0.8m × 長軸 0.86m × 深さ 0.26m で、平面形状は円形を呈する。SH14 を切っている。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

土坑 29 号 (SK29) (第 210 図)

検出状況：L-3 区で検出した。短軸 0.61m × 長軸 0.72m × 深さ 0.5m で、平面形状は方形を呈する。SK09 を切っている。

出土遺物：遺物は出土しなかった。



第 212 図 SK31 実測図

土坑 30 号 (SK30) (第 211 図)

検出状況：M-13・14 区で検出した。短軸 1.48m × 長軸 1.73m × 深さ 0.43m で、平面形状は長方形を呈する。他の遺構と重複は見られず、単独で検出した。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

土坑 31 号 (SK31) (第 212 図)

検出状況：Q-3 区で検出した。短軸 1.24m × 長軸 1.33m × 深さ 0.21m で、平面形状は円形を呈する。床面は傾斜しており、東から西に向かって深くなっている。遺構は SH07 を切っている。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

(4) 焼土跡

中世と考えられる焼土跡は、9基検出した(第155表)。位置的には、遺跡北側で3基、中央部で4基、南側で2基である。検出面については、遺跡中央部に位置する焼土跡09号(M-13区)がⅣ層を掘り下げた後のⅤ層での検出であった以外、すべて表土(Ⅰ層)除去後の層の上面(焼土跡01号～03号・07号がⅧ層(地山)で、04号がⅢ-c層、05号がⅢ-e層、08号がⅢ-j層)での検出であった。

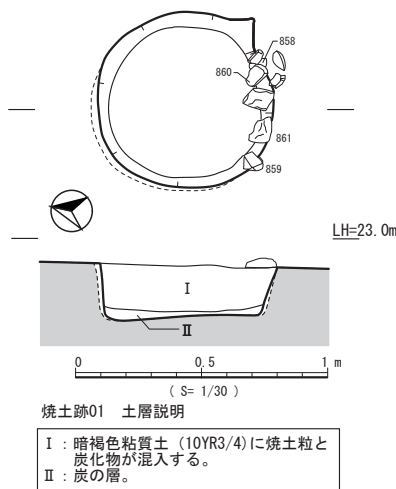
いずれの焼土跡からも時代を特定できる遺物が出土していないが、周囲の遺構や検出面などから、北側に位置する焼土跡3基(焼土跡03・04・08号)が14世紀～15世紀、中央部及び南側に位置する焼土跡(焼土跡01・02・05～07・09)が11世紀末～12世紀を想定している。

なお、焼土跡01号～03号・07号・09号から採取した土壌サンプルを用いフローテーション処理を行ったが、同定可能な炭化種子等は検出されなかった。

以下、焼土跡の詳細を述べることとする。

焼土跡01号(第213図)

検出状況: K-3区で検出した。直径約0.7m×深さ0.2mで、平面形状は円形を呈する。底面には炭の堆積層(Ⅱ層)が見られ、遺構側面は被熱で赤色化している。



第213図 焼土跡01 実測図

遺構検出時に石器が並んで出土した。石器は、付近に検出されている縄文時代の竪穴状遺構から出土するものと同様のものであり、縄文時代の石器を何らかの目的で再利用した可能性がある。

出土遺物: 石器4点と礫4点が出土した。このうち石器4点を実測した。

焼土跡02号(第214図)

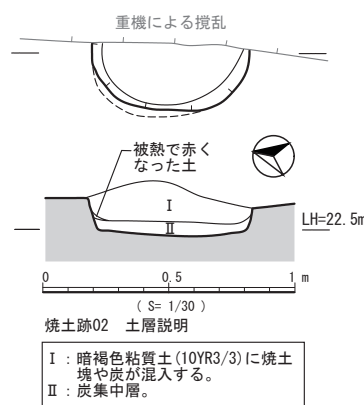
検出状況: K-3区で検出した。短軸0.26m(残存部)×長軸0.63m×深さ0.21mで、平面形状は円形を呈する。遺構の半分が重機により掘削されている。底面には炭の堆積層(Ⅱ層)が見られるが、その上面に被熱で赤色化した土が一部覆いかぶさっている。被熱した壁面が崩れて堆積した可能性が高いが、炭を充填した後に火を使った作業を行った可能性も考えられる。

出土遺物: 遺物は出土しなかった。

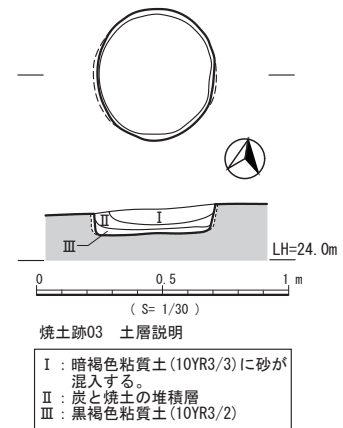
焼土跡03号(第215図)

検出状況: S-20区で検出した。短軸0.46m×長軸0.52m×深さ0.1mで、平面形状は円形を呈する。底面には、炭の堆積層(Ⅱ層)と黒褐色粘質土(Ⅲ層)の堆積が見られ、側面は被熱を受け赤色化している。

出土遺物: 遺物は出土しなかった。



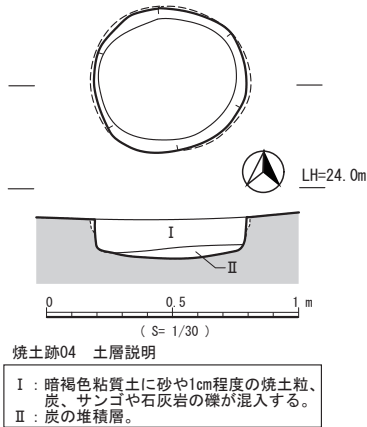
第214図 焼土跡02 実測図



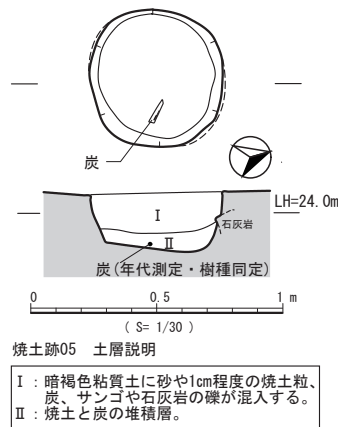
第215図 焼土跡03 実測図

第155表 焼土跡一覧

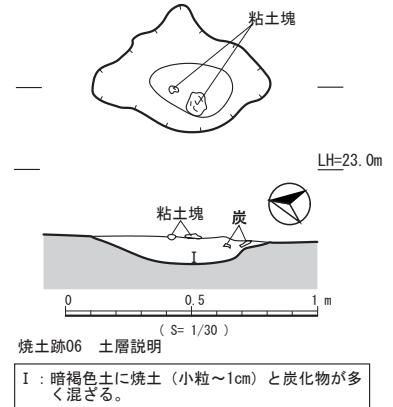
遺構名	出土区	検出面	平面形状	短軸(m)	長軸(m)	深さ(m)	出土遺物
焼土跡01	K-3	Ⅷ層	円形	0.7	0.7	0.2	石器(4), 礫(4)
焼土跡02	K-3	Ⅷ層	円形	(0.26)	0.63	0.21	遺物なし
焼土跡03	S-20	Ⅷ層	円形	0.46	0.52	0.1	遺物なし
焼土跡04	V-31	Ⅲ-c層	円形	0.58	0.6	0.15	ヤコウガイ(2), 礫(1)
焼土跡05	V-31	Ⅲ-e層	円形	0.53	0.54	0.24	遺物なし
焼土跡06	M-11	Ⅴ層	不定形	0.5	0.7	0.1	焼土塊(45), 礫(1)
焼土跡07	Q-20	Ⅷ層	楕円形	0.18	0.28	0.46	遺物なし
焼土跡08	U-30	Ⅲ-j層	不定形	0.46	0.14	0.02	遺物なし
焼土跡09	M-13	Ⅳ層	不定形	0.27	0.43	0.03	遺物なし



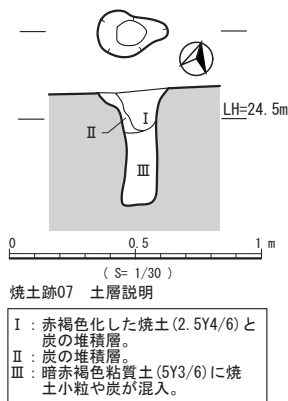
第 216 図 焼土跡 04 実測図



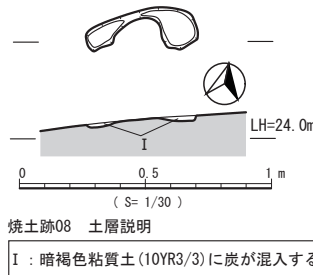
第 217 図 焼土跡 05 実測図



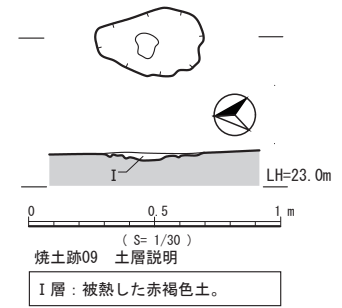
第 218 図 焼土跡 06 実測図



第 219 図 焼土跡 07 実測図



第 220 図 焼土跡 08 実測図



第 221 図 焼土跡 09 実測図

焼土跡 04 号 (第 216 図)

検出状況 : V-31 区で検出した。短軸 0.58m×長軸 0.6m×深さ 0.15mで、平面形状は円形を呈する。底面には炭の堆積層 (II層) が見られ、側面は被熱を受け赤色化している。

出土遺物 : ヤコウガイが 2 点と礫 1 点が出土した。

焼土跡 05 号 (第 217 図)

検出状況 : V-31 区で検出した。短軸 0.53m×長軸 0.54m×深さ 0.24mで、平面形状は円形を呈する。底面には炭の堆積層 (II層) が見られ、その層から採取した炭化物を用い放射性年代測定と樹種同定を行った。放射性炭素年代が ^{14}C 年代 (yrBP) 340 ± 20 の値と樹種は広葉樹であるが種類の特定はできなかった (第IV章 5 節 (2) 参照)。

出土遺物 : 遺物は出土しなかった。

焼土跡 06 号 (第 218 図)

検出状況 : M-11 区で検出した。短軸 0.5m×長軸 0.7m×深さ 0.1mで、平面形状は不定形である。明確な被熱面は確認できなかったが、遺構内には焼土塊や炭化物が混在しており、焼土跡として取り扱った。検出はIV層を掘り下げた後のV層であり、隣接するSB31と同じ検出面である。

出土遺物 : 焼土塊 45 点と礫が 1 点出土した。

焼土跡 07 号 (第 219 図)

検出状況 : Q-20 区で検出した。短軸 0.18m×長軸 0.28m×深さ 0.46mで、平面形状はたまご型に近い楕円形を呈する。遺構内には赤色化した土の層と炭の層が確認された。大きさや断面形状から柱穴であった可能性もある。

出土遺物 : 遺物は出土しなかった。

焼土跡 08 号 (第 220 図)

検出状況 : U-30 区で検出した。短軸 0.46m×長軸 0.14m×深さ 0.02mで、平面形状は不定形である。地形的に高くなっている場所に位置し、表土直下でみつまっていることから、遺構上部のほとんどが耕作などで削平され、底面の一部だけが検出されたものと考えられる。

出土遺物 : 遺物は出土しなかった。

焼土跡 09 号 (第 221 図)

検出状況 : M-13 区で検出した。短軸 0.27m×長軸 0.43m×深さ 0.03mで、平面形状は不定形である。地形的に高くなっている場所に位置し、表土直下でみつまっていることから、遺構上部のほとんどが耕作などで削平され、底面の一部だけが検出されたものと考えられる。

出土遺物 : 遺物は出土しなかった。

(5) 溝状遺構

中世と考えられる溝状遺構（以下「SD」）は、遺跡中央部に1条検出した（第156表）。以下、溝状遺構の詳細を述べることにする。

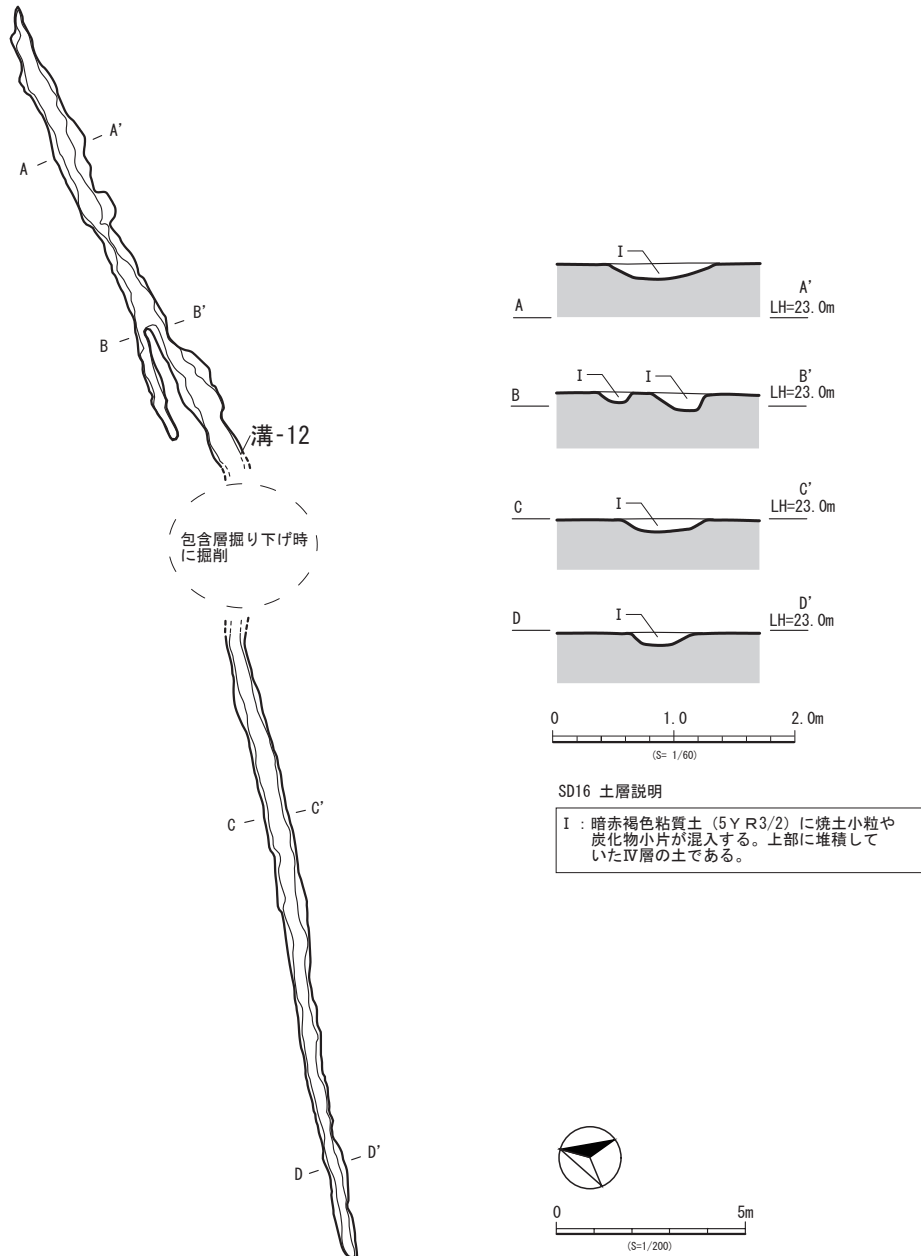
溝状遺構16号（SD16）（第222図）

検出状況：M～Q-13・14区で検出した。長さ約34.4m×最大幅約1.0m×最深0.15mで、東西方向に伸びている。検出は、IV層を掘り下げた後のV層である。時期を特定できる遺物は出土していないが、同じ層で検出されている遺構に、

SB31と焼土跡06号がある。

なお、平面実測図は1/200で示してあるが、断面については1/60で示している。

出土遺物：遺物は出土しなかった。



第222図 SD16実測図

第156表 SD16観察表

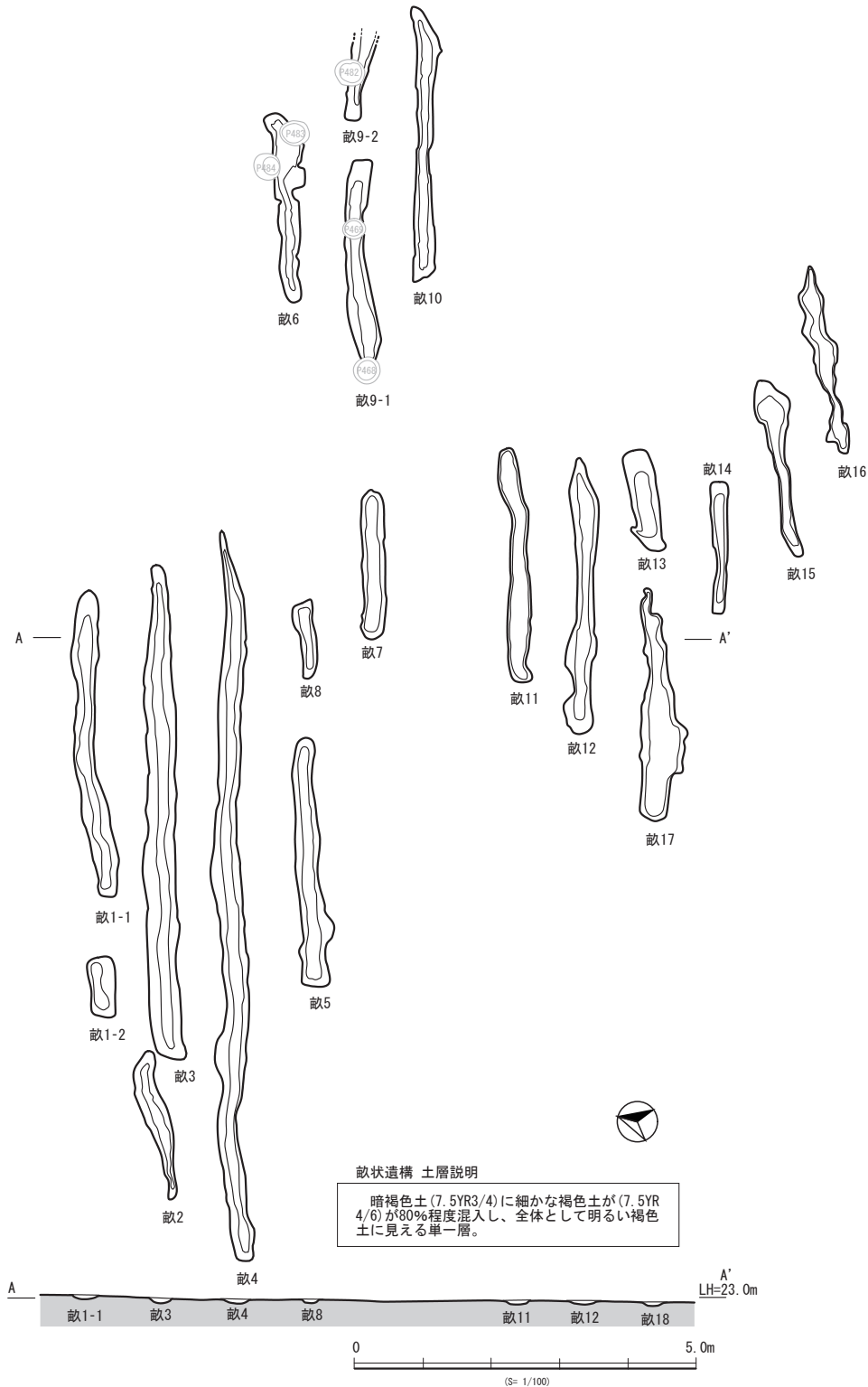
遺構名	出土区	検出面	最大幅(m)	長さ(m)	最大深度(m)	出土遺物
SD16	K-3	V層	1.0	33.4	0.15	遺物なし

(6) 畝状遺構

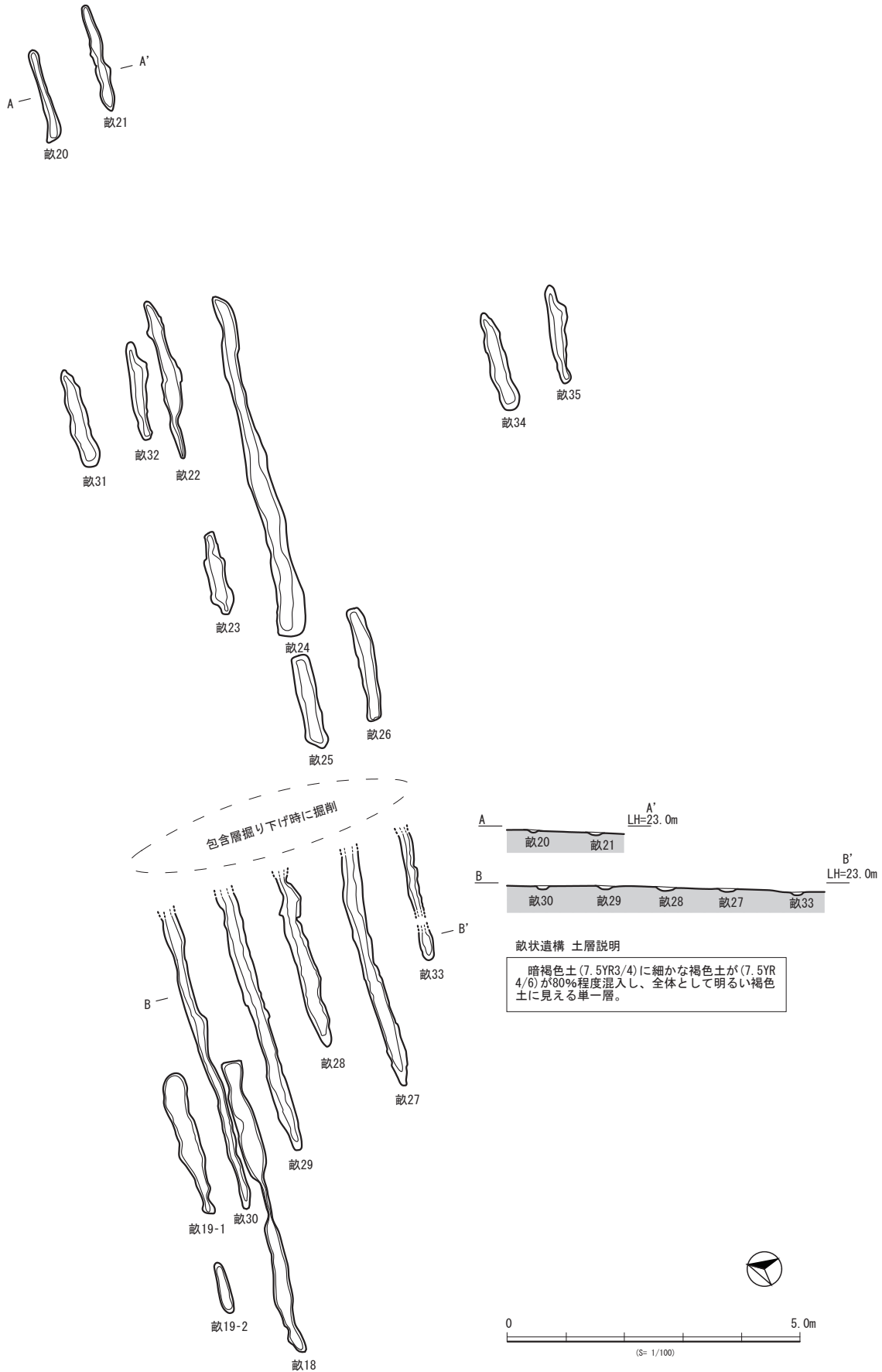
畝状遺構（以下「畝」）は、遺跡中央部南端（L～O-11～14区）にまとまって35条検出した。軸方向から2つのグループに分けられる（畝1-1号～17号（第223図）と畝18号～35号（第224図））が、いずれのグループも長さ5.0m前後、深さ0.05～0.08mのものが多く、東西方向を軸に等間隔で並

んでいる。

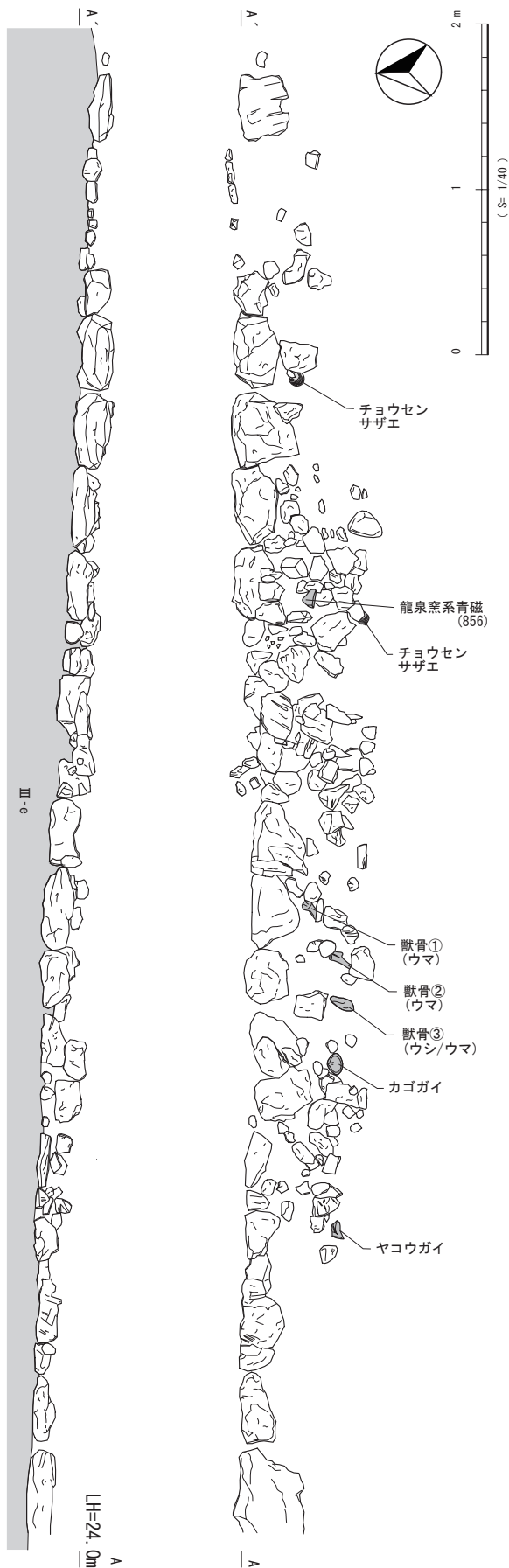
検出面は、V層を掘り下げたVI層上面である。時代を特定できる遺物は出土していないが、V層で検出した中世と想定している遺構（SB31・焼土跡06・SD16）よりも古いと考えられる。なお、畝6号と畝9-1号・畝9-2号は中世のピット5基（P482～P484・P468・P469）に切られている。



第223図 畝状遺構1号～17号実測図



第224図 畝状遺構18号～35号実測図



第 225 図 石列 1 号実測図

(7) 石列 1 号 (第 225 図・第 157 表)

遺跡北側 (V-30 区) から石灰岩を列状に並べた遺構を 1 基検出した。検出は、表土 (I 層) 除去後の III-e 層である。掘り込みは確認できなかったため、III-e 層堆積後、あるいは堆積している段階で石列を組んだものと考えられる。検出した場所の地形は、西から東に向かって緩やかに上っている場所で、石列の軸も東西方向であった。

石列は、北側は面が揃っている状態で検出したが、南側の面や、標高の少し高くなっている東側部分は残りが悪く、耕作などにより消滅している可能性がある。残存部では長さ 9.0 m×最大幅 0.9m を測る。

検出面や石列内部から龍泉窯系青磁などが出土するため、遺構の時期は中世 (14~15 世紀) の頃と想定している。石列はこの 1 基を検出したのみであり、土止めなどの可能性も考えられが検出状況からはその用途を特定することが難しい。

出土遺物は、龍泉窯系青磁 3 点、ウマ、ウシ/ウマなどの獣骨 3 点、チョウセンサザエ 2 点、ヤコウガイ 1 点、カゴガイ 1 点、礫 4 点である。このうち龍泉窯系青磁 2 点を実測した。

第 157 表 石列 1 号観察表

遺構名	出土区	検出面
石組み 1 号	V-30	III-e 層
最大幅 (m)	長さ (m)	高さ (m)
0.9	9.0	0.24 (残存部)
出土遺物		
龍泉窯系青磁 (3)、獣骨 (3)、チョウセンサザエ (2)、ヤコウガイ (1)、カゴガイ (1)、礫 (4)		

(8) 製鉄関連遺構

製鉄関連遺構は、遺跡南側（P-7・8区）で検出した土坑32号（SK32）と溝状遺構17号（SD17）である。互いに隣接する遺構で、表土を除去した後のⅧ層（地山）で検出した。

遺構検出時より鉄滓が多く見られ、これまで崩り遺跡で検出していた溝状遺構や土坑との違いが見られた。特にSD17については遺構北側に微細な焼土ブロックを含む赤色化した土の堆積が見られ、鉄滓が集中している状況であった。遺構内から出土している鉄滓が炉内残留滓と炉外流出滓であることや、炉外流出滓の流動痕跡から製鉄操作初期から操作終盤まで一連の鉄滓があること、また、炉壁や鉄塊など製鉄関連遺物も出土していることなどから、製鉄関連遺構として扱うこととした（第IV章第1節参照）。

出土遺物のほとんどが鉄滓であったが、SD17から一括で取り上げをした遺物に滑石二次加工品があることや周囲で見ついている遺構の時期から、これらを11世紀末～12世紀頃の遺構と想定した。この時期の製鉄に関する遺構は当時南

西諸島では見つかっておらず、今後の喜界島の歴史的評価等にも大きく影響していく重要な遺構であると判断され、周囲879㎡を町保有地として盛土保存することになった。取り上げを保留していた遺物についても記録を取った後、原位置のまま埋め戻した。

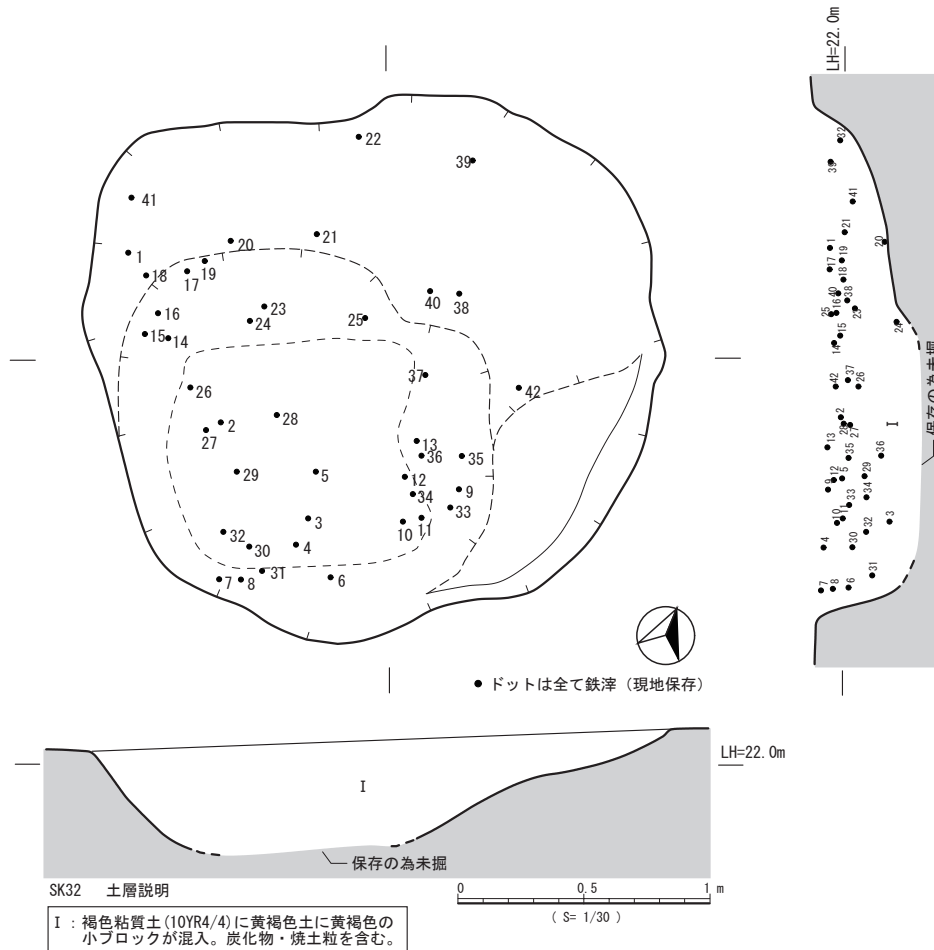
以下、各遺構の詳細を述べる。

土坑32号（SK32）（第226図・第158表）

検出状況：短軸2.18m×長軸2.33m×深さ0.4m（推定）の円形をした土坑である。北側から南側に向け傾斜し、深くなっている。遺構内からは少なくとも42点ほどの鉄滓を検出し記録を取ったが、遺物の取り上げ及び遺構の完掘までは行わずに埋め戻している。

溝状遺構17号（SD17）（第227図・第159表）

検出状況：長さ9.0m×最大幅1.8m×最大深度0.35mを測り、南北方向に軸を持つ遺構である。南側は検出できなかった。



第226図 SK32（製鉄関連遺構）実測図

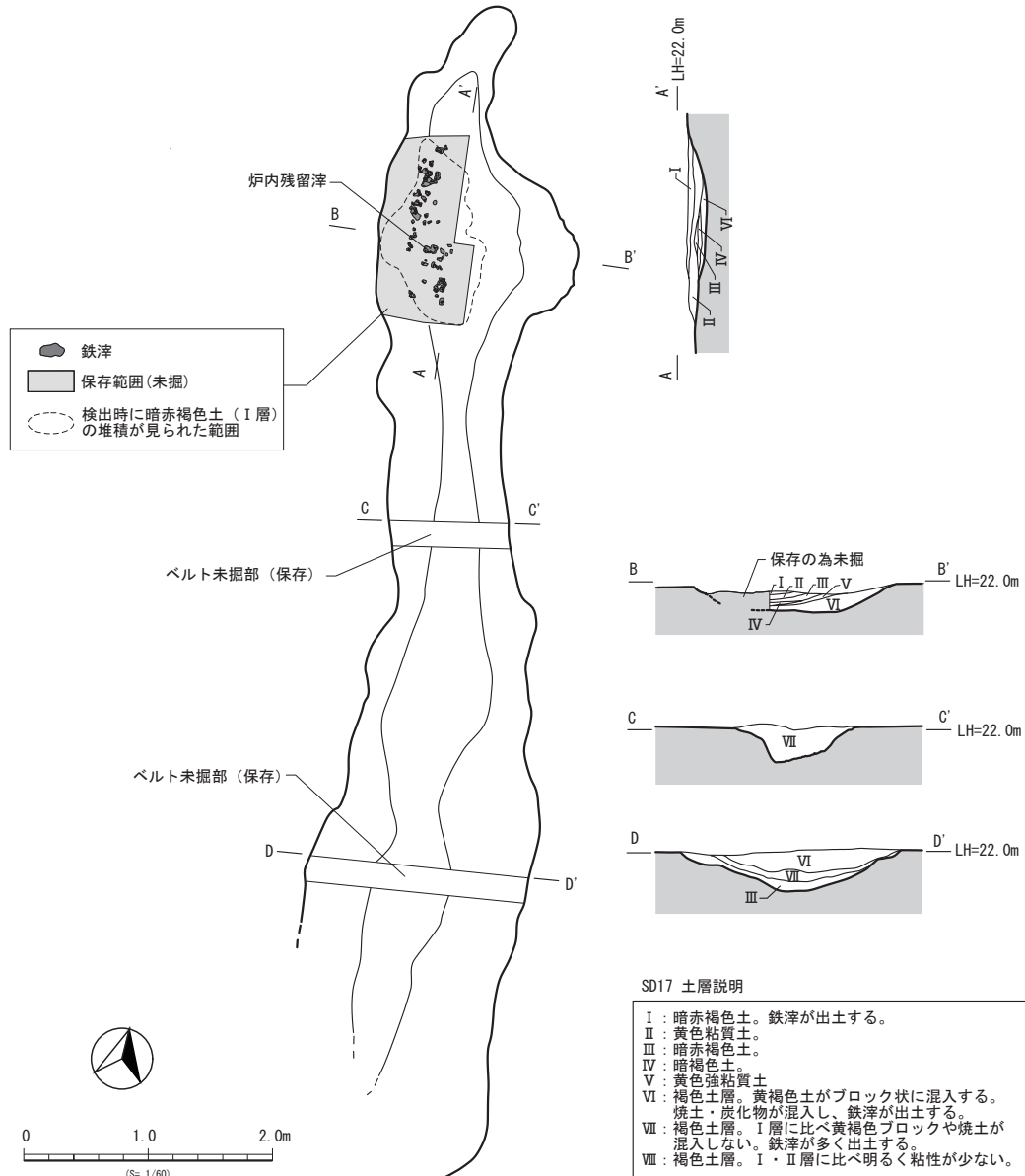
第158表 SK32（製鉄関連遺構）一覧

遺構名	出土区	検出面	平面形状	短軸(m)	長軸(m)	深さ(m)	出土遺物
SK32	P-8	Ⅷ層	円形	2.18	2.33	0.4(推定)	鉄滓(現地保存分約40点)

北側に暗赤褐色土（Ⅰ層）の堆積があり、鉄滓が集中して検出された。当初は排滓土坑の可能性を考え調査を進めたが、明瞭な掘り込みは見られず SD17 の一部として扱うこととした。Ⅰ層の下層は黄褐色土と暗赤褐色土の互層が見られ、鉄滓の出土状況などから周囲にあった炉や被熱した土が流れ込んで堆積した可能性が考えられる。南側の被熱が見られなかった範囲は、先行して調査を行った際に鉄滓が散在して出土した。

保存が決定した時点では完掘に近い状況であったが、遺物の取り上げと遺構掘り下げを保留していたⅠ層の堆積する周囲、また、断面確認用のベルト2か所を埋め戻している。

出土遺物：鉄滓約 221 点（うち、現地保存約 60 点）、鉄塊 2 点、炉壁 9 点、須恵器 1 点、土器 1 点、滑石二次加工品 1 点、ヤコウガイ 1 点などが出土した。これらのうち、鉄滓 14 点、鉄塊 2 点、炉壁 3 点、滑石二次加工品を 1 点実測した。



第 227 図 SD17（製鉄関連遺構）実測図

第159表 SD17(製鉄関連遺構)観察表

遺構名	出土区	検出面	最大幅(m)	長さ(m)	最大深度(m)	出土遺物
SD17	P-7	VIII層	1.8	9.0	0.35	I層:鉄滓(現地保存分約60点) VI層:鉄滓(33点 438g),鉄塊(2点 24g) VII層:鉄滓(1点 45g) 一括:鉄滓(117),炉壁(9),滑石二次加工品(1),須恵器(1),土器(1),ヤコウガイ(1),礫(11)

(9) 遺構内・包含層出土遺物

ここでは、中世の遺構出土遺物と包含層出土遺物をまとめて紹介する。中世の遺構からは遺物が 2,672 点出土し、そのうち図化したものは 119 点である。包含層からは 15,859 点出土し、192 点を図化した。以下、図化した遺物について遺構ごとに記述する。遺物観察表は末尾の第 160～165 表に一括して掲載することとする。

なお、遺構内出土遺物については各遺構に記載している集計表を、包含層出土遺物一覧については第 V 章基礎資料の第 245～248 表を参照されたい。

掘立柱建物跡内出土遺物

SB03 (第 228 図, 第 160 表)

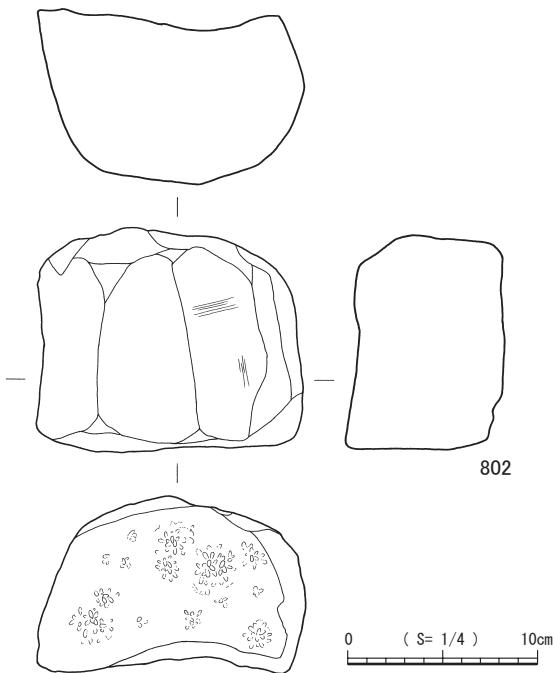
802 は台石である。被熱を受け破碎したものと見られる。

SB06 (第 229 図, 第 160 表)

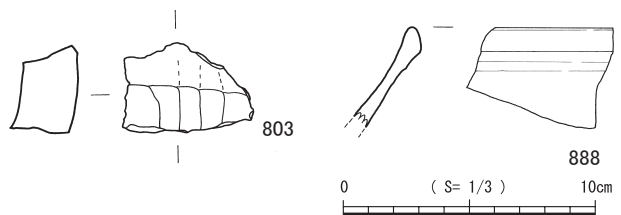
803 は滑石製石鍋である。粒子の荒い滑石を使用している。888 は白磁碗Ⅳ類の口縁部である。

SB07 (第 230 図, 第 160 表)

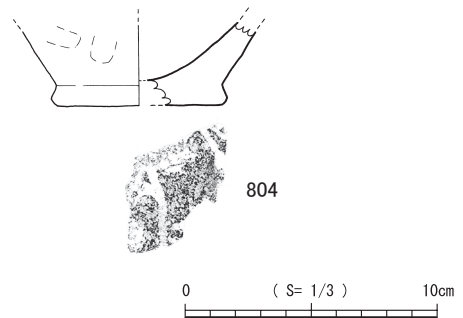
804 は兼久式土器の底部である。底面に圧痕が残る。胎土はやや泥質で、有色鉱物などを混和材に含む。



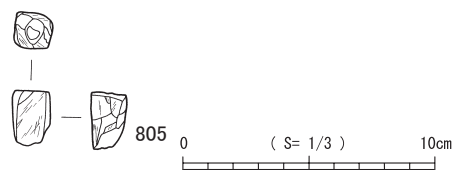
第 228 図 SB03 出土遺物



第 229 図 SB06 出土遺物



第 230 図 SB07 出土遺物



第 231 図 SB10 出土遺物

SB09 (第 231 図, 第 160 表)

805 は滑石二次加工品である。胴部を利用した棒状加工品の一部である。擦切り技法で割り取った痕跡が認められる。

SB13 (第 232 図, 第 160 表)

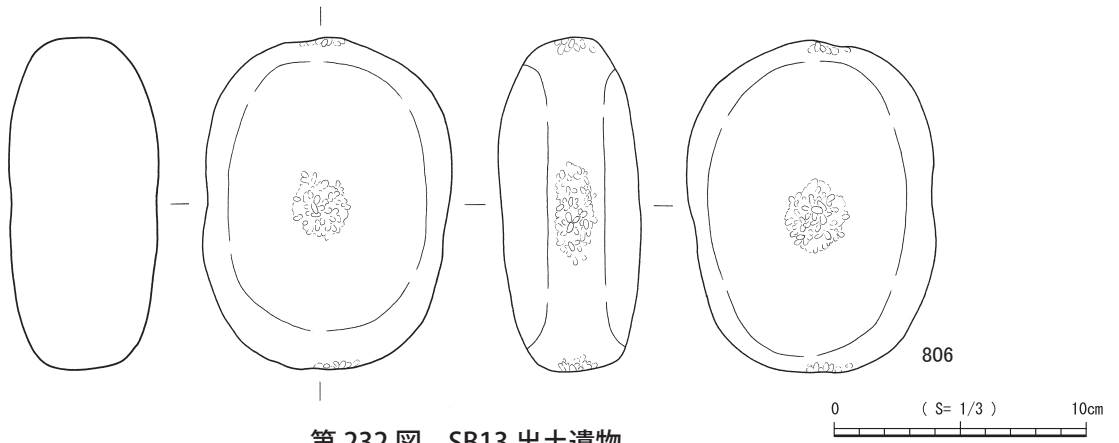
806 は磨敲石である。完形品である。各側面中央部分をよく使用しており凹んでいる。

SB18 (第 233 図, 第 160 表)

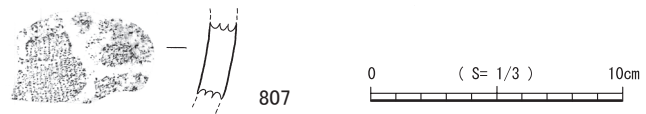
807 は布目圧痕土器である。砂質で混和材に金色の雲母を含む。

SB19 (第 234 図, 第 160 表)

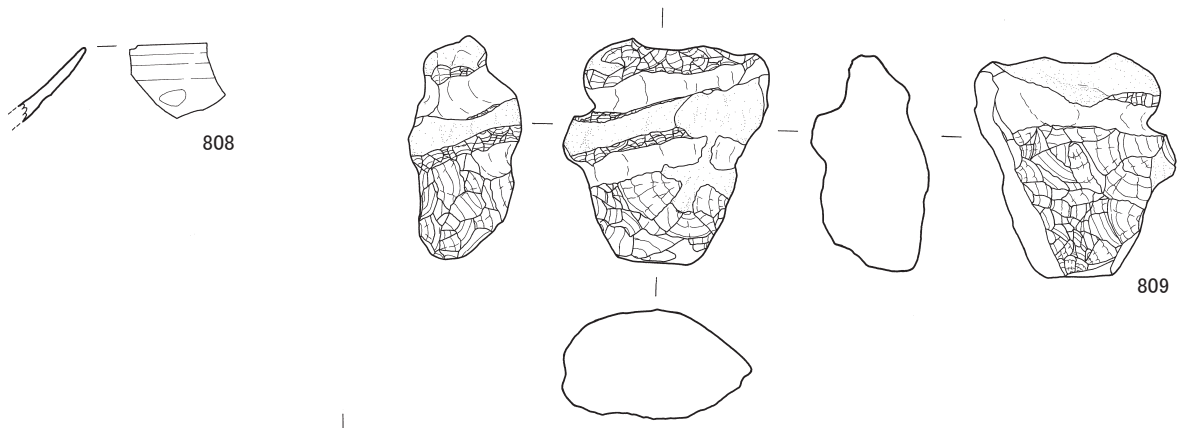
808 は白磁皿である。やや内湾気味の口縁形状で、内面に圈線を施す。809 は石製品である。破損した台石を転用したものと考えられる。溝状の凹みが 2 か所あり、紐ずれ痕などが確認できないが、重りなどに使用する目的で製作したものと考えられる。810 は台石である。破損後も敲打されており、繰り返し使用していることがうかがえる。



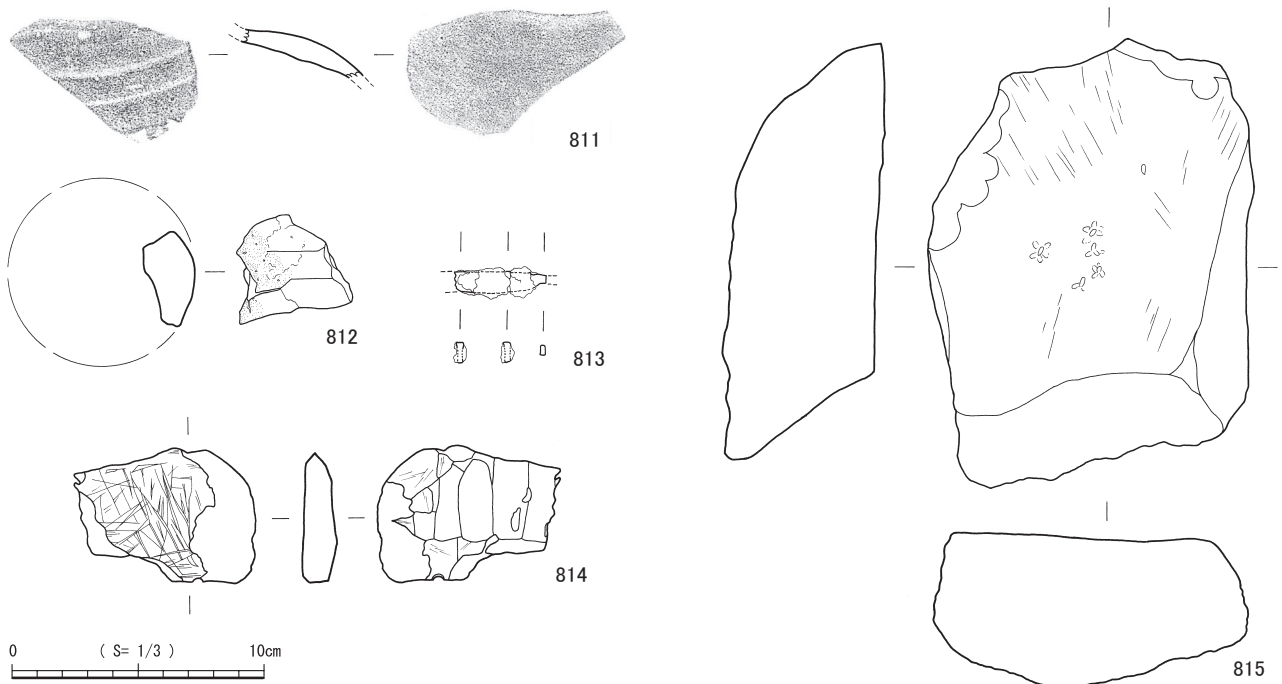
第 232 図 SB13 出土遺物



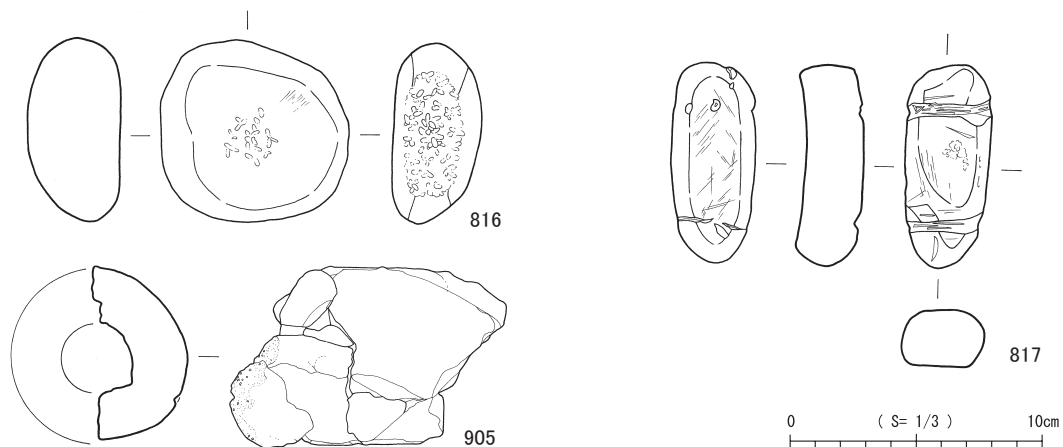
第 233 図 SB18 出土遺物



第 234 図 SB19 出土遺物



第 235 図 SB21 出土遺物



第 236 図 SB22 出土遺物

SB21 (第 235 図, 第 160 表)

811 はカムイヤキである。壺の肩部である。内外面ともやや磨滅しており、調整は不明瞭である。812 は鞆の羽口である。外面部は一部融解し、気泡が表面に見られる。813 は鉄製品である。小型の刀子状の製品であると見られるが、工具類の可能性もある。814 は滑石製石鍋である。内面には使用痕が顕著に見られる。割りとりの痕跡は見られず、自然破損したものと考えられる。815 は台石である。

SB22 (第 236 図, 第 160 表)

816 は磨敲石である。図上左右側面に敲打痕が多く見られる。817 は滑石製石鍋の胴部を利用した二次加工品である。上部と下部に抉りを入れている。下部は裏側まで抉りが入っている。905 は鞆の羽口である。

SB25 (第 237 図, 第 160 表)

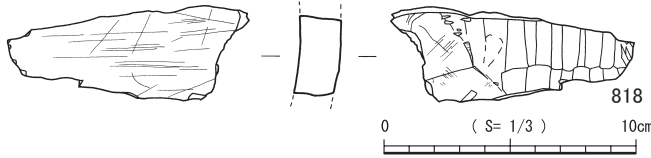
818 は滑石製石鍋である。貫通穿孔が1か所見られる。

SB26 (第 238 図, 第 160 表)

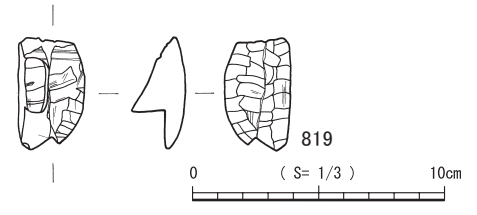
819 は滑石二次加工品である。バレン状の製品であると見られる。

SB27 (第 239 図, 第 160 表)

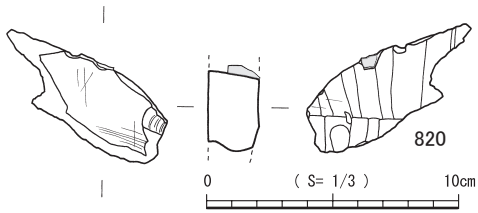
820 は滑石製石鍋である。貫通穿孔が3か所見られ、1か所には鉄片が残存している。



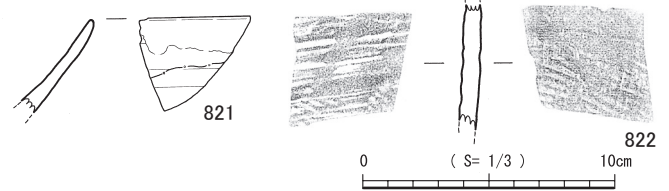
第 237 図 SB25 出土遺物



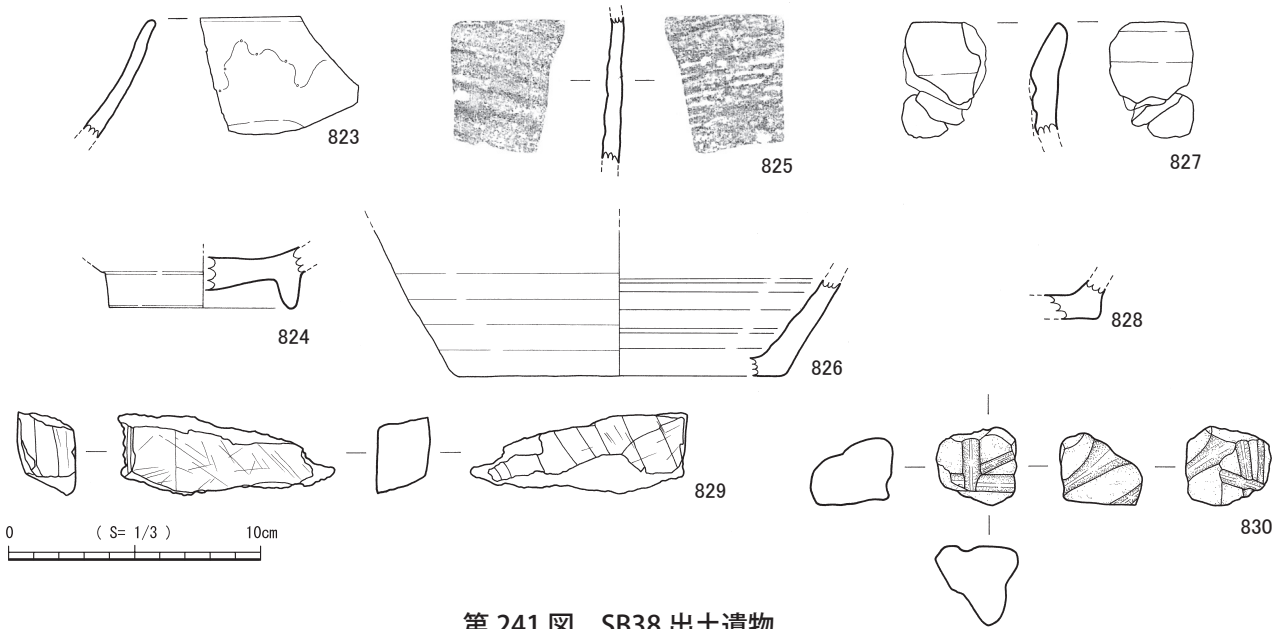
第 238 図 SB26 出土遺物



第 239 図 SB27 出土遺物



第 240 図 SB28 出土遺物



第 241 図 SB38 出土遺物

SB 28 (第 240 図, 第 160 表)

821 は白磁皿である。口縁部は釉だれが見られ、体部外面は露胎である。822 はカムイヤキである。

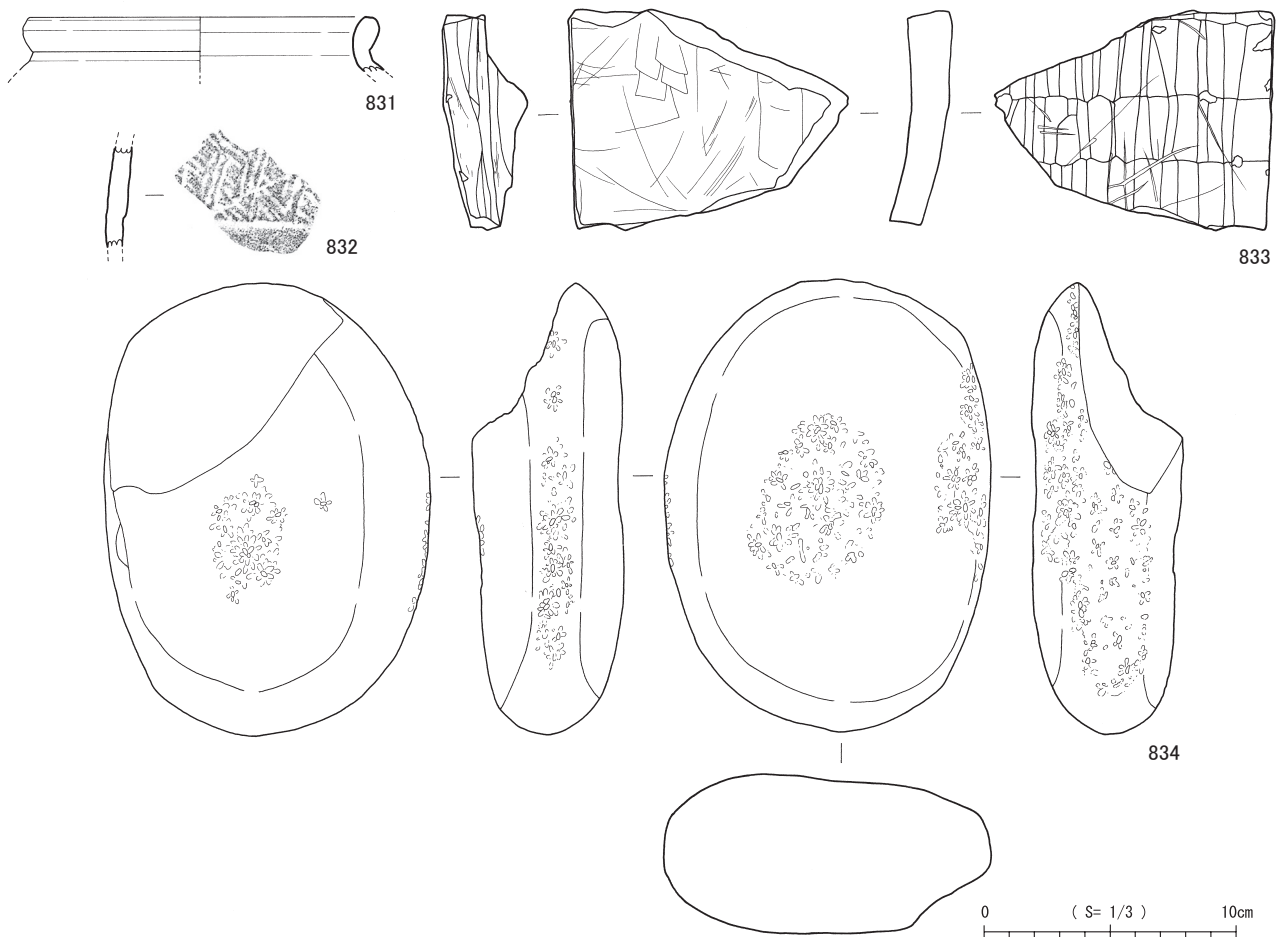
SB 38 (第 241 図, 第 160 表)

823・824 は白磁碗である。太宰府分類白磁碗V類に相当する。接合はしないが、釉色や胎土の雰囲気から同一個体である可能性が高い。825・826 はカムイヤキである。いずれも接合しないが、焼成状況や胎土が酷似しており、同一個体片である可能性が高い。827 は内面が破損し、不明瞭であるが、土師器養型土器であると見られる。828 は土器の底部片であ

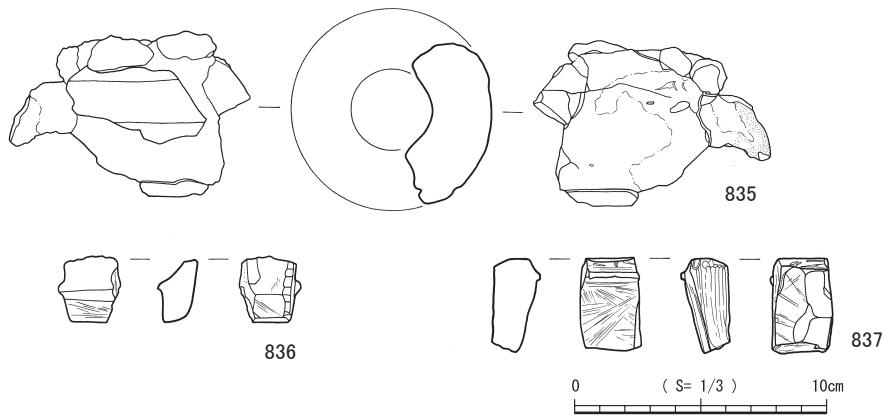
る。底面はやや凹んでいる。829 は滑石製石鍋である。側面には擦り切り後破断している部分が見られる。破断面も黒色化していることから、割り取った後も火の近くに置かれていたことが考えられる。830 は有溝砥石である。三角形を呈しており、各面に溝が見られる。

SB 39 (第 242 図, 第 160 表)

831 はカムイヤキである。口径の広い壺もしくは鉢の口縁部である。832 は縄文土器である。鋸歯文が施されており、文様を施文している部分は肥厚している。本報告土器IV-c類(第三章2節(2)参照。以降、土器分類については同じ。)



第 242 図 SB39 出土遺物



第 243 図 SB40 出土遺物

に相当する。833 は滑石製石鍋である。側面に擦り切り後、破断した痕跡が見られる。破断後に火の近くに置かれていたようで、黒く変色している。834 は磨敲石である。

SB 40 (第 243 図, 第 160 表)

835 は轆の羽口である。外面の一部は被熱し、変色している。836・837 は滑石製石鍋の縦耳部分を切り取ったものである。

土坑墓

土坑墓1号 (第244図, 第160表)

副葬品

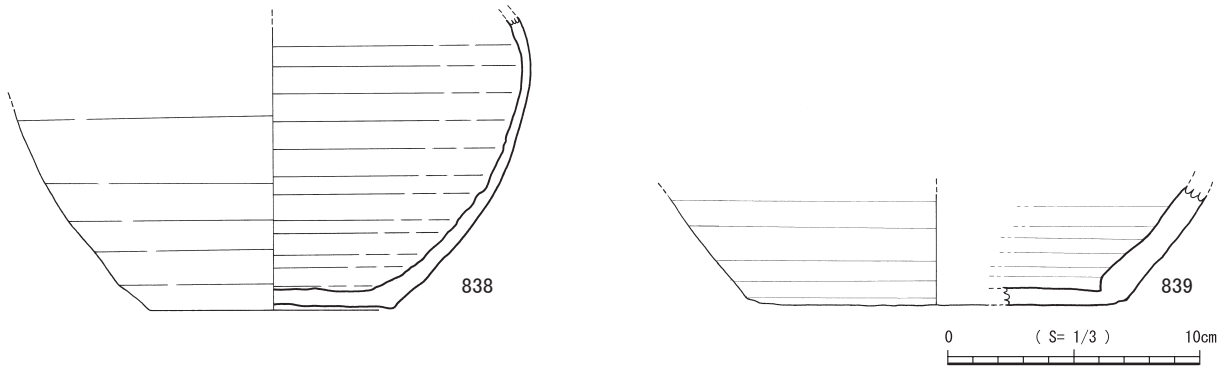
838・839 はカムイヤキである。838 は壺の胴部下半～底部まで残存している。外面は丁寧にナデられており、非常に薄く丁寧に作られている。839 は底部が約 1/4 残存している。838 よりも厚く、外面に平行状叩き・内面に格子目状当て具が残り、ナデが徹底されていない。器壁は底面の厚さより、胴部の厚さの方が厚い。

土坑墓2号 (第245図, 第160・161表)

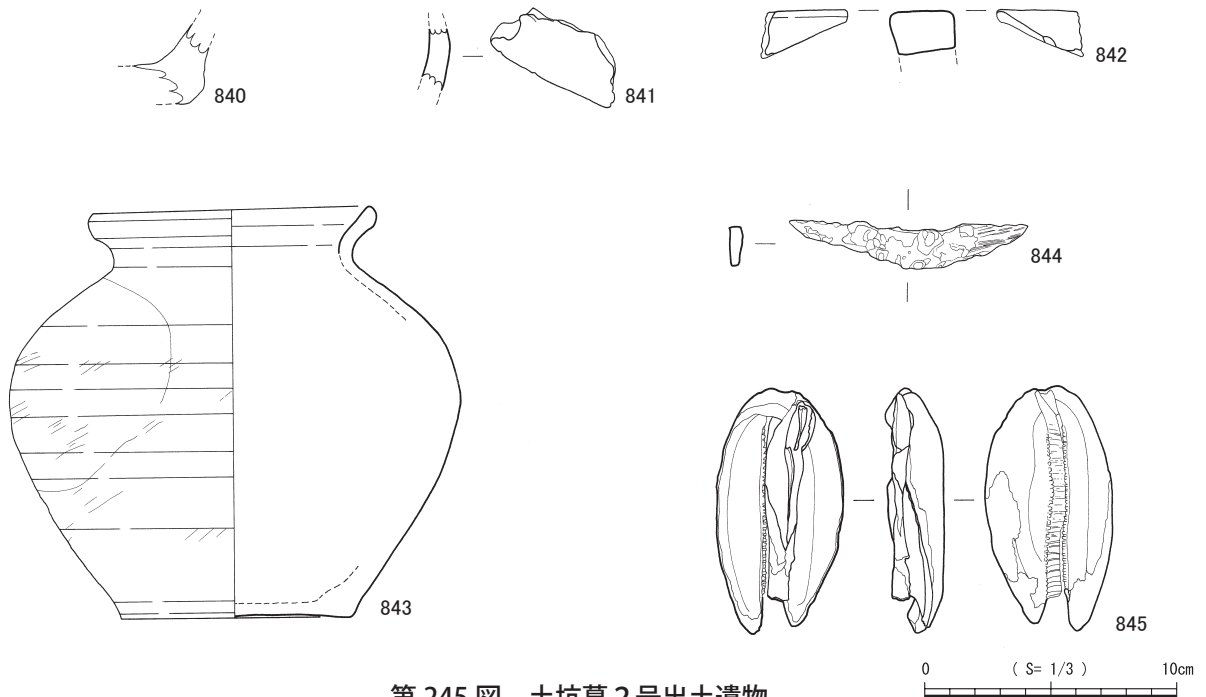
840 は土器の底部である。底面は充填しておらず、中空状になっている。胎土は砂質であるが、焼成良好である。841 は滑石混入土器である。842 は滑石製石鍋の口縁部である。

副葬品

843 はカムイヤキ壺である。口径 11cm×底径 9cm×器高 16cm を測る完形品である。口縁部は丸みを帯びた形状である。外器面に平行状叩き痕が残り、ナデは徹底されていない。焼成時の熱でやや暗く変色した部分が見られる。844 は刀子である。完形品で半月状を呈している。845 はタカラガイである。貝の種類はムラクモダカラと見られる。特に人為的な加工痕は見られない。



第244図 土坑墓1号出土遺物



第245図 土坑墓2号出土遺物

土坑

SK18 (第246図, 第161表)

846~848は滑石製石鍋である。846は貫通穿孔が1か所、未貫通穿孔が1か所見られる。847は底部である。848は胴部片を再加工したものである。破断面は全面削られ平滑である。貫通穿孔1か所有り。

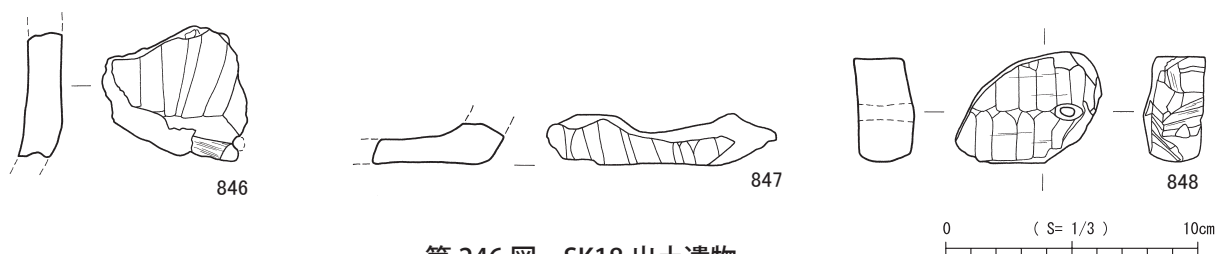
SK20 (第247図, 第161表)

849はカムイヤキである。外面には平行状叩き痕が残る。焼成良好で堅緻である。850~852は滑石製品である。850は底部である。底面に貫通穿孔がある。851は小型の製品である。

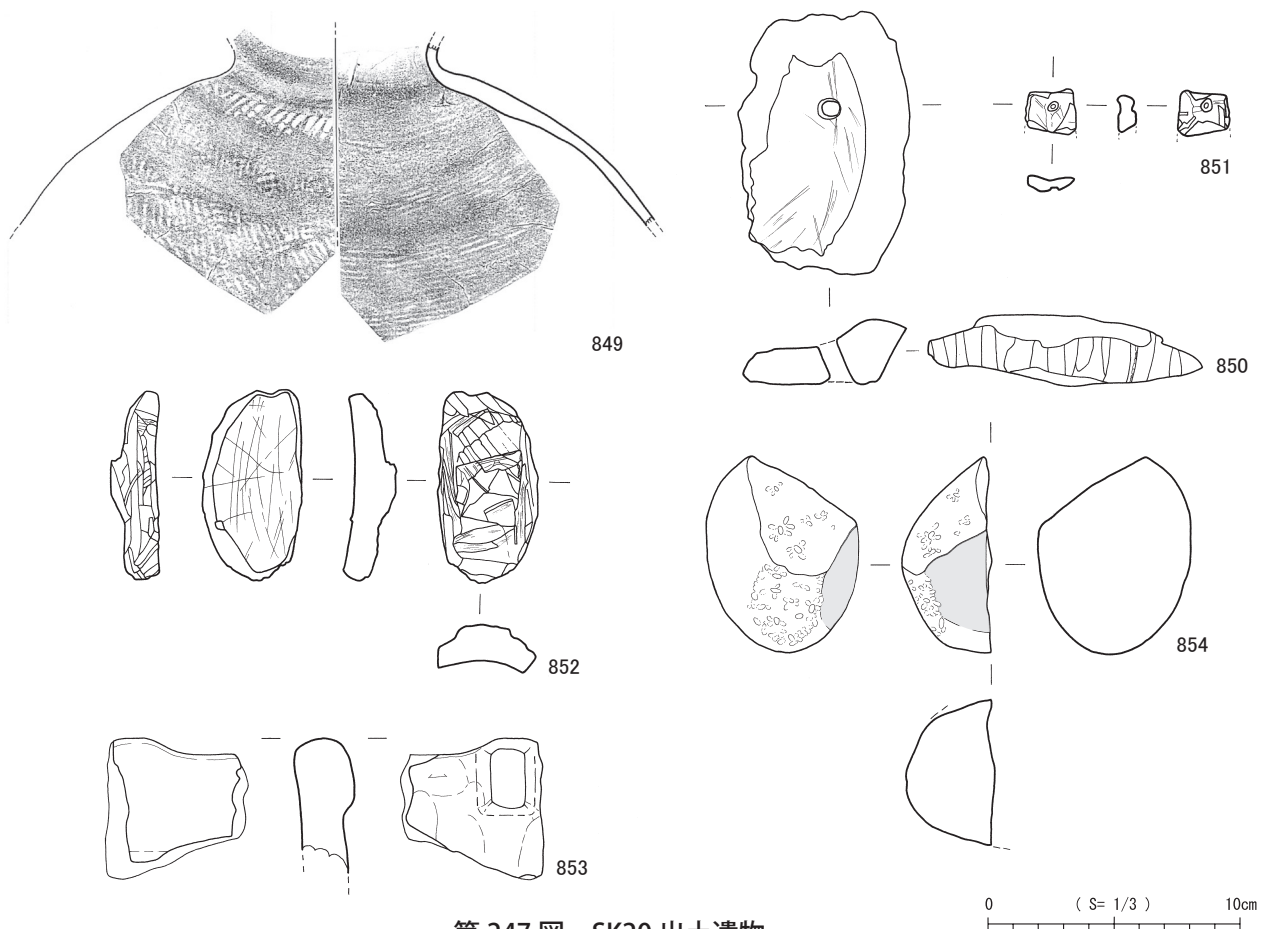
852は底部部分を削りだしてバレン状製品を製作しようとしている加工途中品である。突起部を削りだす途中で加工が止まっている。853は滑石混入土器である。縦耳の石鍋を模倣したものである。縦耳部分がもり上がっており、口縁部はやや波状になっている。滑石の粉末が多く入っており、質感は石鍋に近い。854は磨敲石である。特に先端部に敲打が集中している。

SK25 (第248図, 第161表)

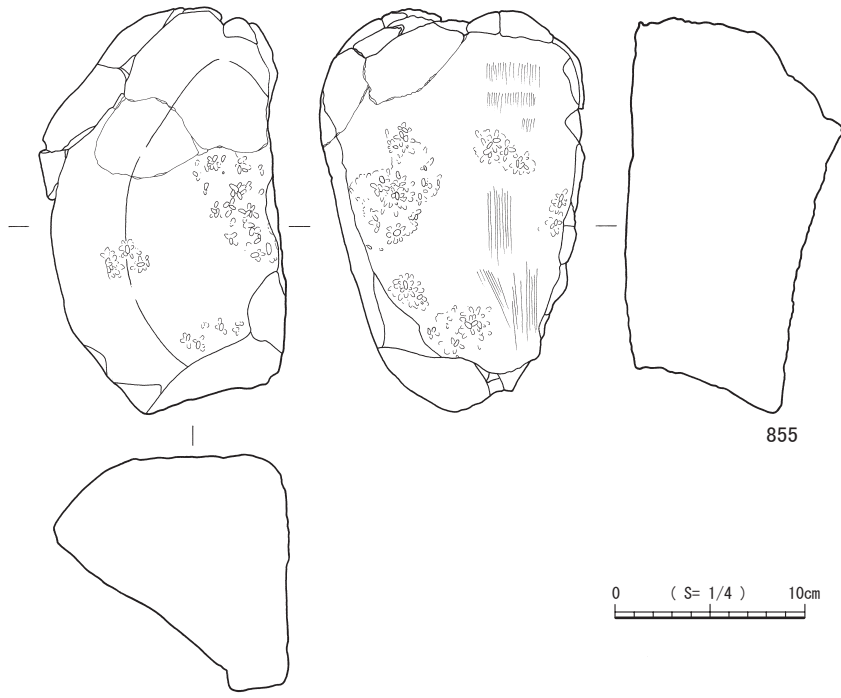
855は台石である。敲打痕が全面に見られる。



第246図 SK18 出土遺物



第247図 SK20 出土遺物

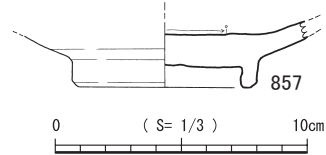
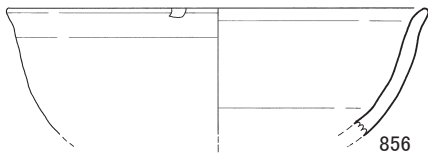


第 248 図 SK25 出土遺物

石列

石列1号 (第249図, 第161表)

856・857は龍泉窯系青磁である。856は無文外反碗である。釉は薄くかかる。ややくすんだ色をしており、二次的に被熱した可能性もある。857は底部である。見込みは輪状に釉剥ぎされており、高台内部は露胎である。

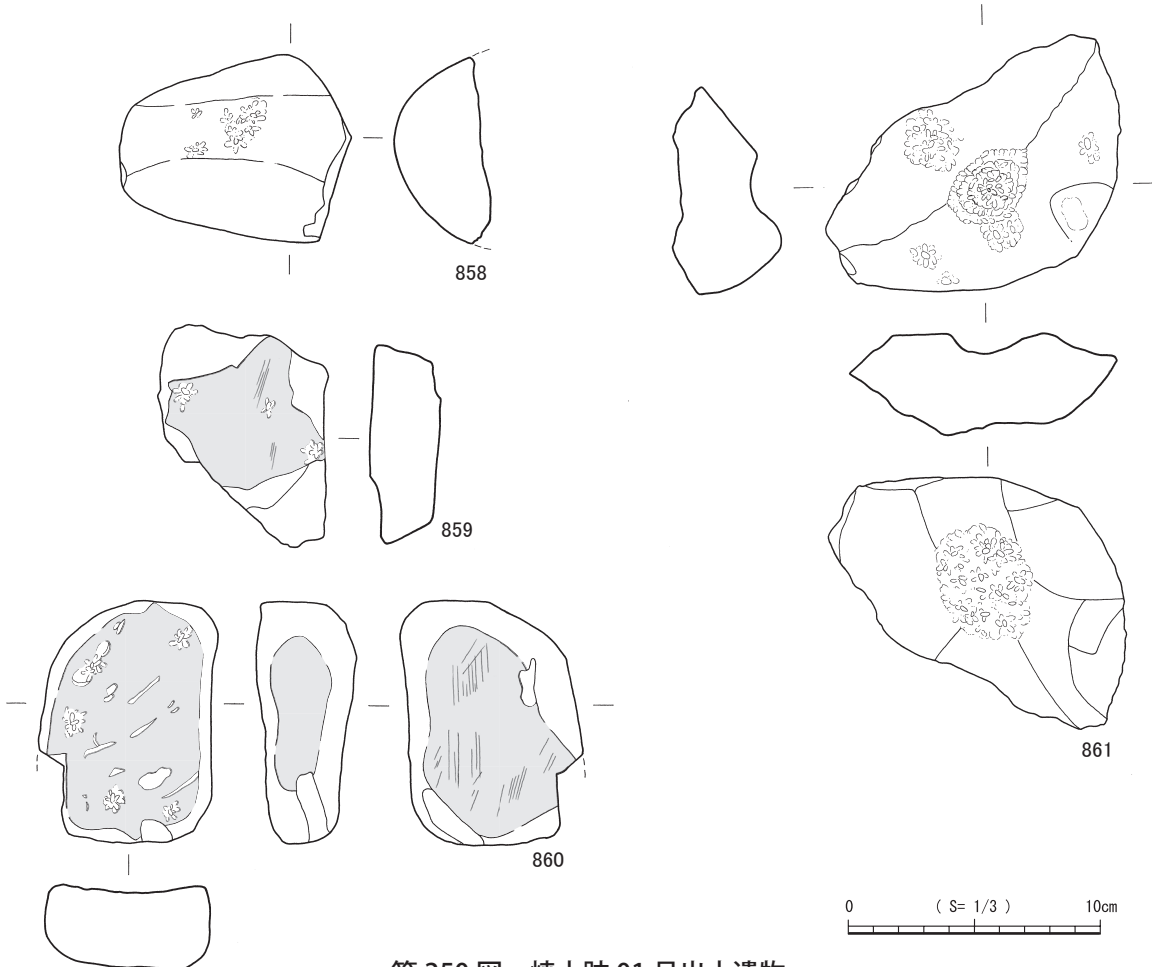


第249図 石列1号出土遺物

焼土跡

焼土跡01号 (第250図, 第161表)

858～861は磨敲石である。860はほぼ完形品で、表面は擦痕が見られるが、裏面は凸凹が多く見られ、使用する面によって敲くこと・磨ることの用途を使い分けられていることが伺える。861は石器が破損した後も敲打具として使用されており、破断面に敲痕が残る。



第250図 焼土跡01号出土遺物

製鉄関連遺構

SD17 (第 251・252 図, 第 161 表)

SD17 の出土遺物は滑石製品 1 点 (862) を除くと、すべて製鉄関連遺物である。862 はバレン状に加工した滑石製品である。突起部には横位の貫通穿孔が 1 カ所みられる。

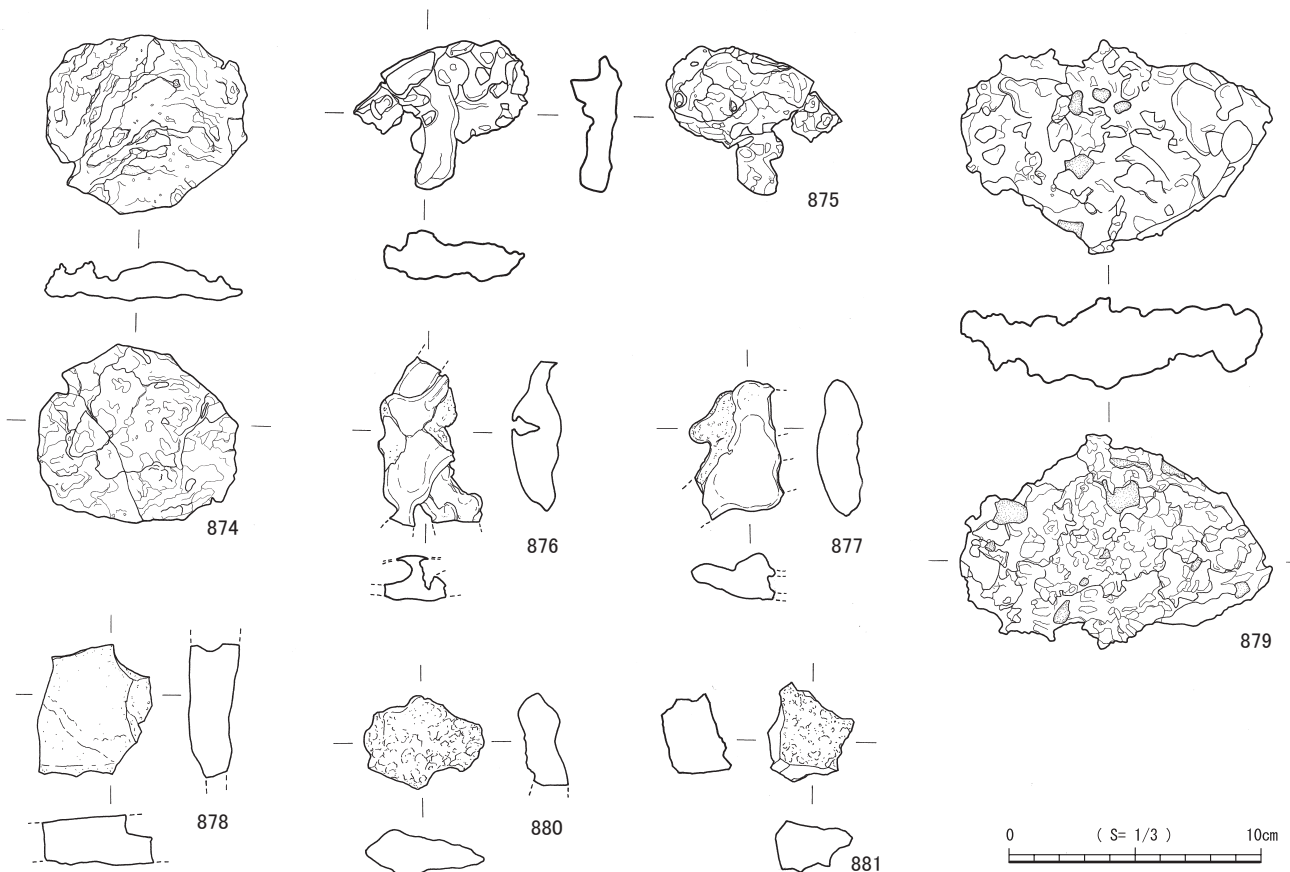
製鉄関連遺物には炉壁 (863~865)、鉄塊 (866・867)、鉄滓 (868~880) がある。鉄滓はすべて製錬滓であり、炉外流出滓 (868~878) と炉内残留滓 (879・880) とに分けられる。

炉壁 (863~865)

863 は築炉時に地面に最初に置かれた粘土塊であり、炉壁最下段に当たる。内面は熔損し、浸食されており、また鉄滓が熔着し、大小の球状滓が付着している。外面は風化し、本来の表面を失っている。底面には鉄滓との接触痕が認められ、炉内側から鉄滓がしみ出した痕跡とみられる。864 も炉内の鉄滓附着面を残し、外面は本来の表面を失っている。外面が黄褐色、炉内に近い内側は灰色を呈している。865 も鉄滓が熔着する炉壁片である。



第 251 図 SD17(製鉄関連遺構) 出土遺物(1)



第 252 図 SD17(製鉄関連遺構)出土遺物(2)

鉄塊 (866・867)

鉄塊は前面を赤錆に覆われており、強い磁性をもつ。866は棒状の鉄塊であり、表面がなめらかであり、微小な穀粒状の突起をもつ。867は板状の小型鉄塊である。それぞれ20g、4gを測るが、鉄分が溶脱して球状よりも軽い可能性がある。

炉外流出滓 (868～878)

製錬滓のうち、炉外に流出した流動滓は総計2,837gを測り、その形状・表面の特徴や色調で分類が可能である。868・869はその他の流動滓が赤褐色を呈するのに対し、灰色を呈しており、流動性に乏しい。870・874は表面に流れ皺を残す流動滓であり、とくに870は流出した際の先端部に当たる。870～873は平面形が長条形で、底部が湾曲しており、筋状に流出した鉄滓である。とくに872・873は両側縁が立ち上がっ

ており、製鉄炉の出滓孔近くで冷却されて固まった鉄滓である。875～877は複数の瘤が認められ、小型鉄滓が融着したようにもみえるが、高温のため内部で発泡して表面が瘤状を呈したものである。878は厚く、断口が緻密である。

炉内残留滓 (879～881)

炉内残留滓879は表面に炉壁の小片を噛み込んでおり、炉底は凹凸が著しく、炉床に鉄滓が垂下した痕跡を残している。880は炉底残留滓の小片であり、表面や断口には鉄塊の嵌入が認められる。881はSD17出土遺物ではなくSD17付近に堆積していたII層から出土しており、880と同様の特徴をもつものである。参考資料として提示しておく。

以上の製鉄関連遺物については第四章(1)においてさらに詳しく説明することとする。

ピット内出土遺物 (第253～256図, 第161・162表)

882～886は龍泉窯系青磁である。882～884は口縁部である。882・883は無文外反碗で、882は釉が薄く、883はやや厚めに釉がかかっている。884は全体的に変色しており、器表面に気泡が見られることから二次的に被熱しているものと見られる。885は片彫り連弁文碗の底部である。釉は薄く高台の一部までやや雑にかけられている。886は無文外反碗の底部であるとみられる。中央部に印花文がある。釉は薄く均一にかかり、貫入が入る。高台外面は釉剥ぎされ、内面は露胎である。

887～891は白磁である。887は碗Ⅳ類の口縁部である。890は碗Ⅳ類の底部である。889は口唇部が欠損しているが、口縁部に近い部分で、碗Ⅴ類と見られる。外器面には縦櫛目文、内面に1条圈線が施されている。891も碗Ⅴ類の底部で細かい貫入がみられ、高台外面まで施釉される。

892～895はカムイヤキである。895の胴部上半部は叩き・当て具痕が明瞭に残っている。

896・897は滑石混入土器である。896は外器面にヘラ状工

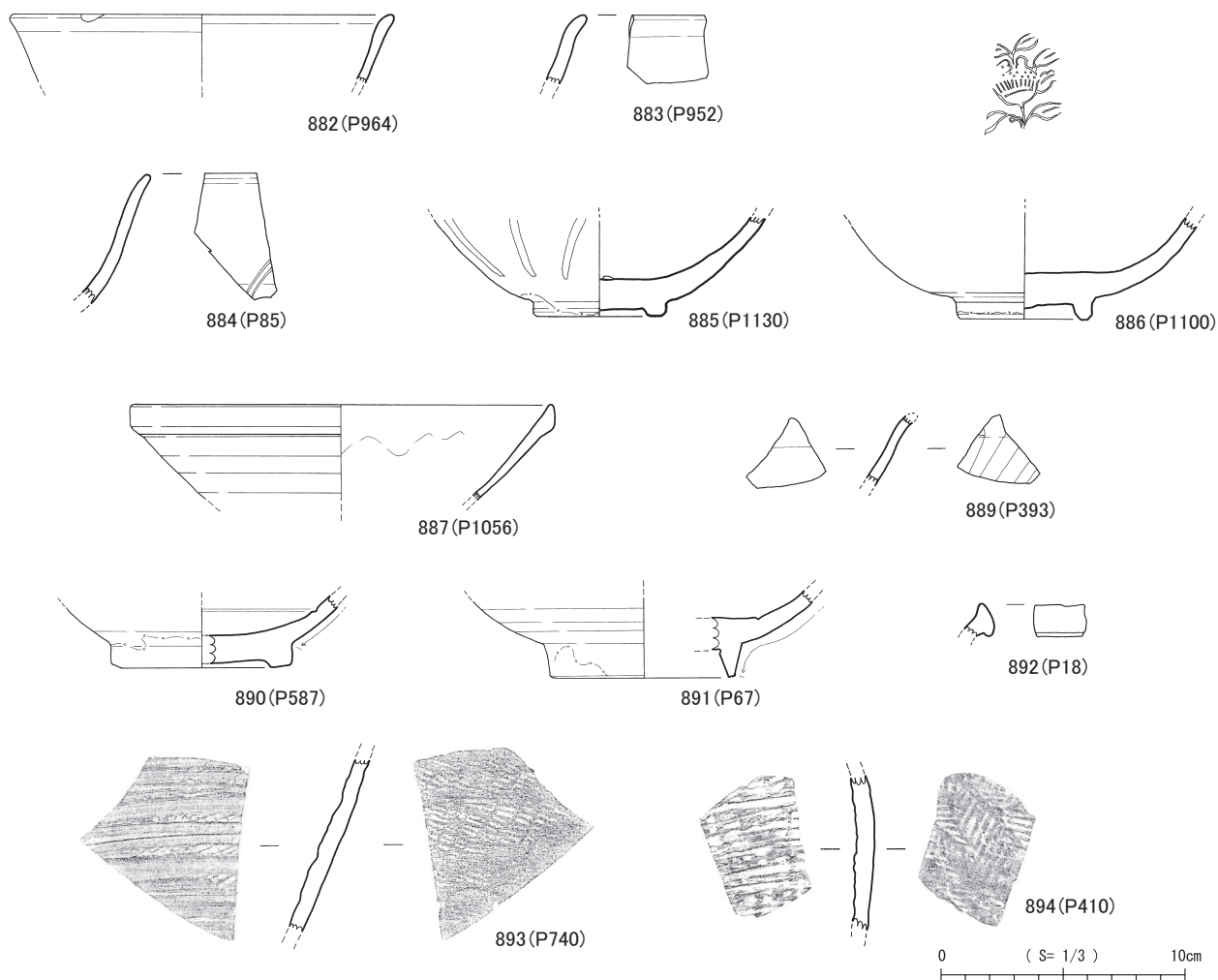
具で加工した痕跡が見られ、石鍋を模倣したものと考えられる。

898～902は滑石製石鍋である。899は縦耳の下部分である。幅広の縦耳である。901・902は底部である。901は破損後に一部転用しようとしたようで、中央部分に擦痕がみられる。また、貫通穿孔が3か所見られ、内1か所に鉄片が残存している。902はやや粗質の滑石を使用しているため、多孔質である。

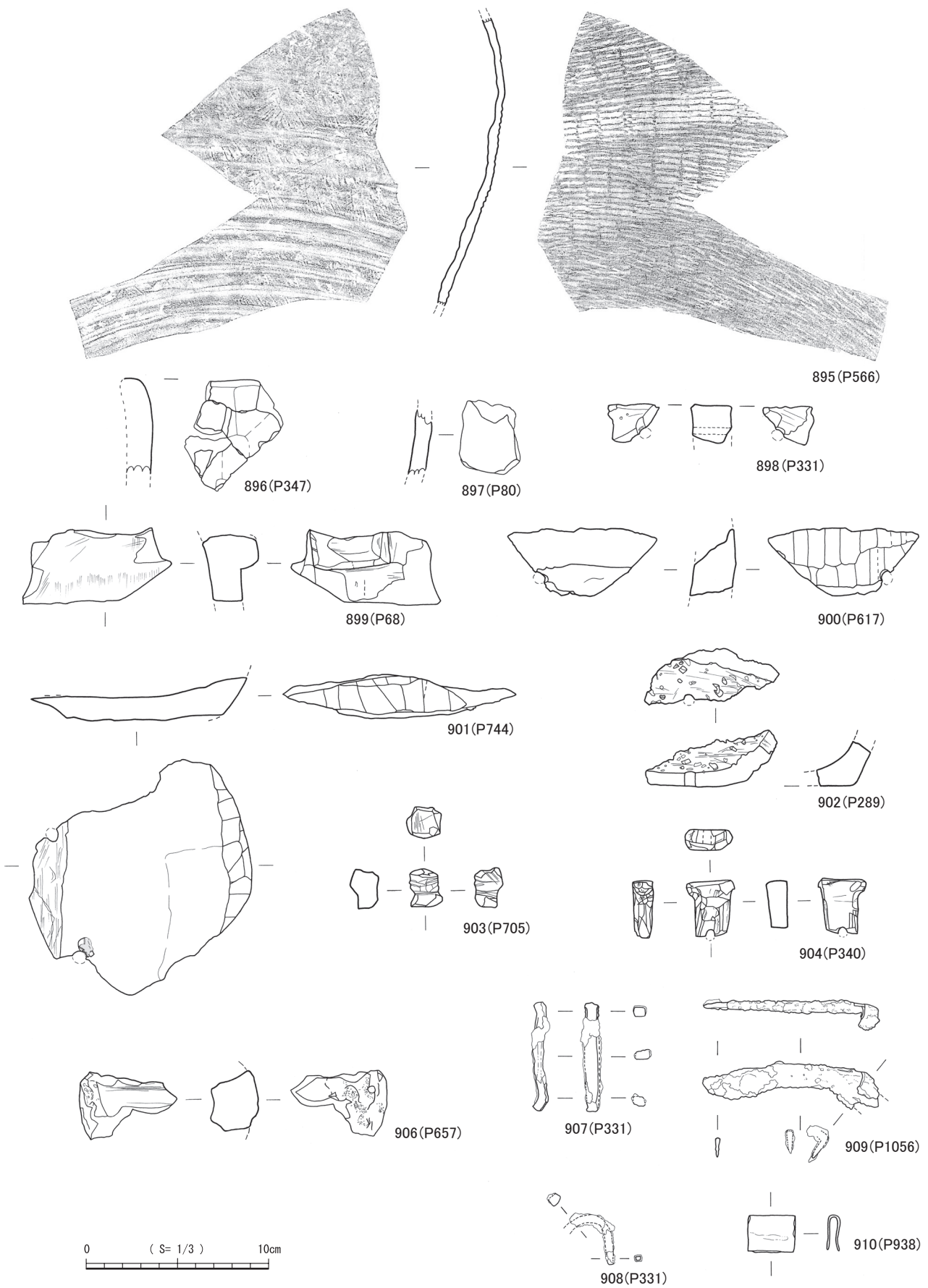
903・904は滑石製品である。903は中央部に抉りが入り、錘状に加工されている。904はT字型に加工されている。中央部に貫通穿孔があり、下側は破損している。

906は轆の羽口である。羽口の先端部で、表面はガラス質化している。

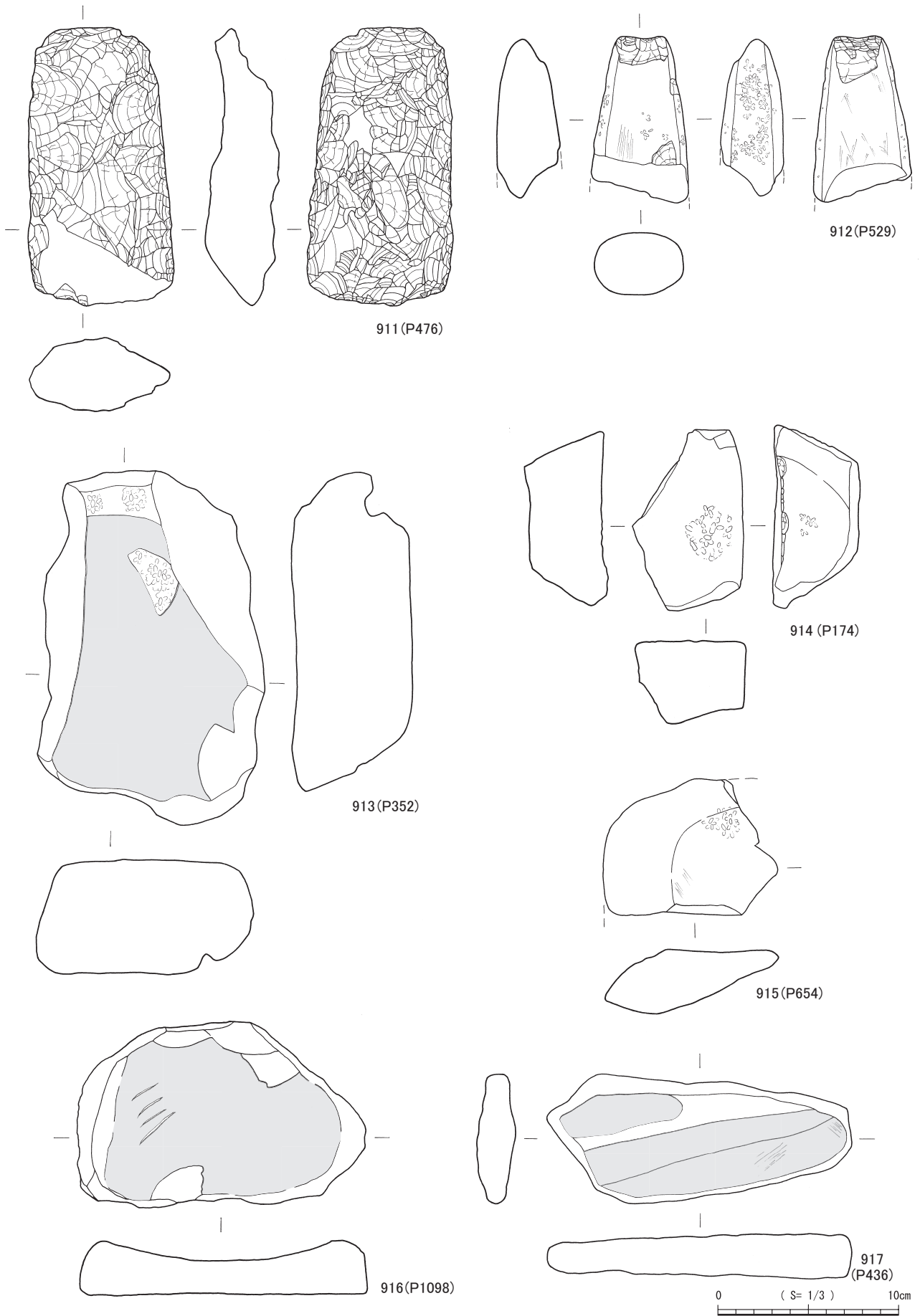
907～910は金属製品である。907・908は断面四角形をした鉄製品である。907は釘状もしくはかすがい状の製品と考えられる。909は鎌状の鉄製品である。基部に近い方は袋状になっている。910は薄い板状の銅製品である。



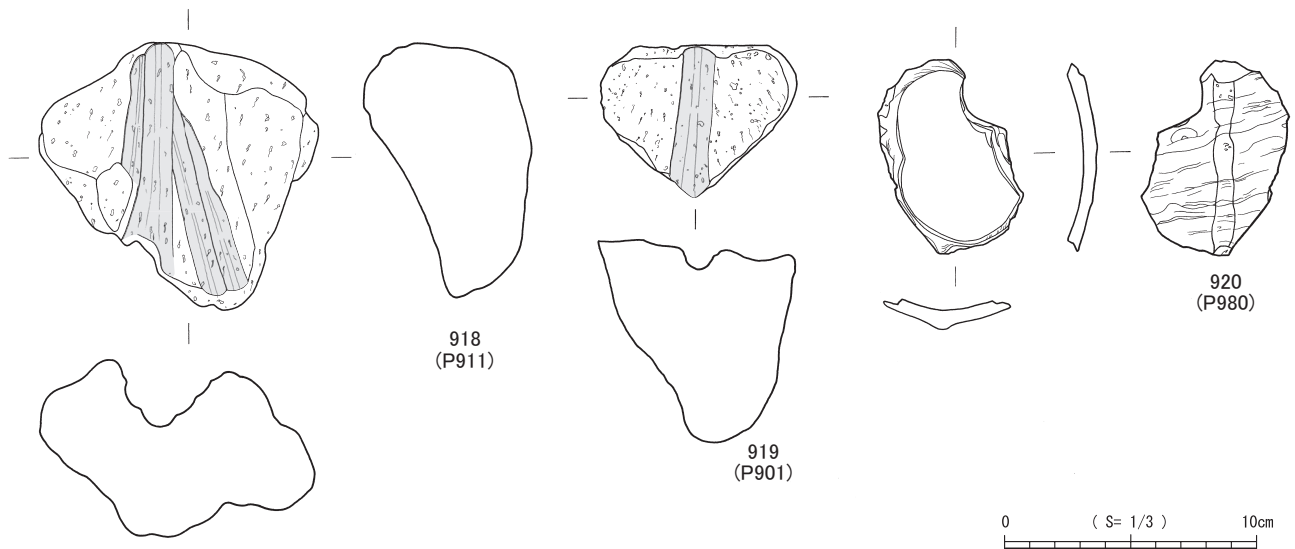
第253図 ピット出土遺物(1)



第 254 図 ピット出土遺物 (2)



第 255 図 ピット出土遺物(3)



第 256 図 ピット出土遺物(4)

911～917は石器である。911・912は石斧である。911は緑色岩を使用した大型の磨製石斧であったと見られる。全面剥離されている。912は石斧の基部部分である。端部は先細りしている。側面には敲打痕が見られ、打具としても使用されていたようである。913は台石である。やや軟質な砂岩を使用しており、断面部に多孔状になっている部分が見られる。914・915は磨敲石である。914は石器が破損した後も打具として使用されており、破断面側面に敲打痕が見られる。916は石皿である。使い込まれており、中央部が凹んでいる。目の細かい砂岩を使用している。側面には敲打痕が見られる。917は台石などの大型石器が破損後に転用したものだと考えられる。側面には部分的に敲打痕が見られる。918・919は軽石に対して棒状の何かを当て、擦った痕跡が残っているものである。幅は0.8～1.0cmで918では何回も擦られ、重複している痕跡が伺える。

920はヤコウガイを使用した貝製品の加工途中のものである。内面には切り取り途中の痕跡が残る。

包含層出土遺物

Ⅲ層出土遺物 (第 257・258 図, 第 162・163 表)

Ⅲ-a 層出土遺物 (921~929)

921~923 は龍泉窯系青磁である。921 は直口気味の口縁で、外器面に草花文が施される。釉は厚くかかっている。922 は外面に鑄連弁文、内面に双魚文の貼付文が施されている。923 は玉縁椀である。924・925 はカムイヤキである。924 は貫通穿孔が1か所ある。926 は板状の鉄製品である。927 はガラス玉である。表面が風化し、白色化している。928 は細粒砂岩を石材とする棒状の石製品である。片側の先端は破損しているが、もう一方の先端は細くなり、鉛筆のような形状をしている。全体に擦痕が観察できる。929 はヤコウガイの蓋を利用した螺蓋製敲打具である。

Ⅲ-c 層出土遺物 (930~936)

930 は連弁文のある青磁椀である。蓮江窯の可能性ある。931~934 は龍泉窯系青磁である。931・932 は無文外反椀である。931 の釉は薄い。932 は玉縁状の口縁部を持つ。933 は坏である。口折れの口縁部である。外器面に無鑄連弁文が施されているが、表面に気泡が見られ、二次的に被熱している。934 は盤である。幅広の沈線文が施される。935 は褐釉陶器である。936 は板状の鉄製品である。

Ⅲ-d 層出土遺物 (937~940)

937・938 は龍泉窯系青磁である。937 は連弁文椀である。938 は無文外反椀である。釉は薄く施されている。939 はピロースクタイプ白磁椀である。940 は褐釉陶器である。

Ⅲ-c・d 一括取り上げ遺物 (941~943)

941・942 は無文外反する龍泉窯系青磁椀である。941 の釉は薄く施されている。942 の器壁はやや厚めで釉も厚く施されている。943 は白磁のピロースクタイプ椀Ⅱ類である。

Ⅲ-g 層出土遺物 (944・945)

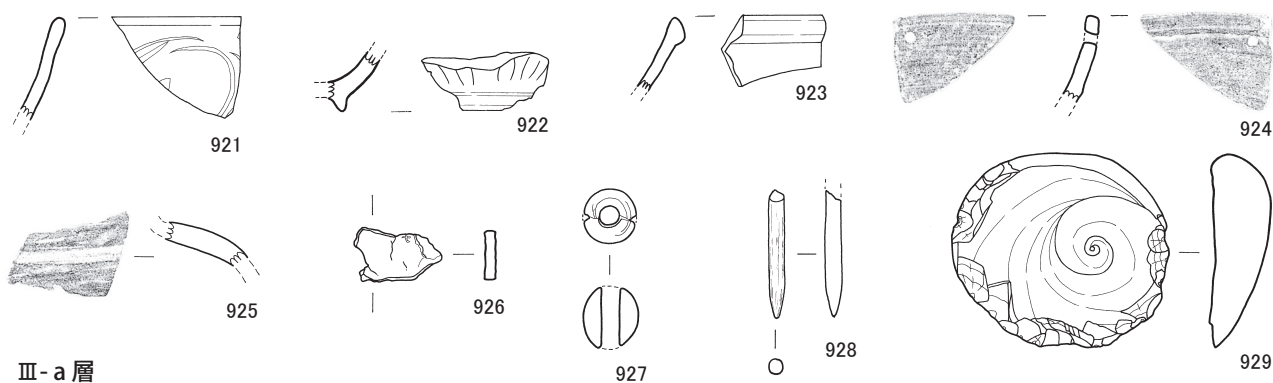
944・945 は白磁である。944 は内湾するもので、945 はピロースク椀Ⅲ類である。

Ⅲ-j 層出土遺物 (946~949)

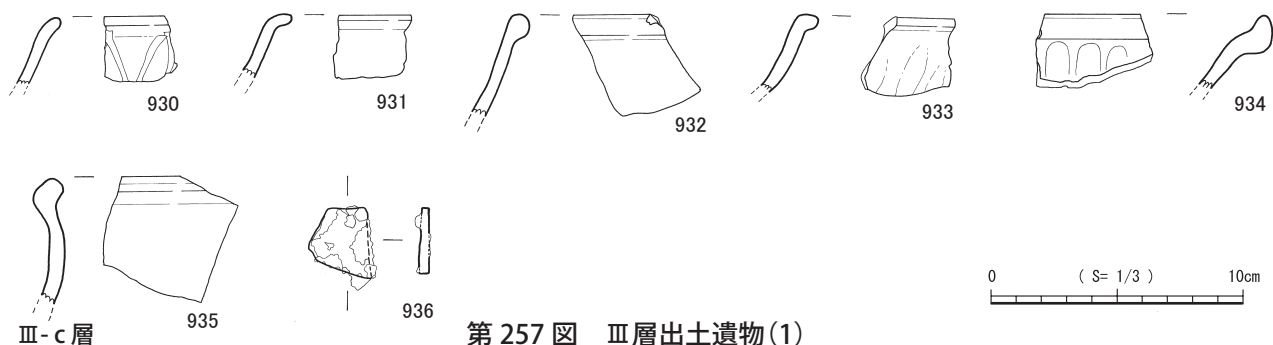
946~948 は龍泉窯系青磁である。946・947 は無文外反椀で、釉は薄く施されている。948 は底部である。釉は薄く、高台内面まで施釉されている。

Ⅲ-k 層出土遺物 (950~956)

950~952 は龍泉窯系青磁である。950 は無文外反椀で、器壁は厚めで釉も厚くかかっており、少しぼったりとした印象を受ける。951 は全体的に釉が厚めで、高台の作りもやや甘い。高台内面は蛇目状に釉剥ぎされている。952 は盤である。

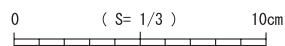


Ⅲ-a 層



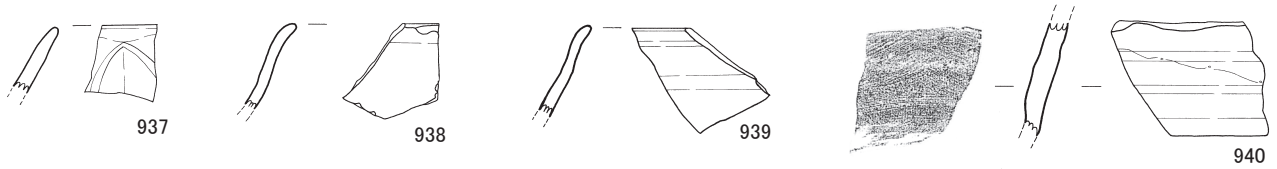
Ⅲ-c 層

第 257 図 Ⅲ層出土遺物(1)

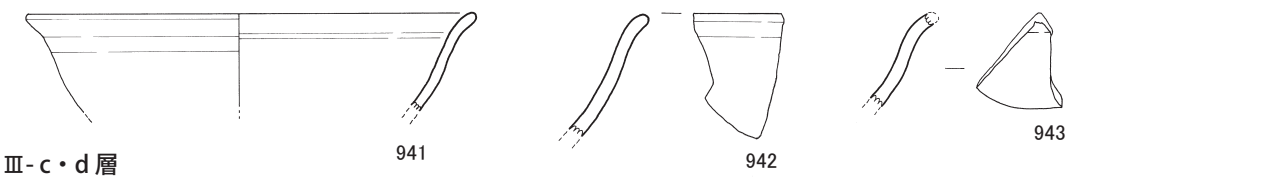


953はカムイヤキA群の口縁部である。954は縄文土器である。胎土は泥質で、口縁付近に横位と縦位に刻目貼付突帯を施す。外面には鋸歯状の細沈線文も施され、本報告土器V-b'類に相当する。

955は中粒砂岩を石材とする有溝砥石である。使用面は4面あり、合計5条の溝がある。956は粗粒砂岩を石材とする磨敲石である。両平坦面中央部は浅く凹んでおり、側面にも敲打痕が観察される。



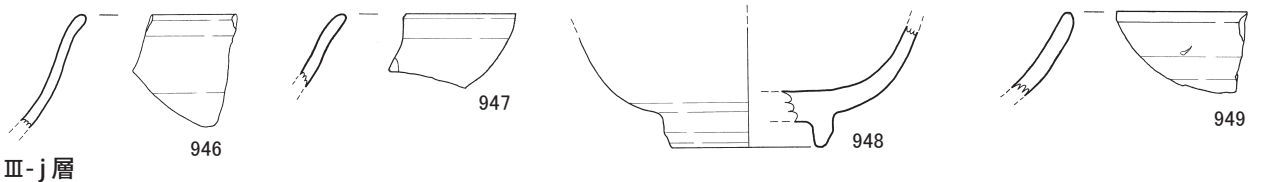
Ⅲ-d層



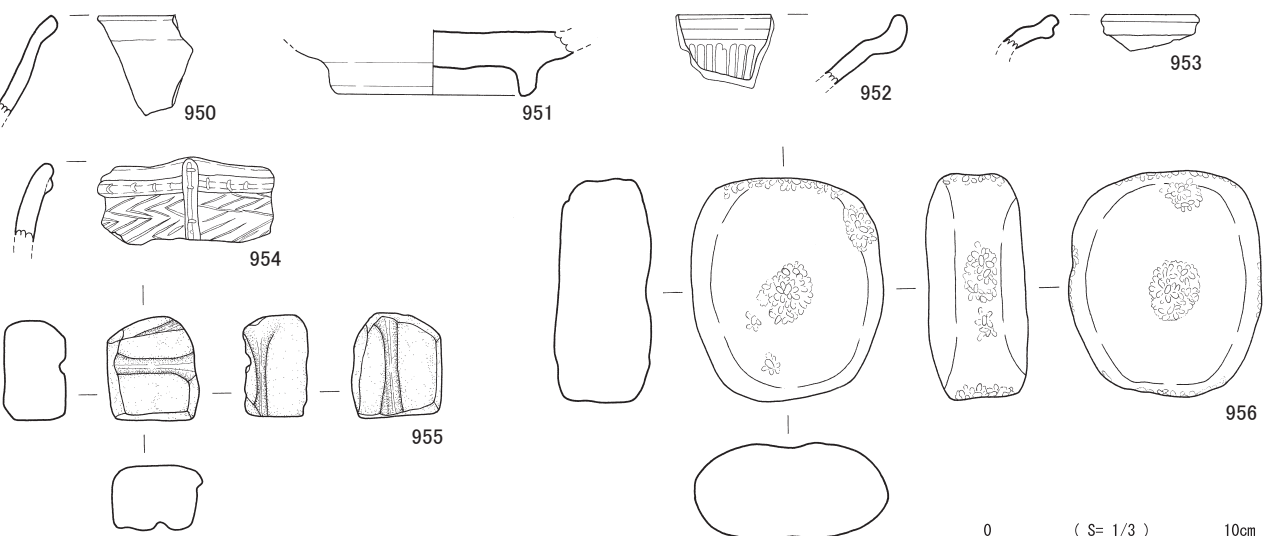
Ⅲ-c・d層



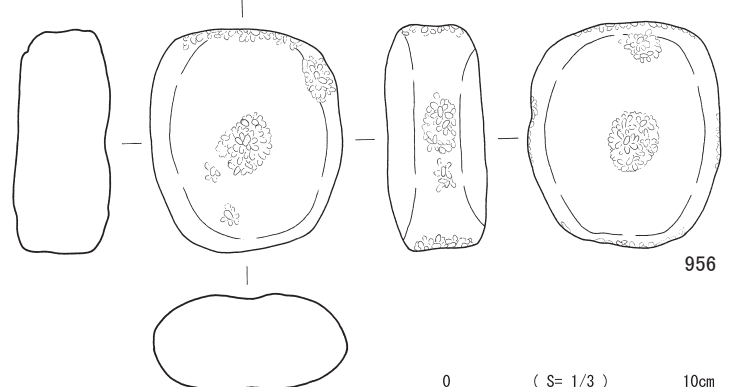
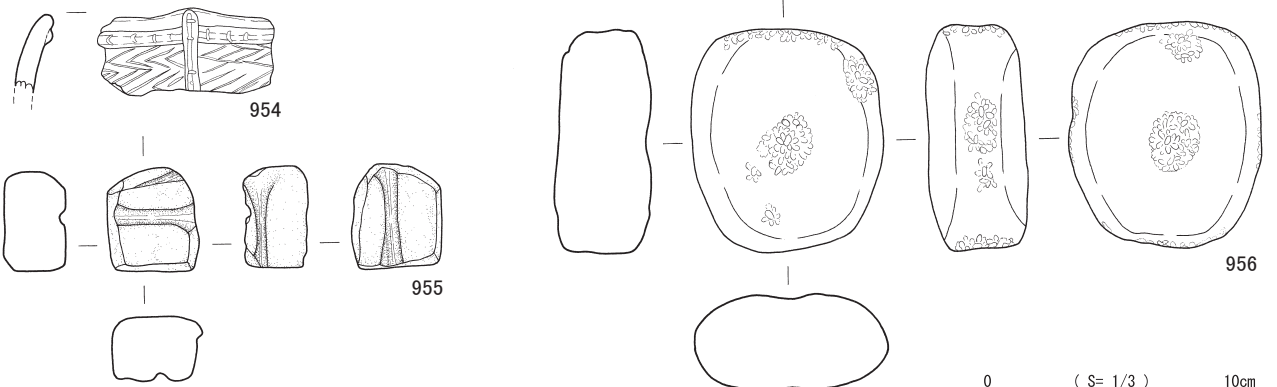
Ⅲ-g層



Ⅲ-j層



Ⅲ-k層



0 (S= 1/3) 10cm

第 258 図 Ⅲ層出土遺物(2)

IV層出土遺物 (第259図, 第163表)

IV-a 層出土遺物 (957~966)

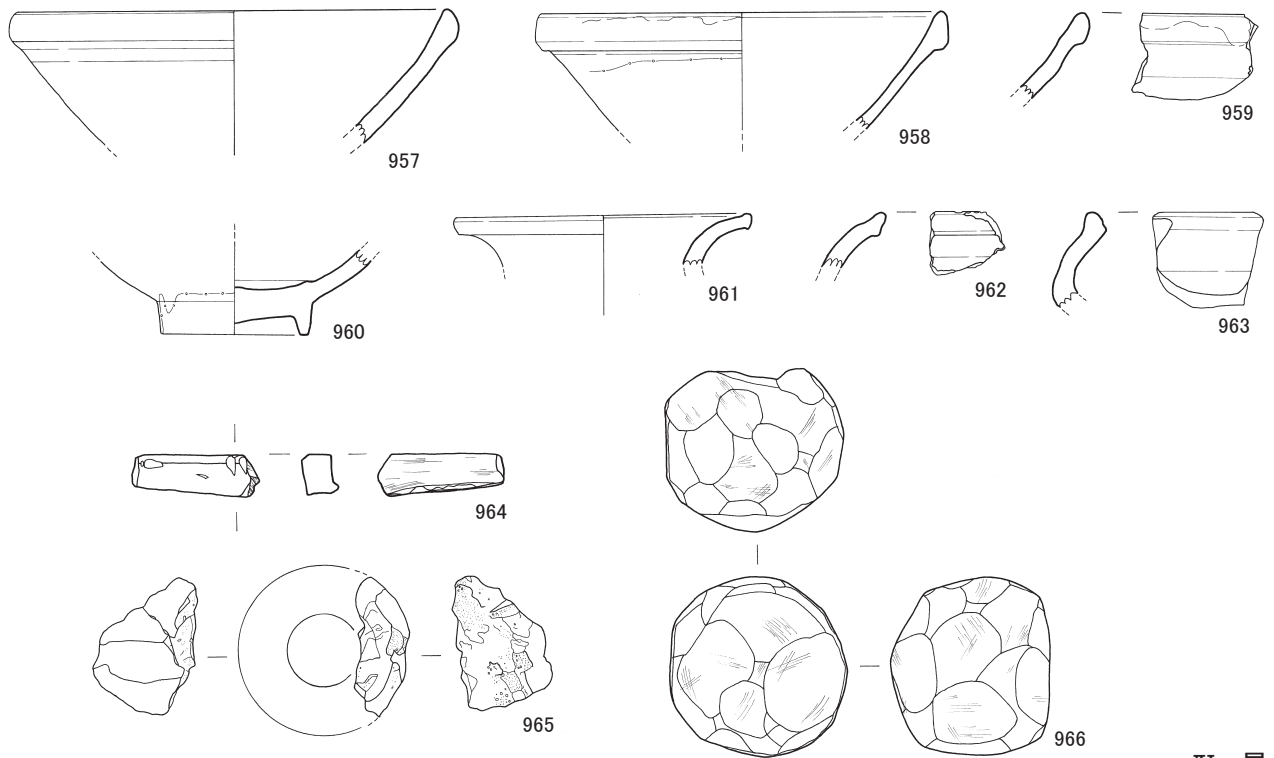
957~959は白磁碗IV類の口縁部である。958は胴部の大部分が露胎である。959は口縁部付近に釉だれが見られる。960は白磁碗V類の底部である。961~963はカムイヤキA群の口縁部である。964は滑石二次加工品である。滑石の口縁付近を切り取って加工している。965は鞆の羽口である。外面部は一部融解し、気泡が表面に見られる。

966は粗粒砂岩を石材とする石製品である。球形に加工されているが、用途は不明である。

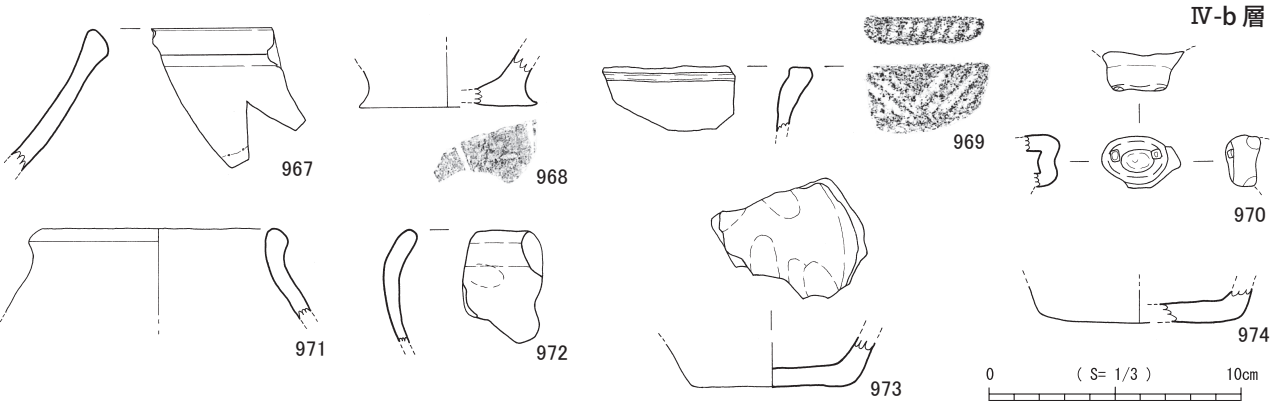
である。底部外面には木葉痕が残る。胎土は泥質である。969はII-b類土器である。口唇部に刻み目、外面に凹線で文様を施している。970はVIII類に分類した砂質土器である。円柱状の突起に未貫通の凹みを2点施し文様としている。突起の内部は中空である。口縁部などの装飾部と考えられる。971・972はVIII'類に分類した泥質土器の口縁部である。残存部に文様は見られない。971は口縁部をわずかに肥厚させている壺型の土器である。972の外面にはオサエによる調整が観察できる。973・974は泥質土器の平底底部である。973は内面にオサエによる調整が観察でき、底径が6.4cmに復元できる。974の底径は8.2cmに復元できる。

IV-b 層出土遺物 (967~974)

967は白磁碗IV類の口縁部である。968は兼久式土器底部



IV-a 層



IV-b 層

第259図 IV層出土遺物

VI層出土遺物 (第260~262図, 第163・164表)

VI-a 層出土遺物 (975~986)

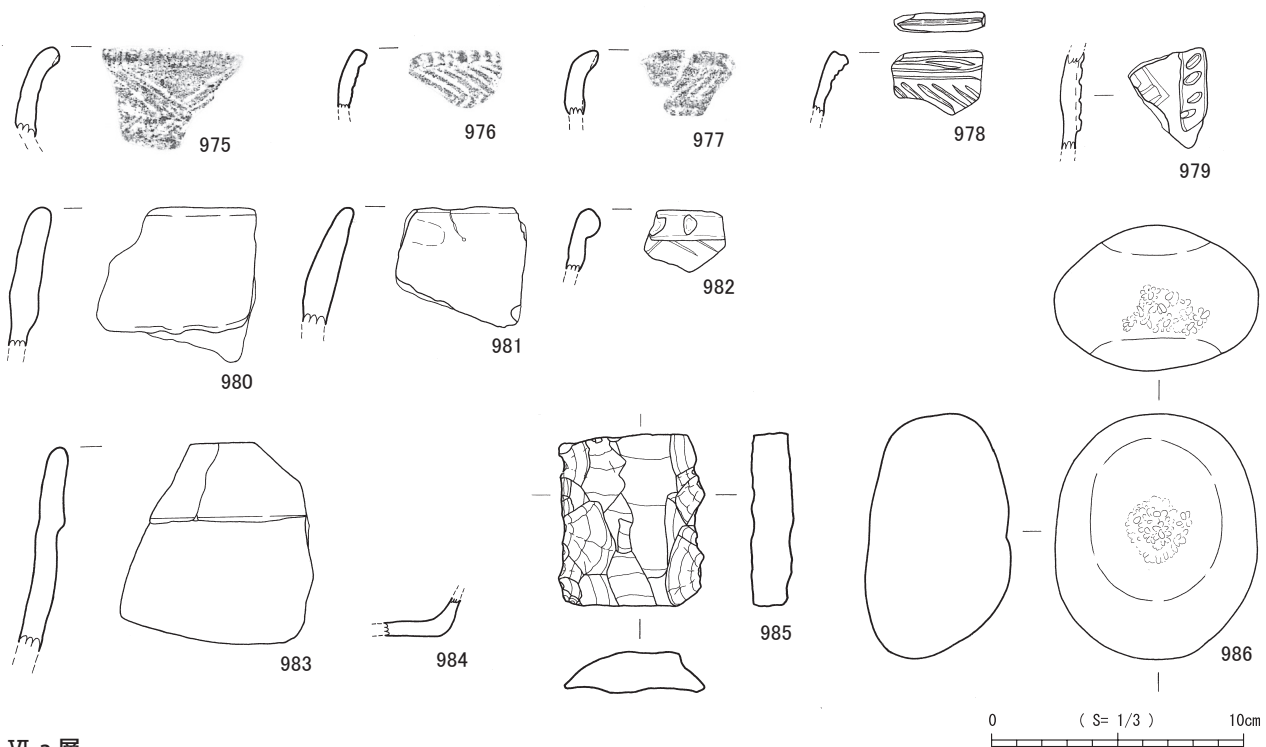
975~977はI類土器である。975は胎土に金色の雲母が混入する。978はII-b類土器である。口唇及び口縁外面には沈線による文様が施されている。胎土に金色の雲母が混入し、器壁は薄くしっかりとしている。979はV-b類土器の胴部である。縦位に刻み目貼付突帯があり、沈線による鋸歯状の文様がわずかにみられる。980はVII-a類土器である。981はVIII'類に分類した泥質土器口縁部である。器壁は厚く、また、残存部には文様は見られない。982はV-b'土器である。983はVII-a'類土器である。内面にオサエによる器面調整が見られる。984は泥質土器の平底底部である。

985は粗粒砂岩を石材とするスクレイパー状の石器である。両端を打製により加工し、刃部のような形状を持つ。986は粗粒砂岩を石材とする磨敲石である。

VI-b 層出土遺物 (987~1039)

987~993はI類土器である。987は縦位の耳が取り付けられていた痕跡が残る。988~992は胎土に金色の雲母が混入する。993は口唇を肥厚させ、口縁部断面形状としてはII類に近い形を呈する。口唇は波状にし、口縁外側に1条の細い突帯を貼り付けその下部に沈線によって文様を施している。I類に分類したが、他のI類より器壁は厚い。994・995はII-b類土器である。994は口唇部に細かな刻み目を施し、内面に口唇に沿った1条の凹線、外面に凹線による文様を施してい

る。波状口縁である。985は太い刻み目と外面に細沈線による文様が施されている。996はIV-d類土器である。胎土に金色の雲母が混入する。997はIV-e類土器である。波状口縁で、器壁は厚い。998・999はV-a'類土器である。口縁下部に横位に刻み目突帯を施している。1000はV-b類土器である。口縁に沿って1条の刻み目貼付突帯を施し、その下部に鋸歯状の文様を細沈線で施している。1001~1011はV-b'類土器である。刻み目や連点を施した突帯を横・縦位に貼り付け、沈線文による文様を施している。1008~1010は波状口縁である。1012はVI-a'類土器である。肥厚させた口縁部下部に細い貼り付け突帯を1条横位に施し、細沈線文による文様施されている。1013はVIII類に分類した砂質土器である。口縁の断面形状は舌状で、外面に細沈線文を組み合わせる籠目のような文様を施している。1014~1018はVIII'類に分類した泥質土器である。1014は口縁をわずかに肥厚させた壺型土器と考えられる。残存部に文様は見られない。1015は口唇に沿って張り付けた突帯の痕がかすかに見られる壺型の土器である。外面にはオサエによる器面調整が観察できる。V-a'類に近いが口唇部が舌状であることから今回はVIII'類に分類した。1016・1017は残存部には文様は見られない土器で、1016は口唇部が少し内側に飛び出した形状を持つ。1017は横位の取っ手が張り付けられている。1018は口縁部を断面形状が方形に近い形に肥厚させ、方形の工具で施文している。内面にはナデとケズリ、外面にはオサエとナデによる調整が観察できる。1019は



VI-a 層

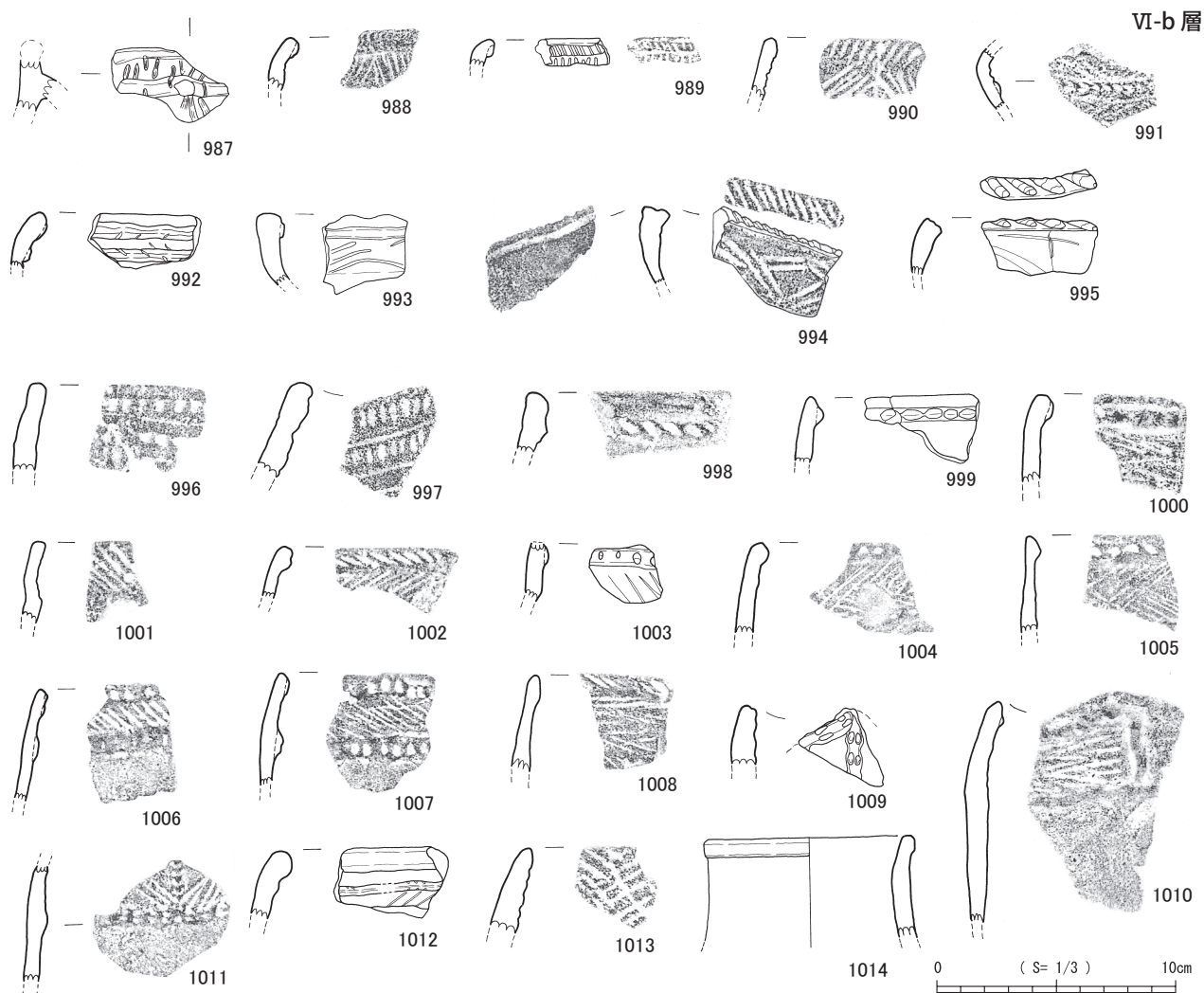
第260図 VI層出土遺物(1)

砂質土器の装飾部と考えられる部分である。粘土をアーチ状にし、連点を施した薄い粘土を中央部に縦位に貼り付けている。1020は砂質土器の耳の部分と考えられる。沈線による文様が施されている。

1021～1024は砂質土器底部である。1021・1022は平底で1023・1024が尖底である。1025～1031は泥質土器底部である。1025～1030は平底である。1027の底径は7.4cm, 1028が7.6cm, 1029が5.8cmに復元できる。1031は尖底である。

1032は中粒砂岩を石材とする有溝砥石である。使用面は3面あり、合計3条の溝がある。1033は斑岩系の石を石材とする石皿である。図面中央部から右側にかけて帯状の敲打痕が見られる。1034は中粒砂岩を石材とする砥石である。1035は緑色岩を石材とする石斧の刃部である。刃部には剥離が見られる。1036は粗粒砂岩を石材とする磨敲石である。1037は斑状玄武岩を石材とする棒状の石製品である。表面には細か

な敲打痕や擦痕が観察される。片側は欠損しており全体形状や用途は不明である。1038はチャートを石材とする石核である。1039は泥岩を石材とした石製品である。平面形状は逆三角形を呈し、厚さは1.1cmである。上部には貫通した穴が1つ穿たれているが、穴の半分より上は欠損している。紐ずれ等は確認できないが、形状から装飾品の可能性がある。



第 261 図 VI層出土遺物(2)



IV-b層

第 262 圖 VI層出土遺物(3)

Ⅶ層出土遺物 (第 263～266 図, 第 164・165 表)

Ⅶ-a 層出土遺物 (1040～1107)

1040～1045 は I 類土器である。いずれも幅の細い突帯とその下部に細沈線による文様が施されている。突帯の施文は、1042・1043 は叉状工具による細かな連点、その他のものは細かな沈線文を施している。1041・1043・1045 は胎土に金色の雲母が混入する。1046～1048 は II-a 類土器である。口唇部に施されている刻み目は幅広く、波を打ったような形状となっている。1048 の外面には貝殻条痕が残る。1049 は II-b 類土器である。内面には口縁に沿って 1 条の凹線文が施され、外面にも凹線による施文が施されている。胎土には金色の雲母が混入し、器壁は薄くしっかりしている。1050 は II-c 類土器である。波状口縁を持つ土器の装飾部と考えられる。波状口縁の突帯部を肥厚させ、帯状の粘土を縦位や横位に貼り付け押し文を施している。1051～1053 は IV-d 類土器である。1052・1053 の胎土には金色の雲母が混入する。1054～1056 は V-b 類土器である。1054 は口縁に沿って貼付突帯を施し、その下部に細沈線による施文が見られる。1055・1056 は貼付突帯を縦位と横位に施し、刻み目に近い連点や沈線により文様を施している。1057～1062 は V-a' 類土器である。いずれも口縁直下に 1 条の貼付突帯が施されている。1058～1060 は突帯に連点が施されている。1061 はやや幅の広い突帯に叉状の連点が施されている。1062 の突帯は幅細で施文はされていない。1063～1077 は V-b' 類土器である。1063・1064 は波状口縁を持つ。他の V-b' に比べ突帯は幅が狭く器壁は薄い。1078 は細沈線による鋸歯状の文様を持つ砂質土器である。1079・1080 はⅧ類に分類した砂質土器である。1079 は口縁付近が「く」の字に外反し内面、外面、口唇部に沈線による文様が施されている。器壁は厚い。口唇部の形状や文様構成は IV-c 類とも考えられるが、外反する器形や器壁の厚さ、内面の施文などからⅧ類に分類した。1080 は口唇部に大きめの連点が施され、外面には沈線文が施されている。口縁の断面形状は丸形に近く沈線文も規則性がないことから IV-c 類とは区別し、Ⅷ類とした。1081～1083 はⅧ' 類に分類した泥質土器である。1081 は口唇部を断面三角形に肥厚させ、Ⅱ類的な形状を示すが、文様は見られない壺型の土器である。1082・1083 は口縁部を断面形状が方形に近い形に肥厚させ、方形の工具で施文している。1082 は壺と考えられ、横に取り付けられた耳の痕跡がのこる。1084～1092 は泥質土器の平底底部である。1089 の底径は 8.8cm, 1090 は 6.8cm, 1091 は 6.3cm, 1092 は 9.0cm である。1093・1094 は砂質土器の尖底底部である。

1095～1097 は貫通した穴を持つ石製品である。いずれの穴も明瞭な加工痕は見られず、自然の穴を利用したものか、加工したものなのかの判断ができなかった。外面には擦痕が見られる。1095 は球形に近い形を呈し、中央部の穴の直径は約

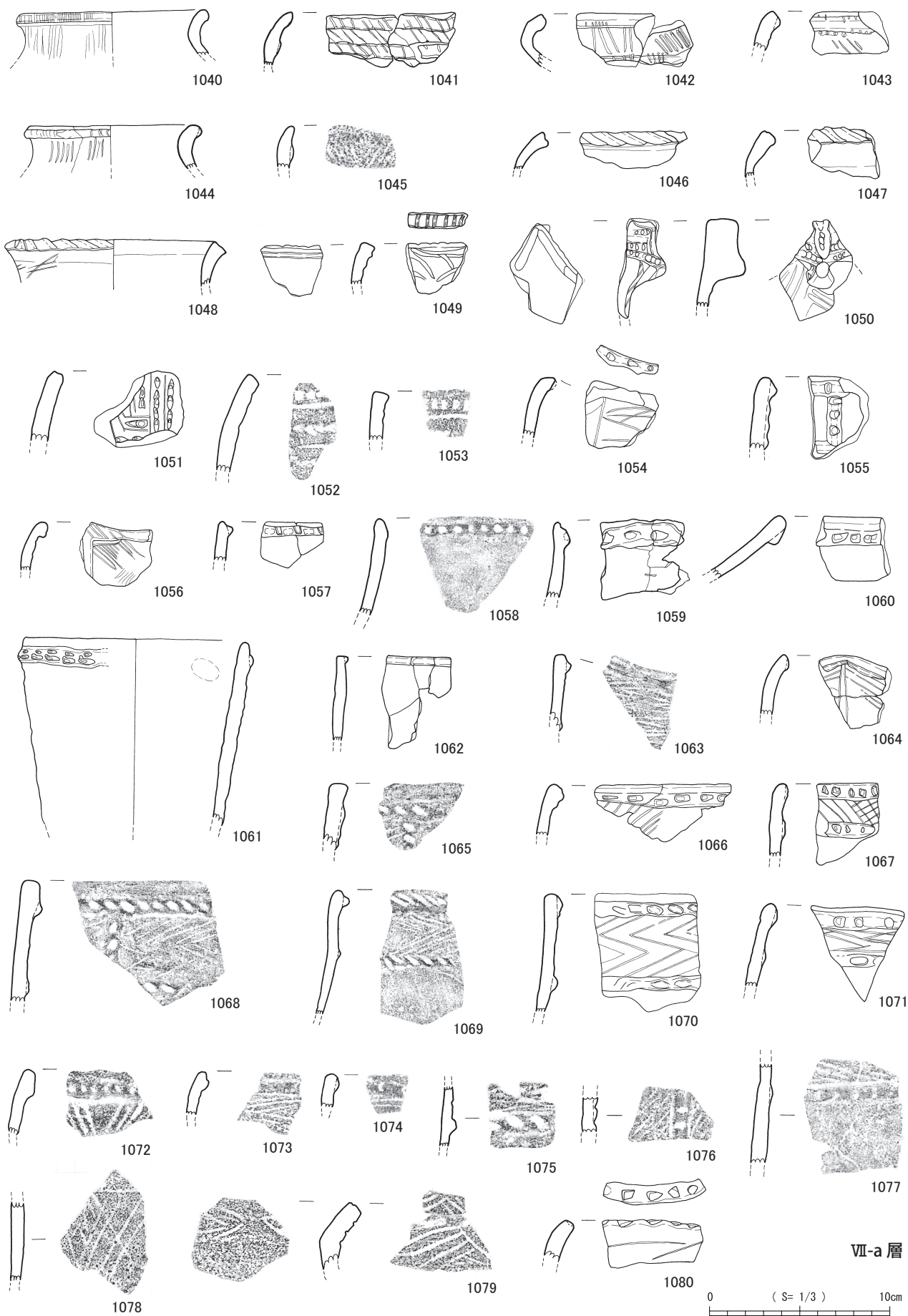
1.5cm である。製品の用途は不明である。1096 の石材はホルンフェルスで、全体的に丸みを帯びた形であるが不定形である。中央付近の穴は小さく直径 0.5cm である。1097 の石材は泥岩で、ひし形状呈し、中央付近の穴の直径は 1.0cm である。厚さは 1.1cm である。1096・1097 に紐ずれ等の痕跡は見られないが、形状から装飾品の可能性がある。1098 は泥岩を石材とする棒状の石製品である。片側の先端は細くなり、鉛筆のような形状をしている。1099 は中粒砂岩を石材とする有溝砥石である。使用面は 2 面あり、合計 2 条の溝がある。1100 は斑状玄武岩を石材とする磨製石斧である。刃部の一部には剥離が見られる。胴部及び側面には細かな敲打痕が観察され、敲打石として 2 次利用をされていた可能性がある。1101 は中粒砂岩を石材とした凹石である。1 か所にのみ凹みが見られるが、側面には敲打痕が観察できる。1102 は中粒砂岩を石材とした磨敲石である。両平坦部中央部には凹みが見られる。1103～1105 は台石である。1103・1104 の石材は中粒砂岩である。1105 の石材は粗粒砂岩で、中央部付近に盃状の凹みが 2 つある。1106・1107 は石皿である。石材は、1106 が粗粒砂岩で、1107 が中粒砂岩である。1107 は大部分が欠損しているが、側面にも皿状の凹みが観察できる。

Ⅶ-b 層出土遺物 (1108～1112)

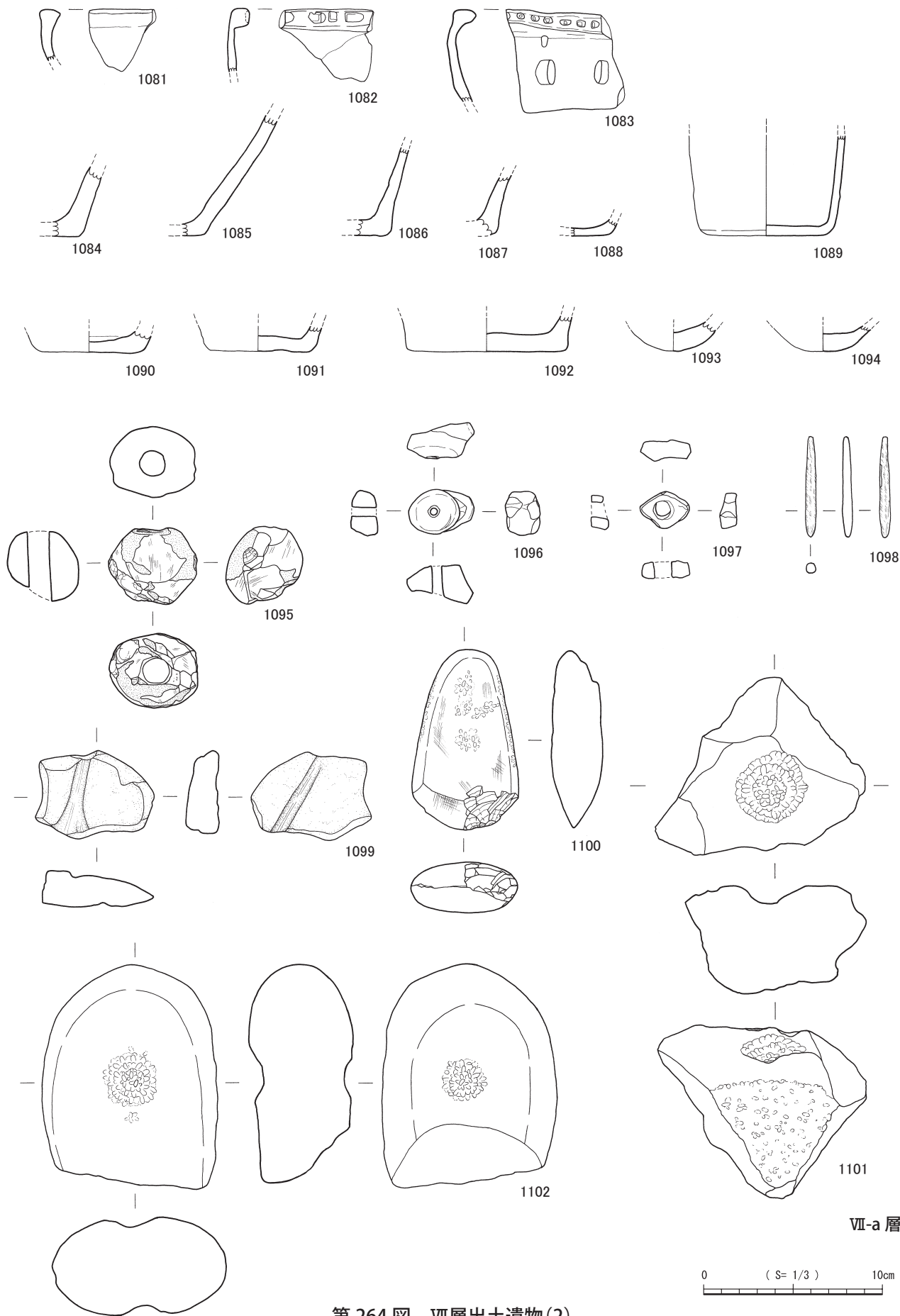
1108 は V-a' 類土器である。口唇に沿って、幅の細い突帯を張り付けている。1109～1110 は泥質土器の平底底部である。

1111 は頁岩製の磨製石鏃である。基部がわずかにかけているが、ほぼ完形である。二等辺三角形の形状を呈し、中央部に貫通した 2 つの穴があいている。厚さは 0.2cm である。

1112 は粗粒砂岩製の磨敲石である。



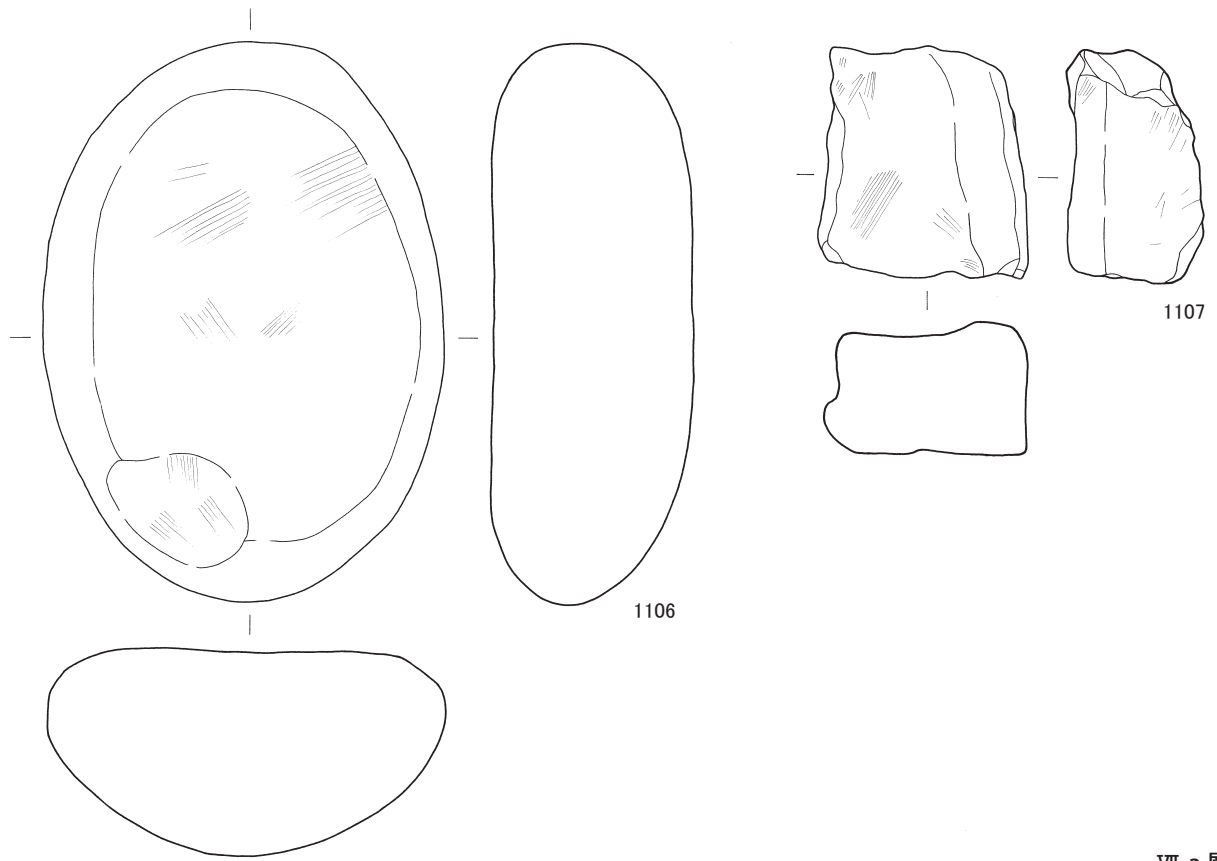
第 263 图 VII層出土遺物(1)



第 264 図 VII層出土遺物(2)

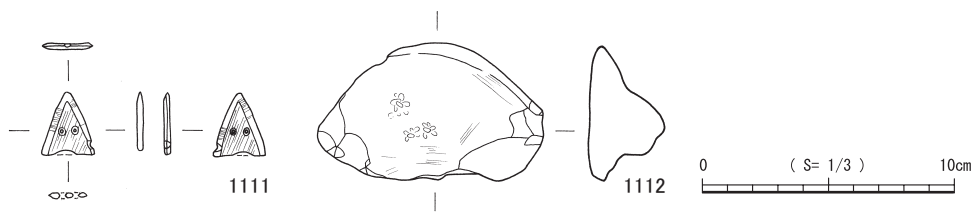
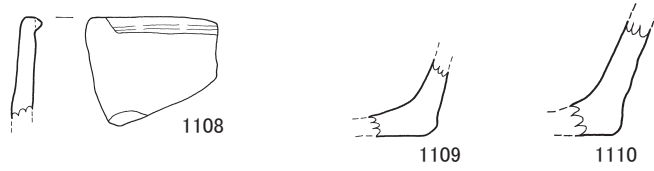


第 265 図 VII層出土遺物(3)



VII-a 層

VII-b 層



第 266 図 VII 層出土遺物 (4)

第160表 崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(1)

掲載番号	報告書遺構名	出土区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整		色調		重量(g)	備考	挿図No.
								口径(最大長)	底径(最大幅)	器高(最大厚)	(外)	(内)	(外)	(内)			
802	SB03(P12)	V-26	-	石器	台石	粗粒砂岩	-	(11.9)	(14.0)	(8.3)	-	-	-	-	2340	P1010	第228図
803	SB06(P15)	Q-19	-	滑石製品	石鍋	滑石	胴	(3.5)	(5.3)	(2.2)	-	-	-	-	61	P0614	第229図
804	SB07(P04)	P-18	-	兼久式土器	-	砂質	底部	-	7.0	-	ナデ・オサエ	ナデ	-	-	-	P0664	第230図
805	SB10(P04)	Q-17	-	滑石二次加工品	-	滑石	-	(2.3)	(1.6)	(1.3)	-	-	-	-	8	P0106	第231図
806	SB13(P01)	P-18	-	石器	磨砕石	花崗岩	-	(13.0)	(9.7)	(6.0)	-	-	-	-	1232	P0620	第232図
807	SB18(P10)	O-16	-	布目庄痕土器	-	砂質	胴	-	-	-	-	-	-	-	-	P0732	第233図
808	SB19(P05)	Q-15	-	白磁	皿	皿類	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	P0213	第234図
809	SB19(P04)	O-15	-	石製品	不明	閃緑岩	-	(8.9)	(7.9)	(4.8)	-	-	-	-	346	P0598	
810	SB19(P04)	O-15	-	石器	台石	中粒砂岩	-	(21.3)	(13.6)	(7.5)	-	-	-	-	3570	P0598	
811	SB21(P11)	N-15	-	カムイヤキ	壺?	A群	肩	-	-	-	-	-	灰オリーブ	灰オリーブ	-	P0530	第235図
812	SB21(P20)	Q-15	-	鞆の羽口	-	-	-	3.7	-	-	-	-	-	-	-	P0527	
813	SB21(P17)	O-15	-	鉄製品	刀子?	-	-	(0.8)	(3.6)	(0.3)	-	-	-	-	3	P0513	
814	SB21(P28)	N-15	-	滑石製品	石鍋	滑石	-	(5.4)	(7.0)	(0.9)	-	-	-	-	69	P0021	
815	SB21(P27)	N-15	-	石器	石皿	粗粒砂岩	-	(16.3)	(12.5)	(6.0)	-	-	-	-	1192	P0029	第236図
816	SB22(P05)	N-15	-	石器	磨砕石	粗粒砂岩	-	(7.4)	(7.2)	(3.7)	-	-	-	-	322	P0727	
817	SB22(P03)	N-15	-	滑石二次加工品	-	滑石	-	(3.3)	(8.0)	(2.6)	-	-	-	-	123	P0018	
818	SB25(P04)	P-15	-	滑石製品	石鍋	滑石	胴	(3.2)	(9.6)	(1.1)	-	-	-	-	88	P0443	第237図
819	SB26(P01)	P-15	-	滑石二次加工品	バレン状	滑石	-	(4.4)	(2.1)	(2.0)	-	-	-	-	16	P0556	第238図
820	SB27(P04)	O-15	-	滑石製品	石鍋	滑石	胴	(5.2)	(6.4)	(2.0)	-	-	-	-	61	P0545	第239図
821	SB28(P02)	O-15	-	白磁	皿	-	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	P0445	第240図
822	SB28(P02)	O-15	-	カムイヤキ	甕・壺	A群	胴	-	-	-	タタキ・平行	タタキ・平行	オリーブ	オリーブ	-	P0445	
823	SB38(P03)	K-3	-	白磁	椀	V類	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	P0496	第241図
824	SB38(P01)	K-3	-	白磁	椀	V類	底	-	7.3	-	-	-	灰白	灰白	-	P0492	
825	SB38(P01)	K-3	-	カムイヤキ	-	A群	胴	-	-	-	平行	平行	にぶい黄	にぶい黄	-	P0492	
826	SB38(P04)	K-3	-	カムイヤキ	壺?	-	底	-	13.2	-	-	-	にぶい黄	にぶい黄	-	P0498	
827	SB38(P04)	K-3	-	土師器	甕	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	P0498	
828	SB38(P04)	K-3	-	砂質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-	-	P0498	
829	SB38(P03)	K-3	-	滑石製品	石鍋	滑石	胴	(3.2)	(8.6)	(2.1)	-	-	-	-	71	P0496	
830	SB38(P01)	K-3	-	石器	有溝砥石	中粒砂岩	-	(3.0)	(3.3)	(3.3)	-	-	-	-	29	3面に計8条の溝。P0492	第242図
831	SB39(P12)	K-3	-	カムイヤキ	壺?	A群	口縁	7.0	-	-	-	-	灰	灰	-	P0578	
832	SB39(P13)	K-3	-	砂質土器	深鉢	IV-b類	胴	-	-	-	-	-	-	-	-	P0576	
833	SB39(P04)	J-3	-	滑石製品	石鍋	滑石	-	(8.7)	(11.0)	(1.7)	-	-	-	-	247	P0148	
834	SB39(P12)	K-3	-	石器	磨砕石	中粒砂岩	-	(17.8)	(12.8)	(6.7)	-	-	-	-	2375	P0578	第243図
835	SB40(P17)	J-2	-	鞆の羽口	-	-	-	4.0	1.6	-	-	-	-	-	-	P0156	
836	SB40(P20)	K-3	-	滑石二次加工品	-	-	-	(2.3)	(2.5)	(1.5)	-	-	-	-	12	P0427	
837	SB40(P20)	K-3	-	滑石二次加工品	-	-	-	(3.5)	(2.2)	(1.9)	-	-	-	-	28	P0427	第244図
838	土坑墓1号	O-15	I	カムイヤキ	壺?	A群	胴・底	-	9.6	-	ナデ	ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	-	カムイヤキa	
839	土坑墓1号	O-15	I	カムイヤキ	壺?	A群	-	-	16.0	-	平行	平行・格目	オリーブ灰	オリーブ灰	-	カムイヤキb	
840	土坑墓2号	O-15	I	砂質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
841	土坑墓2号	O-15	I	滑石混入土器	鍋?	-	胴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
842	土坑墓2号	O-15	I	滑石製品	石鍋	滑石	口縁	(1.2)	(3.2)	(2.6)	-	-	-	-	20	補修孔1点	

第161表 崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(2)

掲載 番号	報告書 遺構名	出土 区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整		色調		重量 (g)	備考	挿図No.
								口径 (最大長)	底径 (最大幅)	器高 (最大厚)	(外)	(内)	(外)	(内)			
843	土坑墓 2号	O-15	I	カムイヤキ	壺?	A群	完形	(11.0)	(9.0)	(16.0)	タタキ ナデ	ナデ 格目	青灰	青灰	-		第245図
844	土坑墓 2号	O-15	I	鉄製品	刀子	-	-	(2.0)	(9.5)	(0.5)	-	-	-	-	14		
845	土坑墓 2号	O-15	I	貝	-	タカラガイ	-	(9.6)	(4.9)	(2.2)	-	-	-	-	27		
846	SK18	Q-18	-	滑石製品	石鍋	滑石	胴	(5.3)	(5.7)	(1.5)	-	-	-	-	61		第246図
847	SK18	Q-18	-	滑石製品	石鍋	滑石	口縁	(2.0)	(9.1)	(1.6)	-	-	-	-	107		
848	SK18	Q-18	-	滑石二次加工品	-	-	-	(4.1)	(5.0)	(2.2)	-	-	-	-	84		
849	SK20	P-18	-	カムイヤキ	壺	A群	肩	-	-	-	-	-	緑灰	緑灰	-		第247図
850	SK20	P-18	-	滑石製品	石鍋	滑石	底	(2.8)	(6.7)	(1.5)	-	-	-	-	182		
851	SK20	P-18	-	滑石二次加工品	-	滑石	-	(1.8)	(2.0)	(0.8)	-	-	-	-	4		
852	SK20	P-18	-	滑石二次加工品	-	滑石	-	(7.4)	(4.0)	(1.1)	-	-	-	-	67	パレン状未成品	
853	SK20	P-18	-	滑石混入土器	石鍋模倣	-	口唇	-	-	-	-	-	-	-	-		
854	SK20	P-18	-	石器	敲石	粗粒砂岩	-	(3.3)	(7.8)	(6.0)	-	-	-	-	194		
855	SK25	Q-19	-	石器	石皿	粗粒砂岩	-	(21.0)	(12.3)	(12.5)	-	-	-	-	3790		第248図
856	石列1	V-29	石列内	龍泉窯系青磁	椀	IV類	口縁	17.6	-	-	-	-	明オリ ブ灰	明オリ ブ灰	-		第249図
857	石列1	V-29	石列内	龍泉窯系青磁	椀	V類	底	-	7.2	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-		
858	焼土跡01	K-3	I	石器	敲石	粗粒砂岩	-	(9.1)	(7.4)	(3.5)	-	-	-	-	274		第250図
859	焼土跡01	K-3	I	石器	石皿?	中粒砂岩	-	(8.5)	(6.6)	(2.7)	-	-	-	-	207		
860	焼土跡01	K-3	検出面	石器	磨敲石	中粒砂岩	-	(9.5)	(6.8)	(4.0)	-	-	-	-	359		
861	焼土跡01	K-3	検出面	石器	敲石	粗粒砂岩	-	11.5	10.0	4.2	-	-	-	-	499		
862	SD17	P-7	-	滑石二次加工品	パレン状	滑石	-	(8.7)	(5.0)	(1.8)	-	-	-	-	74		第251図
863	SD17	P-7	-	炉壁	-	-	下部	(4.4)	(8.2)	(3.5)	-	-	-	-	62		
864	SD17	P-7	-	炉壁	-	-	下部	(4.7)	(5.9)	(6.4)	-	-	-	-	70		
865	SD17	P-7	-	炉壁	-	-	-	(3.8)	(2.7)	(1.8)	-	-	-	-	10		
866	SD17	P-7	VI	鉄塊	-	-	-	(3.8)	(2.0)	(1.5)	-	-	-	-	20		
867	SD17	P-7	VI	鉄塊	-	-	-	(1.9)	(1.5)	(0.8)	-	-	-	-	4		
868	SD17	P-7	VI	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(8.3)	(3.0)	(1.6)	-	-	-	-	55		
869	SD17	P-7	-	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(9.2)	(5.4)	(2.0)	-	-	-	-	126		
870	SD17	P-7	VI	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(4.2)	(5.0)	(1.9)	-	-	-	-	41		
871	SD17	P-7	-	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(9.7)	(4.2)	(1.6)	-	-	-	-	46		
872	SD17	P-7	-	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(5.7)	(4.0)	(2.3)	-	-	-	-	65		
873	SD17	P-7	VII	鉄滓	炉外流出滓	-	口縁	(6.0)	(3.6)	(2.4)	-	-	-	-	45		
874	SD17	P-7	-	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(8.0)	(7.1)	(1.8)	-	-	-	-	80		
875	SD17	P-7	-	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(6.0)	(6.8)	(2.0)	-	-	-	-	64		
876	SD17	P-7	VI	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(6.6)	(4.1)	(2.0)	-	-	-	-	48		
877	SD17	P-7	VI	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(5.4)	(3.7)	(1.8)	-	-	-	-	47		
878	SD17	P-7	VI	鉄滓	炉外流出滓	-	-	(5.2)	(4.5)	(2.0)	-	-	-	-	86		
879	SD17	P-7	-	鉄滓	炉内残留滓	-	-	(12.7)	(8.5)	(3.6)	-	-	-	-	300		
880	SD17	P-7	VII	鉄滓	炉内残留滓	-	-	(3.4)	(4.0)	(2.4)	-	-	-	-	51		
881	一括	R-15	II	鉄滓	炉内残留滓	-	-	(3.7)	(4.7)	(1.7)	-	-	-	-	40		
882	P0964	V-27	一括	龍泉窯系青磁	椀	IV類	口縁	15.6	-	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-		第253図
883	P0952	V-27	一括	龍泉窯系青磁	椀	IV'類	底	-	-	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-		
884	P0085	P-18	一括	龍泉窯系青磁	椀	IV類	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	二次被熱	
885	P1130	U-24	一括	龍泉窯系青磁	椀	II類	底	-	5.6	-	無鑄連 弁	-	オリ ブ褐	オリ ブ褐	-		
886	P1100	V-27	一括	龍泉窯系青磁	椀	IV類	底	-	-	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-		
887	P1056	T-24	一括	白磁	椀	IV類	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-		
888	SB06 (P3)	Q-19	一括	白磁	椀	IV類	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-	P0277	第229図
889	P0393	K-12	一括	白磁	椀	V類	胴	-	-	-	-	-	-	-	-		第253図
890	P0587	Q-18	一括	白磁	椀	IV-I a類	底	-	(7.4)	-	-	-	灰白	灰白	-		
891	P0067	K-12	一括	白磁	椀	V類	底	-	7.6	-	-	-	灰白	灰白	-		
892	P0102	P-18	一括	カムイヤキ	壺?	A群	口縁	-	-	-	-	-	暗青灰	暗青灰	-		
893	P0740	K-6	一括	カムイヤキ	壺?	A群	胴	-	-	-	-	-	青灰	青灰	-		
894	P0410	O-15	一括	カムイヤキ	壺?	A群	胴	-	-	-	綾杉	平行	暗赤	暗褐	-		

第162表 崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(3)

掲載 番号	報告書 遺構名	出土 区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整		色調		重量 (g)	備考	挿図No.
								口径 (最大長)	底径 (最大幅)	器高 (最大厚)	(外)	(内)	(外)	(内)			
895	P0566	J-4	一括	カムイヤキ	壺?	A群	胴	-	-	-	平行・ 扇状	平行	にぶい 赤褐	暗青灰	-		
896	P0347	P-19	一括	滑石混入土器	-	-	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	石鍋模倣?	
897	P0080	P-17	一括	滑石混入土器	鍋	-	胴	-	-	-	-	-	褐灰	褐灰	-	石鍋模倣	
898	P0331	Q-19	一括	滑石製品	石鍋	滑石	口縁	-	-	-	-	-	-	-	20	補修孔1点	
899	P0068	L-12	一括	滑石製品	石鍋	滑石	-	(4.0)	(8.0)	(3.0)	-	-	-	-	99		
900	P0617	Q-19	一括	滑石製品	石鍋	滑石	胴	(3.2)	(8.2)	(2.2)	-	-	-	-	64		
901	P0744	K-5	一括	滑石製品	石鍋	滑石	底	(12.8)	(12.1)	(1.8)	-	-	-	-	154		
902	P0289	Q-19	一括	滑石製品	石鍋	滑石	底	(3.0)	(7.0)	(1.1)	-	-	-	-	34	底部補修孔1点	
903	P0705	Q-18	一括	滑石二次加工品	-	滑石	-	(1.9)	(1.2)	(1.2)	-	-	-	-	2		
904	P0340	Q-19	一括	滑石二次加工品	-	滑石	-	(3.0)	(2.7)	(1.1)	-	-	-	-	13		
905	SB22 (P13)	N-15	一括	鞆の羽口	-	-	-	7.0	3.0	-	-	-	-	-	-	P0642	第236図
906	P0657	P-13	一括	鞆の羽口	-	-	-	-	12	-	-	-	-	-	-		
907	P0331	Q-19	一括	鉄製品	釘?	-	-	(6.0)	(1.0)	(0.7)	-	-	-	-	7		
908	P0331	Q-19	一括	鉄製品	-	-	-	(2.7)	(2.7)	(0.5)	-	-	-	-	3	釘?かすがい?	第254図
909	P1056	T-24	一括	鉄製品	鎌状	-	-	(2.4)	(9.6)	(0.4)	-	-	-	-	15		
910	P0938	U-27	一括	銅製品	金具?	-	-	(2.5)	(2.0)	(0.1)	-	-	-	-	6		
911	P0476	L-12	一括	石器	石斧	緑色岩	-	(15.1)	(8.0)	(4.0)	-	-	-	-	677		
912	P0529	Q-13	一括	石器	磨製石斧	緑色片岩	-	(9.2)	(5.4)	(3.5)	-	-	-	-	210	刃部欠損。	
913	P0352	Q-18	一括	石器	石皿	中粒砂岩	-	(19.3)	(12.1)	(6.4)	-	-	-	-	2120		
914	P0174	J-2	一括	石器	磨敲石	-	-	(9.9)	(6.0)	(4.3)	-	-	-	-	363	3面に敲打痕	第255図
915	P0654	-	一括	石器	石皿	中粒砂岩	-	(7.4)	(9.5)	(3.5)	-	-	-	-	261		
916	P1098	V-27	一括	石器	石皿	中粒砂岩	-	(15.8)	(10.2)	(2.9)	-	-	-	-	584		
917	P0436	K-5	一括	石器	砥石	中粒砂岩	-	(1.6)	(7.0)	(2.4)	-	-	-	-	362		
918	P0911	U-28	一括	石器	有溝砥石	軽石	-	(10.4)	(11.0)	(7.2)	-	-	-	-	88	1面に計5条の溝	
919	P0901	U-28	一括	石器	有溝砥石	軽石	-	(5.9)	(7.8)	(8.0)	-	-	-	-	70	1条の溝	第256図
920	P0980	V-28	一括	貝製品	未製品	ヤコウガイ	-	(7.7)	(5.0)	(0.4)	-	-	-	-	33		
921	一括	L-13	Ⅲ-a	龍泉窯系青磁	椀	V類	口縁	-	-	-	草花 文	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-		
922	一括	V-26	Ⅲ-a	龍泉窯系青磁	椀	Ⅲ類	底	-	-	-	鎚蓮 弁	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-		
923	一括	U-30	Ⅲ-a	白磁	椀	Ⅳ類	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-		
924	一括	K-11	Ⅲ-a	カムイヤキ	椀	A群	口縁	-	-	-	-	-	青灰	青灰	-		
925	一括	V-26	Ⅲ-a	カムイヤキ	壺?	B群	肩	-	-	-	ナデ	平行	青灰	青灰	-		
926	一括	R-14	Ⅲ-a	鉄製品	鉄片	-	-	(2.1)	(3.4)	(0.5)	-	-	-	-	9		
927	一括	M-3	Ⅲ-a	ガラス玉	-	-	-	(2.1)	(2.1)	(2.5)	-	-	-	-	-		
928	一括	K-4	Ⅲ-a	石製品	棒状石製品	細粒砂岩	-	(5.1)	(1.1)	(1.1)	-	-	-	-	3		
929	一括	-	Ⅲ-a	貝製品	螺蓋製敲打具	ヤコウガイ	蓋	(4.6)	(8.5)	(2.3)	-	-	-	-	187		第257図
930	一括	V-29	Ⅲ-c	青磁	椀	Ⅳ類	口縁	-	-	-	無鎚蓮 弁文	-	緑灰	緑灰	-	蓮江窯?	
931	一括	V-29	Ⅲ-c	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ類	口縁	-	-	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-		
932	一括	V-29	Ⅲ-c	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ'類	口縁	-	-	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-		
933	一括	V-29	Ⅲ-c	龍泉窯系青磁	皿	Ⅳ類	口縁	-	-	-	無鎚蓮 弁	-	灰白	灰白	-		
934	一括	V-29	Ⅲ-c	龍泉窯系青磁	盤	V類	口縁	-	-	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-		
935	一括	V-29	Ⅲ-c	褐釉陶器	壺	-	口縁	-	-	-	-	-	黄褐	黄褐	-		
936	一括	V-29	Ⅲ-c	鉄製品	-	-	-	(3.3)	(2.6)	(0.4)	-	-	-	-	11	板状	
937	一括	U-27	Ⅲ-d	龍泉窯系青磁	椀	Ⅱ類	口縁	-	-	-	鎚蓮 弁	-	-	-	-		
938	一括	V-29	Ⅲ-d	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ類	口縁	-	-	-	-	-	緑灰	緑灰	-		
939	一括	V-29	Ⅲ-d	白磁	椀	ビロースク	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-		
940	一括	V-29	Ⅲ-d	褐釉陶器	壺?	-	底	-	-	-	-	ナデ	暗オ リーブ	-	-		
941	一括	V-28	Ⅲ-c・d	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ類	口縁	16.7	-	-	-	-	明オ リーブ	明オ リーブ	-	二次被熱	
942	一括	V-28	Ⅲ-c・d	龍泉窯系青磁	-	Ⅳ類	口縁	-	-	-	-	-	明オ リーブ	明オ リーブ	-		第258図
943	一括	V-28	Ⅲ-c・d	白磁	椀	ビロースクⅢ	胴	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-		
944	一括	V-26	Ⅲ-g	白磁	小皿	-	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-		
945	一括	V-26	Ⅲ-g	白磁	椀	ビロースクⅢ	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-		
946	一括	V-29	Ⅲ-j	龍泉窯系青磁	椀	Ⅳ類	口縁	-	-	-	-	-	明オ リーブ	明オ リーブ	-	二次被熱	

第163表 崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(4)

掲載 番号	報告書 遺構名	出土 区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整		色調		重量 (g)	備考	挿図No.										
								口径 (最大長)	底径 (最大幅)	器高 (最大厚)	(外)	(内)	(外)	(内)													
947	一括	V-28	III-j	龍泉窯系青磁	椀	IV類	口縁	-	-	-	-	-	オリ ブ黄	オリ ブ黄	-		第258図										
948	一括	V-29	III-j	龍泉窯系青磁	椀	V類	底	-	6.0	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-			第258図									
949	一括	V-27	III-j	白磁	椀・皿	-	口縁	-	-	-	-	-	淡黄	淡黄	-				第258図								
950	一括	M-12	III-k	龍泉窯系青磁	椀	IV'類	口縁	-	-	-	-	-	灰オ リーブ	灰オ リーブ	-					第258図							
951	一括	N-11	III-k	龍泉窯系青磁	椀	V類	底	-	8.2	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-						第258図						
952	一括	L-12	III-k	龍泉窯系青磁	盤	V類	口縁	-	-	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-							第258図					
953	一括	M-12	III-k	カムイヤキ	壺?	A群	口縁	-	-	-	-	-	青灰	青灰	-								第258図				
954	一括	-	III-k	泥質土器	深鉢	V-b'	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-									第258図			
955	一括	K-12	III-k	石器	有溝砥石	中粒砂岩	-	(4.1)	(3.5)	(2.5)	-	-	-	-	-	58									4面に計5条の溝	第258図	
956	一括	N-12	III-k	石器	磨砕石	粗粒砂岩	-	(8.8)	(7.7)	(3.8)	-	-	-	-	-	-											第258図
957	一括	M-12	IV-a	白磁	椀	IV類	口縁	17.7	-	-	-	-	淡黄	淡黄	-		第259図										
958	一括	P-14	IV-a	白磁	椀	IV類	口縁	-	-	-	-	-	浅黄	浅黄	-			第259図									
959	一括	N-13	IV-a	白磁	椀	IV類	口縁	-	-	-	-	-	淡黄	淡黄	-				第259図								
960	一括	N-13	IV-a	白磁	椀	V類	底	-	-	-	-	-	-	-	-					第259図							
961	一括	N-13	IV-a	カムイヤキ	壺?	A群	口縁	11.8	-	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-						第259図						
962	一括	M-12	IV-a	カムイヤキ	壺?	A群	口縁	-	-	-	-	-	暗青灰	暗青灰	-							第259図					
963	一括	M-13	IV-a	カムイヤキ	壺?	A群	口縁	-	-	-	-	-	オリ ブ灰	オリ ブ灰	-								第259図				
964	一括	O-15	IV-a	滑石二次加工品	-	-	-	(1.2)	(1.5)	(1.2)	-	-	-	-	-	19									第259図		
965	一括	O-15	IV-a	鞆の羽口	-	-	-	6.4	-	-	-	-	-	-	-	-										第259図	
966	一括	N-15	IV-a	石器	不明	粗粒砂岩	-	(7.0)	(7.0)	(6.4)	-	-	-	-	-	470											第259図
967	一括	N-16	IV-b	白磁	椀	IV類	口縁	-	-	-	-	-	灰白	灰白	-		第259図										
968	一括	-	IV-b	兼久式土器	-	泥質	底	-	7.2	-	-	-	-	-	-	木葉痕								第259図			
969	一括	-	IV-b	砂質土器	深鉢?	II-b	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-			第259図								
970	一括	-	IV-b	砂質土器	-	VIII	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-				第259図							
971	一括	-	IV-b	泥質土器	壺?	VIII'	口縁	9.2	-	-	-	-	-	-	-	-					第259図						
972	一括	-	IV-b	泥質土器	壺?	VIII'	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-						第259図					
973	一括	-	IV-b	泥質土器	-	-	平底	-	6.4	-	-	オサエ	-	-	-	-							第259図				
974	一括	-	IV-b	泥質土器	-	-	平底	-	8.2	-	-	-	-	-	-	-									第259図		
975	一括	S-23	VI-a	砂質土器	壺?	I	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-		胎土に金雲母								第260図	
976	一括	S-26	VI-a	砂質土器	壺?	I	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-											第260図
977	一括	-	VI-a	砂質土器	-	I	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-		第260図									
978	一括	R-20	VI-a	砂質土器	深鉢	II-b類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母							第260図			
979	一括	-	VI-a	砂質土器	甕?	V-b類	胴	-	-	-	-	-	-	-	-	-			第260図								
980	一括	S-23	VI-a	砂質土器	深鉢	VII-a類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-				第260図							
981	一括	S-23	VI-a	泥質土器	鉢?	VIII'類	口縁	-	-	-	-	ナデ	-	-	-	-					第260図						
982	一括	T-24	VI-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-						第260図					
983	一括	T-24	VI-a	泥質土器	甕	VII-a'類	口縁	-	-	-	ナデ	ナデ	-	-	-	-							第260図				
984	一括	V-27	VI-a	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-	-	-									第260図		
985	一括	R-19	VI-a	石器	スクレイパー	粗粒砂岩	-	(6.8)	(5.7)	(2.1)	-	-	-	-	-	-	83										
986	一括	T-24	VI-a	石器	磨砕石	粗粒砂岩	-	(9.7)	(8.0)	(5.7)	-	-	-	-	-	-	616										第260図
987	一括	N-12	VI-b	砂質土器	壺?	I類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-		第261図									
988	一括	P-18	VI-b	砂質土器	壺?	I類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母							第261図			
989	一括	T-24	VI-b	砂質土器	壺?	I類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-			第261図								
990	一括	T-24	VI-b	砂質土器	-	I類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母			第261図							
991	一括	R-20	VI-b	砂質土器	壺?	I類	頸部	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母				第261図						
992	一括	-	VI-b	砂質土器	鉢・壺?	I類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母					第261図					
993	一括	T-24	VI-b	砂質土器	壺?	I?	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-							第261図				
994	一括	-	VI-b	砂質土器	深鉢	II-b類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	波状口縁								第261図		
995	一括	M-12	VI-b	砂質土器	壺?鉢?	II-b類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-										第261図	
996	一括	N-15	VI-b	砂質土器	深鉢	IV-d類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母										第261図
997	一括	S-20	VI-b	砂質土器	深鉢	IV-e類	胴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	波状口縁	第261図									
998	一括	-	VI-b	泥質土器	鉢?	V-a'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-								第261図			
999	一括	-	VI-b	泥質土器	鉢	V-a'類		-	-	-	-	-	-	-	-	-			第261図								
1000	一括	N-11	VI-b	砂質土器	深鉢	V-b類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	-				第261図							

第164表 崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(5)

掲載 番号	報告書 遺構名	出土 区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整		色調		重量 (g)	備考	挿図No.
								口径 (最大長)	底径 (最大幅)	器高 (最大厚)	(外)	(内)	(外)	(内)			
1001	一括	T-25	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		第261図
1002	一括	S-23	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	オサエ	-	-	-	-		
1003	一括	R-13	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	胴	-	-	-	-	-	-	-	-		
1004	一括	N-11	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1005	一括	N-12	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1006	一括	N-12	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1007	一括	N-12	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1008	一括	M-12	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	波状口縁	
1009	一括	N-11	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	波状口縁	
1010	一括	N-13	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	波状口縁	
1011	一括	N-11	VI-b	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1012	一括	M-12	VI-b	泥質土器	深鉢	VI-a'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1013	一括	T-24	VI-b	砂質土器	深鉢	VIII類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1014	一括	-	VI-b	泥質土器	壺?	VIII'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1015	一括	U-25	VI-b	泥質土器	壺?	VIII'類	頸部	-	-	-	-	-	-	-	-		
1016	一括	M-12	VI-b	泥質土器	壺?	VIII'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1017	一括	N-12	VI-b	泥質土器	-	VIII'類	胴	-	-	-	-	-	-	-	-	横位耳付	
1018	一括	M-12	VI-b	泥質土器	壺?	VIII'類	口縁	-	-	-	オサエ・ ナデ	ナデ・ケ ズリ	-	-	-		
1019	一括	S-20	VI-b	砂質土器	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	装飾部?	
1020	一括	T-24	VI-b	砂質土器	不明	-	耳	-	-	-	-	-	-	-	-		
1021	一括	M-11	VI-b	砂質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-	-		
1022	一括	T-24	VI-b	砂質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-	-		
1023	一括	N-12	VI-b	砂質土器	-	-	尖底	-	-	-	-	-	-	-	-		
1024	一括	T-25	VI-b	砂質土器	-	-	尖底	-	-	-	-	-	-	-	-		
1025	一括	R-13	VI-b	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-	-		
1026	一括	P-15	VI-b	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-	-		
1027	一括	N-13	VI-b	泥質土器	-	-	平底	-	7.4	-	-	-	-	-	-		
1028	一括	N-12	VI-b	泥質土器	-	-	平底	-	7.6	-	-	-	-	-	-		
1029	一括	N-13	VI-b	泥質土器	-	-	平底	-	5.8	-	-	-	-	-	-		
1030	一括	R-13	VI-b	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-	-		
1031	一括	N-13	VI-b	泥質土器	-	-	尖底	-	-	-	-	-	-	-	-		
1032	一括	R-19	VI-b	石器	有溝砥石	中粒砂岩	-	(5.8)	(4.3)	(4.4)	-	-	-	-	60	3面に計3条の溝	
1033	一括	-	VI-b	石器	石皿	斑岩系	-	(12.3)	(9.8)	(3.6)	-	-	-	-	475		
1034	一括	-	VI-b	石器	磨石	中粒砂岩	-	(4.7)	(3.1)	(3.2)	-	-	-	-	67		
1035	一括	Q-19	VI-b	石器	磨製石斧	緑色岩	-	(5.5)	(9.7)	(2.6)	-	-	-	-	166	刃部のみ残存	
1036	一括	N-12	VI-b	石器	磨砕石	粗粒砂岩	-	(6.3)	(5.6)	(5.0)	-	-	-	-	204		
1037	一括	-	VI-b	石製品	棒状石製品	斑状玄武岩	-	(9.5)	(3.1)	(2.1)	-	-	-	-	89		
1038	一括	R-19	VI-b	石器	石核	チャート	-	(5.2)	(7.4)	(3.0)	-	-	-	-	166		
1039	一括	P18	VI-b	石製品	装飾品?	泥岩	-	(3.5)	(3.8)	(1.1)	-	-	-	-	16		
1040	一括	P-18	VII-a	砂質土器	壺?	I類類	口縁	10.5	-	-	-	-	-	-	-		
1041	一括	N-11	VII-a	砂質土器	壺?	I類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母	
1042	一括	P-18	VII-a	砂質土器	壺?	I類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1043	一括	P-19	VII-a	砂質土器	壺?	I類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母	
1044	一括	N-12	VII-a	砂質土器	壺?	I類	口縁	9.8	-	-	-	-	-	-	-		
1045	一括	Q-18	VII-a	砂質土器	壺?	I類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母	
1046	一括	M-12	VII-a	砂質土器	深鉢	II-a類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1047	一括	M-12	VII-a	砂質土器	深鉢	II-a類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1048	一括	N-12	VII-a	砂質土器	深鉢	II-a類	口縁	-	-	-	貝殻条 痕	-	-	-	-		
1049	一括	N-11	VII-a	砂質土器	深鉢	II-b類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母	
1050	一括	N-12	VII-a	砂質土器	深鉢	II-c類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1051	一括	Q-13	VII-a	砂質土器	深鉢	IV-d類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1052	一括	P-15	VII-a	砂質土器	深鉢	IV-d類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母	
1053	一括	P-15	VII-a	砂質土器	深鉢	IV-d類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母	
1054	一括	M-12	VII-a	砂質土器	深鉢	V-b類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1055	一括	M-12	VII-a	砂質土器	深鉢	V-b類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		
1056	一括	Q-19	VII-a	砂質土器	深鉢	V-b類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	-		

第165表 崩り遺跡出土遺物(中世・包含層)観察表(6)

掲載 番号	報告書 遺構名	出土 区	層位	分類L1	分類L2	分類L3	部位	計測値(cm)			文様・調整		色調		重量 (g)	備考	挿図No.
								口径 (最大長)	底径 (最大幅)	器高 (最大厚)	(外)	(内)	(外)	(内)			
1057	一括	L-12	VII-a	泥質土器	鉢	V-a'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1058	一括	R-13	VII-a	泥質土器	浅鉢	V-a'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1059	一括	R-13	VII-a	泥質土器	浅鉢	V-a'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1060	一括	R-13	VII-a	泥質土器	浅鉢	V-a'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1061	一括	N-13	VII-a	泥質土器	鉢	V-a'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1062	一括	R-13	VII-a	泥質土器	鉢	V-a'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1063	一括	N-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	波状口縁		
1064	一括	R-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1065	一括	R-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1066	一括	Q-18	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1067	一括	N-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1068	一括	O-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-		第263図	
1069	一括	R-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1070	一括	R-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1071	一括	Q-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1072	一括	R-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1073	一括	Q-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1074	一括	Q-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1075	一括	Q-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	胴	-	-	-	-	-	-	-			
1076	一括	Q-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	胴	-	-	-	-	-	-	-			
1077	一括	Q-13	VII-a	泥質土器	深鉢	V-b'類	胴	-	-	-	-	-	-	-			
1078	一括	P-15	VII-a	砂質土器	深鉢	細沈線文系	胴	-	-	-	-	-	-	-	胎土に金雲母		
1079	一括	O-13	VII-a	砂質土器	甕	VIII類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1080	一括	P-18	VII-a	砂質土器	深鉢	VIII類	口縁	-	-	-	ナデ	-	-	-			
1081	一括	N-12	VII-a	泥質土器	壺?	VIII類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1082	一括	R-13	VII-a	泥質土器	甕?	VIII類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1083	一括	R-13	VII-a	泥質土器	壺?	VIII類	口縁	-	-	-	-	-	-	-	耳の痕跡		
1084	一括	M-12	VII-a	砂質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-			
1085	一括	R-13	VII-a	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-			
1086	一括	O-13	VII-a	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-			
1087	一括	Q-13	VII-a	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-			
1088	一括	Q-18	VII-a	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-			
1089	一括	N-12	VII-a	泥質土器	-	-	平底	-	8.8	-	-	-	-	-			
1090	一括	R-13	VII-a	泥質土器	-	-	平底	-	6.3	-	-	-	-	-			
1091	一括	R-13	VII-a	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-			
1092	一括	R-13	VII-a	泥質土器	-	-	平底	-	9.0	-	-	-	-	-		第264図	
1093	一括	P-18	VII-a	砂質土器	-	-	尖底	-	-	-	-	-	-	-			
1094	一括	M-12	VII-a	砂質土器	-	-	尖底	-	-	-	-	-	-	-			
1095	一括	Q-18	VII-a	石製品	不明	泥岩	-	(4.3)	(4.9)	(4.0)	-	-	-	-	86	装飾品?	
1096	一括	R-13	VII-a	石製品	装飾品?	ホルンフェルス	-	(2.5)	(3.7)	(2.0)	-	-	-	-	18		
1097	一括	N-13	VII-a	石製品	装飾品?	泥岩	-	(1.9)	(2.9)	(1.1)	-	-	-	-	4		
1098	一括	P-18	VII-a	石製品	棒状石製品	泥岩	-	(5.6)	(0.6)	(0.6)	-	-	-	-	3		
1099	一括	R-13	VII-a	石器	有溝砥石	中粒砂岩	-	(4.8)	(6.6)	(1.8)	-	-	-	-	77	2面に計2条の溝	
1100	一括	R-13	VII-a	石器	磨製石斧	斑状玄武岩	-	(10.1)	(6.0)	(2.8)	-	-	-	-	249		
1101	一括	P-18	VII-a	石器	凹石	中粒砂岩	-	(11.6)	(9.8)	(6.0)	-	-	-	-	589		
1102	一括	P-6	VII-a	石器	磨敲石	中粒砂岩	-	(12.6)	(9.7)	(5.8)	-	-	-	-	981		
1103	一括	L-12	VII-a	石器	台石	中粒砂岩	-	(13.2)	(12.4)	(5.0)	-	-	-	-	1003		
1104	一括	N-13	VII-a	石器	台石	中粒砂岩	-	(14.3)	(12.7)	(8.4)	-	-	-	-	1996		
1105	一括	R-18	VII-a	石器	台石	粗粒砂岩	-	(14.8)	(14.1)	(7.5)	-	-	-	-	2300	盃状の凹み2つ	
1106	一括	Q-19	VII-a	石器	石皿	粗粒砂岩	-	(22.0)	(15.9)	(7.9)	-	-	-	-	4100		
1107	一括	P-18	VII-a	石器	石皿	中粒砂岩	-	(9.1)	(7.9)	(5.5)	-	-	-	-	582		
1108	一括	Q-13	VII-b	泥質土器	鉢?	V-a'類	口縁	-	-	-	-	-	-	-			
1109	一括	Q-13	VII-b	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-		第266図	
1110	一括	Q-13	VII-b	泥質土器	-	-	平底	-	-	-	-	-	-	-			
1111	一括	R-13	VII-b	石器	磨製石鏃	頁岩	-	(3.0)	(2.0)	(0.2)	-	-	-	-	1		
1112	一括	Q-13	VII-a・t	石器	磨敲石	粗粒砂岩	-	(9.0)	(5.3)	(3.0)	-	-	-	-	122		

第IV章 自然科学分析

第1節 崩り遺跡の製鉄関連遺物について

村上 恭通 (愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター)

はじめに

崩り遺跡の溝状遺構SD17では、炉壁、鉄塊、鉄滓などの製鉄関連遺物が出土した。SD17の検出面を覆うI層、さらにその周辺に広がるIII層でもSD17と同量程度の製鉄関連遺物が出土しており、SD17の削平時に多くの遺物が動いたものと推測される。ここでは第三章(8)において紙数の都合で十分説明できなかった製鉄関連遺物について改めて詳述したい。

1. 炉壁

863 (第251・267図)は炉壁の最下段に当たる部分の破片であり、内面は前面に鉄滓が付着し、大小の球状塊が付着している。断面図に現れているように底部付近の内面は熔損し、深くえぐれており、炉底付近で成長した鉄滓、鉄塊によって浸食されたことがわかる。底面はきれいに肌別れした面を残しており、当時の地表に密着した面である。また底面の炉内側には鉄滓との接触痕が認められる。炉内で水平方向に成長する鉄滓は、炉壁と地面の密着度が弱い場合、しばしばその接着部分に薄く板状に嵌入する。底面に付着した鉄滓の痕跡は炉壁の接着部分に嵌入した鉄滓の痕跡を示している。

炉壁内面の湾曲から炉内の直径は約24cmに還元されるため、作業前の炉内径はそれよりも小さかったであろう。ただし破片数が少ないために、平面形が円形であったのか楕円形であったのかは判断できない。

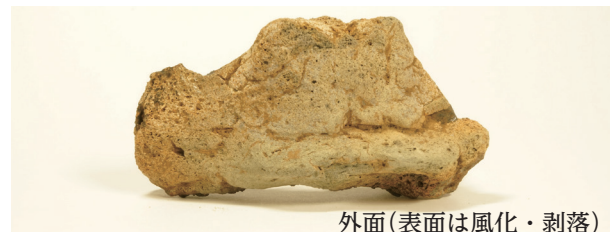
2. 製錬滓—とくに流動滓について—

鉄滓はすべて製錬滓であり、すでに述べたように炉外流出滓(868~878)と炉内残留滓(879・880)とに分けられ、点数の多い炉外流出滓は細分が可能である。

868, 869 (第268図)は色調が他の赤褐色系の鉄滓に比べて灰色がかっている。炉外流出滓でありながら、流動の痕跡がない。このように粘り気の強い鉄滓は生成温度が低かったことを示しており、炉内が十分な温度に達する前か、あるいは炉壁の浸食が進んだために炉内温度が下降する作業後半に炉外に流出する鉄滓である。炉内が浸食される前であれば、炉内圧が高く、風も強いので鉄滓が自然に押し出される場合がある。これに対し、作業終盤の粘性が強い鉄滓は、炉内圧も低くなっているため、道具を使用して無理に掻き出される場合が多く、その際掻き出しの道具痕が鉄滓の表面に残る。868はその表面に流出した流動滓と判断できる。869は868と比較すると、わずかに流動の痕跡を呈しており、やや時間を経た段階の流動滓とみられる。

その他の流動滓は赤褐色系を呈し、また表面は流動の痕跡を顕著に残すか、または流れ皺がなくなるほどに平滑となっている。とくに棒状、長条形を呈し、底の断面形が湾曲した870~873などの流出滓は、排滓孔から流出し、溝内を一定距離流れたことを示している。とくに872, 873 (第269図)は両側縁が高く立ち上がっており、製鉄炉の出滓孔近くで冷えて固まった鉄滓である。この2点の鉄滓の断面から出滓孔の直径が約4cmに還元できる。これらの棒状、長条形の流動滓を除くと、874のように流れ皺を残す板状の鉄滓があり、しばらく溝内を流れた鉄滓がその先で薄く広がったことを示している。

875~877はその内部に大きな気泡があるため、鉄滓の厚みに厚薄が生じ、割れている。気泡を含む流動滓は図化した資料以外にも多数みられる(第271図)。これらは鉄滓の温度が高いこと、さらには炉内温度が十分に上昇していたことを示している。



第267図 炉壁 863

3. 製鉄炉の復元

炉内残留滓だけが発見される場合、鉄塊を噛み込んだ鉄滓が搬入されて、島内で鉄滓を割って鉄塊を取り出したという説明が可能であるため、島内での製鉄を証明することにはならない。しかしながら崩り遺跡では炉内残留滓のみならず、製鉄操業の初期段階以降、経時的に生成される炉外流出滓が発見されている。製鉄のすべての工程の鉄滓が揃っていることはこの地での製鉄を確かなものとした。

もとより浸食の進んだ炉壁は製鉄炉の存在を強く主張するものである。築炉時の炉内直径は小型であるが、副産物をみる限り、鉄とスラグが良好に分離されており、鉄の生成を疑う必要はない。

それでは崩り遺跡の製鉄炉はどのような形態、構造であったのだろうか？中世の九州本土における製鉄炉はかつては熊本県西原遺跡での発見に因んで「西原型」という名称が与えられていた。これは炉体を段の法面に掘り込み、その前面を粘土でふさぎ、炉頂部を粘土で積み上げる半地下式竪型炉の一類型とされてきた。しかし、西原遺跡以降、半地下式竪型炉と考えられる製鉄炉は九州において一例も発見されていない。「西原型」の再考を促す製鉄炉は熊本県荒尾市狐塚遺跡、大藤遺跡例であり、古くは弥生時代の製鉄炉と称された宮崎県延岡市祝子（ほうり）の遺跡例である（第272図）。これらの炉は平面形が方形か隅丸方形を呈し、炉の後背から一本の管で風が送られる自立炉である。炉床および地下構造を掘り抜けば、段の肩近くに炉が築かれるために半地下式竪型炉と類似した構造に見える。熊本県、大分県、宮崎県といった九

州西海岸、東海岸で発見されている中世の製鉄炉は、むしろ「狐塚型」、「大藤型」と呼称すべき平面方形あるいは隅丸方形の自立炉なのである。

崩り遺跡出土の底部付近の炉壁には内面に鉄滓の付着と浸食が認められた。半地下式竪型炉の炉頂に積み上げられた炉壁であれば、加熱帯に相当する部分であるため、その内面は軽微な被熱しかなく、鉄滓が付着したり、まして熔損することはあり得ない。そもそもこの部位の炉壁は風化して遺跡に遺らないであろう。とするならば崩り遺跡の炉壁は自立炉の最下部に位置していたものである。復元される崩り遺跡の製鉄炉は、熊本の有明海沿岸地域や大分、宮崎の製鉄炉の中世自立炉に系譜をもつこと、しかしより小型であることが指摘できるのである（第273図）。

本報告文及び考察文の執筆にあたっては、品川愛（愛媛大学法文学部）・八木宏明（滋賀県立大学大学院）両氏の協力を頂いた。文末ながら深く感謝申し上げます。

<文献>

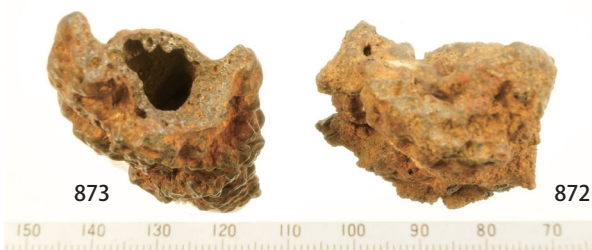
- 石川恒太郎 1959 『日本古代の銅鉄の精錬遺蹟に関する究』 角川書店
- 勢田廣行編 1992 『金山・樺製鉄遺跡群調査報告書』熊本県荒尾市文化財調査報告書7、荒尾市教育委員会・九州リゾート株式会社
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』 青木書店



第268図 流動滓



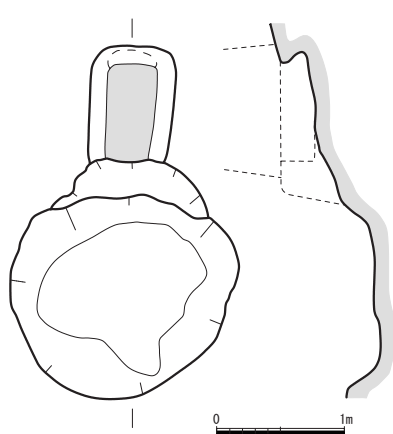
第269図 出滓孔付近の流動滓



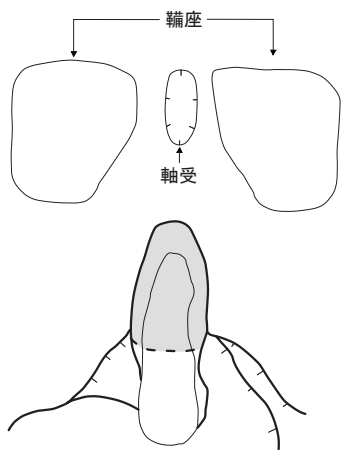
第270図 出滓孔付近の流動滓(断面)



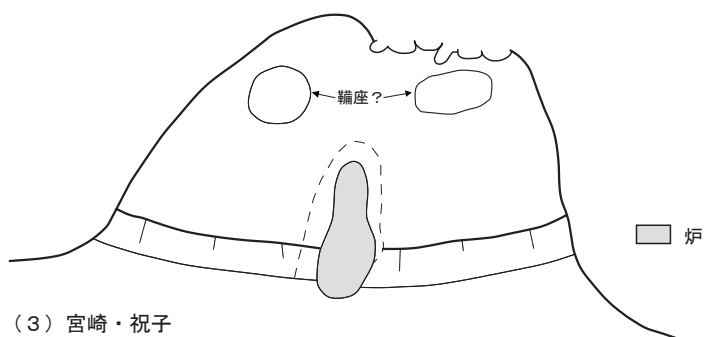
第271図 空洞・発泡痕跡のある流動滓



(1) 熊本・大藤

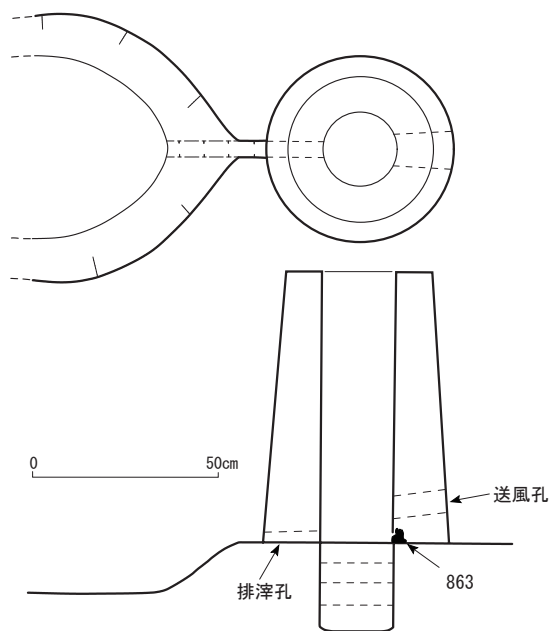


(2) 熊本・狐谷1号



(3) 宮崎・祝子

第272図 中・南九州の古代・中世製鉄炉



第273図 崩り遺跡製鉄炉の復元略図

第2節 崩り遺跡出土ガラス玉の調査

田村 朋美 (奈良文化財研究所)

1. はじめに

崩り遺跡から出土したガラス玉について、観察および分析化学的手法により製作技法および基礎ガラスの種類、着色因子の調査をおこなった。以下、その結果について報告する。

2. 資料と方法

本調査の対象とした資料は、崩り遺跡 M-3 区Ⅲ-a 層から出土したガラス玉1点である。二片に割れており、表層は風化で白色化している。一方、破断面をみると内部に健全な部分が残存しており、本来の色調が濃青緑色であることがわかる (第274 図上)。

本ガラス玉について、実体顕微鏡観察により製作技法の推定をおこなった。次に、破断面の本来の色調が残存している箇所について蛍光 X 線分析をおこなった。測定結果については、ガラス標準試料を用いて FP (Fundamental Parameters) 法によって規格化し、酸化物重量百分率で表示した。分析に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (EDAX 社製 EAGLE III) である。蛍光 X 線分析の測定条件を第166 表に示す。

第166 表 蛍光 X 線分析法の測定条件

測定条件項目	概要
X 線源	Mo 管球
X 線照射径(μm)	φ112
管電圧(kV)	20
電流(μA)	100
測定時間(秒)	300
試料室雰囲気	真空

3. 結果と考察

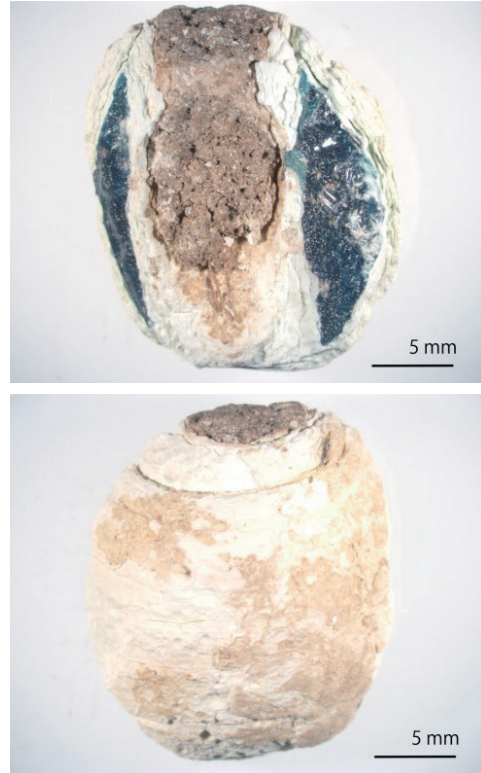
風化表面に孔と直行方向にめぐる蝕像が認められ、巻き付け法で製作されたと推察される (第274 図下)。

蛍光 X 線分析の結果、SiO₂ を約 47.1%、K₂O を 11.1%、PbO を 39.2% 含有するカリ鉛ガラスであることが判明した (第167 表・第275 図)。喜界町では、城久遺跡群で同種のガラス玉が多く出土している。着色に関与する成分として CuO を 0.51% 含有しており、銅による着色である。カリ鉛ガラスは風化が著しい個体が多く、本来の色調がわかる資料は貴重な事例で

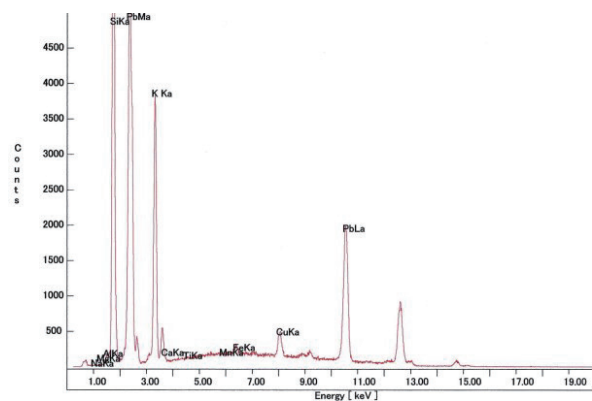
第167 表 蛍光 X 線分析結果

資料名	色調	重量濃度 (wt%)										
		Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	PbO
崩り遺跡 M-3 区 Ⅲ-a 層出土ガラス玉	濃青緑 透明	0.6	0.2	0.9	47.1	11.1	0.1	0.03	0.03	0.18	0.51	39.2

ある。なお、カリ鉛ガラスの産地に関しては、鉛同位体比分析による鉛原料の産地推定が有力な情報となるが、本調査では鉛同位体比分析を実施していないため、原料産地の特定には至っていない。今後の課題としたい。



第274 図 崩り遺跡 M-3 区Ⅲ-a 層出土ガラス玉



第275 図 蛍光 X 線スペクトル

第3節 崩り遺跡の平成23～24年度調査で採集された脊椎動物遺体

樋泉岳二（早稲田大学）

はじめに

崩り遺跡（鹿児島県喜界町）は喜界島南西部の海岸段丘上（標高23m前後）に位置する手久津久地区に広がる4つの遺跡のひとつで、縄文時代後～晩期と中世の複合遺跡である。本遺跡では平成23～24年度に実施された喜界町教育委員会による発掘調査（宮城ほか2013）において脊椎動物遺体（魚骨・獣骨など）が多数出土した。ここではその分析結果について報告し、その特徴について予察する。

1. 分析資料と分析方法

分析資料には(1)ピックアップ資料（発掘現場での目視確認と手での拾い上げによって採集されたもの）および(2)水洗選別資料（堆積物サンプルの水洗選別に伴う沈殿物（ヘビー・フラクション：HF）から1mm目のフルイによって回収された資料）の2種類がある。

資料の年代は、縄文時代後～晩期のもの中世のものに分かれる。中世の資料には、11～12世紀、14～15世紀、および詳細な年代が不明のものがある。同定対象部位については、魚骨では主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、主鰓蓋骨、椎骨の全資料およびその他同定可能な資料を同定用資料とした。魚類以外では部位の判定可能なものを同定用資料としたが、鳥獣類の四肢骨のうち骨幹の全周を残さない破片は同定対象外とした。同定方法は現生標本との比較を原則とした。比較標本には筆者の所蔵標本を使用した。哺乳類遺体の計測はDriesch (1976)の方法に準拠した。ウシ・ウマの体高推定は西中川ほか(1991)の方法に従った。

2. 分析結果

ピックアップ資料の同定結果の詳細・集計結果・組成を第169～179表に、水洗選別資料の同定結果の詳細・集計結果・組成を第180～192表にそれぞれ示した。NISPの算出に際しては、詳細な分類群・部位の特定が困難な骨片（第169～178表、第180～191表で数値に<>を付して示したもの）は除外した。

(1) 縄文後～晩期

全体的に骨の保存状態が悪く、溶解が進行し細片化しているため、詳細な分類群の特定が困難なものが多かった。

ピックアップ資料

ほとんどの資料が堅穴建物状遺構（SH）と土坑（SK）から出土している（第169～178表）。遺構別の出土数（NISP）はSK07が76点と突出して多く、SK03も20点とやや多いが、他は10点未満（多くは5点以下）である。

脊椎動物全体の組成（第276・277図）では魚類が最も多く、同定標本数（NISP）比で約7割、最小個体数（MNI）比では

約8割を占める。哺乳類がこれに次ぎ、ウミガメ類も普通である。そのほかに鳥類がわずかに確認された。

魚類（第278・279図）ではブダイ科が最も多く、ハリセンボン科がこれに次ぐ。ニザダイ科、ハタ科、サメ類もやや多い。その他に、ベラ科、フエフキダイ科、イスズミ科、モンガラカワハギ科、フグ科が確認された。

ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨の多くはアオブダイ属だが、イロブダイ属も若干みられた。サメ類は歯と椎骨が得られている。SH14出土の歯はエナメル質のみが残存しており、歯冠形態は細身の三角形で鋸歯がみられないことから、メジロザメ科下顎歯の可能性はある。SH17出土の歯は歯冠が大型の三角形で鋸歯が明瞭であることから、ホホジロザメ属の可能性はある（図版1）。ベラ科の咽頭骨には「タキベラ型」、ベラ科A、ベラ科B（金子1996、樋泉2006）がみられた。フグ科の顎骨（前上顎骨または歯骨）はいずれも溶解が進行しており、SK01出土資料は一部が崩壊して多数の針状破片に分解している。SH03とSH05からも同様の針状破片が採集されており、フグ科顎骨が分解したものと判断される。

ウミガメ類は下顎骨破片・指骨各1点のほか甲板破片が若干確認された。

鳥類は詳細な同定が困難な四肢骨骨幹が1点確認されたのみである。

哺乳類（第276・277図）ではイノシシが最も多く、クジラ類がこれに次ぐ。他にネズミ類とウシがわずかに確認されたが、前者は自然の遺体、後者は後世資料の混入と思われる。

イノシシは現生のリュウキュウイノシシと同様の小型個体である。全身の骨格が出土しており、部位組成にとくに偏りは認められない。出土数が少ないため、年齢構成や性比は明確でない。

クジラ類はかなり大型の種と思われるものが多い。SH01・SH14の出土資料は加工品の可能性が強く、SH15・SK02の出土資料にもその可能性がある。また焼けた資料が多いのも特徴である。

水洗選別資料

資料の大半は魚骨であり、他にヘビ類、鳥類、ネズミ類、イノシシがわずかに確認された（第192表）。ヘビ類とネズミ類は自然の遺体と思われる。

魚類（第280・281図）ではブダイ科（咽頭骨・前上顎骨・歯骨はすべてアオブダイ属）が最も多く、ニザダイ科、ハタ科、ウツボ科、サメ類がこれに次ぐ。とくにブダイ科の咽頭骨・顎骨が溶解・分解して派生した遊離歯が多くのサンプルで検出された。サメ類はすべて歯で、多くはエナメル質のみが残存している状態であった。歯冠形態は三角形で鋸歯が明瞭なものや細身の剃刀状で鋸歯をもたないものなどがみられた。前者はメジロザメ科（またはホホジロザメ属？）、後者はアオザメ

属またはミズワニ科のものではないかと思われる。その他にクロダイ属、フエフキダイ科、ベラ科、アイゴ属、モンガラカワハギ科、ハコフグ科？、ハリセンボン科がわずかに確認された。

鳥類は詳細な同定が困難な小型鳥類の指骨3点が確認されたのみである。

(2) 中世

ピックアップ資料

今回得られた中世資料には11～12世紀、14～15世紀および詳細な年代が不明な中世資料がある。全般的に保存状態は良好である。出土数を年代別にみると(第176～178表)、11～12世紀の資料は計54点で、このうち42点がピット(P)からの出土資料である。骨を出土したピットの数は31基と多いが、個々のピットからの出土数(NISP)は3点以下と少ない。そのほか土壇墓2号出土が2点、他の10点は包含層出土(一括取り上げ資料)である。14～15世紀の資料は計20点で、このうち石積み1号出土が3点、その他は包含層出土(一括取り上げ資料)資料である。詳細時期不明の資料は53点で、このうち42点をピット出土資料が占めており(とくにP914では18点とややまとまっている)、その他に包含層出土(一括取り上げ)資料が10点ある。

脊椎動物全体の組成(第276・277図)をみると、中世の合計では魚類がNISP比・MNI比ともに約8割と最も多く、哺乳類(おもにウシ・ウマ)がこれに次ぐ。そのほかにウミガメがわずかに確認された。年代別の組成をNISP比でみると(第276図)、11～12世紀では44点中魚類が43点を占めており、他はウシが1点みられたのみである。14～15世紀では、魚類10点、ウシ・ウマ(およびそれらのいずれかと思われるもの)が8点で、ウシ・ウマが増加するが、資料数が少ないため意味のある変化といえるかは判然としない。

魚類は、中世全体ではフエフキダイ科が最も多く、ブダイ科がこれに次ぎ、ハタ科、ベラ科、クロダイ属も普通である(第278・279図)。フエフキダイ科の前上顎骨にはメイチダイ属とフエフキダイ属(アマミフエフキに類するタイプ)がみられた。ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨はすべてアオブダイ属であった。ハタ科の前上顎骨・前鰓蓋骨はすべてマハタに類するタイプである。そのほかに、サメ類、ウツボ科、モンガラカワハギ科、ハリセンボン科がわずかに確認された。年代別の組成をNISP比でみると(第278図)、11～12世紀ではフエフキダイ科を最多として、ハタ科・クロダイ属もやや多く、ベラ科、ブダイ科がこれに次ぐ。14～15世紀では資料数が少ないが、フエフキダイ科6点、ブダイ科3点、ハタ科1点が確認された。

哺乳類は、11～12世紀ではネズミ類とウシ踵骨が各1点みられたのみである(第276図)。ネズミは自然の遺体と思われる。14～15世紀ではウシとウマが各2点およびそれらのいずれかと思われるもの4点が確認された。また、中世の資料

ではあるが詳細年代が不明のものとして、ウシ5点、ウシ・ウマのいずれかと思われるもの7点が確認されている。

ウシ・ウマの計測値(第169～175表「サイズ/計測」欄参照)から推定される体高は、ウシではP430(11～12世紀)の左踵骨(資料番号31)が105cm程度、U-29グリッドIII-j層(中世詳細不明)の右脛骨遠位端(資料番号279)が約115cm、ウマでは石列1号(14～15C)の左中足骨遠位端(資料番号258)がおそらく123cm前後であった。

解体痕(第169～175表「備考」欄参照)としては上記のウシ脛骨(資料番号279)にスパイラルフラクチャー、石列1号(14～15C)のウマ尺骨滑車切痕(資料番号259)にカットマーク、U-29グリッドIII-j層(中世詳細不明)のウシまたはウマの腰椎(資料番号277)および石列1号(14～15C)のウシまたはウマの仙椎(資料番号260)にもカットマークが確認された。

部位組成や年齢構成については資料数が少ないため明確でないが、ウシは歯1点と四肢骨7点(上腕骨・脛骨・踵骨・基節骨・末節骨)、ウマは四肢骨2点(尺骨・中足骨)、他にウシ・ウマのいずれかと思われる椎骨4点、肋骨6点が検出されている。また、ウシには幼獣が1点(資料番号268)確認されている。

なおN-13区IV-a層(11～12世紀)からはヒトの頭蓋骨破片(およびその可能性の強いもの)がまとまって採集されている。すべて強く焼けており火葬骨の可能性も考えられる。

水洗選別資料

資料の大半は魚骨である(第192表)。ニザダイ科が最も多く(第280図)、ブダイ科の咽頭骨・顎骨が溶解・分解して派生した遊離歯も多くのサンプルで検出された。そのほかにダツ科、ウツボ科、モンガラカワハギ科、ハタ科、アイゴ属、ハコフグ科？、ハリセンボン科などが確認された。

魚類以外では、ヘビ類椎骨、詳細な同定が困難な鳥類指骨、ネズミ類下顎切歯およびイノシシ肋骨の可能性のある獣骨片が各1点確認されたのみである。ヘビ類とネズミ類は自然の遺体と思われる。

(3) 年代不明資料

上記以外に、年代不明のピックアップ資料としてサメ類の歯3点、ウシ5点(歯1、四肢骨4)、ウマの歯1点が得られている(第176～178表)。サメ類の歯のうち1点(資料番号32、図版1)は歯冠が大型(最大幅35mm)の三角形で鋸歯が明瞭であることからホホジロザメ属と思われ、質感から化石の可能性も考えられる。ウシの中手骨と脛骨にはスパイラルフラクチャーが確認された。

3. 考察

(1) 縄文後～晩期の脊椎動物遺体群の特徴

喜界島において縄文後～晩期(貝塚時代前4～5期)の詳細

な脊椎動物遺体のデータが得られたのは今回が初例であり、これまで様相が不明であった喜界島の当該時期における動物資源利用の様相を知るうえできわめて重要である。

本遺跡の縄文後～晩期の脊椎動物遺体の特徴をまとめると、ピックアップ資料では魚類を主体として、イノシシも多く、ウミガメも普通である。水洗資料では魚骨が大半を占める。魚類はピックアップ資料・水洗資料ともにブダイ科が主体であり、ピックアップ資料ではハリセンボン科・ベラ科、水洗資料ではニザダイ科・ハタ科なども多く、出土魚類の大半をサンゴ礁やその周辺に生息する魚類が占める。これらの特徴から、本遺跡の縄文後～晩期における脊椎動物資源利用の構成は、サンゴ礁性の魚類を主対象とした沿岸漁労とイノシシ猟を主力としており、とくに前者が活発であったと推定される。

イノシシは、これまで喜界島の遺跡では出土例がごく少なく、先山遺跡（7～10世紀、西中川 1987）および和早地遺跡（14～15世紀、樋泉 2008）で少数が確認されていたのみであったが、今回縄文後～晩期のまとまった資料が確認された。これらのイノシシは現生リュウキュウイノシシと同様の小型個体であり、全身の骨格が出土していること、また島嶼規模において喜界島（面積 56.93 km²）と同等の沖縄県久米島（59.11 km²）やより小規模な伊江島（22.78 km²）の貝塚時代遺跡からイノシシ遺体が多数出土しており、いずれも自生の個体群と考えられることから、喜界島においても野生の個体群が自生していたと考えて差し支えないと思われる。

奄美群島においてこれまでに脊椎動物遺体を出土した縄文後～晩期の主要遺跡としては、喜界島に隣接する奄美大島の宇宿貝塚（大塚・西中川 1979、今井ほか 1979）、宇宿小学校構内第1～第2文化層（名島 2003）、長浜金久第Ⅱ遺跡（松元・西中川 1985、四宮ほか 1985）、奄美群島南部では徳之島のトマチン遺跡（樋泉 2013）、面縄第2貝塚（樋泉 2016）、沖永良部島の住吉貝塚（西中川 2006、樋泉 2006）、友留遺跡（樋泉 2009）などがある。

これらの遺跡のデータと今回の結果を比較すると、ピックアップ資料に関してはサンゴ礁性の魚類とイノシシを主体としてウミガメが加わる基本的特徴はおおむね共通している。これは奄美群島～沖縄諸島の貝塚時代前3期～後2期（縄文中期～古代）に普遍的にみられる特徴（樋泉 2002, 2011）でもある。水洗資料に示される小型魚類に関しては、奄美群島でこれまでにデータが得られているのはトマチン・面縄第2・住吉・友留の4遺跡のみだが、いずれもピックアップ資料と同様にサンゴ礁性の魚類が卓越しており、本遺跡も同様の特徴を示した。

ただし魚類組成を詳細にみると、他の遺跡では突出した優占種がみられず、さまざまな種類のサンゴ礁性魚類が混在する多様性の高い組成がみられる点が特徴となっているのに対して、本遺跡ではとくにピックアップ資料においてブダイ科とハリセンボン科が卓越している点で傾向が異なるように思われる。ただしこの点については、本遺跡では全体的に骨の保

存状態が悪く溶解・分解が進んでいる資料が多いことから、骨質が堅緻なブダイ科の咽頭骨・顎骨やハリセンボン科の顎骨がとくに保存されやすかったことが原因とも考えられる。

また、本遺跡ではクジラ類が多くみられた点も特徴である。クジラ類はかなり大型のものが多く、加工品もみられたことから、骨製品の素材として漂着した死体などから骨が採集されたのではないかと思われる。住吉貝塚・友留遺跡などでは大型クジラ類を素材とした骨製品が出土しており、面縄第2貝塚でも加工痕のある大型クジラ類の骨が確認されていることから、本遺跡の資料もこれらの類例になるものと思われる。

② 中世の脊椎動物遺体群の特徴

今回得られた中世資料の年代は11～12世紀と14～15世紀と推定されている。とくに城久遺跡群の最盛期に相当する11～12世紀の資料が得られたことは、これまでデータのなかった当該時期の低位段丘域における生活の様相を示すものとして重要である。

本遺跡の中世全体の脊椎動物遺体の特徴をまとめると、ピックアップ資料では魚類を主体として、ウシ・ウマも普通である。水洗資料では魚骨が大半を占める。魚類はピックアップ資料ではフエフキダイ科、水洗資料ではニザダイ科が主体であり、ピックアップ資料ではブダイ科・ハタ科なども多く、出土魚類の大半をサンゴ礁やその周辺に生息する魚類が占める。これらの特徴から、本遺跡の中世における脊椎動物資源利用の構成は、サンゴ礁性の魚類を主とした魚類利用とウシ・ウマの利用を主力としたものであったと推定される。

これを縄文後～晩期と比較すると、中世においてもサンゴ礁性魚類が主体となる点は縄文後～晩期と同様だが、哺乳類はウシ・ウマが出現し、イノシシがほぼみられなくなる点で明確な変化がみられる。ウシ・ウマの出現は喜界島の他の中世遺跡や沖縄諸島のグスク時代以降の遺跡に広くみられる現象である。いっぽうイノシシについては、沖縄諸島ではグスク時代以降も出土数が多い（ただしシタの可能性のあるものが含まれるようになる）が、喜界島の他の中世遺跡では稀であり、本遺跡も同様の特徴を示した。

また魚類の内容にも大きな変化がみられ、縄文後～晩期ではブダイ科（およびピックアップ資料ではハリセンボン科）が主体だが、中世ではこれらが激減し、ピックアップ資料ではフエフキダイ科、水洗資料ではニザダイ科が増加する。こうした変化の原因については今のところ不明だが、優占種はいずれもサンゴ礁やその周辺の生息種であることから、沿岸環境に大きな変化があったとは考えにくいように思われる。なお縄文後～晩期では、すでに述べたとおり全体的に骨の保存状態が悪いことから、骨質が堅緻なブダイ科の咽頭骨・顎骨やハリセンボン科以外の骨が選択的に溶解・消失する傾向にあったのに対し、中世資料は全般的に保存良好であり、フエフキダイ科やニザダイ科のような比較的脆弱な骨も保存されやすかったことが組成変化の一因となっている可能性も考慮する必要

があろう。

次に、中世資料の年代別の組成を NISP 比によってみると、11～12 世紀と 14～15 世紀のいずれにおいてもサンゴ礁性魚類が主体となる点では共通している（第 176～177 表）。魚類の内容は、11～12 世紀ではフエフキダイ科を最多として、ハタ科・クロダイ属・バラ科・ブダイ科などもやや多い（第 278 図）。14～15 世紀については資料数が少ないため特徴が不明確だが、フエフキダイ科が多く、これにブダイ科・ハタ科といったサンゴ礁性魚類が加わる点で基本的には同傾向とみてよいかと思われる。

喜界島における 11～12 世紀の魚骨資料としては、これまで城久遺跡群（大ウフ遺跡 A～C 地区、10～12 世紀）で少数（サメ類 6 点・ハリセンボン科 1 点）の出土が確認されていたのみであった（西中川 2013b）。これに対して本遺跡では比較的多くの魚骨が出土しており、これらの魚類が本遺跡の住民によって直接漁獲されたものか、他の漁撈集団から間接的に入手されたものかは不明だが、いずれにしても魚類が食料資源としてある程度の頻度で利用されていたと推定される。このことは当時の喜界島沿岸域に漁労を行う集団が存在していたことを示唆しており、この時期の動物資源利用の実態を推定するうえで重要である。

14～15 世紀には、本遺跡よりもさらに低位の段丘（標高 13m）に位置し海岸に近接した和早地遺跡においてサンゴ礁性の魚類を主とした多数の魚骨（NISP ピックアップ資料 169 点、篩別資料 346 点：合計 515 点）が出土していることから（樋泉 2008）、本遺跡の魚類がこうした漁労集団から入手されたものである可能性も考えられる。

魚類以外については、11～12 世紀ではウシが 1 点みられたのみであるのに対して、14～15 世紀ではウシ・ウマが増加する。こうした変化はウシ・ウマの飼育（およびこれらを利用した農耕）の普及を示しているようにも思えるが、資料数が少ないため確実ではない。ただし城久遺跡群の大ウフ遺跡・半田遺跡では 13～15 世紀にウシ・ウマの出土数の増加がみられることから（西中川 2013a・b・c）、本遺跡もこれと連動した傾向を示している可能性は強いと考えられる。

なお、本遺跡に隣接する中増遺跡（13～15 世紀、樋泉 2015）ではウシ・ウマが多いのに対して魚類は少なく（NISP でウシ 44 点、ウマ 6 点、魚類 10 点）、本遺跡とは対照的な様相を示している。隣接した同時代遺跡の間でこうした差異が生じた原因については今後の課題だが、この時期の動物資源利用の様相は遺跡間の差異が大きく、多様かつ複雑なものであった可能性がある。

(3) ウシ・ウマの形質

今回得られたウシの推定体高は 105～115cm（N=2）である。これは大ウフ遺跡（108～123cm）、半田遺跡（111～125cm）、中増遺跡（110～122cm）と同様に、日本在来牛である口之島牛（雄 122cm、雌 112cm、西中川ほか 1991）に相

当するサイズである。

今回得られたウマの推定体高は 123cm 前後（N=1）である。これは中増遺跡（120cm）とほぼ同様であり、大ウフ遺跡・半田遺跡（ともに 116cm）よりわずかに大きい。基本的には日本在来馬である与那国馬（120cm、西中川ほか 1991）とほぼ同大で、日本在来の小型馬の系統に属するものとみてよいと考えられる。

謝辞

喜界町教育委員会の澄田直敏、野崎拓司、松原信之の各氏には、調査・分析に際して多大なるご助力とご教示を賜った。記して厚く御礼申し上げる。本報告の一部には科学研究費（15K02990、代表：樋泉岳二）を使用した。

参考文献

- 今井貞彦・四宮明彦・鎌田昌彦（1979）「魚骨」『鹿児島県笠利町文化財調査報告書 宇宿貝塚』笠利町教育委員会，pp.97-98.
- 大塚閏一・西中川駿（1979）「獣骨」『鹿児島県笠利町文化財調査報告書 宇宿貝塚』笠利町教育委員会，pp.95-96.
- 金子浩昌（1996）「動物遺体（軟体動物を除く）」『平式屋トウバル遺跡』沖縄県教育委員会，pp.168-295.
- 四宮明彦・鈴木広志・久保田裕一（1985）「長浜金久遺跡出土魚骨および甲殻類鉗脚について」『長浜金久遺跡—新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書』鹿児島県教育委員会，pp.230-232.
- 樋泉岳二（2002）「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』熊本大学文学部，pp.47-66.
- 樋泉岳二（2006）「魚類遺体群からみた住吉貝塚の特徴と重要性」『住吉貝塚』知名町教育委員会，pp.115-131.
- 樋泉岳二（2008）「和早地遺跡の脊椎動物遺体群」『荒木貝塚和早地遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター，pp.43-56.
- 樋泉岳二（2009）「友留遺跡から出土した脊椎動物遺体群」『友留遺跡』知名町教育委員会，pp.83-106.
- 樋泉岳二（2011）「琉球先史時代人と動物資源利用—脊椎動物遺体を中心に—」『先史・原史時代の琉球列島—ヒトと景観—』六一書房，pp.109-131.
- 樋泉岳二（2013）「トマチン遺跡出土の脊椎動物遺体」『徳之島トマチン遺跡の研究』鹿児島大学埋蔵文化財調査センター，pp.174-185.
- 樋泉岳二（2015）「中増遺跡の平成 23～24 年度調査で採集された脊椎動物遺体」『中増遺跡 I』喜界町教育委員会，pp.59-70.
- 樋泉岳二（2016）「面縄貝塚から出土した脊椎動物遺体群の特徴と重要性」『面縄貝塚総括報告書—平成 19～27 年度町内遺跡発掘調査等事業に係る発掘調査報告書』伊仙町教育委員会 pp.118-139.

名島弥生 (2003) 「宇宿小学校構内遺跡出土の動物遺存体について」 奄美考古 5 : 61-72.

西中川 駿 (1987) 「先山遺跡出土の自然遺物—とくに出土動物骨について—」 『先山遺跡』 喜界町教育委員会, pp.36-37.

西中川 駿 (2006) 「知名町住吉貝塚出土の動物遺体」 『住吉貝塚』 知名町教育委員会, pp.108-114.

西中川 駿 (2013a) 「喜界町大ウフ遺跡出土のウシ遺体」 『城久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡』 喜界町教育委員会, pp.173-178.

西中川 駿 (2013b) 「喜界町大ウフ遺跡 (平成 19 年度, 21・22 年度調査) 出土の動物遺体」 『城久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡』 喜界町教育委員会, pp.179-185.

西中川 駿 (2013c) 「喜界町半田遺跡出土の動物遺体」 『城

久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡』 喜界町教育委員会, pp.298-300.

西中川 駿ほか (1991) 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛, 馬の渡来時期とその経路に関する研究』 平成 2 年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 B) 成果報告書.

松元光春・西中川駿 (1985) 「長浜金久遺跡出土の動物骨」 『長浜金久遺跡—新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書』 鹿児島県教育委員会, pp.223-229.

宮城良真・亀島慎吾・野崎拓司 (2013) 「喜界島崩り遺跡発掘調査速報」 奄美考古第 7 号, pp.70-74.

Driesch, A. (1976) A Guide to the Measurements of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1.

第168表 崩り遺跡平成23～24年度調査において採集された脊椎動物遺体の種名一覧

* 縄文後～晩期のウシは中世資料の混入と思われる。

和名	学名	縄文後～晩期		中世		年代不明	
		ピックアップ	水洗選別	ピックアップ	水洗選別	ピックアップ	
軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES							
メジロザメ科	属・種不明	Carcharhinidae	gen. et sp. Indet.	○?	○		
ネズミザメ科	ホオジロザメ属	Lamnidae	<i>Carcharodon</i> sp.			○	
サメ類	科不明	Lamniformes?	family indet.	○	○	○	
硬骨魚綱 OSTEICHTHYES							
アナゴ科	属・種不明	Congridae	gen. et sp. Indet.	○			
ウツボ科	属・種不明	Muraenidae	gen. et sp. Indet.	○	○	○	
ダツ科	属・種不明	Belonidae	gen. et sp. Indet.			○	
ハタ科	マハタ型	Serranidae	cf. <i>Epinephelus</i>	○	○	○	
	属・種不明		gen. et sp. Indet.	○	○	○	
フエダイ科	属・種不明	Lutjanidae	gen. et sp. Indet.		○		
イスズミ科	属・種不明	Kyphosidae	gen. et sp. Indet.	○			
タイ科	クロダイ属	Sparidae	<i>Acanthopagrus</i> sp.	○?	○		
	メイチダイ属		<i>Gymnocranius</i> sp.		○		
フエフキダイ科	フエフキダイ属	Lethrinidae	ハマフエフキ型	<i>Lethrinus</i> cf. <i>L. nebulosus</i>		○	
			アマミフエフキ型	<i>Lethrinus</i> cf. <i>L. amamianus</i>		○	
			種不明	<i>Lethrinus</i> sp.	○	○	
			属・種不明	gen. et sp. Indet.	○	○	
ベラ科	タキベラ型	Labridae	cf. " <i>Bodianus perditio</i> "	○			
	ベラ科A		sp. A	○			
	ベラ科B		sp. B	○	○		
	属・種不明		gen. et sp. Indet.		○	○	
ブダイ科	イロブダイ属	Scaridae	<i>Balbometopon</i> sp.	○			
	アオブダイ属		<i>Scarus</i> sp.	○	○	○	
アイゴ科	アイゴ属	Siganidae	<i>Siganus</i> sp.	○	○	○	
			属・種不明	gen. et sp. Indet.	○	○	○
ニザダイ科	属・種不明	Acanthrinidae	gen. et sp. Indet.	○	○	○	
モンガラカワハギ科	属・種不明	Balistidae	gen. et sp. Indet.	○	○	○	
ハコフグ科?	属・種不明	Ostraciidae	gen. et sp. Indet.		○	○	
フグ科	属・種不明	Tetraodontidae	gen. et sp. Indet.	○			
ハリセンボン科	属・種不明	Diodontidae	gen. et sp. Indet.	○	○	○	
爬虫綱 REPTILIA							
ヘビ亜目	科不明	Serpentes	family indet.	○		○	
ウミガメ科	属・種不明	Cheloniidae	gen. et sp. Indet.	○	○		
鳥綱 AVES							
目不明		Order indet.		○	○	○	
哺乳綱 MAMMALIA							
ネズミ科	ネズミ亜科	Muridae	Murinae	○	○		
	属・種不明		gen. et sp. Indet.	○	○	○	
イノシシ科	イノシシ	Suidae	<i>Sus scrofa</i>	○	○	○?	
ウシ科	ウシ	Bovidae	<i>Bos taurus</i>	○*	○	○	
ウマ科	ウマ	Equidae	<i>Equus ferus</i>		○		
クジラ目	科不明	Cetacea (large)	family indet.	○			
ヒト科	ヒト	Hominidae	<i>Homo sapiens</i>		○		

第169表 崩り遺跡平成23～24年度調査においてピックアップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(1)

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr 破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損

*2 同一骨が割れて複数の破片になっていると考えられる場合は1とカウントした。<>を付したものはNISPの算定対象外。

時期	遺構名	層	区	ドット 番号	資料 番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数 *2	サイズ/ 計測	保存状態	備考
縄文後～晩期	SH01	I	J-2	23	107	ハタ科	歯骨	R		1		軽焼	おそらくマハタ型
縄文後～晩期	SH01	II	J-2	62	-	イノシシ	下顎M3		L	1	計測不可	溶解進行→歯冠のみ残存	第3咬頭には咬耗みられず
縄文後～晩期	SH01		J-2		16	クジラ類	不明	fr		1		焼(灰色)	おそらく加工品
縄文後～晩期	SH02	I	J-3		325	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		焼	
縄文後～晩期	SH02	I	J-3	2	102	骨ではない							
縄文後～晩期	SH03	I・II	J-2・3		63	ブダイ科	上咽頭歯			<1>		エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SH03	一括	J-2・3		52	ニザダイ科	尾椎			1		良好	
縄文後～晩期	SH03	I・II	J-2・3	60	47	フグ科	前上顎/歯骨	fr		1			フグ科前上顎骨/歯骨のエナメル質部分が多数の針状薄板に分解したもの。
縄文後～晩期	SH03	I・II	J-2・3	18	318	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1		エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SH03	I・II	J-2・3	62	48	哺乳類(同定不可)	四肢骨	mfr		<1>		焼(灰色)	中型陸獣(イノシシ/イヌ?)
縄文後～晩期	SH03	一括	J-1・2		330	哺乳類(同定不可)	四肢骨	mfr		<1>		焼	
縄文後～晩期	SH03	I・II	J-2・3	60	47	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		焼(灰色)	
縄文後～晩期	SH04	床直	K-2		101	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH05	一括	K-2		7	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH05	I	K-2		327	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		焼	海獣か
縄文後～晩期	SH05	一括	K-2		7	炭化物		fr		<1>			
縄文後～晩期	SH05	I	K-2		167	骨ではない?							磯か
縄文後～晩期	SH05		K-2	203	340	フェエキダイ科	歯骨		R	1			
縄文後～晩期	SH05		K-2	228	169	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	大		
縄文後～晩期	SH05		K-2	288	176	アオブダイ属	歯骨		R	1	大	溶解進行	
縄文後～晩期	SH05		K-2		11	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1			おそらくアオブダイ属
縄文後～晩期	SH05	1	K-2	35	60	フグ科	前上顎/歯骨	fr		1			フグ科前上顎骨/歯骨のエナメル質部分が多数の針状薄板に分解したもの。
縄文後～晩期	SH05	1	K-2		182	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1		エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SH05		K-2		12	鳥類/哺乳類	不明(長骨)	mfr		<1>		焼(白色)	中型陸獣(イノシシ/イヌ)?。緻密質は薄い→鳥類の可能性もある。
縄文後～晩期	SH05	1	K-2		181	海獣/ウミガメ	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH05		K-2	256	170	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH05		K-2	105	168	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH05		K-2	269	171	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH05		K-2	270	172	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH05		K-2	273	173	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH05		K-2	274	174	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH05		K-2	275	175	骨(同定不可)	不明	fr		多数			多数の小骨片が土中に散在
縄文後～晩期	SH05		K-2	288	176	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH05		K-2	286	177	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH05	下	K-2		183	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			海獣/ウミガメ?
縄文後～晩期	SH05		K-2		184	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH05		K-2	285	178	骨ではない?							炭化材か
縄文後～晩期	SH05	床直上	K-2		179	資料なし							
縄文後～晩期	SH05	下	K-2		180	骨なし							
縄文後～晩期	SH06		K-3		163	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH07	攪乱?	K-3		54	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
縄文後～晩期	SH08		L-3	7	153	タキベラ型	下咽頭骨			1	大	やや溶解進行	
縄文後～晩期	SH08		L-3	6	152	アオブダイ属	歯骨		L	1	大	良好	
縄文後～晩期	SH08		L-3	6	152	ブダイ科	尾椎			1		良好	
縄文後～晩期	SH08		L-3	6	152	真骨類(保留)	腹椎			1		良好	
縄文後～晩期	SH08		L-3	5	151	大型クジラ類	不明	fr		1		良好	
縄文後～晩期	SH08		L-3	4	150	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH08		L-3	7	153	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	海獣類か
縄文後～晩期	SH10		J-1・2		9	クジラ類	不明	fr		1		焼(灰色)	
縄文後～晩期	SH10		J-1・2		10	クジラ類	不明	fr		1		良好	
縄文後～晩期	SH10		J-1・2	6	164	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH10		J-1・2	21	165	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		焼	
縄文後～晩期	SH10	床直	J-1・2		33	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			海獣/ウミガメ?
縄文後～晩期	SH12	一括	J・K-2		103	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH12	II	J・K-2	147	-	イノシシ	後臼歯	破片	?	1		溶解進行→歯冠のみ残存	
縄文後～晩期	SH12	II	J・K-2		105	イノシシ?	脛骨?	(p-)?	?	1		焼	
縄文後～晩期	SH12	II	J・K-2	156	45	哺乳類(同定不可)	四肢骨	m		1		溶解進行	大型種
縄文後～晩期	SH12	一括	J・K-2		14	サンゴ?		fr					
縄文後～晩期	SH12	I	J・K-2	180	104	磯							
縄文後～晩期	SH12	II	J・K-2		106	骨ではない							
縄文後～晩期	SH13		K-2	68	18	ブダイ科	腹椎			1		良好	
縄文後～晩期	SH13		K-2		55	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	70	121	サメ類	歯			1		エナメル質のみ残存	細身の三角形・歯なし→メジロザメ科下顎歯?
縄文後～晩期	SH14	層暗褐色	K-2	3	108	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1		エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	61	114	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1		エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2		13	鳥類/哺乳類	不明(長骨?)	fr		<1>		溶解進行	

第170表 崩り遺跡平成23～24年度調査においてピックアップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(2)

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr 破片。(p)・(d)は未癒合の骨端のみ、(p-)・(d-)は骨端未癒合脱落、(p-)・(d-)は骨端のみ欠損。

*2 同一骨が割れて複数の破片になっていると考えられる場合は1とカウントした。<>を付したものはNISPの算定対象外。

時期	遺構名	層	区	ドット番号	資料番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	サイズ/計測	保存状態	備考
縄文後～晩期	SH14	I	K-2		4	クジラ類	不明	fr		1		良好。わずかに焼(灰色)	加工品(管状製品?)の可能性大
縄文後～晩期	SH14	II	K-2		8	クジラ類	不明	fr		1		焼(黒/灰色)	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	60	113	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	64	115	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14		K-2	77	2a	哺乳類?	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14		K-2	78	2b	哺乳類?	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2		20	哺乳類?	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14		k-2	35	109	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	46	110	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	47	111	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	48	112	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	65	116	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	66	117	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	67	118	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	698	119	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	69	120	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH14		K-2		3	バミス?		fr					
縄文後～晩期	SH14	II	K-2		8	バミス		fr					
縄文後～晩期	SH14	II	K-2		8	炭化物		fr					
縄文後～晩期	SH14	II	K-2	71	122	骨ではない							おそらく木材
縄文後～晩期	SH15		L-1	57	199	アオブダイ属	下咽頭骨			1	大		
縄文後～晩期	SH15	上	L-1		197	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1		溶解進行	
縄文後～晩期	SH15		L-1		195	クジラ類	不明	fr		1		焼	加工品(棒状製品)の可能性あり
縄文後～晩期	SH15		L-1	42	198	哺乳類(同定不可)	大腿骨?	大腿骨頭?		1			未癒合
縄文後～晩期	SH15		L-1	42	198	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<10>			
縄文後～晩期	SH15		L-1	28	196	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH16-19-21	一括	K・L-2		69	アオブダイ属	上咽頭骨	fr		1		溶解進行	
縄文後～晩期	SH16-19-21	一括	K・L-2		68	フグ科	前上顎/歯骨	fr		1		溶解進行	
縄文後～晩期	SH16-20		K・L-2		137	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	四肢骨骨端部か
縄文後～晩期	SH16-21	一括	K・L-2		136	ブダイ科	前上顎骨	柄状突起fr	R	1		良好	
縄文後～晩期	SH17	I	K-2		138	サメ類	歯			1			大型三角形・歯面明瞭→ホジロザメ属か
縄文後～晩期	SH17		K-2		139	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH18	床直	K-2	156	140	サメ類	椎骨			1	大	溶解進行→観察後崩壊	
縄文後～晩期	SH18	I	K-2		143	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1			エナメル部分のみ残存
縄文後～晩期	SH18	I	K-2		144	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1			エナメル部分のみ残存
縄文後～晩期	SH18	I	K-2		144	イノシシ	脛骨	(p)		1			
縄文後～晩期	SH18		-	97	17	哺乳類/ウミガメ	不明	fr		<1>		良好	イノシシ/ウミガメ?
縄文後～晩期	SH18	I	K-2		145	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<2>		焼1	
縄文後～晩期	SH18	I	K-2		6	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH18		K-2	213	141	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH18		K-2	216	142	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH18?		K-2		46	骨/サンゴ礁?		fr		<1>			おそらくサンゴ礁
縄文後～晩期	SH20	I	L-2		19	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1			エナメル部分のみ残存
縄文後～晩期	SH21		L-2	105	124	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	大		
縄文後～晩期	SH21		L-2	140	129	真骨類(同定不可)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SH21		L-2	195	134	ネズミ亜科	下顎骨			1		溶解進行	
縄文後～晩期	SH21		L-2		5	哺乳類(同定不可)	四肢骨	mfr		<2>		焼(白色)	中型陸獣(イノシシ/イヌ?)
縄文後～晩期	SH21	I	L-2		123	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		保存良好	研磨痕あり→加工品
縄文後～晩期	SH21		L-2	109	125	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH21		L-2	119	126	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	海獣骨の可能性もある(きわめて不確実)
縄文後～晩期	SH21		L-2	156	131	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH21		L-2		135	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		焼	
縄文後～晩期	SH21		L-2		5	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH21		L-2	123	127	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH21		L-2	126	128	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH21		L-2	153	130	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SH21		L-2	174	132	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH21		L-2	185	341	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH21		L-2	194	342	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH21		L-2	190	343	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH21		L-2	187	133	骨ではない?							石灰岩破片か
縄文後～晩期	SH21		L-2	150	329	資料なし							骨製垂飾
縄文後～晩期	SH22-23		K-1・2		146	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1			エナメル部分のみ残存
縄文後～晩期	SH23	I	K-1・2		212	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		焼	
縄文後～晩期	SH23	I	K-1・2		213	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		焼	
縄文後～晩期	SH23	I	K-1・2		214	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1			エナメル部分のみ残存→薄板に分解
縄文後～晩期	SH25		K・L-2		194	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH26		K・L-1	41	215	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			哺乳類/ウミガメ?
縄文後～晩期	SH	I	L-1	48	322	ハタ型	腹椎			1	大	良好	
縄文後～晩期	SH	I		46	219	アオブダイ属	下咽頭骨			1	大		

第171表 崩り遺跡平成23～24年度調査においてピックアップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(3)

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損

*2 同一骨が割れて複数の破片になっていると考えられる場合は1とカウントした。<>を付したものはNISPの算定対象外。

時期	遺構名	層	区	ドット 番号	資料 番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数 *2	サイズ/ 計測	保存状態	備考
縄文後～晩期	SH		不明		1	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1		エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SH	I		36	218	ウミガメ類?	不明	fr		<2>			
縄文後～晩期	SH		不明		1	哺乳類/ウミガメ	不明	fr		<1>		焼(白色)+亀裂	人骨ではない、イノシシ/ウミガメ?
縄文後～晩期	SH		J-K-2		15	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		焼(黒/灰色)	
縄文後～晩期	SH	I		34	216	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH	I		35	217	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SH	I	J-K-2		220	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SK01		L-3		17	149	ハタ科	前上顎/歯骨		1	大	溶解進行→観察後崩壊	おそらくスジアラ型
縄文後～晩期	SK01		L-3		9	148	フグ科	前上顎/歯骨		1	ごく大	溶解進行→一部崩壊開始	不明針状薄板はこれが分解したもの
縄文後～晩期	SK01		L-3		8	147	骨(同定不可)	不明	fr	<1>		溶解進行	魚骨か
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		11	158	ブダイ科	前上顎/歯骨		1		溶解進行	
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		4	157	ブダイ科	尾椎		1		良好	
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		4	157	モンガラカワハギ科	吻端部		1	大	良好	部位名要確認
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		154	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1		エナメル部分のみ残存→薄板に分解	
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		156	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1		エナメル部分のみ残存→薄板に分解	
縄文後～晩期	SK02	一括	L・K-3		162	真骨類(同定不可)	鱭棘			<1>		焼	
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		25	追加02	イノシシ?	下顎骨?	連合部?	?	1	溶解進行	切歯歯根?あり
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		26	追加21	クジラ類?	不明	fr	1		良好	おそらく製品(骨刀?), 洗浄のうえ要再確認
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		20	159	大型クジラ類	不明	fr	1		やや焼	
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		161	161	大型クジラ類	不明	fr	1		やや焼	資料番号159に類似→同一骨か
縄文後～晩期	SK02	I	L・K-3		155	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<2>		焼	
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		162	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<3>		溶解進行	
縄文後～晩期	SK02		L・K-3	0.24	追加01	骨(同定不可)	不明	fr		+		溶解進行	
縄文後～晩期	SK02		L・K-3	29	追加03	骨(同定不可)	不明	fr		+		溶解進行	
縄文後～晩期	SK02		L・K-3		160	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
縄文後～晩期	SK03	I	K-3		追加16	ハタ型	腹椎			1		良好	
縄文後～晩期	SK03	I	K-3		追加16	タキベラ型	上咽頭骨		R	1		良好	
縄文後～晩期	SK03	I	K-3		追加16	ベラ科A	下咽頭骨			1		溶解進行	
縄文後～晩期	SK03	I	K-3		追加16	イロブダイ属?	上咽頭骨		L?	1	大	溶解進行	ブダイ属の可能性もある
縄文後～晩期	SK03	I	L-3	6	187	イロブダイ属	下咽頭骨			1	大		
縄文後～晩期	SK03	I	K-3		追加16	アオブダイ属	下咽頭骨			1	大	溶解進行	
縄文後～晩期	SK03	I	K-3		追加16	ハリセンボン科	前上顎/歯骨			1	ごく大	溶解進行	
縄文後～晩期	SK03		K-3		185	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1		エナメル部分のみ残存→薄板に分解	
縄文後～晩期	SK03	I	K-3	7	188	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1		エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SK03		K-3		193	真骨類(同定不可)	腹椎			1			
縄文後～晩期	SK03	一括	K-3		190	ウミガメ類	下顎骨	fr	R	1		焼	
縄文後～晩期	SK03	I	K-3		追加16	ウミガメ類	甲板	fr		<1>		良好	
縄文後～晩期	SK03	I	K-3		追加16	イノシシ	環椎			1		良好	
縄文後～晩期	SK03	一括	K-3		189	大型クジラ類	椎骨	椎頭板		1			
縄文後～晩期	SK03		K-3		191	大型クジラ類	椎骨	椎頭板		1			
縄文後～晩期	SK03		K-3		193	大型クジラ類	椎骨	椎頭板		1			
縄文後～晩期	SK03		K-3		192	大型クジラ類	不明	fr		4			
縄文後～晩期	SK03	I	K-3	2	186	哺乳類(未同定)	未確認			1		やや焼	重い
縄文後～晩期	SK03		K-3		追加08	骨(同定不可)	不明	fr		+		溶解進行→小骨片化	
縄文後～晩期	SK03	I	K-3	34	追加12	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
縄文後～晩期	SK06		K-2	9	205	アオブダイ属	下咽頭骨			1			
縄文後～晩期	SK06	II	K-2		21	ブダイ科	下咽頭骨	エナメル部		<1>		エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SK06	I	K-2	56	207	ブダイ科	下咽頭骨	遊離歯		<4>			
縄文後～晩期	SK06		K-2		211	ハリセンボン科	前上顎/歯骨	エナメル部		1		エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SK06	II	K-2		50	真骨類(同定不可)	不明(棘)	fr		<1>		焼(灰色)	
縄文後～晩期	SK06		K-2	30	206	イノシシ	下顎M3		L	1			
縄文後～晩期	SK06	I	K-2	72	52	イノシシ	下顎M3		R	1	L32.5	エナメル部分のみ残存	
縄文後～晩期	SK06		K-2	132	-	イノシシ	下顎M3	第3咬頭	R	1	第3咬頭での歯冠最大幅11.7	溶解進行→歯冠のみ残存 前内側咬頭のみ咬耗あり	
縄文後～晩期	SK06	II	K-2		210	イノシシ	脛骨	pfr	L	1		焼	
縄文後～晩期	SK06		K-2		211	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<2>		焼	
縄文後～晩期	SK06	I	K-2	56	207	骨(同定不可)	不明	fr		<2>			
縄文後～晩期	SK06		K-2	130	208	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SK06		K-2	131	209	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
縄文後～晩期	SK07	II	K-3・4		追加19	サメ類	椎骨			1	中	良好	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		344	サメ類	椎骨			2	中		メジロザメ型
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	ハタ科	主上顎骨	ant	R	1	やや大	良好	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	マハタ型	歯骨		R	1	中	良好	
縄文後～晩期	SK07	II	K-3・4		追加10	ハタ型	尾椎			1		良好	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	イスズミ科	前上顎/歯骨		?	1		溶解進行	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	ベラ科B	上咽頭骨		L	1		良好	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	アオブダイ属	下咽頭骨			1	やや小	良好	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加09	アオブダイ属	下咽頭骨			1	中	良好	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		204	アオブダイ属	下咽頭骨			1			

第172表 崩り遺跡平成23～24年度調査においてピックアップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(4)

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr 破片。(p)・(d)は未癒合の骨端のみ、(p-)・(d-)は骨端未癒合脱落、<p->・<d->は骨端のみ欠損。

*2 同一骨が割れて複数の破片になっていると考えられる場合は1とカウントした。<>を付したものはNISPの算定対象外。

時期	遺構名	層	区	ドット 番号	資料 番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数 #2	サイズ/ 計測	保存状態	備考	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4	5	追加13	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	ごく大	良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加04	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	中	良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加09	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	やや小	良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加11	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	小	良好		
縄文後～晩期	SK07	II	K-3・4		追加19	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	大	良好	歯骨LRと同一個体?	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加20	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	大	良好		
縄文後～晩期	SK07	II	K-3・4		追加19	アオブダイ属	歯骨		L	1	大	良好		
縄文後～晩期	SK07	II	K-3・4		追加19	アオブダイ属	歯骨		R	1	大	良好	歯骨Lと同一個体	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	アオブダイ属	上咽頭骨		L	1	大	良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	アオブダイ属	下咽頭骨			1	中	良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	アオブダイ属	前上顎/歯骨	ant		?	?	大	良好	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加11	ブダイ科	角骨		L	1	大	良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	ブダイ科	方骨		L	1	大	良好		
縄文後～晩期	SK07	II	K-3・4		追加10	ブダイ科	方骨		L	1	大	良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		344	ブダイ科	方骨		R	1	大			
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加07	ブダイ科	腹椎			1		溶解進行		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	ブダイ科	尾椎			5		良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	ブダイ科	尾椎			1		良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加07	ブダイ科	尾椎			1		溶解進行		
縄文後～晩期	SK07	II	K-3・4		追加10	ブダイ科	尾椎			1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	ブダイ科	尾椎			1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	ニザダイ科	尾椎			3	大	良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	ニザダイ科	橋鱗			2		良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	ニザダイ科	橋鱗(可動型)			1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	ニザダイ科	橋鱗(可動型)			1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	真骨類(保留)	腹椎			1		良好	フェフキダイ科?	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	真骨類(保留)	尾椎			1		良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加11	真骨類(保留)	尾椎			1		良好		
縄文後～晩期	SK07	II	K-3・4		追加19	真骨類(保留)	尾椎			1		良好	ハタ?	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	真骨類(同定不可)	角骨		R	1		良好	フェフキダイ科?	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加20	真骨類(同定不可)	方骨			1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	真骨類(同定不可)	腹椎			1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	真骨類(同定不可)	尾椎			1	ごく小	良好	同定不可	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	真骨類(同定不可)	尾椎			1		良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加07	真骨類(同定不可)	尾椎			1		溶解進行		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加20	真骨類(同定不可)	尾椎			1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加14	真骨類(同定不可)	不明	fr		+		良好		
縄文後～晩期	SK07	II	K-3・4		201	真骨類(同定不可)	不明	fr		<6>				
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	ウミガメ類	指骨			1		焼(灰色)		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		200	ウミガメ類	椎骨板			2				
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	ウミガメ類	縁骨板	fr		1		良好、わずかに焼(灰色)		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		53	ウミガメ類	縁骨板	fr		2		良好、わずかに焼?		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	ウミガメ類	縁骨板?			1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	ウミガメ類	甲板	fr		<1>		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		53	ウミガメ類	甲板	fr		<1>		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	ウミガメ類	甲板	fr		<1>		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		203	ウミガメ類?	甲板?	fr		<1>				
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加11	鳥類?	四肢骨	mfr		<1>		焼		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		204	鳥類(同定不可)	四肢骨	m		1		焼		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	ネズミ科	下顎		R	1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	イノシシ	顎頭1		R	1		良好		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加06	イノシシ?	頸椎	棘突起fr		1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		203	イノシシ	仙椎			1				
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	イノシシ	肩甲骨	関節欠	R	1		良好	幼獣	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加17	イノシシ	上腕骨	m-<d->	L	1		良好	若獣	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		345	イノシシ	上腕骨	m-<d->	R	1			幼獣	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		追加20	イノシシ	尺骨	滑車切痕-m	L	1		焼	幼獣	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		345	イノシシ	尺骨	滑車切痕下部-m	R	1			幼獣	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加11	イノシシ	距骨		R	1		良好	幼獣	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加07	イノシシ	第2中足骨	p	L	1		焼		
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加04	イノシシ	第5中足骨	w	L	1		良好		
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	哺乳類(同定不可)	椎骨	椎体		1		良好	やや小型、イヌ?	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		51	哺乳類(同定不可)	椎骨	椎弓		2		良好	やや小型、イヌ?	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		202	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>			加工品	
縄文後～晩期	SK07		K-3・4		344	骨(同定不可)	不明	fr		<10>				
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加04	貝類						溶解進行	貝ブロック	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加05	貝類						溶解進行	貝ブロック	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加09	巻貝	fr					焼	タカラガイ?	
縄文後～晩期	SK07	I	K-3・4		追加11	巻貝	fr					溶解進行		
縄文後～晩期?	SD01		P・Q-18		59	真骨類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好		
縄文後～晩期	一括	III-b	R-12		292	ウシ	踵骨		R	1		良好		
縄文後～晩期	一括		K-1・2		301	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>			ヒト機骨近位端の可能性あり	
縄文後～晩期	一括		U-26		280	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好		

第173表 崩り遺跡平成23～24年度調査においてピックアップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(5)

*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr 破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p)・(d)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損

*2 同一骨が割れて複数の破片になっていると考えられる場合は1とカウントした。<>を付したものはNISPの算定対象外。

時期	遺構名	層	区	ドット 番号	資料 番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数 *2	サイズ/ 計測	保存状態	備考
縄文後～晩期	一括		K-1	2	300	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
中世(11～12C)	P11	N-11			331	真骨類(同定不可)	不明	fr		<1>			ハリセンボン科棘か
中世(11～12C)	P77	P-17			321	ブダイ科	尾椎			1		良好	
中世(11～12C)	P197	N-6			332	ベラ科	前上顎骨		R	1	やや大	良好	
中世(11～12C)	P206	O-16			333	タイ型	腹椎			1		良好	おそろくフエフキダイ科
中世(11～12C)	P206	O-16			333	ベラ科	前上顎/歯骨			1		良好	
中世(11～12C)	P226	N-14			312	サメ類	椎骨			1	中	良好	メジロザメ型(隔壁タイプ)
中世(11～12C)	P227	P-15			27	ハリセンボン科	歯骨+右角骨			1	中: エナメル 幅17		
中世(11～12C)	P307	N-15			334	ハタ型	腹椎			1		良好	
中世(11～12C)	P308	N-15			320	アオブダイ属	歯骨		L	1	中	良好	
中世(11～12C)	P340	Q-19			34	フジツボ?		fr		<1>		焼(灰色)	
中世(11～12C)	P357	N-15			222	タイ型	尾椎			1		良好	
中世(11～12C)	P357	N-15			222	真骨類(同定不可)	椎骨	fr		1		良好	
中世(11～12C)	P357	N-15			222	真骨類(同定不可)	不明	fr		<12>		良好	
中世(11～12C)	P386	N-16			315	クロダイ属	歯骨		L	1	大		
中世(11～12C)	P386	N-16			315	アオブダイ属	上咽頭骨		R	1	中		
中世(11～12C)	P416	O-15			223	ハリセンボン科	棘			<1>		良好	
中世(11～12C)	P416	O-15			223	真骨類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
中世(11～12C)	P430	P-15			31	ウシ	踵骨	w	L	1	GB39.0	良好	
中世(11～12C)	P443	P-15			26	ハタ科	角骨		L	1	中		
中世(11～12C)	P450	P-15			39	真骨類(同定不可)	鱗棘			<1>		良好	
中世(11～12C)	P458	-			25	ハタ科	腹椎			1	大:椎体 幅30.5	良好	
中世(11～12C)	P485	L-12			319	フエフキダイ科	角骨		R	1	中		
中世(11～12C)	P515	N-15			224	メイチダイ属	前上顎骨		L	1		良好	
中世(11～12C)	P517	O-15			56	フエフキダイ科	腹椎			1		良好	
中世(11～12C)	P521	N-15			23	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		焼(灰色)	
中世(11～12C)	P523	N-15			335	真骨類(保留)	尾椎			1		焼	ベラ科か
中世(11～12C)	P528	O-15			61	ウツボ科	椎骨			1	大	良好	
中世(11～12C)	P541	O-15			336	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<2>		焼	
中世(11～12C)	P544	O-15			58	クロダイ属?	角骨		R	1		良好	
中世(11～12C)	P544	O-15			58	真骨類(同定不可)	不明	fr		<2>		良好	
中世(11～12C)	P544	O-15			58	ネズミ科	尺骨	w		1		良好	
中世(11～12C)	P547	O-15			44	フエフキダイ科?	腹椎			1		良好	
中世(11～12C)	P551	P-15			35	フエフキダイ科	前上顎骨	w	L	1		良好	
中世(11～12C)	P551	P-15			35	真骨類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
中世(11～12C)	P566	J-4			67	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
中世(11～12C)	P587	Q-18			36	巻貝		fr				焼(灰色)	
中世(11～12C)	P609	Q-19			33	巻貝		fr					
中世(11～12C)	P618	Q-19			28	哺乳類(同定不可)	四肢骨	mfr		<1>		良好、わずかに焼(灰色)	中型陸獣(イノシシ?)
中世(11～12C)	P629	P-18			57	真骨類(同定不可)	尾椎			1		良好	フエフキダイ科?
中世(11～12C)	P635	O-15			225	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
中世(11～12C)	P637	N-15			226	クロダイ属	主上顎骨		L	1	大	良好	
中世(11～12C)	P637	N-15			226	タイ型	尾椎			1		良好	
中世(11～12C)	P638	N-15			227	ハタ科	擬鱗骨		L	1	中	良好	
中世(11～12C)	P638	N-15			227	フエフキダイ属	口蓋骨		R	1	やや大	良好	
中世(11～12C)	P638	N-15			227	フエフキダイ科	歯骨	post		1		良好	
中世(11～12C)	P638	N-15			227	真骨類(同定不可)	鱗棘			<1>		良好	
中世(11～12C)	P639	N-15			228	フエフキダイ科	主上顎骨		L	1	大	良好	
中世(11～12C)	P642	N-15			316	クロダイ属	角骨		R	1	やや大		
中世(11～12C)	P642	N-15			316	真骨類(同定不可)	不明	fr		<1>			
中世(11～12C)	P649	O-15			317	真骨類(同定不可)	鱗棘	fr		<1>			
中世(11～12C)	P649	O-15			317	真骨類(同定不可)	不明	fr		数点			
中世(11～12C)	P656	-			230	骨ではない							
中世(11～12C)	P659	N-15			229	サメ類	椎骨			1	中	良好	
中世(11～12C)	P715	N-15			231	フエフキダイ科	主上顎骨		R	1	大	良好	メイチダイか
中世(11～12C)	P717	N-15			64	クロダイ属	方骨		L	1	大	良好	
中世(11～12C)	P717	N-15			64	モンガラカワハギ科	腰帯			1		良好	
中世(11～12C)	P717	N-15			64	真骨類(同定不可)	尾椎			1		良好	同定不可
中世(11～12C)	P717	N-15			64	真骨類(同定不可)	不明	fr		<7>		良好	
中世(11～12C)	P727	N-15			66	マハタ型	前上顎骨	ant	R	1	中	良好	
中世(11～12C)	P727	N-15			66	真骨類(同定不可)	尾椎			1	ごく小	良好	同定不可
中世(11～12C)	P731	O-16			65	真骨類(同定不可)	不明	fr		<2>		良好	
中世(11～12C)	P732	O-16			62	フエフキダイ科	角骨		R	1	大	良好	
中世(11～12C)	P732	O-16			62	フエフキダイ科	腹椎			1	大	良好	
中世(11～12C)	P732	O-16			62	真骨類(保留)	前鰓蓋骨		R	1		良好	おそろくフエフキダイ科
中世(11～12C)	P742	L-6			337	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		焼	魚骨か
中世(14～15C)	P804	-			追加15	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		溶解進行	
中世(14～15C)	P900	U-28			232	ブダイ科	尾椎			1	中	良好	
中世(14～15C)	P900	U-28			233	フエフキダイ科	歯骨	fr		1		良好	
中世(14～15C)	P900	U-28			233	フエフキダイ科	角骨		R	1	ごく大	良好	
中世(14～15C)	P900	U-28			233	ベラ科B	下咽頭骨			1	やや大	良好	

第174表 崩り遺跡平成23～24年度調査においてピックアップによって採集された脊椎動物遺体の同定結果(6)

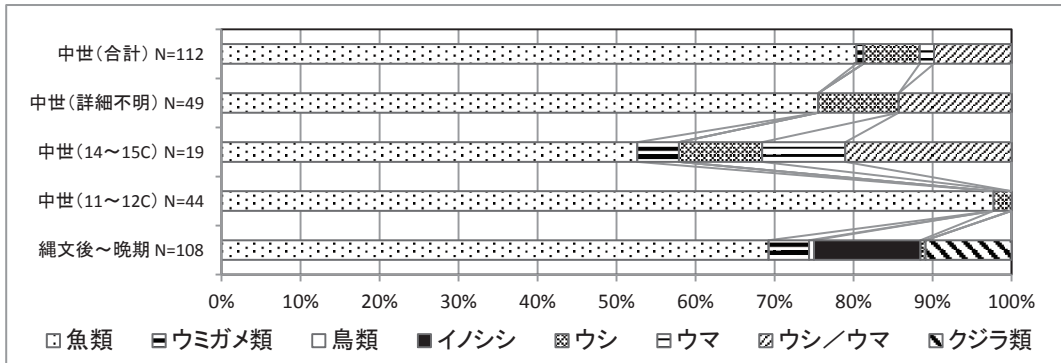
*1 残存位置凡例: w完存, p近位端, m骨幹, d遠位端, fr破片, (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は骨端のみ欠損。

*2 同一骨が割れて複数の破片になっていると考えられる場合は1とカウントした。<>を付したものはNISPの算定対象外。

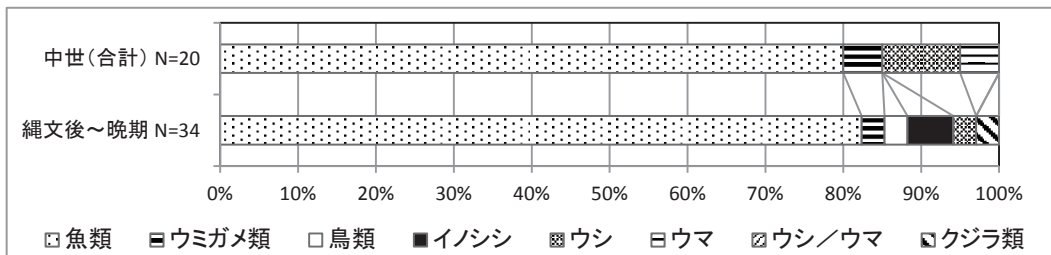
時期	遺構名	層	区	ドット 番号	資料 番号	種類	部位	残存位置*1	左右	数 *2	サイズ/ 計測	保存状態	備考
中世(14～15C)	P909		U-28		233	ペラ科	前上顎骨		L	1	大	良好	
中世(14～15C)	P909		U-28		233	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
中世(14～15C)	P914		U-28		234	マハタ型	前上顎骨		L	1	やや大	良好	
中世(14～15C)	P914		U-28		234	マハタ型	前鰓蓋骨		R	1	やや大	良好	
中世(14～15C)	P914		U-28		234	アオブダイ属	下咽頭骨			1	ごく大	良好	
中世(14～15C)	P914		U-28		234	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	ごく大	良好	
中世(14～15C)	P914		U-28		234	ブダイ科	尾椎			10		良好	
中世(14～15C)	P914		U-28		234	真骨類(保留)	尾椎			4		良好	
中世(14～15C)	P914		U-28		234	真骨類(同定不可)	鱗棘			多数		良好	
中世(14～15C)	P914		U-28		234	真骨類(同定不可)	不明	fr		多数		良好	
中世(14～15C)	P919		U-28		235	ハタ科	角骨		L	1	やや大	良好	
中世(14～15C)	P949		U-27		236	真骨類(同定不可)	鱗棘			<1>		良好	
中世(14～15C)	P980		V-28		237	哺乳類?	尾椎?			1		良好	
中世(14～15C)	P991		V-28		238	アオブダイ属	歯骨		R	1	大	良好	
中世(14～15C)	P995		V-28		239	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
中世(14～15C)	P1000		V-29		240	ウシ	下顎M1/2		L	1		良好	
中世(14～15C)	P1003		V-27		241	フェフキダイ科	歯骨		R	1	大	良好	おそらくフェフキダイ属、カットマーク
中世(14～15C)	P1011		V-26		242	タイ型	尾椎			1		良好	
中世(14～15C)	P1011		V-26		242	真骨類(保留)	腹椎			1		良好	ペラ科か
中世(14～15C)	P1073		U-27		243	タイ型	尾椎			1		良好	
中世(14～15C)	P1073		U-27		243	真骨類(同定不可)	鱗棘			<1>		良好	
中世(14～15C)	P1076		U-76		245	真骨類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
中世(14～15C)	P1076		U-26		244	哺乳類(同定不可)	四肢骨	m		1		良好	野生イノシシより大→ウシ/ウマ/ブタ?
中世(14～15C)	P1077		U-26		246	フェフキダイ科	前上顎骨		R	1	大	良好	
中世(14～15C)	P1077		U-26		246	フェフキダイ科	角骨		R	1	大	良好	
中世(14～15C)	P1077		U-26		246	真骨類(同定不可)	鱗棘			<1>		良好	
中世(14～15C)	P1084		V-26		247	ウシ	基節骨	w		1		良好	
中世(14～15C)	P1090		V-26		248	ウシ/ウマ	肋骨	m		2			
中世(14～15C)	P1092		V-26		249	フェフキダイ科	主上顎骨		L	1	中		
中世(14～15C)	P1092		V-26		249	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>			
中世(14～15C)	P1097		V-27		250	真骨類(同定不可)	鱗棘			<1>		良好	
中世(14～15C)	P1108		V-27		251	ペラ科B	下咽頭骨			1	中	良好	
中世(14～15C)	P1108		V-27		251	骨(同定不可)	不明	fr		<1>		焼	
中世(14～15C)	P1113		V-26		252	真骨類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
中世(14～15C)	P1116		V-26		253	骨(同定不可)	不明	fr		<1>			
中世(14～15C)	P1145		V-27		254	真骨類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	
中世(14～15C)	P1146		V-27		255	マハタ型	前鰓蓋骨		L	1	やや大	良好	
中世(14～15C)	P1146		V-27		255	ハタ科	角骨		L	1	やや大	良好	
中世(14～15C)	P1196		S-20		256	骨ではない							植物
中世(14～15C)	P1203		U-28		257	ウシ/ウマ	肋骨	m		1			
中世(11～12C)	土坑墓2号	I	O-15		328	フェフキダイ科?	方骨		L	1			
中世(11～12C)	土坑墓2号	I	O-15		328	真骨類(同定不可)	鱗棘	fr		<1>			
中世(11～12C)	土坑墓2号	I	O-15		302	真骨類(同定不可)	鱗棘			<1>		良好	
中世(11～12C)	土坑墓2号	I	O-15		328	真骨類(同定不可)	不明	fr		<1>			
中世(11～12C)	土坑墓2号	I	O-15		328	カエル/鳥類?	四肢骨	m		1			ごく小型
主に15C～17C	風葬墓2		25		338	資料なし							
主に15C～17C	風葬墓2		57		339	資料なし							
中世	SK17		Q-18		37	フェフキダイ科	腹椎			1		焼(灰色)	
中世?	SK25		Q-19		221	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<1>		良好	肋骨か
中世(14～15C)	石列1号	石組中	V-29	獣骨2	259	ウマ	尺骨	滑車切痕	R	1		良好	カットマーク
中世(14～15C)	石列1号	石組中	V-29	獣骨1	258	ウマ	中足骨	d	L	1	Bd43.5+(44±)	良好	
中世(14～15C)	石列1号	石組中	V-29	獣骨3	260	ウシ/ウマ	仙椎			1		良好	カットマーク
中世(11～12C)	一括	IV-a	L-11		289	哺乳類(同定不可)	四肢骨	mfr		<1>		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-12		290	ヒト?	頭蓋骨?	fr		1		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	565	310	ヒト	頭蓋骨	fr		1		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	560	311	ヒト	頭蓋骨	fr		1		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	559	314	ヒト		fr		1		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	561	283	ヒト?	頭蓋骨?	fr		1		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	566	285	ヒト?	頭蓋骨?	fr		1		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	567	286	ヒト?	頭蓋骨?	fr		1		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	287	287	ヒト?	頭蓋骨?	fr		1		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	562	313	哺乳類(同定不可)	四肢骨	mfr		<2>		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	562	313	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<4>		焼3	
中世(11～12C)	一括	IV-a	N-13	563-2	284	哺乳類(同定不可)	不明	fr		<3.>		焼	
中世(11～12C)	一括	IV-a	O-15		288	クロダイ属	前上顎骨		L	1	大	良好	
中世(11～12C)	一括	IV-a	O-15		288	ペラ科	歯骨		L	1		良好	
中世(14～15C)	一括	III-a	V-27・28		262	ウシ/ウマ	四肢骨	mfr		<1>			
中世(14～15C)	一括	III-b	V-29		263	骨ではない							貝
中世(14～15C)	一括	III-c	U-29		264	マハタ型	前上顎骨		R	1	やや小	良好	
中世(14～15C)	一括	III-c	U-29		264	ハマフェキ型	前上顎骨		L	1	やや小	良好	
中世(14～15C)	一括	III-c	U-29		264	アマミフェキ型	前上顎骨		L	1	大		
中世(14～15C)	一括	III-c	U-29		264	フェフキダイ属	口蓋骨		L	1	中	良好	

第179表 崩り遺跡平成23～24年度調査においてピックアップによって採集された脊椎動物遺体の組成.

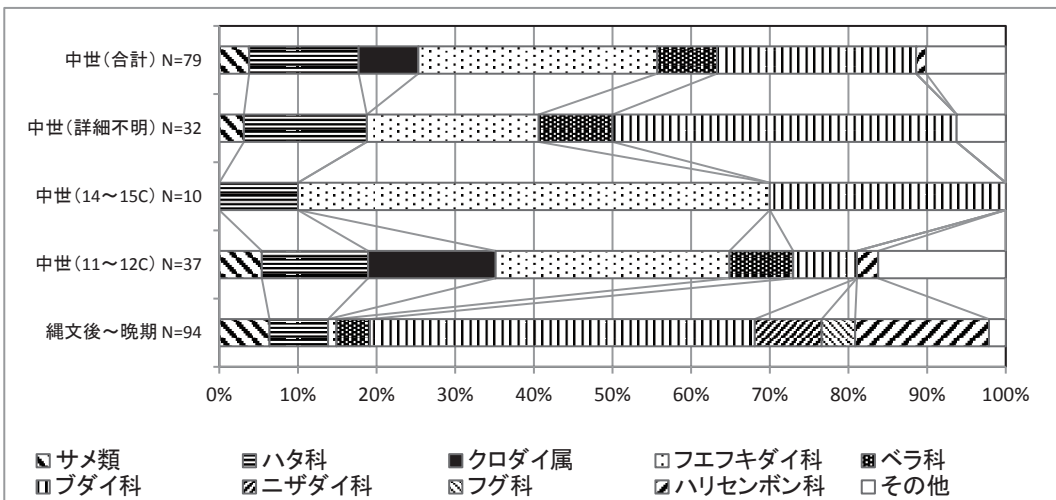
種類	NISP(同定標本数)						MNI(最小個体数)		
	縄文後 ～晩期	中世				年代不明	縄文後 ～晩期	中世	
		11～12C	14～15C	詳細不明	中世合計			11～12C	14～15C
メジロザメ科	0	0	0	1	1	0	0	0	0
ホオジロザメ属	0	0	0	0	0	1	0	0	0
サメ類	6	2	0	0	2	2	1	1	0
ウツボ科	0	1	0	0	1	0	0	1	0
マハタ型	1	1	1	3	5	0	1	1	1
ハタ科	3	3	0	2	5	0	-	-	-
ハタ型	3	1	0	0	1	0	-	-	-
フェダイ科	0	1	0	0	1	0	0	1	0
イズミ科	1	0	0	0	0	0	1	0	0
クロダイ属	0	6	0	0	6	0	0	2	0
メイチダイ属	0	1	0	0	1	0	0	1	0
ハマフエフキ型	0	0	1	0	1	0	0	0	1
アマミフエフキ型	0	0	1	0	1	0	0	0	1
フエフキダイ属	0	1	1	0	2	0	0	1	-
フエフキダイ科	1	9	3	7	19	0	1	-	-
タイ型	0	3	0	2	5	0	-	-	-
タキベラ型	2	0	0	0	0	0	1	0	0
ベラ科A	1	0	0	0	0	0	1	0	0
ベラ科B	1	0	0	2	2	0	1	0	0
ベラ科	0	3	0	1	4	0	0	1	0
イロブダイ属	2	0	0	0	0	0	1	0	0
アオブダイ属	22	2	2	3	7	0	8	1	1
ブダイ科	22	1	1	11	13	0	-	-	-
ニザダイ科	8	0	0	0	0	0	1	0	0
モンガラカワハギ科	1	1	0	0	1	0	1	1	0
フグ科	4	0	0	0	0	0	2	0	0
ハリセンボン科	16	1	0	0	1	+	8	1	0
真骨類(保留)	5	2	0	5	7	0	-	-	-
真骨類(同定不可)	9	4	0	0	4	0	-	-	-
ウミガメ類	8	0	1	0	1	0	1	0	1
カエル/鳥類?	0	1	0	0	1	0	-	-	-
鳥類(同定不可)	1	0	0	0	0	0	1	0	0
ネズミ亜科	1	0	0	0	0	0	1	-	-
ネズミ科	1	1	0	0	1	0	-	1	0
イノシシ	18	0	0	0	0	0	2	0	0
イノシシ?	3	0	0	0	0	0	-	-	-
ウシ	1	1	2	5	8	5	1	1	1
ウマ	0	0	2	0	2	1	0	0	1
ウシ/ウマ	0	0	4	7	11	+	-	-	-
クジラ類	17	0	0	0	0	0	1	0	0
哺乳類(未同定)	1	0	0	0	0	0	-	-	-
哺乳類(同定不可)	5	0	1	2	3	1	-	-	-
哺乳類?(同定不可)	+	0	0	1	1	+	-	-	-
ヒト	0	8	0	1	9	0	0		0
合計	164	54	20	53	127	10	35	14	7



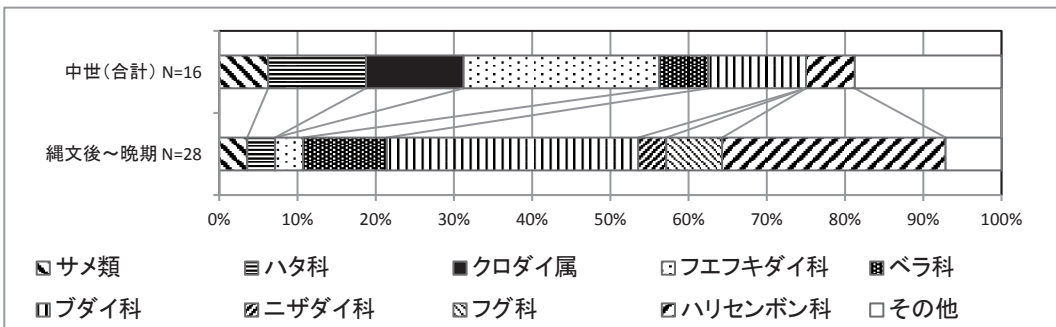
第276図 崩り遺跡平成23~24年度調査においてピックアップによって採集された脊椎動物遺体の組成(NISP比).
ネズミ・ヒトを除く



第277図 崩り遺跡平成23~24年度調査においてピックアップによって採集された脊椎動物遺体の組成(MNI比).
ネズミ・ヒトを除く. 中世は11~12Cおよび14~15Cの各MNIの合計.



第278図 崩り遺跡平成23~24年度調査においてピックアップによって採集された魚類遺体の組成(NISP比).



第279図 崩り遺跡平成23~24年度調査においてピックアップによって採集された魚類遺体の組成(MNI比).
中世は11~12Cおよび14~15Cの各MNIの合計.

第180表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(1)

*1 残存位置略号凡例については第169表を参照。 *2 <>を付したものはNISPPの算定対象外。 <aa>ごく多量、<a>多量、<c>中量、<r>少量。

時期	遺構名	試料番号	層	区	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	計測	損傷	備考
縄文後～晩期	SH01	373	床直	J-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH01	373	床直	J-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH01	521	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<3>			
縄文後～晩期	SH01	521	床直	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
縄文後～晩期	SH01	521	床直	K-2	ニザダイ科	第1椎骨			1		焼	
縄文後～晩期	SH01	561	床直	J-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<2>			
縄文後～晩期	SH03	749	I・II	J-2-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH03	749	I・II	J-2-3	ニザダイ型	歯			<1>			
縄文後～晩期	SH04	234	I・II	K-2	タイ型	臼歯			<a>			
縄文後～晩期	SH04	234	I・II	K-2	アオブダイ属	歯骨		R	1		焼	
縄文後～晩期	SH04	234	I・II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH04	234	I・II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH04	234	I・II	K-2	ニザダイ型	歯			<1>			
縄文後～晩期	SH04	379	I・II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH04	379	I・II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH04	379	I・II	K-2	ニザダイ科	腹椎			1		焼	
縄文後～晩期	SH04	200	I・II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<6>			
縄文後～晩期	SH04	208	I・II	K-2	サメ類	歯	fr		1			エナメル質のみ残存。刺刀状・鋸歯なし→アオザメ/ミズウニ?
縄文後～晩期	SH04	208	I・II	K-2	タイ型	臼歯			<5>			
縄文後～晩期	SH04	208	I・II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH04	208	I・II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH04	208	I・II	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<2>			
縄文後～晩期	SH04	231	I・II	K-2	タイ型	臼歯			<a>			
縄文後～晩期	SH04	231	I・II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH04	231	I・II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH04	231	I・II	K-2	モンガラカワハギ科	鱗			<1>			
縄文後～晩期	SH04	231	I・II	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<1>			
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	ウツボ科	椎骨			1			
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	タイ型	臼歯			<2>			1点はおそらくフェフキダイ科
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	アオブダイ属	下咽頭骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	アオブダイ属	前上顎/歯骨		?	2			
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	真骨類(未同定)	腹椎			1			
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	真骨類(保留)	椎骨			2			ハタ?
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<2>			
縄文後～晩期	SH04	116	I	K-2	コウイカ?	甲?	fr		<1>		焼	
縄文後～晩期	SH04	1150	I-A	K-2	タイ型	臼歯			<1>			
縄文後～晩期	SH04	1150	I-A	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH04	1150	I-A	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH04	1151	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<2>			
縄文後～晩期	SH04	1149	III	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH04	1019	IV	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH04	198	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<5>			
縄文後～晩期	SH04	213	II	K-2	サメ類	歯	fr		1			刺刀状・鋸歯なし/ごく微弱→アオザメ/ミズウニ?
縄文後～晩期	SH04	213	II	K-2	タイ型	臼歯			<c>			一部はおそらくフェフキダイ科
縄文後～晩期	SH04	213	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH04	213	II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<2>			
縄文後～晩期	SH04	224	II	K-2	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。刺刀状・鋸歯なし→アオザメ/ミズウニ?
縄文後～晩期	SH04	224	II	K-2	タイ型	臼歯			<1>			おそらくフェフキダイ科
縄文後～晩期	SH04	224	II	K-2	タイ型	臼歯			<r>			
縄文後～晩期	SH04	224	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH04	224	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH04	224	II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH04	224	II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH04	224	II	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<1>			
縄文後～晩期	SH04	817	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH04	817	床直	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH04	821	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<2>			
縄文後～晩期	SH04	821	床直	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
縄文後～晩期	SH04	821	床直	K-2	ニザダイ科	第1椎骨			1		焼	
縄文後～晩期	SH04	922	床直	K-2	タイ型	臼歯			<1>			ひょうたん型→フェフキダイ科/ペラ科下咽頭歯?
縄文後～晩期	SH04	922	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH04	922	床直	K-2	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		2			
縄文後～晩期	SH04	922	床直	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH05	425	I～III	K-2	タイ型	臼歯			<c>			かなり大型のものあり→ヨコシマクロダイ?(orペラ下咽頭歯?)
縄文後～晩期	SH05	425	I～III	K-2	アオブダイ属	前上顎骨		R	1		焼	
縄文後～晩期	SH05	425	I～III	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH05	425	I～III	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH05	826	I～III	K-2	サメ類	歯	fr		1		焼	三角形・鋸歯なし。表面に擦痕→加工品か、
縄文後～晩期	SH05	826	I～III	K-2	ブダイ科	下咽頭骨	fr		2		焼	
縄文後～晩期	SH05	826	I～III	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<aa>			
縄文後～晩期	SH05	826	I～III	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH05	826	I～III	K-2	ニザダイ型	歯			<3>			
縄文後～晩期	SH05	826	I～III	K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			1		焼	
縄文後～晩期	SH05	417	I～III	K-2	タイ型	臼歯			<r>			フェフキダイ科と思われるものを含む

第181表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(2)

*1 残存位置略号凡例については第169表を参照。 *2 <>を付したものはNISIPの算定対象外。 <aa>ごく少量、 <a>少量、 <c>中量、 <r>少量。

時期	遺構名	試料番号	層	区	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	計測	損傷	備考
縄文後～晩期	SH05	417	I～III	K-2	ブダイ科	下咽頭骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH05	417	I～III	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH05	417	I～III	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH05	188	I～III	K-2	タイ型	犬歯			<1>			
縄文後～晩期	SH05	188	I～III	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<3>			
縄文後～晩期	SH05	188	I～III	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
縄文後～晩期	SH05	188	I～III	K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			3			
縄文後～晩期	SH05	188	I～III	K-2	小型鳥類	未筋骨			1			
縄文後～晩期	SH05	888	I	K-2	ハタ科	前上顎/歯骨	fr		1			焼
縄文後～晩期	SH05	888	I	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH05	888	I	K-2	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		2			
縄文後～晩期	SH05	888	I	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH05	888	I	K-2	ニザダイ科	腹椎			2			焼
縄文後～晩期	SH05	888	I	K-2	真骨類(保留)	椎骨			2			焼
縄文後～晩期	SH05	888	I	K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			2			焼1
縄文後～晩期	SH05	316	II	K-2	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。 三角形・鋸歯あり→メジロザメ科上顎歯? /ホホジロザメ?
縄文後～晩期	SH05	316	II	K-2	ハタ科	第1椎骨			1	小		焼
縄文後～晩期	SH05	316	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH05	316	II	K-2	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		2			焼
縄文後～晩期	SH05	316	II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<3>			
縄文後～晩期	SH05	117	床直	K-2	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。 大型の斜行鋸歯が複数並ぶ→イタチザメ?
縄文後～晩期	SH05	117	床直	K-2	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。 三角形・鋸歯あり→メジロザメ科上顎歯? /ホホジロザメ?
縄文後～晩期	SH05	117	床直	K-2	ハタ型	腹椎			1	小		焼
縄文後～晩期	SH05	117	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<2>			
縄文後～晩期	SH05	117	床直	K-2	ハリセンボン科	棘			<1>			焼
縄文後～晩期	SH05	117	床直	K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH05	401	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH05	401	床直	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH05	958	炉跡	K-2	アオブダイ属	上咽頭骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH05	958	炉跡	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH05	958	炉跡	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH05	958	炉跡	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<r>			
縄文後～晩期	SH06	265	I	K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH06	265	I	K-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<2>			
縄文後～晩期	SH06	265	I	K-3	真骨類(同定不可)	歯			<1>			
縄文後～晩期	SH06	359	I	K-3	サメ類	歯			1			細身の三角形・鋸歯なし→メジロザメ科下顎歯?
縄文後～晩期	SH06	359	I	K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH06	359	I	K-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH07	202	I	K-3	タイ型	白歯			<1>			
縄文後～晩期	SH07	202	I	K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH07	202	I	K-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH07	212	II	K-3	タイ型	白歯			<1>			
縄文後～晩期	SH07	212	II	K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<7>			
縄文後～晩期	SH07	212	II	K-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
縄文後～晩期	SH08	484	I	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH08	439	I	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH08	439	I	L-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH09	565	I	L-3	ウツボ科	歯骨	fr		1			焼
縄文後～晩期	SH09	565	I	L-3	タイ型	白歯			<1>			
縄文後～晩期	SH09	565	I	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH09	565	I	L-3	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		2			焼1
縄文後～晩期	SH09	565	I	L-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH09	565	I	L-3	真骨類(同定不可)	歯			<1>			
縄文後～晩期	SH09	901	I	L-3	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。 細身の三角形・鋸歯なし→メジロザメ科下顎歯?
縄文後～晩期	SH09	901	I	L-3	タイ型	白歯			<r>			
縄文後～晩期	SH09	901	I	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH09	901	I	L-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH09	901	I	L-3	真骨類(同定不可)	歯			<r>			
縄文後～晩期	SH09	901	I	L-3	真骨類(同定不可)	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH09	937	I	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH09	937	I	L-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH09	937	I	L-3	真骨類(同定不可)	歯			<r>			
縄文後～晩期	SH10	397	I	J-1・2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH10	397	I	J-1・2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
縄文後～晩期	SH10	397	I	J-1・2	モンガラカワハギ科	鱗			<1>			焼
縄文後～晩期	SH10	397	I	J-1・2	真骨類(同定不可)	歯			<1>			
縄文後～晩期	SH10	383	I	J-1・2	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。 三角形・鋸歯なし?
縄文後～晩期	SH10	383	I	J-1・2	タイ型	白歯			<1>			
縄文後～晩期	SH10	383	I	J-1・2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH10	383	I	J-1・2	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1			焼
縄文後～晩期	SH10	814	I	J-1・2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<1>			
縄文後～晩期	SH11	3	I	J-2	ウツボ科	椎骨			1	小		焼
縄文後～晩期	SH11	3	I	J-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH11	3	I	J-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH11	3	I	J-2	ブダイ科	腹椎			1	小		焼
縄文後～晩期	SH11	3	I	J-2	ニザダイ科	尾椎			1	小		焼
縄文後～晩期	SH11	553	床直	J-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<3>			

第182表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(3)

*1 残存位置略号凡例については第169表を参照。 *2 <>を付したものはNISPの算定対象外。 <aa>ごく多量、<a>多量、<c>中量、<r>少量。

時期	遺構名	試料番号	層	区	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	計測	損傷	備考
縄文後～晩期	SH11	961	床直	J-2	ウツボ科	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH11	961	床直	J-2	アオブダイ属	前上顎骨		L	1			焼
縄文後～晩期	SH11	961	床直	J-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH11	961	床直	J-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH11	961	床直	J-2	真骨類(同定不可)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SH12	247	I	J-K-2	ベラ科	第1椎骨			1		小	
縄文後～晩期	SH12	247	I	J-K-2	アオブダイ属	下咽頭骨	fr		1		小	
縄文後～晩期	SH12	247	I	J-K-2	アオブダイ属	前上顎/歯骨		?	1		小	
縄文後～晩期	SH12	247	I	J-K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH12	247	I	J-K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH12	247	I	J-K-2	ブダイ科	腹椎			1			
縄文後～晩期	SH12	247	I	J-K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			1			おそらくニザダイ科
縄文後～晩期	SH12	385	I	J-K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH12	385	I	J-K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH12	385	I	J-K-2	真骨類(同定不可)	歯			<1>			
縄文後～晩期	SH12	1018	II	J-K-2	ニザダイ科	第1椎骨			1			
縄文後～晩期	SH12	1018	II	J-K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			2			
縄文後～晩期	SH12	374	床直	J-K-2	アオブダイ属	前上顎/歯骨			1		小	
縄文後～晩期	SH12	374	床直	J-K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH12	376	床直	J-K-2	タイ型	臼歯			<2>			
縄文後～晩期	SH12	376	床直	J-K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH12	376	床直	J-K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH12	381	床直	J-K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH12	381	床直	J-K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH12	381	床直	J-K-2	ヘビ類	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。細身の三角形・鋸歯なし→メジロサメ科下顎歯?
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	ニザダイ科	第1椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	真骨類(保留)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	ネズミ亜科	臼歯			1			
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	イノシシ	臼歯	fr		1			
縄文後～晩期	SH12	507	床直	J-K-2	小型哺乳類	末節骨			1			
縄文後～晩期	SH12	754	床直	J-K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH12	754	床直	J-K-2	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH12	754	床直	J-K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH12	754	床直	J-K-2	ネズミ亜科	臼歯			1			
縄文後～晩期	SH12	773	床直	J-K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH12	773	床直	J-K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			2			
縄文後～晩期	SH13	277	I	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH13	277	I	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<3>			
縄文後～晩期	SH13	277	I	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<3>			
縄文後～晩期	SH13	337	II	K-2	真骨類(未同定)	第1椎骨			1			
縄文後～晩期	SH13	375	III	K-2	タイ型	臼歯			<1>			
縄文後～晩期	SH13	375	III	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH13	466	III	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH13	466	III	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
縄文後～晩期	SH14	544	I	K-2	アオブダイ属	前上顎/歯骨			1			
縄文後～晩期	SH14	544	I	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH14	544	I	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH14	413	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH14	457	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH14	457	II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH14	312	III	K-2	ブダイ科	下咽頭骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH14	312	III	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<2>			
縄文後～晩期	SH14	559	III	K-2	アオブダイ属	前上顎/歯骨	fr		2			焼
縄文後～晩期	SH14	559	III	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH14	559	III	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH15	98	L-1	L-1	ウツボ科	角骨		L	1			
縄文後～晩期	SH15	98	L-1	L-1	アオブダイ属	下咽頭骨	fr		2			
縄文後～晩期	SH15	98	L-1	L-1	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH15	98	L-1	L-1	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH15	98	L-1	L-1	ニザダイ科	第1椎骨			1			
縄文後～晩期	SH15	98	L-1	L-1	真骨類(同定不可)	椎骨			2			
縄文後～晩期	SH15	297	L-1	L-1	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<2>			焼1
縄文後～晩期	SH17	443	I-a・b	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<1>			
縄文後～晩期	SH17	443	I-a・b	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<1>			
縄文後～晩期	SH17	799	I-a・b	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH17	799	I-a・b	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH17	925	I	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH17	925	I	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH17	718	炉跡	K-2	ブダイ科	下咽頭骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH17	718	炉跡	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH17	718	炉跡	K-2	真骨類(同定不可)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SH17	398		K-2	アオブダイ属	前上顎/歯骨	fr		1			焼
縄文後～晩期	SH17	398		K-2	ブダイ科	下咽頭骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH17	398		K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			

第183表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(4)

*1 残存位置略号凡例については第169表を参照。 *2 <>を付したものはNISPの算定対象外。 <aa>ごく多量、<a>多量、<c>中量、<r>少量。

時期	遺構名	試料番号	層	区	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	計測	損傷	備考
縄文後～晩期	SH17	398		K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH17	398		K-2	ニザダイ科	第1椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH18	934	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH18	934	II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH18	934	II	K-2	ニザダイ科	腹椎			1			焼
縄文後～晩期	SH18	934	II	K-2	ニザダイ科	尾椎			1			
縄文後～晩期	SH18	934	II	K-2	ハコフグ科?	鱗板			<l>			焼
縄文後～晩期	SH18	934	II	K-2	真骨類(保留)	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH18	934	II	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<r>			
縄文後～晩期	SH18	812	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH18	812	床直	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH18	812	床直	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<l>			
縄文後～晩期	SH18	818	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH18	900	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH18	949	床直	K-2	マハタ型	歯骨		R	1		小	焼
縄文後～晩期	SH18	949	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH18	949	床直	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH18	949	床直	K-2	真骨類(保留)	椎骨			2			
縄文後～晩期	SH20	416	床直	L-2	マハタ型	歯骨		L	1		ごく小	
縄文後～晩期	SH20	416	床直	L-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH20	416	床直	L-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<l>			
縄文後～晩期	SH20	444		L-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH20	444		L-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH21	762	II	L-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH21	762	II	L-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH21	489		L-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH21	489		L-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH21	489		L-2	真骨類(保留)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SH22	1012	II	K-1	タイ型	臼歯			<l>			
縄文後～晩期	SH22	1012	II	K-1	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH22	1012	II	K-1	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH22	1012	II	K-1	ニザダイ科	尾椎			2			焼
縄文後～晩期	SH22	1012	II	K-1	真骨類(保留)	椎骨			2			焼
縄文後～晩期	SH22	1012	II	K-1	真骨類(同定不可)	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH22	286	I	K-1	タイ型	臼歯			<r>			
縄文後～晩期	SH22	286	I	K-1	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SH22	286	I	K-1	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH22	286	I	K-1	真骨類(保留)	椎骨			1			焼 ブダイ科?
縄文後～晩期	SH22-23	371	床直	K-L-1	ウツボ科	歯骨		L	1			焼
縄文後～晩期	SH22-23	371	床直	K-L-1	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH22-23	371	床直	K-L-1	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH22-23	371	床直	K-L-1	真骨類(保留)	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH22-23	371	床直	K-L-1	真骨類(同定不可)	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH23	108	床直	K-L-1	サメ類	歯	fr		1			エナメル質のみ残存。 剃刀状・鋸歯なし→アオザメ/ミズウニ?
縄文後～晩期	SH23	300	床直	K-L-1	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<l>			
縄文後～晩期	SH23	201	床直	K-L-1	ウツボ科	角骨		R	1		小	
縄文後～晩期	SH23	201	床直	K-L-1	マハタ型	歯骨		R	1		小	
縄文後～晩期	SH23	201	床直	K-L-1	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<l>			
縄文後～晩期	SH23	201	床直	K-L-1	モンガラカワハギ科?	背棘?	fr		1			焼
縄文後～晩期	SH23	201	床直	K-L-1	小型鳥類	指骨	d		1			
縄文後～晩期	SH24	406	I・II	L-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH24	406	I・II	L-2	真骨類(同定不可)	歯			<l>			
縄文後～晩期	SH24	389	I・II	L-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH24	280	床直	L-2	ウツボ科	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SH24	280	床直	L-2	ブダイ科	方骨		R	1			
縄文後～晩期	SH24	280	床直	L-2	真骨類(保留)	椎骨			2			ハタ型?・ウツボ?各1
縄文後～晩期	SH24	280	床直	L-2	真骨類(同定不可)	椎骨			5			焼2
縄文後～晩期	SH25	570	I・II	L-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH25	570	I・II	L-2	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH25	570	I・II	L-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH25	282	床直	L-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SH25	282	床直	L-2	真骨類(同定不可)	歯			<l>			
縄文後～晩期	SH26	28	床直	K-L-1	サメ類	歯			1			焼 エナメル質のみ残存。 三角形・鋸歯あり→メジロザメ科上顎歯?/ホホジロザメ?
縄文後～晩期	SH26	28	床直	K-L-1	アオブダイ属	上咽頭骨	fr		1			
縄文後～晩期	SH26	28	床直	K-L-1	真骨類(同定不可)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SH27	187	床直	K-2	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。 三角形(1辺やや屈曲)・鋸歯あり→おそらくメジロザメ科上顎歯
縄文後～晩期	SH27	187	床直	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<l>			
縄文後～晩期	SH27	720	I	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SH27	720	I	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<l>			
縄文後～晩期	SK01	360	I	L-3	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。 三角形・鋸歯あり→メジロザメ科上顎歯?/ホホジロザメ?
縄文後～晩期	SK01	360	I	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK01	360	I	L-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SK01	763	I	L-3	サメ類	歯	fr		1			焼 エナメル質のみ残存。 三角形・鋸歯あり→メジロザメ科上顎歯?/ホホジロザメ?
縄文後～晩期	SK01	763	I	L-3	ハタ型	腹椎			1			
縄文後～晩期	SK01	763	I	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK01	763	I	L-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			

第184表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(5)

*1 残存位置略号凡例については第169表を参照。 *2 <>を付したものはNISPPの算定対象外。 <aa>ごく多量、<a>多量、<c>中量、<r>少量。

時期	遺構名	試料番号	層	区	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	計測	損傷	備考
縄文後～晩期	SK01	763	I	L-3	真骨類(保留)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SK01	763	I	L-3	真骨類(同定不可)	前上顎/歯骨	fr		1		焼	
縄文後～晩期	SK02	772	I	L-K-3	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。細身の三角形・鋸歯なし→メジロザメ科下顎歯？
縄文後～晩期	SK02	772	I	L-K-3	ハタ科	前上顎/歯骨	fr		1		焼	
縄文後～晩期	SK02	772	I	L-K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK02	772	I	L-K-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SK02	772	I	L-K-3	真骨類(保留)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SK02	772	I	L-K-3	真骨類(同定不可)	歯			<c>			
縄文後～晩期	SK02	772	I	L-K-3	真骨類(同定不可)	尾部棒状骨			1		焼	
縄文後～晩期	SK02	772	I	L-K-3	イノシシ	白歯	fr		<c>			一つの歯が割れたものか
縄文後～晩期	SK02	377	I	L-K-3	タイ型	白歯			<l>			
縄文後～晩期	SK02	377	I	L-K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK02	377	I	L-K-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SK02	377	I	L-K-3	真骨類(保留)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SK02	377	I	L-K-3	真骨類(同定不可)	歯			<r>			
縄文後～晩期	SK02	377	I	L-K-3	イノシシ	白歯	fr		1			
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	マハタ型	歯骨		R	1	小		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	ハタ科?	方骨		L	1	小		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	フェウキダイ科	第1椎骨			1	小		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	タイ型	白歯			<c>			
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	アオブダイ属	上咽頭骨	fr		1	小		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	アオブダイ属	前上顎骨		L	1	小		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	アオブダイ属	前上顎骨		R	1	小		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	アオブダイ属	歯骨		R	1	やや小		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	ブダイ科	下咽頭骨	fr		1	大		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1	小	焼	
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	ブダイ科	尾椎			2	小		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	ニザダイ科	尾椎			2	小/中		
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	真骨類(保留)	椎骨			4			
縄文後～晩期	SK02	289	床直	L-K-3	真骨類(同定不可)	椎骨			5		焼1	
縄文後～晩期	SK03	576	I	K-3	ハタ型	腹椎			1			
縄文後～晩期	SK03	576	I	K-3	アオブダイ属	歯骨		L	1		焼	
縄文後～晩期	SK03	576	I	K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK03	576	I	K-3	ブダイ科	前上顎/歯骨			1			
縄文後～晩期	SK03	576	I	K-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK03	576	I	K-3	ニザダイ科	尾椎			1		焼	
縄文後～晩期	SK03	576	I	K-3	真骨類(未同定)	第1椎骨			1		焼	
縄文後～晩期	SK03	576	I	K-3	真骨類(同定不可)	歯			<r>			
縄文後～晩期	SK03	576	I	K-3	真骨類(同定不可)	椎骨			2			
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	ウツボ科	歯骨	fr		1		焼	
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	ハタ科	第1椎骨			1			
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	アオブダイ属	上咽頭骨	fr		2	小		
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	アオブダイ属	前上顎/歯骨			2			
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	ブダイ科	下咽頭骨	fr		2	大		
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	ニザダイ科	第1椎骨			1			
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	ニザダイ科	腹椎			1			
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	ニザダイ科	尾椎			2			
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	ニザダイ型	歯			<l>			
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	真骨類(保留)	椎骨			2			
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	真骨類(同定不可)	椎骨			6			
縄文後～晩期	SK03	447	I	K-3	小型哺乳類	末節骨			1			
縄文後～晩期	SK03	380	I	K-3	ウツボ科	角骨		R	1		焼	
縄文後～晩期	SK03	380	I	K-3	タイ型	白歯			<l>			
縄文後～晩期	SK03	380	I	K-3	アオブダイ属	前上顎骨		R	1		焼	
縄文後～晩期	SK03	380	I	K-3	アオブダイ属	前上顎/歯骨	fr		1			
縄文後～晩期	SK03	380	I	K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK03	380	I	K-3	真骨類(同定不可)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SK03	380	I	K-3	ヘビ類	椎骨			1		焼	
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	ウツボ科	椎骨			1			
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	マハタ型	前上顎/歯骨			1			
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	アオブダイ属	上咽頭骨	fr		5	大4, 小1		
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	アオブダイ属	前上顎骨		L	2	小		
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	アオブダイ属	歯骨		R	1	小		
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	アオブダイ属	前上顎/歯骨			2			
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	ブダイ科	下咽頭骨	fr		1			
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	ブダイ科	尾椎			1	大		
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	真骨類(保留)	椎骨			5			
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	真骨類(同定不可)	椎骨			7			
縄文後～晩期	SK03	488	I	K-3	ネズミ亜科	白歯			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アナゴ科	腹椎			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アナゴ科	腹椎			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ウツボ科	歯骨		R	1		焼	
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ウツボ科	歯骨	fr		1		焼	
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ウツボ科	椎骨			6			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	マハタ型	前上顎骨		R	1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	マハタ型	歯骨		L	2			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	マハタ型	歯骨		R	3			

第185表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(6)

*1 残存位置略号凡例については第169表を参照。 *2 <>を付したものはNISPの算定対象外。 <aa>ごく多量、<a>多量、<o>中量、<r>少量。

時期	遺構名	試料番号	層	区	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	計測	損傷	備考
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ハタ科	角骨		L	1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ハタ科?	方骨		R	2			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ハタ科	擬鎖骨		R	1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ハタ科	第1椎骨			2			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	クロダイ属?	前上顎骨	fr		1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	タイ型	臼歯			<r>			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ベラ科	前上顎骨		R	1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アオブダイ属	上咽頭骨	fr	-	5			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アオブダイ属	前上顎骨		L	5			焼1
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アオブダイ属	前上顎骨		R	4			焼1
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アオブダイ属	歯骨		L	3			焼1
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アオブダイ属	歯骨		R	4			焼1
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アオブダイ属	歯骨		R	1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ブダイ科	下咽頭骨	fr	-	3			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ブダイ科	下咽頭骨	fr		1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ブダイ科	角骨		R	1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ブダイ科	方骨		R	1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ブダイ科	腹椎			3			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アイゴ属?	方骨		R	1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	アイゴ属	尾椎			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ニザダイ科	擬鎖骨	m	L	1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ニザダイ科	第1椎骨			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ニザダイ科	腹椎			4			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ニザダイ科	尾椎			6			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ニザダイ科	尾椎			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	モンガラカワハギ科	鱗			<l>			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	真骨類(未同定)	第1椎骨			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	真骨類(未同定)	椎骨			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	真骨類(保留)	第1椎骨			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	真骨類(保留)	椎骨			25			焼6
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	真骨類(同定不可)	椎骨			46			焼2
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	真骨類(同定不可)	椎骨			10			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	真骨類(同定不可)	尾部棒状骨			2			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ヘビ類	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	鳥類(同定不可)	指骨			1			
縄文後～晩期	SK03	294	I	K-3	ネズミ亜科	臼歯			1			
縄文後～晩期	SK04	795		L-2	サメ類	歯			2			エナメル質のみ残存。三角形・鋸歯あり→メジロザメ科上顎歯?/ホホジロザメ?
縄文後～晩期	SK04	795		L-2	マハタ型	歯骨		R	1			
縄文後～晩期	SK04	795		L-2	アオブダイ属	前上顎/歯骨			1			
縄文後～晩期	SK04	795		L-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SK04	795		L-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SK04	795		L-2	真骨類(同定不可)	椎骨			4			焼3
縄文後～晩期	SK06	566	I・II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SK06	566	I・II	K-2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SK06	566	I・II	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<r>			
縄文後～晩期	SK06	825	II	K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK06	825	II	K-2	ブダイ科	前上顎/歯骨	fr		1			
縄文後～晩期	SK06	825	II	K-2	真骨類(同定不可)	歯			<r>			
縄文後～晩期	SK06	131		K-2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<l>			
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	メジロザメ科?	歯	ほぼw(一部欠)		1			焼?
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	ウツボ科	歯骨	fr		1			焼
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	ハタ科	第1椎骨			1			小 焼
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	タイ型	臼歯			<2>			
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	アオブダイ属	前上顎/歯骨	fr		2			
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	ブダイ科	下咽頭骨	fr		2			
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	真骨類(保留)	第1椎骨			1			
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	真骨類(保留)	椎骨			4			焼1
縄文後～晩期	SK07	348	I	K-3・4	真骨類(同定不可)	椎骨			4			
縄文後～晩期	SK08	721	I	K-1	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	SK08	721	I	K-1	真骨類(同定不可)	椎骨			1			焼
縄文後～晩期	SK09	345	I	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<aa>			
縄文後～晩期	SK09	345	I	L-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<aa>			
縄文後～晩期	SK09	524	II	L-3	サメ類	歯			1			エナメル質のみ残存。三角形・鋸歯あり→メジロザメ科上顎歯?/ホホジロザメ?
縄文後～晩期	SK09	524	II	L-3	タイ型	臼歯			<r>			
縄文後～晩期	SK09	524	II	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SK09	524	II	L-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	SK09	524	II	L-3	真骨類(同定不可)	歯			<r>			
縄文?	SD01	860		P-18・19	骨なし							
縄文後～晩期	SD03	509		O・P-16	骨なし							
縄文後～晩期	SD04	875		O-14	骨なし							
縄文後～晩期	SD06	906	III	O-15	骨なし							
縄文後～晩期	SD06	837		O-15	骨なし							
縄文後～晩期	一括	407	VI-b	K-1・2	ウツボ科	角骨		R	1			焼
縄文後～晩期	一括	407	VI-b	K-1・2	タイ型	臼歯			<r>			
縄文後～晩期	一括	407	VI-b	K-1・2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<aa>			
縄文後～晩期	一括	407	VI-b	K-1・2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<r>			
縄文後～晩期	一括	407	VI-b	K-1・2	真骨類(同定不可)	歯			<r>			

第186表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(7)

*1 残存位置略号凡例については第169表を参照。 *2 <>を付したものはNISPの算定対象外。 <aa>ごく多量、<a>多量、<c>中量、<r>少量。

時期	遺構名	試料番号	層	区	種類	部位	残存位置*1	左右	数*2	計測	損傷	備考
縄文後～晩期	一括	474	VI-b	L-3・2	タイ型	臼歯			<r>			
縄文後～晩期	一括	474	VI-b	L-3・2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<a>			
縄文後～晩期	一括	474	VI-b	L-3・2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	一括	822	VI-b	J-K-2	ウツボ科	歯骨		R	1			
縄文後～晩期	一括	822	VI-b	J-K-2	アオブダイ属	前上顎骨		L	1			
縄文後～晩期	一括	822	VI-b	J-K-2	ブダイ科	第1椎骨			2			
縄文後～晩期	一括	822	VI-b	J-K-2	真骨類(同定不可)	角骨			1			焼
縄文後～晩期	一括	558	VI-b	K-1・2	ウツボ科	歯骨	fr		1			
縄文後～晩期	一括	558	VI-b	K-1・2	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<c>			
縄文後～晩期	一括	558	VI-b	K-1・2	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
中世か?	P0318	948			骨なし							
中世	P0393	404		K-12	真骨類(保留)	椎骨			1			
中世	P0556	304		J-4	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<2>			
中世	P0556	304		J-4	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
中世	P0718	935		N-15	ハリセンボン科	棘			<1>			
中世	P0731	481		O-16	同定対象資料なし							
中世	P0732	919		O-16	ウツボ科	角骨		L	1			
中世	P0732	919		O-16	ハタ型	腹椎			1			
中世	P0732	919		O-16	タイ型	犬歯			<2>			
中世	P0732	919		O-16	タイ型	尾椎			2			
中世	P0732	919		O-16	モンガラカワハギ科	腹椎			1			
中世	P0732	919		O-16	モンガラカワハギ科	鱗			<3>			
中世	P0732	919		O-16	真骨類(未同定)	角骨			1			
中世	P0732	919		O-16	真骨類(未同定)	腹椎			1			
中世	P0732	919		O-16	真骨類(保留)	椎骨			4			
中世	P0732	919		O-16	真骨類(保留)	鱗			<1>			
中世	P0732	919		O-16	真骨類(同定不可)	椎骨			3			
中世	P0759	895		O-15	骨なし							
中世	P0962	487		V-27	ウツボ科	椎骨			2			
中世	P0962	487		V-27	マハタ型	前鰓蓋骨		R	1			小
中世	P0962	487		V-27	ブダイ科	尾椎			2			やや小
中世	P0962	487		V-27	ニザダイ科	尾椎			1			
中世	P0962	487		V-27	真骨類(同定不可)	尾部棒状骨			1			
中世	P0980	296		V-28	タイ型	尾椎			1			
中世	P0980	296		V-28	モンガラカワハギ科	背鱗棘			1			焼
中世	P0980	296		V-28	真骨類(保留)	椎骨			2			焼1
中世	P1074	716		U-27	ダツ科	腹椎			2			
中世	P1074	716		U-27	ダツ科	尾椎			1			
中世	P1074	716		U-27	ハタ型	腹椎			1			
中世	P1074	716		U-27	タイ型	犬歯			<3>			
中世	P1074	716		U-27	タイ型	臼歯			<1>			
中世	P1074	716		U-27	タイ型	腹椎			1			
中世	P1074	716		U-27	タイ型	尾椎			2			
中世	P1074	716		U-27	アイゴ属	尾椎			1			
中世	P1074	716		U-27	ニザダイ科	腹椎			1			
中世	P1074	716		U-27	ニザダイ科	尾椎			1			
中世	P1074	716		U-27	モンガラカワハギ科	腹椎			1			焼
中世	P1074	716		U-27	モンガラカワハギ科	鱗			<1>			
中世	P1074	716		U-27	真骨類(保留)	椎骨			2			焼1
中世	P1074	716		U-27	真骨類(保留)	鱗			<2>			
中世	P1074	716		U-27	真骨類(同定不可)	椎骨			1			
中世	P1074	716		U-27	真骨類(同定不可)	尾部棒状骨			2			
中世	P1074	716		U-27	鳥類(同定不可)	指骨			1			焼
中世	P1141	450		U-25	同定対象資料なし							
中世	P1192	105										
中世	P1200	120	下層	V-27	骨なし							
中世	P1201	110	中層	V-28	同定対象資料なし							ほとんど骨なし
中世	P1251	804		M11E	骨なし							
中世	P1251	929		M-11	骨なし							
中世	SK23	7		P-18	同定対象資料なし							
中世	一括	19	III	Q-19	同定対象資料なし							
中世か?	一括	943	III	P-14	同定対象資料なし							
中世か?	一括	914	III	P-14	同定対象資料なし							
中世	一括	334	III	K-3	ハタ科	第1椎骨			1			小
中世	一括	334	III	K-3	タイ型	臼歯			<1>			おそらくフエフキダイ科
中世	一括	334	III	K-3	アオブダイ属	前上顎骨		R	1			小
中世	一括	334	III	K-3	ブダイ科	下咽頭骨	fr		3			大 焼1
中世	一括	334	III	K-3	ニザダイ科	尾椎			2			小/中 焼
中世	一括	334	III	K-3	真骨類(保留)	椎骨			1			
中世	一括	334	III	K-3	真骨類(同定不可)	椎骨			4			焼2
中世	一括	334	III	K-3	真骨類(同定不可)	尾部棒状骨			1			
中世	一括	954	III	H-13	骨なし							
中世	一括	586	III	M・N-12	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<1>			
中世	一括	453	III	L-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
中世	一括	107	IV-a	N-13	同定対象資料なし							
中世か?	焼01	293	I	K-3	タイ型	臼歯			<1>			
中世か?	焼01	293	I	K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<r>			
中世か?	焼01	293	I	K-3	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
中世	焼02	283	I	K-3	ウツボ科	椎骨			1			焼
中世	焼02	283	I	K-3	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<3>			

第187表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の同定結果(8)

*1 残存位置略号凡例については第169表を参照. *2 <>を付したものはNISIPの算定対象外. <aa>ごく多量, <a>多量, <c>中量, <r>少量.

時期	遺構名	試料 番号	層	区	種類	部位	残存 位置*1	左右	数 *2	計測	損傷	備考
中世	焼02	283	I	K-3	ハコブグ科?	鱗板			<1>		焼	
中世	焼02	283	I	K-3	真骨類(同定不可)	歯			<1>			
中世	焼02	295	II	K-3	同定対象資料なし							
中世か?	焼03	109-a		T-20	同定対象資料なし							ほとんど骨なし
中世か?	焼03	109-b		T-20	同定対象資料なし							ほとんど骨なし
中世か?	焼04	483	I	V-30	ニザダイ科	腹椎			1			
中世か?	焼04	483	I	V-30	真骨類(未同定)	歯骨		R	1			
中世か?	焼04	483	I	V-30	小型哺乳類	基節骨			1			
中世か?	焼04	423		V-30	マハタ型	前上顎/歯骨			1		焼	
中世か?	焼04	423		V-30	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<2>			
中世か?	焼05	124	I	V-30	同定対象資料なし							ほとんど骨なし
中世か?	焼05	119	II	V-30	同定対象資料なし							ほとんど骨なし
中世か?	焼06	568		M-11	骨なし							
中世か?	敵01	766		M-12	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<1>			
中世か?	敵02	845		N-12	骨なし							
中世	敵05	751		M-12	骨なし							
中世か?	敵06	333		L-12	骨なし							
中世	敵07	738		M-11	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<1>			
中世	敵11	750		M-11	ブダイ科	咽頭歯(遊離歯)			<1>			
中世か?	敵12	523		L-3	骨なし							
中世か?	敵16	880		M-11	骨なし							
中世か?	敵17	513		L-2・3	骨なし							
中世か?	敵17	580		L-2・3	骨なし							
中世か?	敵17	855		L-2・3	骨なし							
中世か?	敵20	882		M-14	骨なし							
中世か?	敵24	500		M-13	骨なし							
中世か?	敵28	511		O-13	骨なし							
中世か?	敵29	584		O-13	骨なし							
中世か?	敵30	869		O-13	骨なし							
中世か?	敵32	866		N-14	骨なし							
中世	土坑墓1号	96		O-15								
中世	土坑墓1号	100		O-15	ダツ科	腹椎			1			
中世	土坑墓1号	100		O-15	イノシシ?	肋骨?	p?		1			
中世	土坑墓1号	101		O-15	ダツ科	腹椎			2			
中世	土坑墓1号	101		O-15	ニザダイ科	腹椎			7			
中世	土坑墓1号	101		O-15	ニザダイ科	尾椎			10			
中世	土坑墓1号	101		O-15	真骨類(同定不可)	椎骨			3			
中世	土坑墓1号	101		O-15	真骨類(同定不可)	尾部棒状骨			2			
中世	土坑墓1号	101		O-15	ヘビ類	椎骨			1			
中世	土坑墓1号	306		O-15	真骨類(同定不可)	尾部棒状骨			1			
中世	土坑墓2号	103	I	O-15	真骨類(同定不可)	椎骨			1			
中世	土坑墓2号	114	I	O-15	同定対象資料なし							ほとんど骨なし
中世	土坑墓2号	106	床直	O-15	ウツボ科	前上顎/歯骨	fr		1			
中世	土坑墓2号	106	床直	O-15	真骨類(未同定)	第1椎骨			1			
中世	土坑墓2号	106	床直	O-15	真骨類(同定不可)	歯			<3>			タイ型2
中世	土坑墓2号	89		O-15	アオブダイ属	下咽頭骨	fr		1			
中世	土坑墓2号	89		O-15	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
中世	土坑墓2号	111		O-15	同定対象資料なし							ほとんど骨なし
中世	土坑墓2号	130		O-15	真骨類(同定不可)	歯			<1>			
中世	土坑墓2号	130		O-15	ネズミ科	下顎1		R	1			小型
中世	土坑墓2号	551		O-15	ブダイ科	顎歯(遊離歯)			<1>			
中世	土坑墓2号	841		O-15	骨なし							

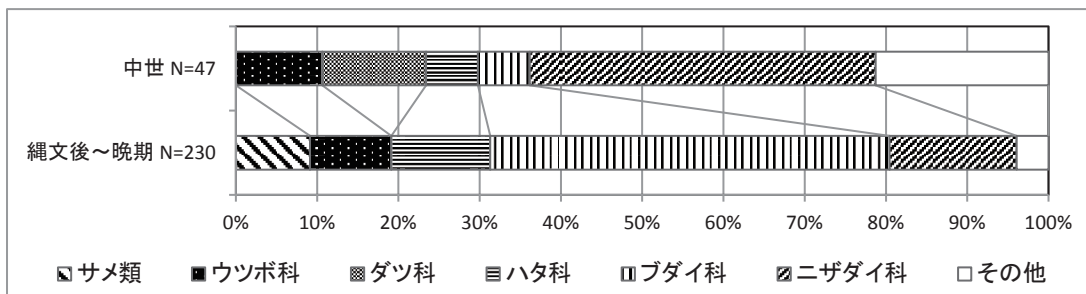
第191表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の集計結果(4)

種類	部位	残存位置	中世												不明		総計					
			P0393	P0556	P0718	P0732	P0962	P0980	P1074	土壘墓 1号	土壘墓 2号	燧02	燧007	燧011	中世合計	燧01		燧04	燧001	Ⅲ層	Ⅲ層	
アイゴ属?	方骨															0 / 0						0 / 1
アイゴ属	尾椎															1						2
ニサダイ科	擬鎮骨	m														0 / 0						1 / 0
ニサダイ科	第1椎骨															0						8
ニサダイ科	190															8						18
ニサダイ科	尾椎															12						30
ニサダイ科	歯															0						+
ニサダイ科	腹椎															2						2
モンガラクワハギ科	背椎															1						2
モンガラクワハギ科	鱗															+						+
ハコフグ科?	鱗板															+						+
ハリセン科	鱗															+						+
真骨類(未同定)	角骨															0 / 0						0 / 1
真骨類(未同定)	角骨															1						1
真骨類(未同定)	第1椎骨															1						4
真骨類(未同定)	椎骨															1						3
真骨類(未同定)	第1椎骨															0						2
真骨類(保留)	椎骨															9						68
真骨類(保留)	鱗															+						+
真骨類(同定不可)	鱗															+						+
真骨類(同定不可)	角骨															0						1
真骨類(同定不可)	椎骨															8						126
真骨類(同定不可)	尾節椎状骨															6						10
ヘビ類	椎骨															1						4
小型鳥類	指骨	d														0						2
小型鳥類	末節骨															0						1
鳥類(同定不可)	指骨															1						1
ネズミ亜科	白歯															0						4
ネズミ科	下顎															1						1
イノシシ	白歯	f														0						3
イノシシ?	肋骨?	p?														1						1
小型哺乳類	趾骨															0						1
小型哺乳類	末節骨															0						2
合計			1	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	77	+	+	+	+	+	515

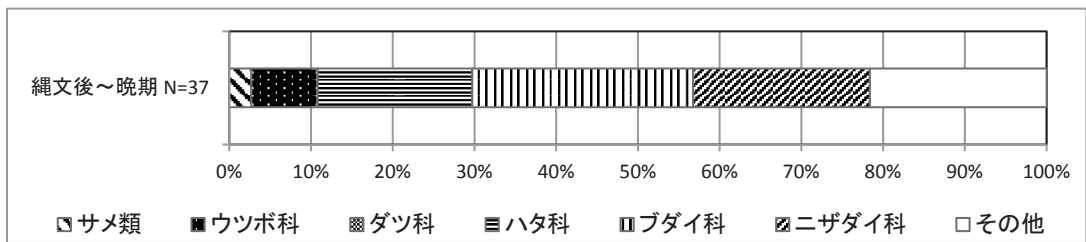
第192表 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された脊椎動物遺体の組成.

* NISPの+は算定対象外の資料のみが検出されたことを示す.

種類	NISP (同定標本数) *		MNI (最小個体数)	
	縄文後～晩期	中世	縄文後～晩期	中世
メジロザメ科?	1	0	0	0
サメ類	20	0	1	0
アナゴ科	2	0	1	0
ウツボ科	23	5	3	1
ダツ科	0	6	0	1
マハタ型	12	1	7	1
ハタ科	13	0	-	-
ハタ型	3	2	-	-
クロダイ属?	1	0	1	0
フエフキダイ科	1	0	1	0
タイ型	0	6	-	-
ベラ科	2	0	1	0
アオブダイ属	65	1	10	1
ブダイ科	48	2	-	-
アイゴ属	2	1	1	1
ニザダイ科	36	20	8	1
モンガラカワハギ科	1	3	1	1
ハコブグ科?	+	+	1	1
ハリセンボン科	+	+	1	1
真骨類 (未同定)	5	3	-	-
真骨類 (保留)	61	9	-	-
真骨類 (同定不可)	123	14	-	-
ヘビ類	3	1	1	1
鳥類 (同定不可)	3	1	1	1
ネズミ亜科	4	0	1	-
ネズミ科	0	1	-	1
イノシシ	3	0	1	-
イノシシ?	0	1	-	1
小型哺乳類	2	0	-	-
合計	434	77	41	13



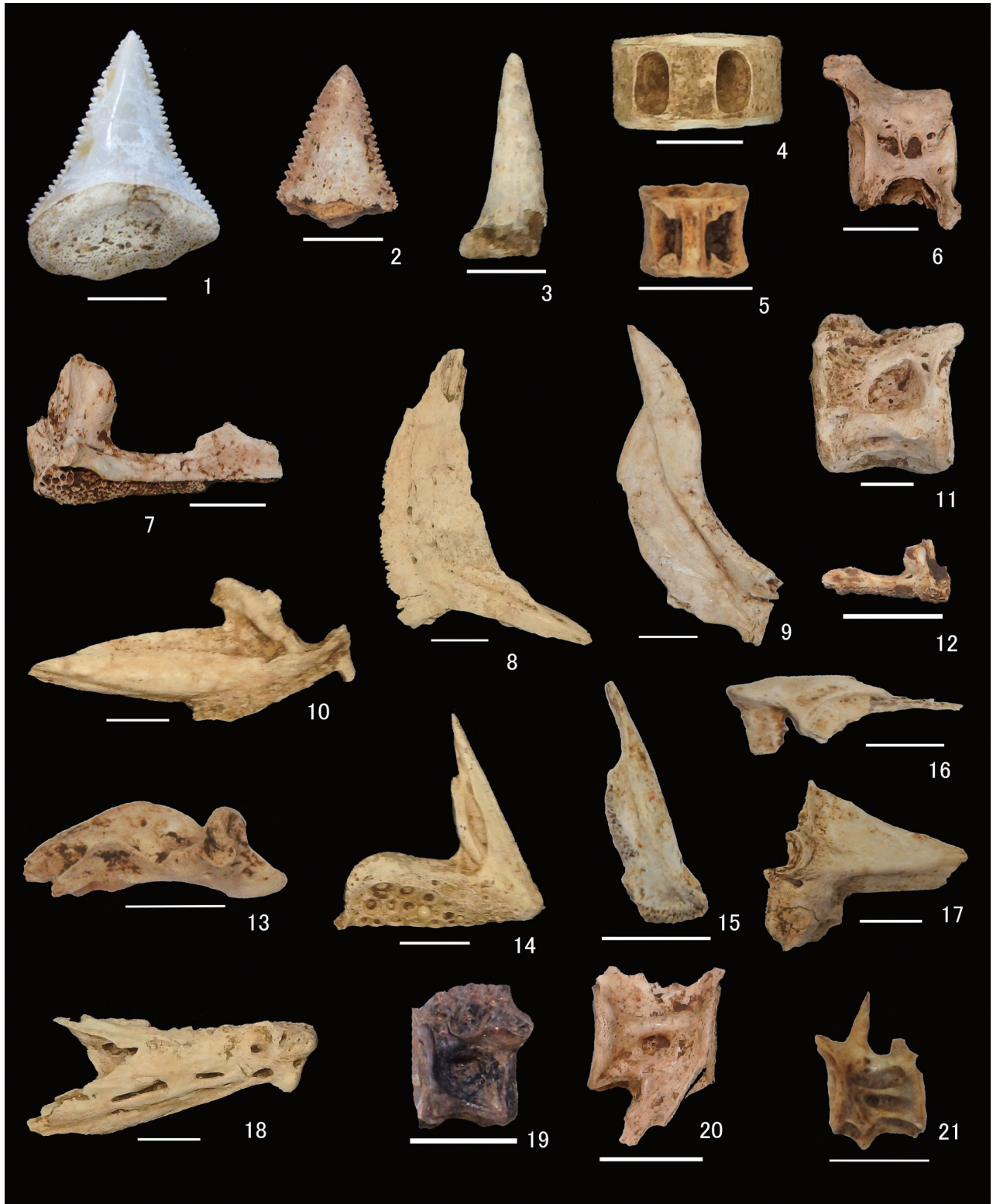
第280図 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された魚類遺体の組成 (NISP比).



第281図 崩り遺跡平成23～24年度調査において水洗選別によって採集された魚類遺体の組成 (MNI比).

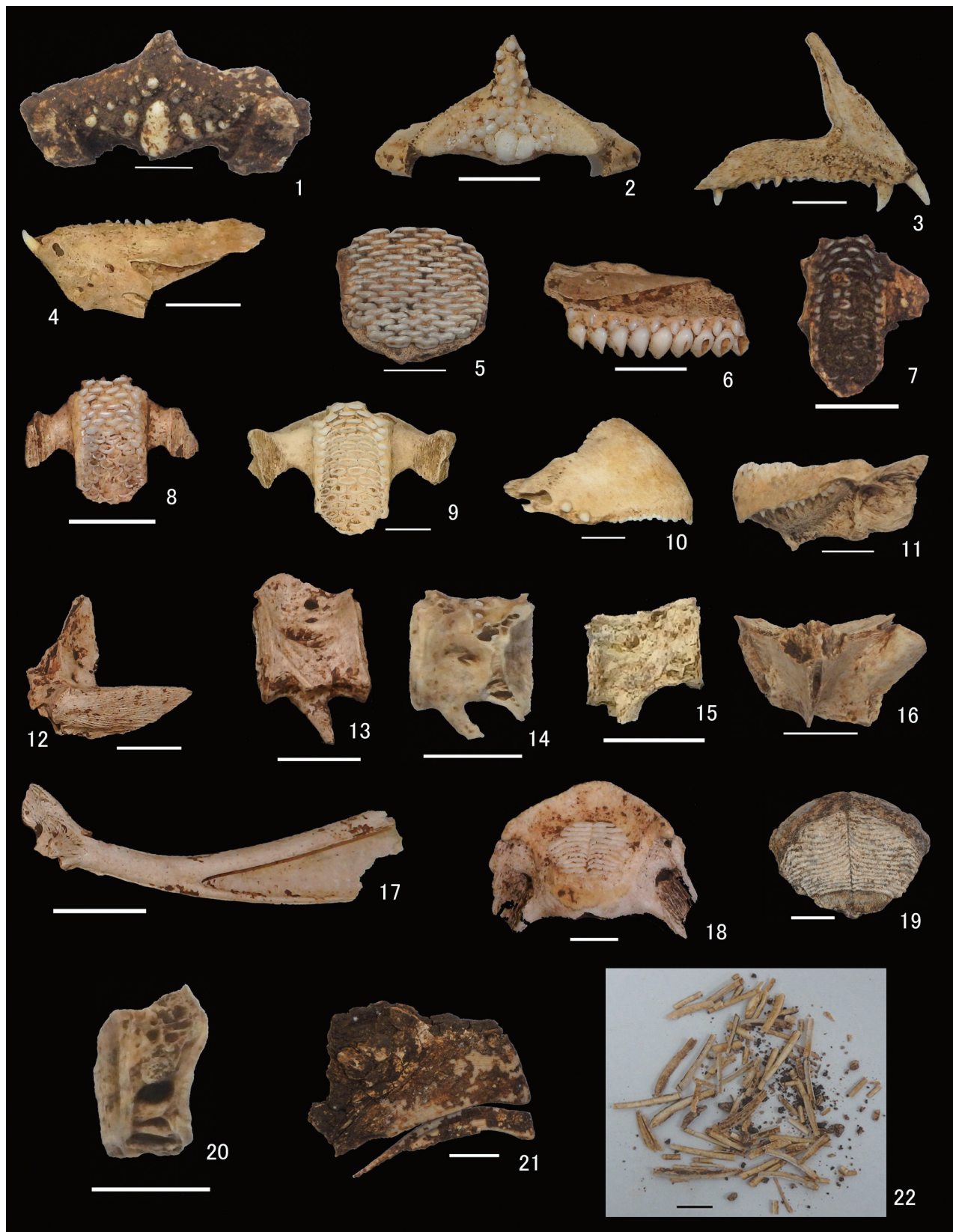
中世はMNI総数が少ないため表示していない。

図版1 魚類遺体(1)



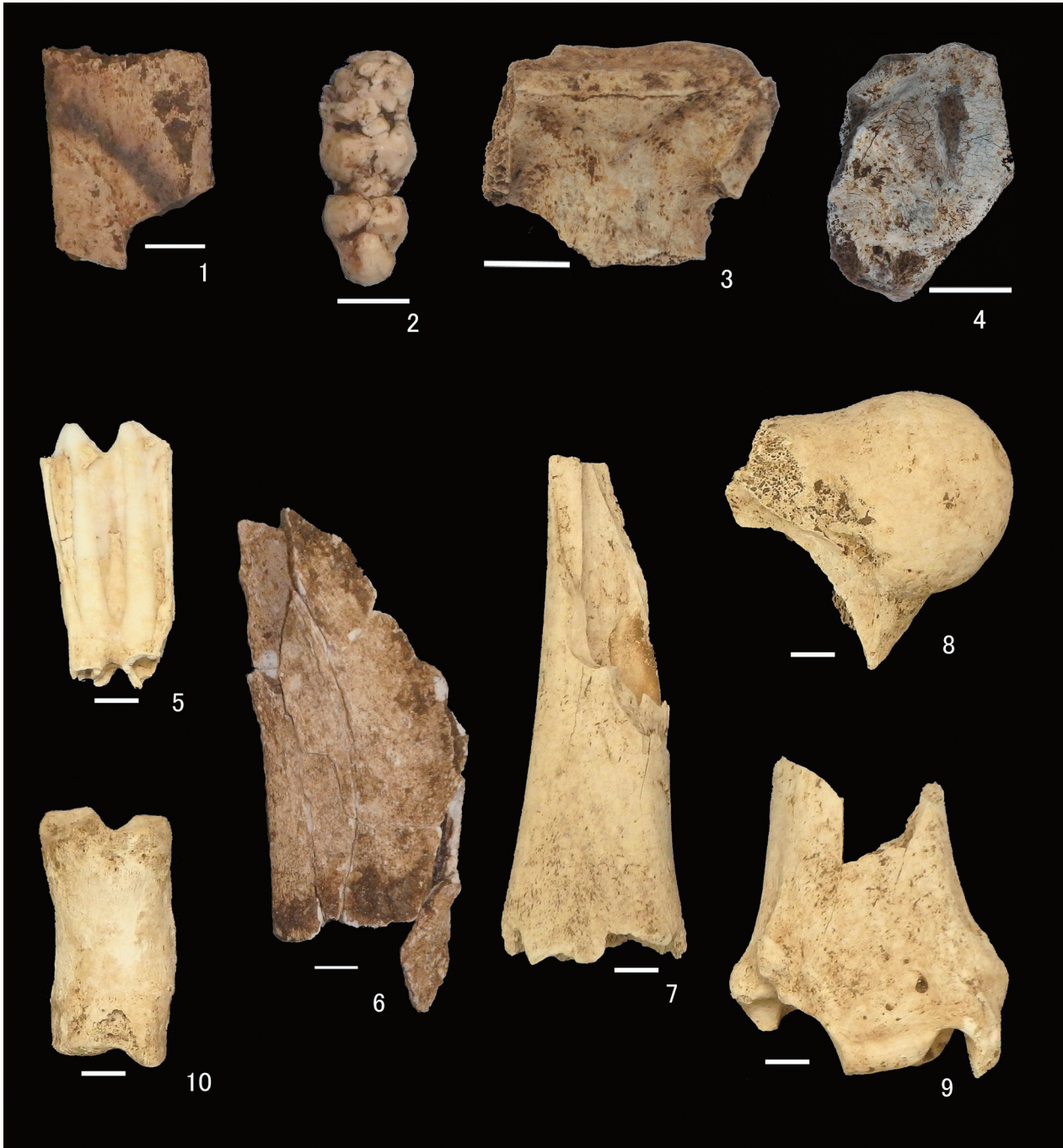
1 ホホジロザメ属歯(32), 2 サメ類歯(138), 3 サメ類歯(295), 4 メジロザメ科椎骨(275), 5 サメ類椎骨(229), 6 ウツボ科椎骨(61), 7~8 ハタ科(マハタ型) [7 前上顎骨 R(66), 8 前鰓蓋骨 R(234)], 9~10 ハタ科 [9 擬鎖骨 L(227), 10 角骨 L(235)], 11 ハタ型腹椎(25), 12 フェエダイ科前上顎骨 L(35), 13~14 クロダイ属 [13 主上顎骨 L(226), 14 前上顎骨 L(288)], 15 メイチダイ属前上顎骨 L(224), 16 フェエキダイ属口蓋骨 R(227), 17~19 フェエキダイ科 [17 角骨 R(233), 18 歯骨 R(241), 19 腹椎(焼)(37)], 20 フェエキダイ科?腹椎(44), 21 タイ型尾椎(226). () 内の数字は資料番号. スケールバーは1cm.

図版2 魚類遺体(2)



1 ベラ科(タキベラ型) 下咽頭骨(153), 2 ベラ科B下咽頭骨(233), 3~4 ベラ科[3 前上顎骨L(233), 4 歯骨L(288), 5 イロブダイ属下咽頭骨(187), 6~11 アオブダイ属[6 上咽頭骨L(51), 7 下咽頭骨(205), 8 下咽頭歯(51), 9 下咽頭骨(234), 10 前上顎骨R(234), 11 歯骨L(152)], 12~14 ブダイ科[12 方骨L(51), 13 腹椎(18), 14 尾椎(152)], 15 ニザダイ科尾椎(323), 16~17 モンガラカワハギ科[16 吻端部(157), 17 腰帯(64)], 18~19 ハリセンボン科[18 歯骨(27), 19 前上顎骨/歯骨(182)], 20 真骨類(保留) 腹椎(152), 21~22 フグ科[21 前上顎骨/歯骨(148), 22 前上顎骨/歯骨(分解した針状破片)(60)]. ()内の数字は資料番号. スケールバーは1cm.

図版3 ウミガメ類・哺乳類遺体(1)



1 ウミガメ類縁骨板(51), 2~4 イノシシ[2 下顎 M3 R(52), 3 仙椎(203), 4 脛骨 L(210)], 5~10 ウシ[5 下顎 M1/2 L(240), 6 肩甲骨 R(42), 7 脛骨 L(304), 8 大腿骨 R(304), 9 脛骨 R(279), 10 基節骨(247)]. () 内の数字は資料番号. スケールバーは 1cm.

図版4 哺乳類遺体(2)



1～2 ウシ[1 踵骨 R (292), 2 踵骨 L (31)], 3～5 ウマ[3 下顎臼歯 L (326), 4 中足骨 (258), 5a 尺骨 R (259), 5b 同カットマーク拡大], 6～9 クジラ類[6 部位不明(加工品の可能性. やや焼) (4), 7 部位不明(おそらく加工品. 焼) (16), 8 部位不明(焼) (161), 9 部位不明 (151)]. () 内の数字は資料番号. スケールバーは 1cm.

第4節 崩り遺跡出土の植物遺体

高宮広土 (鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

1) はじめに

崩り遺跡は喜界町手久津久崩りに所在する主に縄文時代後期～晩期(4000年前～3000年前)および中世(11世紀～15世紀)に属する遺跡である。縄文時代後期～晩期の遺構としては竪穴状遺構が40基ほど確認され、その約半数が竪穴住居であったと解釈されている。これらの遺構からは面縄東洞式や嘉徳式土器、石皿・磨石・敲石などが出土しており、加えてブダイ・フェエキダイ科・ウミガメ類およびイノシシなどの動物遺体も検出されている。中世の遺構では、柱穴が1150基程、41棟の掘立柱建物跡、2基の土坑墓などが確認され、これらの遺構や包含層からはカムイヤキ、白磁、鉄滓やヤコウガイなどが検出されている。

今回フローテーション処理され、回収された浮遊物の分類および同定のために計207の浮遊物サンプルが送付された。そのうち、123サンプルが縄文時代後期から晩期にかけてであり、42サンプルが中世(11世紀～12世紀および11世～12世紀?)、9サンプルが中世(13世紀～15世紀?)、4サンプルが15世紀末～17世紀初、および29サンプルが古代～中世?のものであった。以下では崩り遺跡より回収された炭化植物遺体についてまず縄文時代について報告し、次に中世を含むその他のサンプルについて述べる。

2) 縄文時代(主に縄文時代後期)

サンプルは竪穴状遺構と土坑より回収された土壌サンプルであった。第193～207表に植物遺体の検出された住居跡、第208～212表に植物遺体の回収された土坑および第214表に植物遺体を含んでいなかったサンプルを示した。また、第215表は縄文時代遺構より検出された植物遺体をまとめたものである。

計476(片)の植物遺体が検出された。そのうち、465(片)は同定可能であった。

堅果類子葉?

堅果類の子葉と思われるが保存状態が良好ではなく、堅果類子葉?としたカテゴリーである。10片回収された(第215表)。写真1はその中でも保存状態の良いものである。残存部のサイズは(長さx幅x厚さ)2.7x2.0x1.9mmである。

堅果皮

堅果皮が8片検出されている。小破片のものが多く、写真2はその中でも大きな方で、そのサイズは最大長x最大幅で2.6x1.6mmである。

堅果皮?

堅果皮と思われるが上記よりさらに小破片あるいは保存状態の良くない破片を堅果皮?とした。188片をこのカテゴリーに含めた。

タブノキ *Machilus thunbergii* Siebold et Zucc.

タブノキは双子葉植物で子葉は左右に分かれるが、その片方が1点回収されている(写真3)。写真3のサイズ(長さx幅x厚さ)は6.0x7.2x3.4mmである。

タブノキ?

上記のタブノキ子葉の破片とも思えるが、小破片であるので、タブノキ?とした。2片をこのカテゴリーに含めた。なお、そのうちの1片(ID or LF No.376)を炭素14年代測定法により年代測定を実施した結果、3650calBP-3574calBP(2σ)という年代を得た。

堅果類/タブノキ子葉

堅果類あるいはタブノキの子葉と思えるが、小破片のためそのどちらかにも含めることができなかった子葉を堅果類/タブノキ子葉とした。計3片得られている。

シマサルナシ *Actinidia rufa* (Siebold et Zucc.) Planch. ex Miq.

シマサルナシの種子が29(粒/片)回収された。シマサルナシは液果で生食でき、これほど炭化種子が回収されたということは、崩り遺跡の縄文人に好まれた果実と思われる(写真4)。写真4のサイズ(長さx幅x厚さ)は1.8x1.0x0.6mmである。

不明

今回最も多く回収されたのがこの分類に含まれた破片である。上記の堅果皮と比較すると倍ほどの厚さがあり、また外側は細かい網目模様で覆われている(写真5)。筆者がこれまでに分析した中で初めて検出されたものである。計224片得られた。写真5のサイズは最大長x最大幅で2.0x1.5mmである。

同定不可

保存状態が悪く、分類および同定のできなかった11片を同定不可とした。

3) 中世を含むその他のサンプル

ここでは中世(11～12世紀, 11～12世紀?, 13世紀～15

世紀?), 古代~中世?, 15 世紀末~17 世紀初およびのサンプルを取り扱う。そのうち, 11 世紀~12 世紀および 11 世紀~12 世紀?の焼土など(第 220 表), 中世(11 世紀~12 世紀?)ピット(第 221 表) および 15 世紀末~17 世紀初の焼土(第 224 表)には炭化植物遺体は含まれていなかった。その他のサンプルから計 187(粒片)の植物遺体が回収されたが, 中世(13 世紀~15 世紀?)土坑および古代~中世の畝・溝からはそれぞれ同定不可が 1 片(第 223 表) および 3 片(第 225 表)含まれていたのみであった。それゆえ, 以下での報告は主に中世 11~12 世紀(216~218 表), 中世 11 世紀~12 世紀?(第 219 表) および中世(13~15 世紀?)より回収された植物遺体について述べる。また, 第 226 表はこのセクションで対象となるサンプルをまとめたものである。

イネ *Oryza sativa* L.

イネ穎果が計 5(粒片)確認できた。写真 6 のサイズ(長さ x 幅 x 厚さ)は 4.8x2.8x2.1mm である。

オオムギ *Hordeum vulgare* L.

オオムギ穎果が計 73(粒片)得られた。そのうち計 8 粒が計測可能で, その平均のサイズは 4.9x2.5x1.8mm であった(第 227 表)。写真 7 のサイズ(長さ x 幅 x 厚さ)は 6.5x3.0x2.2mm である。11 世紀~12 世紀と推測された土坑墓 2 号より回収されたオオムギ(ID or LF.111)の炭素 14 年代法による測定結果は 770calBP-686calBP(2 σ)であった。また, 13~15 世紀?と推測された P1201(ID or LF.110), P0980(ID or LF.296)および P1074(ID or LF.1074)より検出されたオオムギの炭素 14 年代測定法による年代はそれぞれ, 654calBP-551calBP(2 σ), 651calBP-581calBP(2 σ) および 637calBP-593calBP(2 σ)であった。

コムギ *Triticum aestivum* L.

計 7 粒コムギ穎果が回収された。そのうち計 4 粒が計測可能で, その平均のサイズは 3.1x2.2x2.0mm であった(第 228 表)。写真 8 のサイズ(長さ x 幅 x 厚さ)は 3.0x1.8x1.8mm である。小型のコムギに属すると思われる。また, コムギと思われる小破片をコムギ?とし, 1 粒回収されている。

ムギ類

オオムギかコムギの穎果とおもわれるが, 保存状態が悪く, そのどちらにも分類できなかったものをムギ類とした。計 32 片をムギ類とした。11 世紀~12 世紀と推測された土坑墓 1 号(ID or LF.101)および土坑墓 2 号(ID or LF.103)より検出されたムギ類の炭素 14 年代による年代は, それぞれ 785calBP-695calBP(2 σ) および 795calBP-698calBP(2 σ)であった。

アワ *Setaria italica* P.Beauv.

アワ穎果が計 4(粒片)検出された。そのうち写真 9 の 1 粒のみが計測可能で, そのサイズ(長さ x 幅 x 厚さ)は 1.0x0.9x0.6mm である。

堅果皮?

堅果皮と思われる小破片が 2 片 11~12 世紀のサンプルより回収された。

不明

縄文時代サンプルで不明とした小破片が 1 片 13~15 世紀?のサンプルより得られている。

同定不可

保存状態が悪く, 同定できなかった植物遺体をこのカテゴリーに含めた。計 62 片である。

4) まとめ

まずお断りさせていただくが, 時間的および紙数の都合上, 植物遺体の分布密度や遺構間あるいはサンプル地点間の比較などは, 今回は不可能であり, 将来的に実施することができればと考えている。ここでは, 簡単なまとめと若干のコメントを述べたい。

まず, 縄文時代における喜界島での植物食利用に関してはほとんど知られていなかった。しかしながら, 今回堅穴住居跡などから土壌をサンプリングし, フローテーションを実施した結果, 堅果類あるいは堅果類の破片と思われるものやタブノキおよびシマサルナシなどのように他の縄文時代(貝塚時代前期)の遺跡から報告されている植物遺体が検出された(例 高宮 2006, 高宮 2017)。崩り遺跡においては他の遺跡では未検出の不明種実の破片が多数検出されたが, この点に関しては今後の検証が必要である。また, 堅果皮および堅果皮と思われるものがかなり小破片で回収され, また堅果類子葉と思われるものも小破片であった。筆者の分析中の印象であるが崩り遺跡においては, 他の同時代の人々と比較して, 堅果類等を節約して利用しているように感じられた。

次に, 中世などのサンプルについてであるが, イネと比較して雑穀が多く得られている。喜界島においては時代が新しくなるにつれ, オオムギが重要になってくるような印象を抱いていたが, 今回 11~12 世紀のサンプルより, 13~15 世紀?のサンプルにオオムギが多く含まれていたことは, この考え(印象)を支持するものではないであろうか。この点も, 今後の検証が必要である。

また, 炭素 14 年代測定結果の報告にあるように, 縄文時代後期, 11~12 世紀および 13~15 世紀?と考えられたタブノ

キ?やオオムギなどの年代は発掘担当者の予測通りであったことも記しておきたい。

謝辞

このような機会を与えてくださった喜界町教育委員会澄田直敏・野崎拓司・松原信之さんに心より感謝申し上げます。

参考文献

高宮広土 (2006) 「住吉貝塚出土の植物遺体」『住吉貝塚』知名町教育委員会 (編) pp.100-107.知名町教育委員会: 知名町

高宮広土 (2017) 「塔原遺跡出土の植物遺体」『塔原遺跡』天城町教育委員会 (編) .天城町教育委員会: 天城町

第193表 SH04出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果皮? (片)	タブノキ (点)	タブノキ? (片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
234	SH04	K-2	I	縄文後期	11	2.17										
379	SH04	K-2	I	縄文後期	10	9.03										
231	SH04	K-2	I	縄文後期	12	0.21										
200	SH04	K-2	I	縄文後期	10	0.52										
208	SH04	K-2	I	縄文後期	12	0.65										
116	SH04	K-2	I	縄文後期	1	0.41										
1150	SH04	K-2	I-a	縄文後期	1	0.71										
224	SH04	K-2	II	縄文後期	8	0.08										
198	SH04	K-2	II	縄文後期	8	2.17	1							16	1	18
213	SH04	K-2	II	縄文後期	13	2.92			1					9		10
1151	SH04	K-2	II	縄文後期	1	0.71										
1149	SH04	K-2	III	縄文後期	0.5	0.01										
817	SH04	K-2	床直(III)	縄文後期	6	0.67										
821	SH04	K-2	床直(III)	縄文後期	8	0.21			1					1		2
922	SH04	K-2	床直(III)	縄文後期	10	5.12			8					5		13
1019	SH04	K-2	IV	縄文後期	0.5	0.37										
計					112	25.96	1		10					31	1	43

第194表 SH05出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果皮? (片)	タブノキ (点)	タブノキ? (片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
316	SH05	K-2	II	縄文後期	7.5	14.6										
117	SH05	K-2	床直(III-IV)	縄文後期	7	1.75							2		1	3
188	SH05	K-2	床直(III-IV)	縄文後期	7	0.53										
401	SH05	K-2	床直(III-IV)	縄文後期	8	6.55			2					23		25
958	SH05	K-2	一括	縄文後期	7	1.15										
417	SH05	K-2	一括(上層)	縄文後期	8	1.58			1					7		8
826	SH05	K-2	一括(中層)	縄文後期	13	3.1			21			1	1	4		27
計					57.5	29.26			24			3	1	34	1	63

第195表 SH09出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果皮? (片)	タブノキ (点)	タブノキ? (片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
565	SH09	L-3	I	縄文後期	8.5	1.4										
901	SH09	L-3	I	縄文後期	10	2.94			1					1		2
937	SH09	L-3	I	縄文後期	8	1.23										
計					26.5	5.57			1					1		2

第196表 SH10出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果皮? (片)	タブノキ (点)	タブノキ? (片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
397	SH10	J-K-1-2	I	縄文後期	10	2.45								11		11
383	SH10	J-K-1-2	I	縄文後期	9	3.05		2						12		14
814	SH10	J-K-1-2	一括	縄文後期	12	1.3			2			1		9		12
計					31	6.8		2	2			1		32		37

第197表 SH11出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
3	SH11	J-2	I	縄文後期	8	1.04			1			2			3	6
961	SH11	J-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	9	2.42			3							3
553	SH11	J-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	7	0.13										
計					24	3.59			4			2			3	9

第198表 SH12出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
247	SH12	J-K-2	I	縄文後期	10	2.84	4		33			1		39		77
385	SH12	J-K-2	I	縄文後期	5.5	0.8								3		3
244	SH12	J-K-2	Ⅱ	縄文後期	9	0.4										
1018	SH12	J-K-2	Ⅱ	縄文後期	0.3	0.02										
754	SH12	J-K-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	13	0.44										
374	SH12	J-K-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	10	2.17	1	1								2
376	SH12	J-K-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	9.5	1.75					2			7		9
381	SH12	J-K-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	10	0.57								7		7
507	SH12	J-K-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	10	0.28										
773	SH12	J-K-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	11	9.06		5						9	1	15
計					88.3	18.33	5	6	33		2	1		65	1	113

第199表 SH13出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
277	SH13	K-2	Ⅱ	縄文後期	6.5	2.05				1				10		11
337	SH13	K-2	Ⅳ	縄文後期	3	0.26										
計					9.5	2.31				1				10		11

第200表 SH14出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
544	SH14	K-2	I	縄文後期	11	0.85			3					7		10
457	SH14	K-2	Ⅱ	縄文後期	4.5	1.53			2					2		4
413	SH14	K-2	Ⅱ	縄文後期	5.5	0.62										
559	SH14	K-2	Ⅲ	縄文後期	10	0.69			5					5		10
312	SH14	K-2	Ⅲ	縄文後期	10	0.63										
計					41	4.32			10					14		24

第201表 SH15出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
297	SH15	L-1・2	遺構底面(V)	縄文後期	9	1.19										
98	SH15	L-1・2	一括	縄文後期	6.5	1.69			16					6		22
計					15.5	2.88			16					6		22

第202表 SH17出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
925	SH17	K-2	I	縄文後期	10	1.13			11					2		13
718	SH17	K-2	一括	縄文後期	10	0.51										
398	SH17	K-2	一括	縄文後期	5	2.91										
計					25	4.55			11					2		13

第203表 SH18出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
												(粒)	(片)			
934	SH18	K-2	Ⅱ	縄文後期	10	1.11			8			18	2	3		31
812	SH18	K-2	床面(Ⅲ)	縄文後期	11	0.95			3			3			1	7
900	SH18	K-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	10	0.16										
818	SH18	K-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	9	1.16										
949	SH18	K-2	床直(Ⅱ)	縄文後期	7	1.24			5					2		7
計					47	4.62			16			21	2	5	1	45

第204表 SH21出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	堅果類/ タブノキ 子葉(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)	
													(粒)	(片)				
443	SH21	L-2	I	縄文後期	10	1.4												
762	SH21	L-2	II	縄文後期	8	0.48												
799	SH21	L-2	II	縄文後期	9.5	5.03												
489	SH21	L-2	一括	縄文後期	9	0.72			3						8			11
計					17.5	5.51			3						8			11

第205表 SH22出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	堅果類/ タブノキ 子葉(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)	
													(粒)	(片)				
286	SH22	K-1-2	I	縄文後期	8	0.9												
1012	SH22	K-1-2	II	縄文後期	10	2.81			5				1					6
計					18	3.71			5				1					6

第206表 SH24出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	堅果類/ タブノキ 子葉(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)	
													(粒)	(片)				
280	SH24	L-2	遺構底面(I)	縄文後期	7	13.59												
406	SH24	L-2	I(上部)	縄文後期	6.5	1.21									2			2
389	SH24	L-2	I(下部)	縄文後期	11	4.64												
計					24.5	19.44									2			2

第207表 SH27出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	堅果類/ タブノキ 子葉(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)	
													(粒)	(片)				
720	SH27	K-2	床直(I)	縄文後期	5.5	1.49												
132	SH27	K-2	床直(I)	縄文後期	5	1.96	1		1									2
187	SH27	K-2	床直(I)	縄文後期	5	1.7											1	1
計					15.5	5.15	1		1								1	3

第208表 SK01出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	堅果類/ タブノキ 子葉(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)	
													(粒)	(片)				
763	SK01	L-2	I	縄文後期	10	6.41			1						3			4
360	SK01	L-2	I	縄文後期	4.5	1.16												
計					14.5	7.57			1						3			4

第209表 SK03出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	堅果類/ タブノキ 子葉(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)	
													(粒)	(片)				
294	SK03	K-3	I	縄文後期	12	7.01												
576	SK03	K-3	I(0~5cm)	縄文後期	5.5	2.1												
488	SK03	K-3	I(5~10cm)	縄文後期	6	0.26												
447	SK03	K-3	I(10~15cm)	縄文後期	2.5	1.29			2						1			3
380	SK03	K-3	I(15~20cm)	縄文後期	4.5	2.08												
計					30.5	12.74			2						1			3

第210表 SK04出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	堅果類/ タブノキ 子葉(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)	
													(粒)	(片)				
795	SK04	L-2	I	縄文後期	11	6.04	2		44						6	1		53
計					11	6.04	2		44					6	1		53	

第211表 SK06出土の植物遺体

ID	新遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類 子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果 皮? (片)	タブ ノ キ(点)	タブ ノ キ?(片)	堅果類/ タブノキ 子葉(片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)	
													(粒)	(片)				
566	SK06	K-2	I・II(0~3cm)	縄文後期	9.5	0.27												
825	SK06	K-2	II	縄文後期	5	0.82												
131	SK06	K-2	一括	縄文後期	10	8.03			3						1			4
計					24.5	9.12			3					1				4

第212表 SK09出土の植物遺体

ID	新造構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果皮? (片)	タブノキ (点)	タブノキ? (片)	堅果類/タブノキ子葉 (片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)	
													(粒)	(片)				
524	SK09	L-2・3	I	縄文後期	9	0.92			3							2		5
345	SK09	L-2・3	I	縄文後期	1.5	0.23												
計					10.5	1.15			3						2		5	

第213表 その他包含層出土の植物遺体

ID	新造構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果皮? (片)	タブノキ (点)	タブノキ? (片)	堅果類/タブノキ子葉 (片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (粒/片)	計 (粒/片)
													(粒)	(片)			
407	包含層	K-1・2	IV-b	縄文後期	13	0.77	1								1	2	4
計					13	0.77	1							1	2	4	

第214表 植物遺体の検出されなかったサンプル

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (l)	浮遊物量 (g)	
521	SH01	J-2	床直 (V)	縄文後期	7	0.25	28	SH26	K・L-1	床直 (I)	縄文後期	10	1.6	
373	SH01	J-2	床直 (V)	縄文後期	10	0.41	772	SK02	K-3	I (上層)	縄文後期	9.5	5.3	
561	SH01	J-2	床直 (V)	縄文後期	8	0.74	377	SK02	K-3	I (中層)	縄文後期	8	6.99	
749	SH03	J-3	Ⅲ	縄文後期	2	1.11	289	SK02	K-3	I (下層)	縄文後期	10	2.63	
425	SH05	K-2	一括	縄文後期	10	0.57	348	SK07	K-3・4	I	縄文後期	10	1.22	
265	SH06	K-3	I	縄文後期	16.5	16.52	721	SK08	K-1	I	縄文後期	10	1.48	
359	SH06	K-3	I	縄文後期	10.5	2.31	6	SK10	P-18	Ⅱ	縄文後期～晩期	6	0.66	
202	SH07	K-3	I	縄文後期	6	0.13	24	SK10	P-18	一括	縄文後期～晩期	7	0.13	
212	SH07	K-3	Ⅱ	縄文後期	4	0.27	13	SK10	P-18	一括	縄文後期～晩期	0.09	0	
439	SH08	L-3	I	縄文後期	5	10.38	952	SK04	Q-R-13	I	縄文後期～晩期	8.5	1.29	
484	SH08	L-3	I	縄文後期	3	0.53	875	SK04	O-14	I	縄文後期～晩期?	11	1.75	
416	SH20	L-2	Ⅲ	縄文後期	7	0.38	837	SD06	O-15	I	縄文後期～晩期?	10	0.76	
444	SH20	L-2	床直 (Ⅳ)	縄文後期	9	1.34	509	SD03	O-P-15	I	縄文後期～晩期?	7	0.24	
300	SH23	K・L-1・2	床直	縄文後期	7.5	1.01	860	SD01	P・Q-18・19	I	縄文後期～晩期?	8	0.05	
108	SH23	K・L-1・2	床直	縄文後期	6	2.95	16	SD01	P・Q-18・19	I	縄文後期～晩期?	13	0.34	
201	SH23	K・L-1・2	床直	縄文後期	8	1.13	568	焼030	M-11	I	縄文後期～晩期	4	0.31	
371	SH22・23	K・L-1・2	床直	縄文後期	7.5	3.34	223	焼001	K-2・3	地山直上焼土溜り	時期不明	3	0.89	
282	SH25	L-2	遺構底面 (I)	縄文後期	5.5	2.86	474	SH-002	L-3・2	包含層溜り	縄文後期	8	2.61	
570	SH25	L-2	I	縄文後期	9.5	0.39	822	SH-002	J・K-2	包含層溜り	縄文後期	10	1.27	
小計①						142	小計②						153.09	29.52
合計 (①+②)													295.09	76.14

第215表 縄文後期 (まとめ)

遺構名等	重量 (l)	浮遊物量 (g)	堅果類子葉? (片)	堅果皮 (片)	堅果皮? (片)	タブノキ (点)	タブノキ? (片)	堅果類/タブノキ子葉 (片)	シマサルナシ		不明 (片)	同定不可 (片)	計 (粒/片)
									(粒)	(片)			
SH04	112	25.96	1		10						31	1	43
SH05	57.5	29.26			24			3	1		34	1	63
SH09	26.5	5.57			1						1		2
SH10	31	6.8		2	2				1		32		37
SH11	24	3.59			4				2			3	9
SH12	88.3	18.33	5	6	33		2	1		65	1		113
SH13	9.5	2.31				1					10		11
SH14	41	4.32			10						14		24
SH15	15.5	2.88			15						6		21
SH17	25	4.55			11						2		13
SH18	47	4.62			16				21	2	5	1	45
SH21	17.5	5.51			3						8		11
SH22	18	3.71			5				1				6
SH24	24.5	19.44									2		2
SH27	15.5	5.15	1		1							1	3
SK01	14.5	7.57			1						3		4
SK03	30.5	12.74			2						1		3
SK04	11	6.04	2		44						6	1	53
SK06	24.5	9.12			3						1		4
SK09	10.5	1.15			3						2		5
その他包含層出土の植物遺体	13	0.77	1								1	2	4
植物遺体の検出されなかったサンプル	291.09	76.14											
計	947.89	255.53	10	8	188	1	2	3	27	2	224	11	476

第216表 ピット出土の植物遺体

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物 量 (g)	イネ		オオムギ		コムギ		コム ギ? (粒)	ムギ類 (片)	アワ		堅果皮? (片)	同定不可 (片)	計 (粒/ 片)
							(粒)	(片)	(粒)	(片)	(粒)	(片)			(粒)	(片)			
309	P0393	K-12	I	中世(11~12C)	2.9	2.9		1										1	2
404	P0393	K-12	I	中世(11~12C)	11	8.17													
935	P0718	N-15	I	中世(11~12C)	1.5	1.83													
481	P0731	O-16	I	中世(11~12C)	2	0													
919	P0732	O-16	I	中世(11~12C)	10.5	9.68					1							4	5
23	P0744	K-5	I	中世(11~12C)	2.5	0.2													
304	P0556	J-4	I	中世(11~12C)	2.5	0.19			1										1
895	P0759	O-15	I	中世(11~12C)	9	0.1													
929	P1251	M-11	I	中世(11~12C)?	12.5	0.25													
105	P1192	Q-20	I	中世(11~12C)	5	0.51													
948	P0318	L-13	I	中世(11~12C)	4	1.8													
計					63.4	25.63		1		1	1							5	8

第217表 土坑墓1号出土の植物遺体

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物 量 (g)	イネ		オオムギ		コムギ		コム ギ? (粒)	ムギ類 (片)	アワ		堅果皮? (片)	同定不可 (片)	計 (粒/ 片)	
							(粒)	(片)	(粒)	(片)	(粒)	(片)			(粒)	(片)				
96	土坑墓1号	O-15	I	中世(11~12C)	1	0.95														
100	土坑墓1号	O-15	I	中世(11~12C)	6.5	2.35		1											1	2
101	土坑墓1号	O-15	I	中世(11~12C)	6	2.51								5						5
306	土坑墓1号	O-15	I	中世(11~12C)	6.5	4.94			1											1
計					20	10.75		1	1					5					1	8

第218表 土坑墓2号出土の植物遺体

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物 量 (g)	イネ		オオムギ		コムギ		コム ギ? (粒)	ムギ類 (片)	アワ		堅果皮? (片)	同定不可 (片)	計 (粒/ 片)	
							(粒)	(片)	(粒)	(片)	(粒)	(片)			(粒)	(片)				
89	土坑墓2号	O-15	I	中世(11~12C)	4.5	2.53					1			1					1	3
106	土坑墓2号	O-15	I	中世(11~12C)	10	2.12														
111	土坑墓2号	O-15	I	中世(11~12C)	8	7.05			1											1
841	土坑墓2号	O-15	I	中世(11~12C)	7.5	0.15														
130	土坑墓2号	O-15	I	中世(11~12C)	7	4.1														
551	土坑墓2号	O-15	I	中世(11~12C)	9	0.13														
103	土坑墓2号	O-15	I (7~9cm)	中世(11~12C)	5.5	2.56			2		1		1				2		1	7
114	土坑墓2号	O-15	I (9cm~床)	中世(11~12C)	5.5	2.76														
計					57	21.4			3		2		1	1				2	2	11

第219表 土坑出土の植物遺体

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物 量 (g)	イネ		オオムギ		コムギ		コム ギ? (粒)	ムギ類 (片)	アワ		堅果皮? (片)	同定不可 (片)	計 (粒/ 片)	
							(粒)	(片)	(粒)	(片)	(粒)	(片)			(粒)	(片)				
7	SK23	P-18	I	中世(11~12C)?	3	0.64														
22	SK24	P-18	I	中世(11~12C)?	13	8.44														
19	SK24	Q-19	I	中世(11~12C)?	10.5	11.01				1				1	1					3
943	SK26	P-14	I	中世(11~12C)?	4.5	0.8														
914	SK26	P-14	II	中世(11~12C)?	5.5	0.52														
計					36.5	21.41				1				1	1					3

第220表 焼土など (11~12C) 分析結果

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物 量 (g)
293	焼土跡01	K-3	I	中世(11~12C)	6.5	4.19
283	焼土跡02	K-3	I	中世(11~12C)	3	7.57
287	焼土跡01	K-3	II	中世(11~12C)	4	30.62
295	焼土跡02	K-3	II	中世(11~12C)	1	13.16
107	焼土跡01	N-13	包含層IV-a	中世(11~12C)	1.5	0.45
702	焼土跡09	M-13	I	中世(11~12C)?	2	0.06
118	焼土跡07	R-20	III	中世(11~12C)?	1	1.55
109-a	焼土跡03	T-20	I	中世(11~12C)?	0.1	0.04
109-b	焼土跡03	T-20	II	中世(11~12C)?	0.08	2.78
109-c	焼土跡03	T-20	III	中世(11~12C)?	0.08	0.19
計					19.26	60.61

第221表 中世(11C~12C)?ピット・包含層分析結果

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物 量 (g)
375	SH13	K-2	V(中世ピット)	中世(11~12C)?	9.5	0.77
466	SH13	K-2	V(中世ピット)	中世(11~12C)?	8.5	0.78
954		H-13	包含層	中世(11~12C)?	11	1.65
334		K-3	I	中世(11~12C)?	4	0.01
計					33	3.21

第222表 ピット (13~15C?) 出土の植物遺体

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物量 (g)	イネ		オオムギ		コムギ		コムギ? (粒)	ムギ類 (片)	アワ		堅果皮? (片)	不明 (片)	同定不可 (片)	計 (粒/片)
							(粒)	(片)	(粒)	(片)	(粒)	(片)			(粒)	(片)				
487	P0962	V-27	I	中世(13~15C?)	6	2.87			1											1
99	P1200	V-27	I(中層)	中世(13~15C?)	6.5	0.41														
120	P1200	V-27	I(下層)	中世(13~15C?)	6	0.41														
296	P0980	V-28	I	中世(13~15C?)	10	4.47			28	4	2			21	1				21	77
110	P1201	V-28	I(中層)	中世(13~15C?)	7	2.18			3					1				1	2	7
112	P1201	V-28	I(下層)	中世(13~15C?)	8	1.04														
450	P1141	U-25	I	中世(13~15C?)	3.5	5.41													2	2
716	P1074	U-27	I	中世(13~15C?)	9	14.8	1	2	27	4	2			4		1			25	66
計					56	31.59	1	2	59	8	4			25	2	1			50	153

第223表 土坑出土の植物遺体

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物量 (g)	イネ		オオムギ		コムギ		コムギ? (粒)	ムギ類 (片)	アワ		堅果皮? (片)	同定不可 (片)	計 (粒/片)	
							(粒)	(片)	(粒)	(片)	(粒)	(片)			(粒)	(片)				
97	SK-051	V-26	Ⅲ(中層)	中世(13~15C?)	3.5	1.36													1	1
計					3.5	1.36													1	1

第224表 焼土 (15C末~17C初) 分析結果

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物量 (g)
483	焼052	V-30	I	15C末~17C初	7	4.42
124	焼053	V-30	I	15C末~17C初	3.5	2.31
423	焼052	V-30	Ⅱ	15C末~17C初	5.5	35.21
119	焼053	V-30	Ⅱ	15C末~17C初	3	7.43
計					19	49.37

第225表 畝・溝出土の植物遺体

ID	遺構名	グリッド	層位	時期	重量 (g)	浮遊物量 (g)	イネ		オオムギ		コムギ		コムギ? (粒)	ムギ類 (片)	アワ		堅果皮? (片)	同定不可 (片)	計 (粒/片)	
							(粒)	(片)	(粒)	(片)	(粒)	(片)			(粒)	(片)				
766	畝-001	M-12	I	古代~中世?	13.5	3.74														
845	畝-002	N-12	I	古代~中世?	7	1.27														
308	畝-003	M-12	I	古代~中世?	16	0.59														
769	畝-004	M-12	I	古代~中世?	8	0.35														
751	畝-005	M-12	I	古代~中世?	10	1														
333	畝-006	L-12	I	古代~中世?	8	0.04														
738	畝-007	M-11	I	古代~中世?	10	0.32														
301	畝-008	M-12	I	古代~中世?	3.5	0.02														
288	畝-009	L-11	I	古代~中世?	10	1.16														
307	畝-010	L-11	I	古代~中世?	9	0.21														
750	畝-011	M-11	I	古代~中世?	12	0.3														
523	畝-012	M-11	I	古代~中世?	3.5	0.44														
953	畝-013	M-11	I	古代~中世?	6	0.58														
880	畝-016	M-11	I	古代~中世?	4	0.06														
513	畝-017	M-11	I	古代~中世?	5	0.42														
580	畝-017	M-11	I	古代~中世?	13	0.36														
855	畝-017	M-11	I	古代~中世?	12	3.75												3	3	
882	畝-020	M-14	I	古代~中世?	4.5	0.01														
815	畝-023	N-13	I	古代~中世?	7.5	0.09														
500	畝-024	M-13	I	古代~中世?	7	0.03														
346	畝-026	M-12	I	古代~中世?	11.5	1.04														
511	畝-028	O-13	I	古代~中世?	8.5	0.16														
584	畝-029	O-13	I	古代~中世?	12	0.94														
869	畝-030	O-13	I	古代~中世?	9.5	0.22														
926	畝-033	O-13	I	古代~中世?	11	1.28														
894	畝-034	N-14	I	古代~中世?	4	0.13														
866	畝-035	N-14	I	古代~中世?	5	0.11														
586	畝?SD?	M-N-12	I	古代~中世?	7.5	0.08														
775	畝19-1	O-13	I	古代~中世?	10	0.13														
計					248.5	18.83													3	3

第226表 中世などその他のサンプルのまとめ

遺構名	重量 (g)	浮遊物量 (g)	イネ		オオムギ		コムギ		コムギ? (粒)	ムギ類 (片)	アワ		堅果皮? (片)	不明 (片)	同定不可 (片)	計 (粒/片)
			(粒)	(片)	(粒)	(片)	(粒)	(片)			(粒)	(片)				
中世ビット (11~12C)	63.4	25.63		1		1	1								5	8
土坑墓1号	20	10.75		1	1					5					1	8
土坑墓2号	57	21.4			3		2		1	1			2		2	11
中世土坑 (11~12C)?	36.5	21.41				1				1	1					3
中世焼土など (11~12C)	19.26	60.61														
中世ビット (11~12C?)・包含層など	33	3.21														
中世ビット (13~15C?)	56	31.59	1	2	59	8	4			25	2	1		1	50	153
中世土坑 (13~15C?)	3.5	1.36													1	1
焼土 (15C末~17C初)	3.5	1.36														
畝・SD	248.5	18.83													3	3
	540.66	196.15	1	4	63	10	7		1	32	3	1	2	1	62	187

第227表 オオムギのサイズ

長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
4.9	2.6	2
4.3	2.2	1.4
6.5	3	2.2
4.1	2	1.3
4.7	2.4	1.8
5.7	3	2.3
4.9	2.5	2.1
4.2	2.1	1.6
平均	4.9	2.5

第228表 コムギのサイズ

長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
2.1	2	2
3	1.8	1.8
3.8	2.5	2.2
3.4	2.5	2.1
平均	3.1	2.2

崩り遺跡出土の植物遺体 (貝塚時代後4期/縄文時代後期)



写真1 ブナ科子葉
外側 内側

写真2 ブナ科 堅果皮
外側 内側



写真3 タブノキ 子葉
外側 内側



写真4 シマサルナシ

写真5 不明
外側 内側

崩り遺跡出土の植物遺体（グスク時代）



写真6 イネ



背面



腹面

写真7 オオムギ



背面



腹面

写真8 コムギ



写真9 アワ

第5節 (1) 崩り遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定) (土坑墓1号)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

崩り遺跡は、鹿児島県大島郡喜界町大字手久津久字崩りに所在する。測定対象試料は、土坑墓1号(4号人骨焼骨塊中)に含まれていた木炭(No.1:IAAA-111017)1点である(第229表)。

2 測定の意義

土坑墓が造られた年代を探る一つの材料とする。

3 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(第229表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第229表に、補正していない値を参考値として第230表

に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第229表に、補正していない値を参考値として第230表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal109データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第230表に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

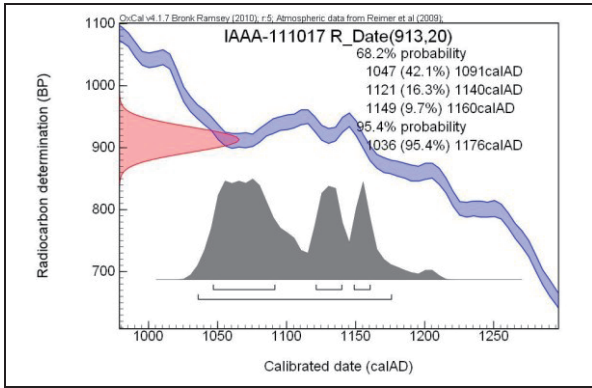
6 測定結果

土坑墓1号(4号人骨焼骨塊中)に含まれていた木炭No.1の¹⁴C年代は $910\pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1σ)は1047~1160cal ADの間に3つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は40%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal109 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50, 000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150



[参考]暦年較正年代グラフ

第 229 表 放射性炭素年代測定結果（土坑墓 1 号）

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-111017	No. 1	土坑墓 1 号 (4 号人骨焼骨塊中)	木炭	AaA	-27.89 ± 0.48	910 ± 20	89.25 ± 0.23

[#4567]

第 230 表 暦年較正結果（土坑墓 1 号）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-111017	960 ± 20	88.72 ± 0.21	913 ± 20	1047calAD - 1091calAD (42.1%) 1121calAD - 1140calAD (16.3%) 1149calAD - 1160calAD (9.7%)	1036calAD - 1176calAD (95.4%)

[参考値]

崩り遺跡出土炭化材の樹種（土坑墓1号）

（株）加速器分析研究所

はじめに

崩り遺跡の土坑墓1号では、地表下15 cmから4号人骨（焼骨塊）が出土している。本報告では、4号人骨の焼骨塊中の炭化物を対象として樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、0-15区土坑墓1号の4号人骨（焼骨塊）から出土した炭化材1点である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

樹種同定の結果、炭化材は、スイカズラ科スイカズラ属(*Lonicera*)に同定された。スイカズラ属は散孔材で、小径の道管が単独または2-3個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

4. 考察

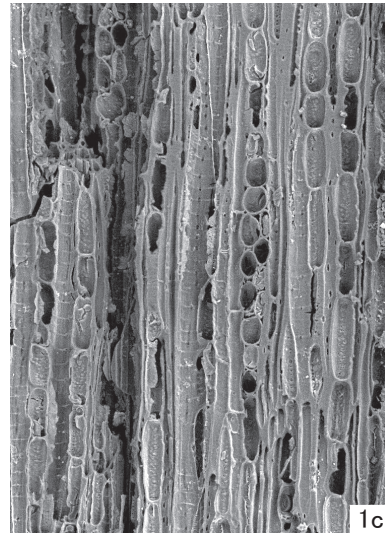
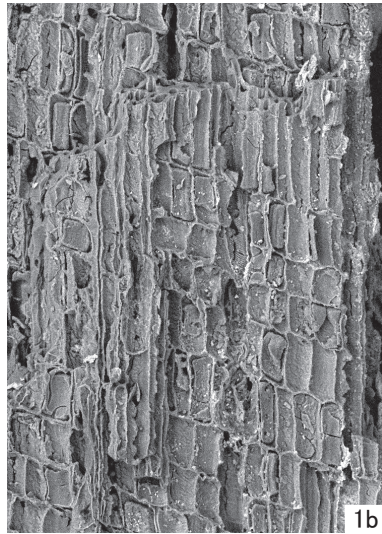
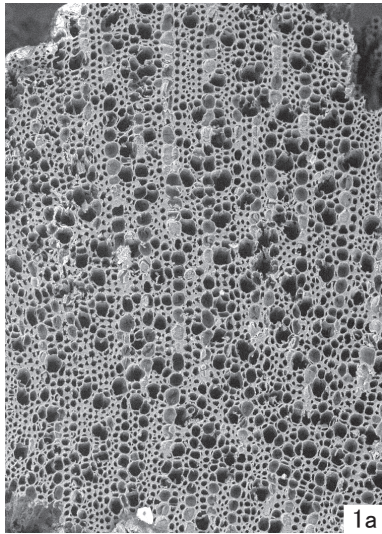
土坑墓1号の4号人骨（焼骨塊）中から出土した炭化材は、長さ約5 mm、幅・厚みが約1 mmの微細片であり、素葛属に同定された。スイカズラ属は、山野に生育する、つる植物あるいは低木である。焼骨と一緒に出土するとされていることから燃料材などとして用いられた可能性もあり、周辺に生育している樹木を利用したと推定される。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

※) 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

図版1 炭化材



1. スイカズラ属(O-15区土坑墓1号;4号人骨焼骨塊中)
a:木口,b:柁目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

第5節 (2) 崩り遺跡出土炭化物の年代測定及び樹種同定 (焼土跡05号・掘立柱建物跡6号P16 (P0606))

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

崩り遺跡は、喜界島南西部に位置する手久津久集落付近の標高約23mの海岸段丘上に位置する。調査は平成23～24年度に実施し、縄文時代後期～晩期と中世と考えられる遺構や遺物が確認されている。

縄文時代の遺構は、遺跡南側に広がり、堅穴状遺構が27基ほどみついている。これらの堅穴状遺構からは、面縄東洞式・嘉徳式などの土器や、石皿・磨石・敲石などの石器、さらに、ブダイやフェフキダイ科の魚骨・ウミガメ類・イノシシなど獣骨が出土している。

一方、中世の遺構は北側に展開しており、柱穴約1150基や掘立柱建物跡41棟、土坑墓2基、製鉄関連遺構が見つまっている。包含層や遺構からはカムイヤキ、白磁、鉄滓、炉壁片、石器やヤコウガイなどの貝類などが出土している。土坑墓は、喜界町城久遺跡でみられた焼骨再葬墓で、うち1基は、年代測定の結果910±20BPの値を得ている。

本業務では、遺跡から出土した炭化材2点の放射性炭素年代測定と樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、焼土跡05号(V-30区)出土炭化材と掘立柱建物跡6号P16(P0606)(Q-19区)I層出土炭化材である。

焼土跡05号(V-30区)出土炭化材は遺構底部直上より採取された。遺跡北側に広がる遺構群の年代確認のための放射性炭素年代測定と木材利用検討のため樹種同定を実施する。炭化材は、微細片が10片以上ある。予備的に実体顕微鏡で観察したところ、2～3種類の破片が混じっていたことから、最も破片数・重量が得られる種類を選択し、年代測定と樹種同定に供した。

掘立柱建物跡6号P16(P0606)(Q-19区)I層出土炭化材は、掘立柱建物跡を構成するピットから採取されたものである。炭化材は板目板状の小破片で、樹皮は認められない。樹種同定用の破片を採取した残りを全量、年代測定に供した。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pellettron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68.3%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95.4%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産樹木

の木材組織については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果を第 231 表および暦年較正結果を第 232 表、第 282 図に示す。同位体効果の補正を行った補正年代は、焼土跡 05 号 (V-30 区) が 340 ± 20 BP、掘立柱建物跡 6 号 P16 (P606) (Q-19 区) I 層が 990 ± 30 BP を示す。測定誤差を σ で計算した暦年較正結果は、前者が calAD1, 493-1, 632、後者が calAD1, 016-1, 146 である。

(2) 樹種同定

樹種同定結果は、年代測定結果と共に第 231 表に示した。炭化材は、掘立柱建物跡 6 号 P16 (P606) (Q-19 区) I 層が針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。焼土跡 05 号 (V-30 区) は広葉樹の破片であるが、微細片で観察範囲が狭いため、種類は不明である。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*)

マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急〜やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮

道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・広葉樹

散孔材の道管配列を有し、道管は単独または 2~3 個が複合して散在する。道管は単穿孔を有する。壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は、同性、1-4 細胞幅、1-30 細胞高。

4. 考察

焼土跡 05 号 (V-30 区) 出土の炭化材は、補正年代が 340 ± 20 BP であり、暦年較正結果 (1σ) は calAD1, 493-1, 632 を示す。この結果から、15 世紀末~17 世紀前半頃の可能性が考えられる。本試料の出土地点は、前述したように遺跡の北側で中世の遺構が展開する場所である。そのことを考慮すると、今回得られた年代は中世後半から近世前半で、おおよそ調和する年代と考える。また、次回刊行予定である崩り遺跡風葬墓出土人骨で実施している年代と測定値と近い値であり、関連性が示唆される。なお、炭化材は微細片であり、全体の大きさや年輪の位置関係等は不明であるため、得られた年代値と暦年較正結果は、多少の幅を持って見る必要がある。

炭化材は、広葉樹であるが、種類は不明である。同遺構中から出土した炭化材は、他にも 2 種類の微細片があった。いずれも広葉樹の破片であるが、種類は不明である。この結果

第231表 放射性炭素年代測定および樹種同定結果(焼土跡05号・掘立柱建物跡6号P16(P606))

地点・層位・遺構など	材質(種類)	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
焼土跡05号 (V-30区) 遺構底部直上	炭化材(広葉樹)	340 ± 20	-25.43 ± 0.49	350 ± 20	IAAA-150143
掘立柱建物跡6号 P16 (P606) (Q-19区) I 層	炭化材(マツ属複維管束亜属)	990 ± 30	-25.64 ± 0.63	$1,000 \pm 20$	IAAA-150144

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第232表 暦年較正結果(焼土跡05号・掘立柱建物跡6号P16(P606))

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)								相対比	Code No.
		σ	cal AD		cal AD		cal BP		cal BP		
焼土跡05号 V-30区 遺構底部直上	338 ± 23	σ	cal AD 1,493	-	cal AD 1,525	cal BP 457	-	425	0.319	IAAA-150143	
			cal AD 1,557	-	cal AD 1,602	cal BP 393	-	348	0.485		
		2σ	cal AD 1,614	-	cal AD 1,632	cal BP 336	-	318	0.196		
			cal AD 1,478	-	cal AD 1,637	cal BP 472	-	313	1.000		
掘立場下建物跡 6号P16 (P606) Q-19区 I 層	986 ± 25	σ	cal AD 1,016	-	cal AD 1,044	cal BP 934	-	906	0.711	IAAA-150144	
			cal AD 1,099	-	cal AD 1,119	cal BP 851	-	831	0.269		
			cal AD 1,143	-	cal AD 1,146	cal BP 807	-	804	0.020		
		2σ	cal AD 993	-	cal AD 1,051	cal BP 957	-	899	0.608		
			cal AD 1,082	-	cal AD 1,129	cal BP 868	-	821	0.308		
			cal AD 1,134	-	cal AD 1,151	cal BP 816	-	799	0.084		

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

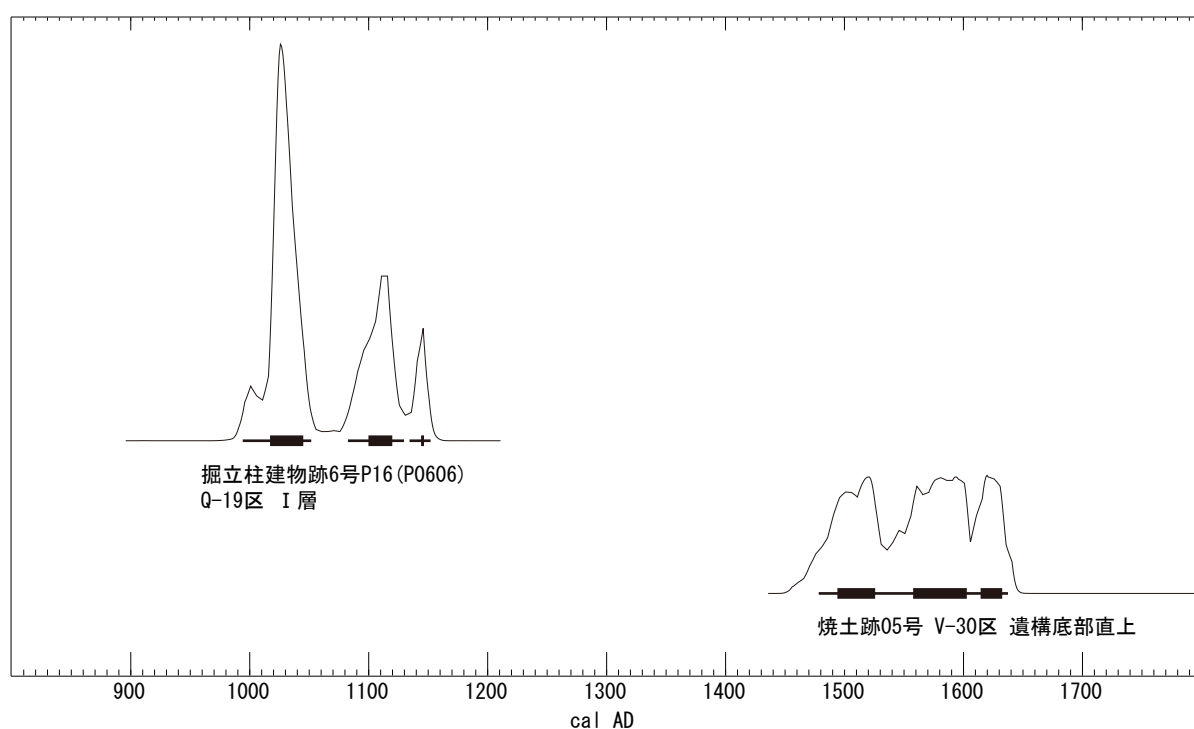
から、焼土跡05号では少なくとも3種類の広葉樹材が利用されたことが推定される。

一方、掘立柱建物跡6号P16 (P606) (Q-19区) I層出土の炭化材は、板目板状の小破片である。補正年代は 990 ± 30 BP、暦年較正結果(1 σ)は calAD1,016-1,146 を示す。この結果から、焼土跡05号よりも古い11世紀前半～12世紀前半頃と考えられる。本試料は掘立柱建物跡のピットから採取されたとする調査所見から、今回得られた年代が古代終末から中世初頭であり、おおそ調和的と考える。この炭化材についても、樹皮が確認できず、全体の大きさや年輪の位置関係が不明なことから、多少の幅を持って見る必要がある。

炭化材は、針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。マツ属複維管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツの3種が日本にある。アカマツは屋久島以北、クロマツがトカラ列島以北、リュウキュウマツがトカラ列島以南に分布するとされており、この記述に従えば、今回の複維管束亜属はリュウキュウマツの可能性が高い。リュウキュウマツの木材は、シロアリに弱いという欠点があるが、水湿には強いとされる。また、油脂を多く含むため、燃焼性が高い。今回の試料は、炭化していることから、何らかの事情で火を受けていることが推定される。

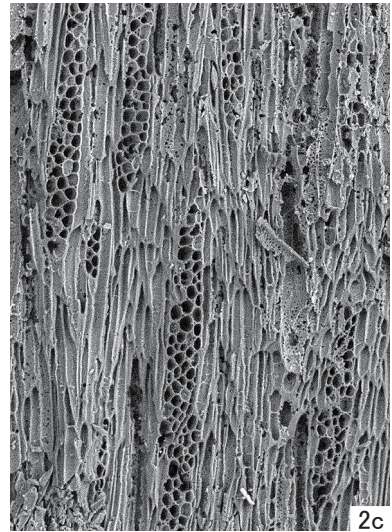
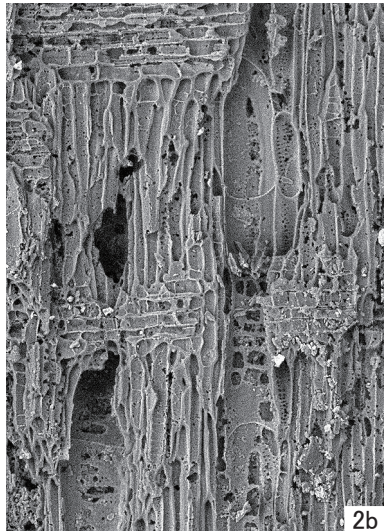
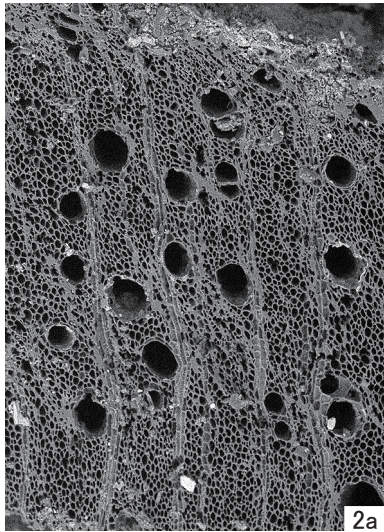
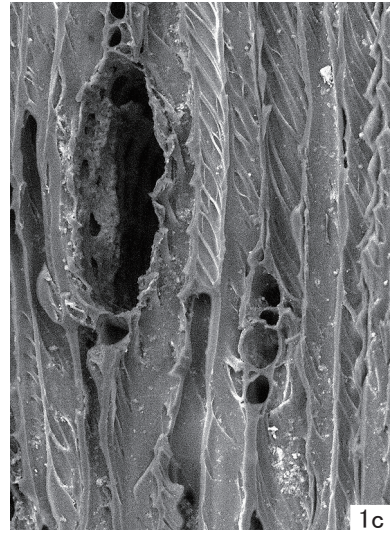
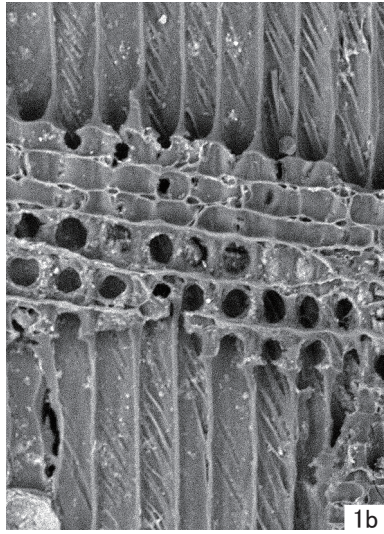
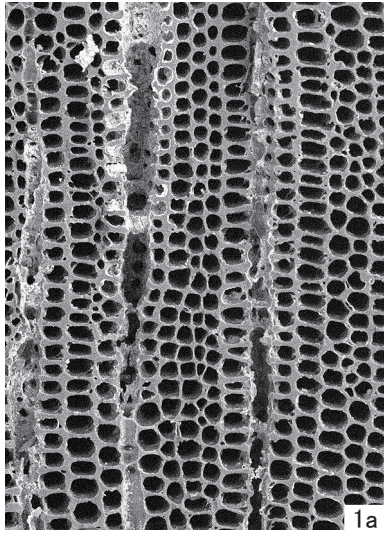
引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織 地球社, 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



第282図 暦年較正結果

図版1 炭化材



1. マツ属複維管束亜属(掘立柱建物跡6号P16(P0606)(Q-19区))
 2. 広葉樹(焼53 V-30区最下層)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μ m: 2a
 100 μ m: 1a, 2b, c
 100 μ m: 1b, c

第5節 (3) 崩り遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定) (フローテーション出土炭化物)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

崩り遺跡は、鹿児島県大島郡喜界町手久津久字崩りに所在する。測定対象試料は、住居跡や土坑墓から出土した炭化種子等7点である(第233表)。

試料の年代は、住居跡出土のLF376・崩り1(SH12)が3000~4000年前、土坑墓出土のLF111・崩り2(土坑墓2号), LF101・崩り3(土坑墓1号), LF103・崩り4(土坑墓2号)が11~12世紀、ピット出土のLF110・崩り5(P1201), LF296・崩り6(P980), LF716・崩り7(P1074)が13~15世紀と推定されている。

2 測定の意義

試料や、試料が出土した遺構の年代を明らかにする。特に喜界島における最古の植物食及び栽培植物の証拠となる可能性のある試料を含む。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第233表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) $\delta^{13}C$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(第233表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第233表に、補正していない値を参考値として第234・235表に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を第233表に、補正していない値を参考値として第234・235表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}C$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第234・235表、図版1、2に示した。なお、暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表され、ここでは前者を第234表、図版1に、後者を第235表、図版2に示した。

6 測定結果

測定結果を第233~235表、図版1、2に示す。較正年代は、cal BP(第234表、図版1)とcal BC/AD(第235表、図版2)の両方を用いて記述する。

住居跡出土試料LF376・崩り1(SH12)の¹⁴C年代は3380 \pm 20yrBP、暦年較正年代(1σ)は3680~3591cal BPの間に2

つの範囲で示され、推定される年代の範囲内に含まれる。

土坑墓出土試料の¹⁴C年代は、土坑墓2号のLF111・崩り2が820±20yrBP、LF103・崩り4が850±20yrBP、土坑墓1号のLF101・崩り3が830±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、土坑墓2号のLF111・崩り2が1216~1256cal ADの範囲、LF103・崩り4が1169~1215cal ADの範囲、土坑墓1号のLF101・崩り3が1184~1245cal ADの範囲で示される。同じ土坑墓2号から出土した2点の値はわずかに重ならないが、確率の低い範囲まで含めて2σ暦年代範囲で見ると、重なる範囲が多い。また、推定される11~12世紀に対して、LF101・崩り3とLF103・崩り4は確率の高い1σの年代値で重なる範囲を持つ。これら2点よりやや新しいLF111・崩り2は、2σに広げて見ると暦年代が12世紀までさかのぼり、推定に重なる。

ピット出土試料の¹⁴C年代は、P1201のLF110・崩り5が610±20yrBP、P0980のLF296・崩り6が600±20yrBP、P1074のLF716・崩り7が560±20yrBPである。暦年較正年代(1σ)

は、LF110・崩り5が1302~1394cal AD、LF296・崩り6が1311~1399cal AD、LF716・崩り7が1325~1412cal ADの間に各々複数の範囲で示され、いずれも推定される13~15世紀に含まれる値となっている。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

第 233 表 放射性炭素年代測定結果 (δ¹³C 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ ¹³ C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-162483	LF376・崩り1	SH12 床直	タブノキ子葉?	AAA	-22.78 ± 0.34	3,380 ± 20	65.62 ± 0.20
IAAA-162484	LF111・崩り2	土坑墓2号	オオムギ	AaA	-25.55 ± 0.48	820 ± 20	90.34 ± 0.25
IAAA-162485	LF101・崩り3	土坑墓1号	ムギ類	AaA	-19.86 ± 0.36	830 ± 20	90.14 ± 0.25
IAAA-162486	LF103・崩り4	土坑墓2号	ムギ類	AaA	-22.64 ± 0.40	850 ± 20	89.91 ± 0.25
IAAA-162487	LF110・崩り5	P1201	オオムギ	AaA	-25.06 ± 0.46	610 ± 20	92.63 ± 0.26
IAAA-162488	LF296・崩り6	P0980	オオムギ	AAA	-23.94 ± 0.49	600 ± 20	92.84 ± 0.26
IAAA-162489	LF716・崩り7	P1074	オオムギ	AAA	-25.79 ± 0.27	560 ± 20	93.22 ± 0.27

[#8438]

第 234 表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代 cal BP)

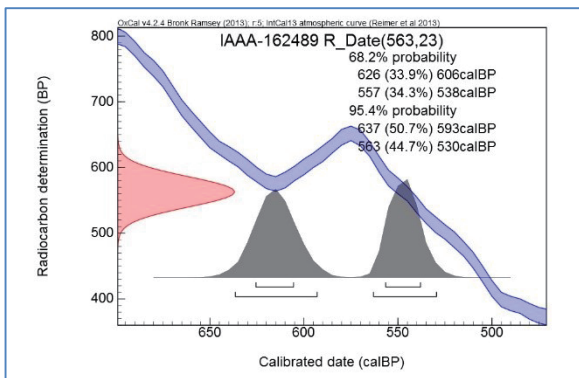
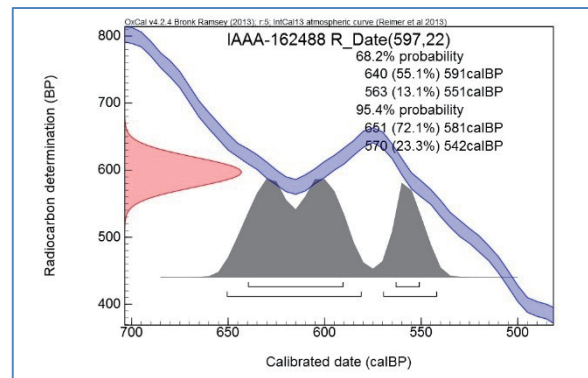
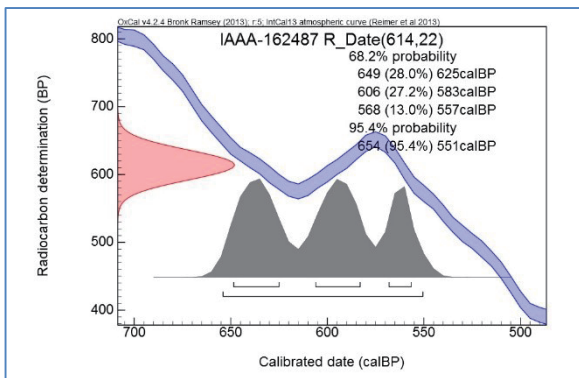
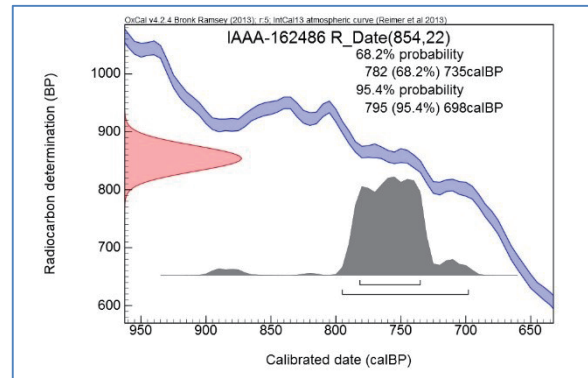
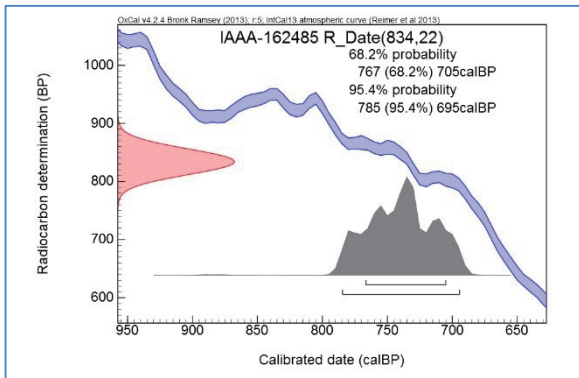
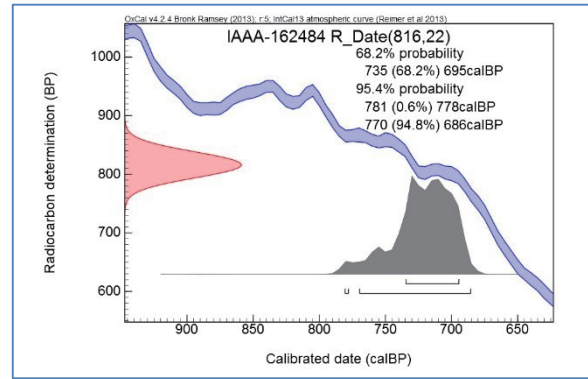
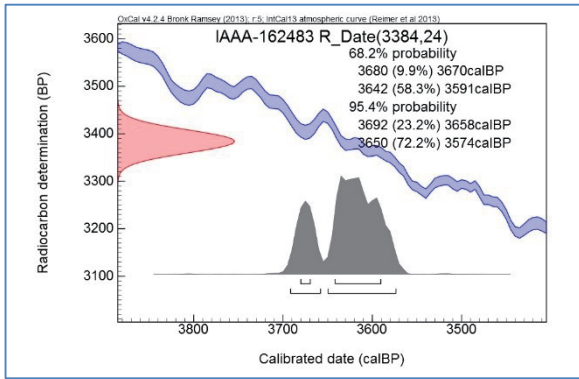
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-162483	3,350 \pm 20	65.92 \pm 0.20	3,384 \pm 24	3680calBP - 3670calBP (9.9%) 3642calBP - 3591calBP (58.3%)	3692calBP - 3658calBP (23.2%) 3650calBP - 3574calBP (72.2%)
IAAA-162484	830 \pm 20	90.23 \pm 0.23	816 \pm 22	735calBP - 695calBP (68.2%)	781calBP - 778calBP (0.6%) 770calBP - 686calBP (94.8%)
IAAA-162485	750 \pm 20	91.09 \pm 0.25	834 \pm 22	767calBP - 705calBP (68.2%)	785calBP - 695calBP (95.4%)
IAAA-162486	820 \pm 20	90.34 \pm 0.24	854 \pm 22	782calBP - 735calBP (68.2%)	795calBP - 698calBP (95.4%)
IAAA-162487	620 \pm 20	92.62 \pm 0.24	614 \pm 22	649calBP - 625calBP (28.0%) 606calBP - 583calBP (27.2%) 568calBP - 557calBP (13.0%)	654calBP - 551calBP (95.4%)
IAAA-162488	580 \pm 20	93.04 \pm 0.24	597 \pm 22	640calBP - 591calBP (55.1%) 563calBP - 551calBP (13.1%)	651calBP - 581calBP (72.1%) 570calBP - 542calBP (23.3%)
IAAA-162489	580 \pm 20	93.07 \pm 0.26	563 \pm 23	626calBP - 606calBP (33.9%) 557calBP - 538calBP (34.3%)	637calBP - 593calBP (50.7%) 563calBP - 530calBP (44.7%)

[参考値]

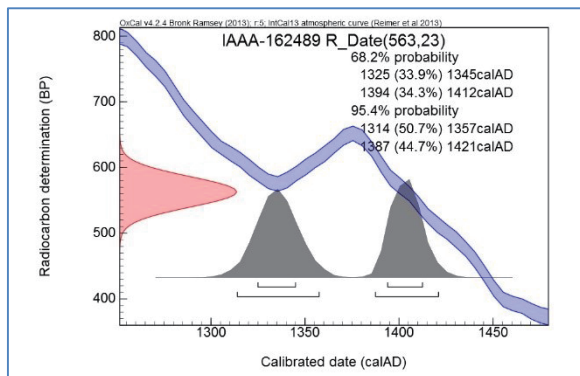
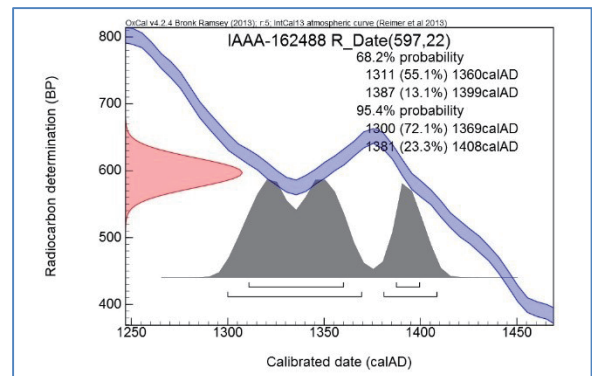
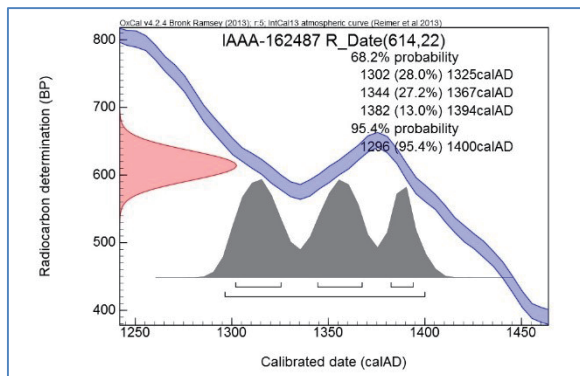
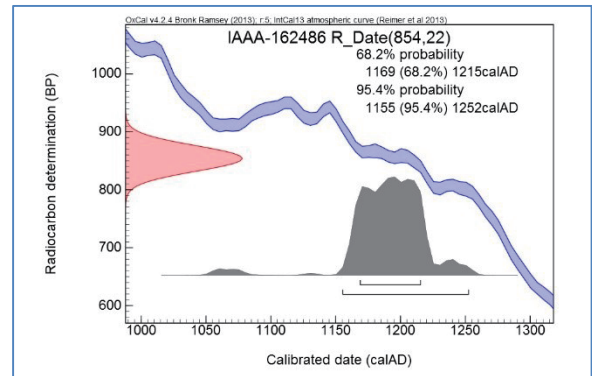
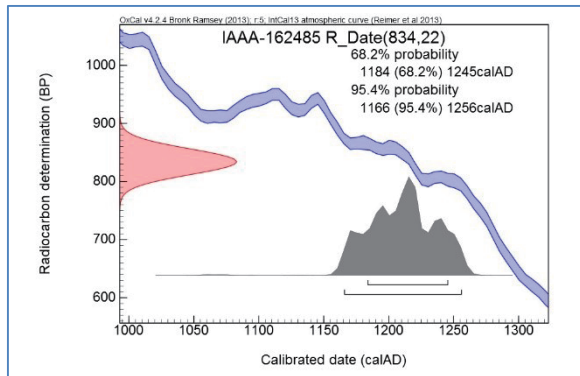
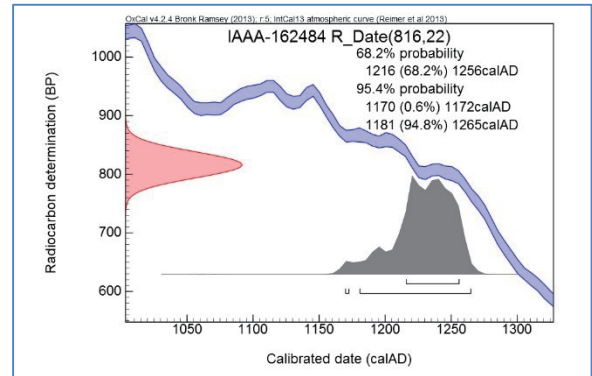
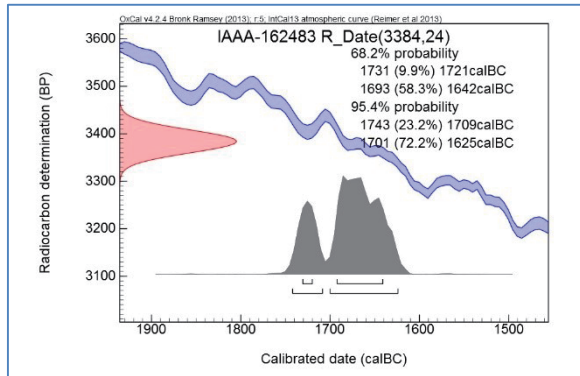
第 235 表 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代 cal BC/AD)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-162483	3,350 \pm 20	65.92 \pm 0.20	3,384 \pm 24	1731calBC - 1721calBC (9.9%) 1693calBC - 1642calBC (58.3%)	1743calBC - 1709calBC (23.2%) 1701calBC - 1625calBC (72.2%)
IAAA-162484	830 \pm 20	90.23 \pm 0.23	816 \pm 22	1216calAD - 1256calAD (68.2%)	1170calAD - 1172calAD (0.6%) 1181calAD - 1265calAD (94.8%)
IAAA-162485	750 \pm 20	91.09 \pm 0.25	834 \pm 22	1184calAD - 1245calAD (68.2%)	1166calAD - 1256calAD (95.4%)
IAAA-162486	820 \pm 20	90.34 \pm 0.24	854 \pm 22	1169calAD - 1215calAD (68.2%)	1155calAD - 1252calAD (95.4%)
IAAA-162487	620 \pm 20	92.62 \pm 0.24	614 \pm 22	1302calAD - 1325calAD (28.0%) 1344calAD - 1367calAD (27.2%) 1382calAD - 1394calAD (13.0%)	1296calAD - 1400calAD (95.4%)
IAAA-162488	580 \pm 20	93.04 \pm 0.24	597 \pm 22	1311calAD - 1360calAD (55.1%) 1387calAD - 1399calAD (13.1%)	1300calAD - 1369calAD (72.1%) 1381calAD - 1408calAD (23.3%)
IAAA-162489	580 \pm 20	93.07 \pm 0.26	563 \pm 23	1325calAD - 1345calAD (33.9%) 1394calAD - 1412calAD (34.3%)	1314calAD - 1357calAD (50.7%) 1387calAD - 1421calAD (44.7%)

[参考値]



[図版 1] 暦年較正年代グラフ (cal BP、参考)



[図版2] 暦年較正年代グラフ (cal BC/AD、参考)

第V章 基礎資料

本遺跡出土の遺物は小片が多かったが、可能な限り分類を行った。堅穴状遺構や掘立柱建物跡、土坑墓、土坑、焼土跡、溝状遺構、畝状遺構、石列、製鉄関連遺構の分類については、それぞれの遺構ごとの集計表や観察表を参照されたい。ここでは、ピット内出土遺物の一覧を第236～244表にまとめる

第236表 ピット内出土遺物(1)

ピット番号	区	出土遺物	SB番号	掲載遺物
P0011	M-11	滑石混入土器(1)、礫(3)、巻貝(1)	SB23(P6)	
P0016	H-15	礫(1)	SB21(P9)	
P0018	N-15	滑石二次加工品(1)、礫(1)	SB22(P3)	817
P0021	H-15	滑石製石鍋(1)、磨蝕石(1)、有溝砥石(1)、礫(2)	SB21(P28)	814
P0029	N-15	石皿(1)	SB21(P27)	815
P0033	Q-14	土器(1)		
P0040	O-15	粘土塊(1)、ヤコウガイ(1)		
P0041	O-16	土器(2)		
P0042	O-16	土器(1)、ヤコウガイ(1)		
P0053	P-17	土器(1)、礫(2)	SB10(P2)	
P0058	Q-17	土器(1)	SB11(P9)	
P0061	K-12	ヤコウガイ(1)、滑石製石鍋(1)		
P0067	K-12	白磁碗V類(1)、カムイヤキA群(1)、土器(1)、土師器(1)、滑石製石鍋(1)、礫(1)		891
P0068	L-12	カムイヤキ(1)、滑石製石鍋(1)、礫(2)		899
P0070	L-13	粘土塊(3)、礫(1)		
P0077	P-17	土器(1)、礫(1)、魚骨(1)	SB11(P2)	
P0080	P-17	土器(5)、滑石混入土器(1)、粘土塊(1)、礫(3)、貝類(6) (貝類内訳: タカラガイ(2)、ホソスジイナミガイ(3)、リュウキュウマスオ(1))		897
P0081	P-17	土器(1)、礫(1)	SB11(P1)	
P0083	P-18	滑石製石鍋(1)、礫(1)		
P0085	P-18	龍泉窯系青磁碗V類(1)、土器(1)、礫(2)、貝類(3) (貝類内訳: カシバン類(1)、キヌカツギイモ?(1)、ニシキアマオブネ(1))		884
P0086	P-18	カムイヤキ(1)、滑石混入土器(1)、土器(1)、タカラガイ(1)		
P0093	Q-17	カムイヤキ(1)、粘土塊(1)、礫(6)、貝類(3) (貝類内訳: ウミナ(1)、シラクモガイ(1)、チョウセンサザエ(1))	SB09(P3)	
P0094	Q-17	土器(12)、粘土塊(2)、礫(3)、貝類(11) (貝類内訳: タカラガイ(2)、マルスダレガイ科(1)、同定不可(8))	SB11(P6)	
P0102	P-18	カムイヤキ(1)、ヤコウガイ(2)、礫(2)		
P0104	Q-17	土器(2)、礫(1)、貝類(3) (貝類内訳: タカラガイ(1)、チョウセンサザエ(1)、ヤコウガイ(1))	SB09(P4)	
P0105	Q-17	土器(1)、鉄滓(1)、礫(4)、貝類(7) (貝類内訳: イモガイ科(1)、タカラガイ(2)、マルスダレガイ科(1)、同定不可(3))	SB08(P7)	
P0106	Q-17	滑石二次加工品(1)、礫(2)	SB10(P4)	805
P0109	Q-7	土器(1)、礫(1)		
P0119	Q-16	土器(2)、貝類(10) (貝類内訳: オキナワウスカワマイマイ(1)、サメザラ(1)、ザルガイ科(1)、ツムイモ(1)、ハナビラタカラ(1)、ハナマルユキ(1)、マダライモ(1)、リュウキュウマスオ(1))		

こととする。また、包含層出土遺物を第235～238表にまとめることとする。なお、表にある魚骨や獣骨、炭化種子の詳細については、第4章第3・4節を参照されたい。

詳細遺構配置図(第283～292図)はS=1:200で作成している。

第237表 ピット内出土遺物(2)

ピット番号	区	出土遺物	SB番号	掲載遺物
P0120	Q-16	土器(1)、滑石製石鍋(1)、チョウセンサザエ(1)、礫(1)		
P0124	Q-16	土器(1)、粘土塊(2)、礫(3)、貝類(23) (貝類内訳: アカイガレイシ(1)、アッキガイ科(2)、イモガイ科(1)、オキナワウスカワマイマイ(1)、サヤガタイモ(1)、シマイボラ(2)、タカラガイ(2)、ハナビラタカラ(3)、ヒメククノミカニモリ(2)、マダライモ(2)、ヤコウガイ(1)、同定不可(5))		
P0130	Q-16	チョウセンサザエ(1)		
P0131	Q-17	土器(2)	SB16(P3)	
P0140	Q-36	タカラガイ(2)、リュウテン属(1)		
P0142	P-16	礫(2)		
P0148	J-3	土器(3)、滑石製石鍋(1)、粘土塊(2)、礫(1)	SB39(P4)	833
P0149	J-3	土器(5)、鞆の羽口(1)、礫(2)	SB39(P3)	
P0155	J-3	土器(2)		
P0156	J-3	土器(2)、鞆の羽口(1)、粘土塊(4)	SB40(P17)	835
P0157	J-3	土器(3)、粘土塊(1)	SB40(P18)	
P0161	K-3	土器(1)、粘土塊(2)、礫(2)	SB40(P8)	
P0162	K-3	土器(8)、鉄滓(2)、礫(6)	SB40(P9)	
P0163	J-4	土器(9)、礫(4)	SB40(P1)	
P0164	J-4	土器(6)		
P0165	J-3	土器(6)、礫(1)		
P0169	K-4	土器(1)	SB40(P14)	
P0174	J-2	土器(4)、土師器(2)、不明貝類(1)		
P0175	J-K-2	土器(3)、礫(2)	SB08(P9)	
P0180	P-18	礫(1)		
P0183	P-19	土器(2)	SB06(P21)	
P0189	N-15	礫(1)		
P0197	N-6	鉄滓(6)、魚骨(1)、チョウセンサザエ(1)、マダライモ(1)		
P0199	N-16	リュウキュウマスオ(1)	SB18(P2)	
P0202	N-16	粘土塊(2)	SB18(P17)	
P0204	O-16	ホソスジイナミガイ(1)、粘土塊(3)		
P0205	O-16	土器(1)、礫(2)、貝類(2) (貝類内訳: シロイガレイシ(1)、ハナビラタカラ(1))	SB18(P8)	
P0206	O-16	鉄滓(6)、粘土塊(5)、礫(10)、キヌボラ(1)、魚骨(2)	SB19(P6)	
P0210	-	貝類(6) (貝類内訳: スヤシガイ科(1)、タカラガイ(1)、ムラサキウズ(1)、ヤコウガイ(2)、巻貝(1))		
P0213	O-15	白磁皿類(1)、土器(3)、礫(3)、ヤコウガイ(1)	SB19(P5)	808
P0214	O-15	チョウセンサザエ(1)、ヤコウガイ(1)		

第238表 ビット内出土遺物(3)

ビット番号	区	出土遺物	SB番号	掲載遺物
P0221	N-15	礫(1)		
P0223	N-15	土器(1), 鉄滓(2), 粘土塊(5), 礫(1), ヤコウガイ(1)	SB19(P3)	
P0226	N-14	滑石混入土器(1), 布目圧痕土器(1), 粘土塊(14), 礫(3), 魚骨(1)		
P0227	P-15	鉄滓(2), 粘土塊(3), 魚骨(1)	SB26(P4)	
P0228	P-15	土器(1), 礫(1)		
P0255	Q-13	土器(1), 滑石(1), 礫(1)		
P0256	Q-13	粘土塊(3), 礫(1)		
P0259	Q-13	粘土塊(1), 礫(1)		
P0260	Q-13	土器(1), 粘土塊(2), 礫(1), ヤコウガイ(1)		
P0261	Q-13	滑石混入土器(1)		
P0271	Q-13	土器(1)		
P0277	Q-19	白磁椀IV類, 鉄塊(1)	SB06(P3)	888
P0280	Q-19	礫(1), チョウセンサザエ(1), ヤコウガイ(1)	SB06(P18)	
P0284	Q-19	滑石製石鍋(1), 粘土塊(1), 礫(2), ショコガイ(1)	SB06(P13)	
P0287	Q-19	土器(1), 礫(1)	SB06(P7)	
P0289	Q-19	土器(1), 滑石製石鍋(1)		902
P0291	Q-19	土器(2), 礫(1)	SB06(P28)	
P0306	R-19	礫(1), ヤコウガイ(1)		
P0307	N-15	ヤコウガイ(1)		
P0308	P-15	土器(1), 滑石混入土器(3), 礫(3), 魚骨(1), 貝類(4) (貝類内訳:ベニエガイ(1), ヤコウガイ(2), リュウキュウマスオ(1))	SB20(P4)	
P0309	L-12	白磁(1)	SB31(P6)	
P0331	Q-19	土器(1), 滑石製石鍋(1), 鉄製品(2), 粘土塊(1), 礫(1)		898・907・908
P0332	Q-19	土器(1), 粘土塊(1), 礫(5), シャコガイ(1)	SB06(P25)	
P0333	Q-19	礫(2)		
P0334	Q-18	礫(1)		
P0336	Q-18	滑石製石鍋(1), 礫(1)	SB07(P12)	
P0337	Q-18		SB06(P6)	
P0339	Q-19	礫(1)	SB06(P10)	
P0340	Q-19	ピロースクタイプ白磁(1), 土器(5), 滑石混入土器(4), 滑石二次加工品(3), 滑石(2), 礫(16), 貝類(2) (貝類内訳:タカラガイ(1), ヤコウガイ(1))		904
P0343	Q-19	粘土塊(3), 礫(2), ヤコウガイ(1)	SB05(P4)	
P0346	Q-19	カムイヤキ(1), 滑石二次加工品(1), 礫(2)	SB07(P14)	
P0347	P-19	滑石混入土器(1), 滑石(1), 礫(3)		896
P0349	Q-18	土器(2), 粘土塊(1), 礫(4)		
P0352	Q-18	礫(4), ヤコウガイ(1)		
P0356	Q-15	粘土塊(1)		
P0357	N-15	ヤコウガイ(1), 魚骨(1)	SB21(P24)	
P0359	N-15	礫(2)		
P0377	R-14	滑石混入土器(2)	SB30(P2)	
P0383	R-14	土器(1), ホソスジイナミガイ(1)	SB30(P6)	
P0386	N-16	土器(4), 滑石製石鍋(1), 礫(1), 魚骨(2)		
P0387	N-16	礫(5)	SB18(P1)	
P0388	N-16	鉄滓(2), 土器(2)		
P0389	N-16	礫(1), タカラガイ(1), チョウセンサザエ(1)		

第239表 ビット内出土遺物(4)

ビット番号	区	出土遺物	SB番号	掲載遺物
P0393	K-12	白磁椀V類(1)		889
P0399	O-15	土器(1), 鉄製品(4)		
P0400	Q-18	土器(3)	SB09(P5)	
P0401	Q-18	敲石(1), 貝類(4) (貝類内訳:タカラガイ(1), トウカムリ科(1), ヤコウガイ(1), リュウキュウマスオ(1))		
P0402	Q-15	土器(1), 礫(6), 貝類(4) (貝類内訳:ホソスジイナミガイ(2), リュウキュウマスオ(1), 巻貝(1))		
P0406	R-17	礫(1), 貝類(4) (貝類内訳:サヤガタイモ(1), マダライモ(1), ヤコウガイ(1), レイシダマシ(1))	SB16(P6)	
P0409	O-15	礫(3)	SB21(P19)	
P0410	O-15	カムイヤキA群(1), カムイヤキ(2), 土器(1), 礫(2), 鉄滓(1)		894
P0411	O-15	土器(4), 礫(15), 不明貝類(2)	SB28(P3)	
P0416	L-5	魚骨(1)	SB34(P7)	
P0417	K-3	土器(2), 礫(1)	SB40(P21)	
P0423	L-5	土器(3), 礫(4)		
P0427	K-3	土器(6), 滑石二次加工品(2), 滑石(1)	SB40(P20)	836・837
P0428	J-3	土器(7)	SB40(P3)	
P0430	P-15	礫(2), ウン(1)	SB26(P6)	
P0431	O-15	土器(5), 滑石二次加工品(1), 滑石(1)粘土塊(3), 礫(14), イモガイ科(1)	SB27(P5)	
P0435	K-5	礫(2)		
P0437	L-5	土器(8), 礫(1)	SB34(P3)	
P0438	L-5	土器(2), 礫(1)	SB35(P4)	
P0439	L-5	粘土塊(10), 礫(6)		
P0440	K-3	土器(5), 滑石製石鍋(1), 滑石(2), 礫(1)	SB39(P10)	
P0441	K-3	土器(4), 滑石(2), 礫(2)		
P0443	O-15	土師器(1), 滑石製石鍋(1), 礫(9), 魚骨(1), 貝類(2) (貝類内訳:イモガイ科(1), チョウセンサザエ(1))	SB25(P4)	818
P0444	O-15	カムイヤキ(1), 土器(2), 鉄滓(1), 礫(5)	SB29(P4)	
P0445	O-15	白磁(1), カムイヤキA群(1)	SB28(P2)	821・822
P0446	O-15	礫(1)	SB27(P2)	
P0450	P-15	土器(1), 滑石(2), 鉄滓(1), 礫(3), 貝類(2) (貝類内訳:チョウセンサザエ(1), 同定不可(1))	SB27(P7)	
P0452	O-15	土器(1)	SB26(P2)	
P0454	O-15	礫(1)	SB29(P5)	
P0455	O-15	白磁(1), 滑石(2)鉄滓(1), 礫(10)	SB28(P4)	
P0458	M-14	土器(1), 鉄滓(1), 魚骨(1)	SB24(P2)	
P0459	N-14	土器(4), 礫(1)		
P0460	P-15	土器(1), 礫(3)	SB25(P5)	
P0461	O-15	土器(2), 礫(11)		
P0462	L-11	滑石製石鍋(1), 礫(1)	SB31(P8)	
P0465	L-11	滑石製石鍋(1), 礫(3)	SB31(P11)	
P0466	L-11	土器(2), 礫(1)	SB31(P12)	
P0468	L-12	土器(1)	SB31(P13)	

第240表 ピット内出土遺物(5)

ピット番号	区	出土遺物	SB番号	掲載遺物
P0470	-	滑石製石鍋(1)	SB31(P1)	
P0473	L-12	礫(6)		
P0474	L-12	滑石製石鍋(3), 滑石(1), 礫(1)		
P0475	L-12	白磁椀IV類(1), 土器(1)		
P0476	L-12	土器(1), 鉄滓(2), 石斧(1)		911
P0478	K-11	礫(1)		
P0481	L-11	土器(1)	SB31(P5)	
P0482	L-12	鉄滓(2)	SB31(P4)	
P0484	L-12	土器(1)	SB31(P2)	
P0485	L-12	魚骨(1)	SB31(P16)	
P0487	J-3	礫(3)	SB40(P24)	
P0490	K-3	土器(7), 土師器(2), 礫(4)	SB36(P1)	
P0491	K-3	土器(30), 土師器(1), 鉄滓(1), 粘土塊(1), 礫(2)	SB37(P1)	
P0492	K-3	白磁椀V類(1), カムイヤキA群(1), 土器(20), 有溝砥石(1), 礫(6)	SB38(P1)	824・825・830
P0494	K-3	土器(13), 土師器(1), 敲石(1), 礫(4)	SB37(P2)	
P0495	K-3	カムイヤキ(1), 土器(9), 礫(1)	SB38(P2)	
P0496	K-3	白磁椀V類(1), 土器(5), 土師器(3), 滑石製石鍋(2), 礫(9)	SB38(P3)	823・829
P0497	K-3	土器(10), 土師器(1), 礫(9)	SB37(P3)	
P0498	K-3	カムイヤキ(1), 土器(26), 土師器(1), 礫(8)	SB38(P4)	826~828
P0499	K-13	土器(13), 粘土塊(2), 礫(7)	SB37(P4)	
P0500	K-3	土器(17), 礫(3)	SB36(P3)	
P0501	K-3	土器(4), 礫(2)		
P0502	K-2	土器(6), 礫(3)		
P0503	M-13	滑石製石鍋(1)		
P0505	Q-19	土器(1), 滑石混入土器(2), 礫(3)		
P0507	L-12	礫(1)		
P0511	N-14	土器(23), 石核(1), 磨石(1), 礫(4)	SB23(P4)	
P0513	O-15	土器(1), 礫(2), 鉄製品(2), ヤコウガイ(1)	SB21(P17)	813
P0515	N-15	土器(1), 礫(2), 魚骨(1)	SB21(P13)	
P0517	O-15	礫(4), チョウセンサザエ(1), 魚骨(1)	SB21(P18)	
P0521	N-15	土器(1), 鉄製品(1), 鉄滓(1), 礫(3), ヤコウガイ(1)	SB23(P1)	
P0523	N-15	敲石(1)	SB22(P4)	
P0525	N-14	礫(1)	SB24(P4)	
P0527	O-15	土器(4), 鞆の羽口(1), 礫(3), ヤコウガイ(1)	SB21(P20)	812
P0528	O-15	土器(2), 鉄滓(1), 礫(1), 魚骨(1)	SB20(P3)	
P0529	Q-13	滑石(1), 石斧(1)		912
P0530	N-15	カムイヤキA群(1)	SB21(P11)	811
P0531	N-15	土器(1), 礫(1)		
P0532	N-15	土器(1), チョウセンサザエ(1)		
P0534	L-8	礫(1)		
P0541	Q-15	カムイヤキA群(1), 鞆の羽口(6), 鉄滓(4), 礫(27)		
P0542	O-15	礫(2)		
P0543	O-15	土器(2), 礫(3)	SB26(P3)	
P0544	O-15	鞆の羽口(2), 滑石(1), 鉄製品(1), 礫(7), ネズミ科(1), 魚骨(1)		

第241表 ピット内出土遺物(6)

ピット番号	区	出土遺物	SB番号	掲載遺物
P0545	O-15	滑石製石鍋(1), 礫(1)	SB27(P4)	820
P0547	O-15	土器(1), 礫(4), 魚骨(1)	SB25(P3)	
P0548	O-15	礫(5)	SB28(P5)	
P0550	P-15	滑石混入土器(1), 粘土塊(2), 礫(1)	SB28(P6)	
P0551	P-15	土器(1), 滑石混入土器(1), 礫(2), 魚骨(1), ウミギク科(1)	SB29(P8)	
P0552	P-15	白磁(1), 土器(1), 礫(1)		
P0553	P-15	土器(2)		
P0556	P-15	滑石二次加工品(1), 滑石(1), 鉄滓(6), 礫(3), 魚骨(3), 貝類(2) (貝類内訳: チョウセンサザエ(1), ヤコウガイ(1))	SB26(P1)	819
P0558	P-15	土器(1)		
P0560	N-15	鞆の羽口(1), 粘土塊(2), 礫(3), 貝類(4) (貝類内訳: タカラガイ(1), ムラサキウズ(2), ヤコウガイ(1))	SB20(P1)	
P0561	N-15	粘土塊(1), 礫(1), 貝類(4) (貝類内訳: イモガイ科(1), ハナマルユキ(1), ホソスジイナミガイ(1), ヤコウガイ(1))		
P0563	J-4	土器(1), 磨敲石(1), 礫(2)		
P0566	J-4	カムイヤキA群(1), 土器(7), 礫(1)		895
P0568	J-3	土器(5), 滑石製石鍋(1), 礫(4)		
P0572	K-3	土器(6), 礫(2)		
P0573	K-3	土器(7)	SB40(P13)	
P0574	K-3	土器(2), 布目圧痕土器(1), 磨敲石(1), 礫(3)	SB40(P23)	
P0575	K-3	土器(9), 礫(2)	SB40(P12)	
P0576	K-3	土器(2), 礫(1)	SB39(P13)	832
P0577	K-3	カムイヤキA群(2), 土器(18), 礫(4)		
P0578	K-3	カムイヤキA群(1), 磨敲石(1)	SB39(P12)	831・834
P0580	K-3	滑石(1)	SB39(P11)	
P0581	K-3	敲石(1)	SB40(P10)	
P0583	J-3	土器(3)	SB39(P2)	
P0584	K-3	土器(2), 礫(4)	SB40(P22)	
P0587	Q-18	白磁椀IV-I a類, 土器(5), 礫(10)		890
P0588	N-14	滑石混入土器(1), 滑石(1)	SB23(P2)	
P0592	N-14	鉄滓(1), 礫(2)	SB24(P1)	
P0597	O-15	礫(2)		
P0598	O-15	土器(1), 石製品(1), 石器(3), 礫(2), ヤナギシボリ(1) (石器内訳: 台石(1), 磨石(1), 敲石(1))	SB19(P4)	809・810
P0602	P-18	土器(1), 粘土塊(2), 礫(1), イガレイシ(1)	SB13(P3)	
P0603	Q-19	土器(1), 土師器(1)	SB06(P26)	
P0604	Q-19	土器(1), 滑石製石鍋(1)	SB06(P17)	
P0606	Q-19	礫(2), 炭(年代測定990±30BP・マツ属複雑管束亜属)	SB06(P16)	
P0607	Q-19	ヤコウガイ(4)		
P0609	Q-19	礫(3)	SB06(P12)	
P0610	Q-19	磨敲石(1), 礫(7), ヤコウガイ(11)	SB06(P14)	
P0612	Q-18	礫(1)	SB07(P11)	
P0613	P-19	土器(1), 敲石(1), 礫(2)		
P0614	Q-19	滑石製石鍋(1), 礫(1), ヤコウガイ(3)	SB06(P15)	803

第242表 ビット内出土遺物(7)

ビット番号	区	出土遺物	SB番号	掲載遺物
P0617	Q-19	土器(1), 滑石製石鍋(2), 鉄製品(1), 粘土塊(1), 礫(2), 巻貝(1)		900
P0619	Q-19	滑石製石鍋(1), 台石(1), 礫(6), 貝類(4) (貝類内訳: マガキガイ(1), 巻貝(1), 同定不可(2))		
P0620	P-18	磨敲石(1)	SB13(P1)	806
P0625	P-15	礫(9)	SB25(P6)	
P0628	Q-19	礫(1)		
P0634	N-15	礫(1)		
P0637	N-15	粘土塊(1), 魚骨(2)	SB19(P1)	
P0638	N-15	魚骨(3)		
P0639	N-15	魚骨(1)		
P0642	N-15	土器(1), 鞆の羽口(1), 礫(1), 魚骨(1)	SB22(P13)	905
P0643	N-15	礫(1)	SB22(P8)	
P0646	O-15	土器(14), チョウセンサザエ(1)	SB21(P12)	
P0648	O-15	滑石(1)		
P0649	O-15	土器(1), 礫(1), 巻貝(1)		
P0651	N-15	鉄滓(1), 礫(4)	SB18(P6)	
P0656	-	土器(1)		
P0659	Q-19	土器(3), 粘土塊(1), 礫(1), 魚骨(1)	SB05(P5)	
P0662	Q-18	イモガイ科(1)	SB07(P6)	
P0664	P-18	土器(1), 兼久式土器(1), 巻貝(1)	SB07(P4)	804
P0666	-	礫(1), アラスノメ(1)		
P0668	Q-17	土器(5), 礫(3)	SB11(P7)	
P0669	N-15	礫(1)	SB21(P29)	
P0700	R-13	礫(2), 貝類(9) (貝類内訳: イモガイ科(1), オオスミウスカワマイマイ(3), カシパン類(1), シマイボボラ(1), ヌノメカワニナ(1), マダライモ(1), 同定不可(1))	SB30(P5)	
P0701	O-15	礫(4), 巻貝(1)	SB29(P2)	
P0702	O-15	土器(1), 鉄滓(1), 礫(1)		
P0705	Q-18	滑石二次加工品(1)		903
P0709	Q-17	土器(2), 礫(1)		
P0712	Q-17	礫(2), ヤコウガイ(1), 二枚貝(1)	SB11(P5)	
P0715	N-15	魚骨(1)	SB20(P2)	
P0717	N-15	土器(1), 礫(2), 魚骨(2), ヤコウガイ(1)	SB21(P30)	
P0718	N-15	魚骨(1)	SB22(P10)	
P0720	P-18	土器(1)		
P0721	P-18	土器(2), 礫(7), 貝類(2) (貝類内訳: チョウセンサザエ(1), ナガニシ類(1))	SB09(P1)	
P0723	P-18	土器(3), 礫(1)	SB10(P1)	
P0727	N-15	磨敲石(1), 魚骨(1)	SB22(P5)	816
P0728	Q-17	土器(1)	SB11(P4)	
P0730	Q-17	礫(1)		
P0732	O-16	土器(3), 布目圧痕土器(1), 礫(3), 魚骨(2), 貝類(7) (貝類内訳: タカラガイ(3), チョウセンサザエ(1), ビノスモドキ(2), ヤコウガイ(1))	SB18(P10)	807
P0733	N-16	鞆の羽口(1)		
P0740	K-6	カムイヤキA群, 礫(9)		893
P0742	L-6	白磁(1), 礫(16)		
P0744	K-5	滑石製石鍋(1), 礫(5)		901

第243表 ビット内出土遺物(8)

ビット番号	区	出土遺物	SB番号	掲載遺物
P0746	L-4	土器(17), 礫(2)		
P0747	L-4	土器(2), 礫(6)		
P0753	K-5	礫(1)		
P0764	O-15	滑石製石鍋(1), 石皿(1), 礫(6)	SB29(P1)	
P0765	O-12	滑石混入土器(1), 礫(1), 貝(1)		
P0770	J-2	土器(1), 礫(4)		
P0779	C-2	礫(1)		
P0796	N-12	礫(1)		
P0799	L-5	滑石(1), 礫(1)	SB37(P2)	
P0900	U-28	魚骨(1), マダライモ(1)		
P0909	U-28	礫(3), 魚骨(4), 貝類(4) (貝類内訳: アッキガイ科(1), アラスノメ(1), ビノスモドキ(1), ヤコウガイ(1))		
P0910	U-28	チョウセンサザエ(1)		
P0911	U-28	有溝砥石(1), 滑石(1), 礫(1), ヤコウガイ(1)		918
P0913	U-28	サメザラ(1), ヤコウガイ(1)		
P0914	U-29	魚骨(4)		
P0919	U-28	イモガイ科(2), 魚骨(11)		
P0938	U-27	銅製品(1), 二枚貝(1)		910
P0949	U-27	礫(1), マガキガイ(1)	SB02(P14)	
P0952	V-27	龍泉窯系青磁椀IV'類(1)		883
P0957	V-29	ヤコウガイ(1)		
P0962	V-27	鉄製品(1), 魚骨(6), 炭化種子(1), 二枚貝(2)		
P0964	V-27	龍泉窯系青磁椀IV類(1)		882
P0973	V-28	タカラガイ(1)		
P0980	V-29	貝製品(1), 魚骨(2), 炭化種子(77)(炭化種子放射性年代測定600±20BP)		920
P0982	V-28	タカラガイ(1)		
P0984	V-25	ヤコウガイ(1)		
P0988	U-28	ホラガイ(1)		
P0991	V-28	礫(1), 魚骨(1), 貝類(3) (貝類内訳: キヌボラ(1), タカラガイ(1), ムシロガイ科(1))		
P0993	V-28	敲石(1), 礫(1)	SB01(P5)	
P0994	V-27	アラスノメ(1), タカラガイ(2)		
P1000	V-30	ウシ(1)	SB01(P8)	
P1002	V-27	礫(2), チョウセンサザエ(1), ヤコウガイ(2)	SB02(P13)	
P1003	U-27	魚骨(1)	SB03(P17)	
P1008	V-26	マガキガイ(1), ヤコウガイ(1), 二枚貝(1)	SB03(P15)	
P1010	V-26	台石(1)	SB03(P12)	802
P1011	V-26	礫(6), 魚骨(1)	SB03(P7)	
P1021	V-26	巻貝(1)		
P1022	V-26	ヤコウガイ(1)	SB04(P6)	
P1056	T-24	白磁椀IV類(1), 鉄製品(1), 土器(1), 礫(1)		887・909
P1066	V-26	粘土塊(1), 貝類(5) (貝類内訳: マイマイ(4), ヤコウガイ(1), 巻貝(1))	SB04(P4)	
P1067	V-26	敲石(1), 磨敲石(1), 貝類(3) (貝類内訳: タカラガイ(2), ホソスジイナミガイ(1))	SB03(P11)	
P1069	U-27	土器(1)		
P1073	U-28	魚骨(1)		
P1074	U-28	魚骨(16), 獣骨(1), 炭化種子(66)(炭化種子放射性年代測定560±20BP)		

第244表 ピット内出土遺物(9)

ピット 番号	区	出土遺物	SB 番号	掲載 遺物
P1077	U-27	魚骨(1)		
P1079	U-26	土器(1)		
P1084	V-27	ウシ(1)	SB04 (P3)	
P1086	V-26	ヤコウガイ(1), 二枚貝(2)		
P1087	V-27	タカラガイ(1), 巻貝(1), 二枚貝(4)	SB03 (P13)	
P1089	V-27	粘土塊(4), ヤコウガイ(1)		
P1090	V-26	巻貝(3), ウシ/ウマ(2), 二枚貝(2)	SB03 (P14)	
P1092	V-27	魚骨(1)		
P1093	V-26	礫(1), 二枚貝(1), 不明貝類(4)		
P1096	V-27	二枚貝(1)		
P1097	V-27	礫(1), 巻貝(3), 二枚貝(2)		
P1098	V-27	石皿(1)		
P1099	V-26	アッキガイ科(1), タカラガイ(2), ヤコウガイ (1), 二枚貝(2)		
P1100	V-27	龍泉窯系青磁椀IV類(1), 龍泉窯系青磁 (1), 巻貝(1)		886
P1102	V-27	粘土塊(1), ヤコウガイ(1)		
P1103	V-26	粘土塊(9)		
P1105	U-26	ヤコウガイ(1), 巻貝(1)		
P1108	U-28	魚骨(1)	SB02 (P7)	
P1116	U-26	ヤコウガイ(2)	SB03 (P4)	
P1117	V-27	二枚貝(1)		
P1119	V-26	土器(1)		
P1121	V-26	巻貝(10)		
P1122	V-27	巻貝(16)		
P1130	U-24	龍泉窯系青磁椀IV類(1), 龍泉窯系青磁椀 (1)		885
P1132	T-25	土器(2), 粘土塊(4)		
P1140	T-25	礫(1)		
P1141	U-27	炭化種子(2)		
P1142	U-26	巻貝(2)	SB03 (P2)	
P1145	V-27	滑石混入土器(1)		
P1146	U-27	魚骨(2)	SB03 (P1)	
P1149	V-26	滑石混入土器(1), 礫(3), 貝類(4) (貝類内訳: ソデボラ科(1), タカラガイ(1), 二枚貝(2))	SB03 (P3)	
P1155	U-25	土器(1), 磨石(1), 礫(1)		
P1166	V-27	礫(1)		
P1167	V-27	鉄製品(1)		
P1175	S-19	礫(1)		
P1178	R-19	粘土塊(3)		
P1194	R-20	粘土塊(1), 礫(1), 巻貝(1)		
P1196	S-20	白磁皿(1), 土器(3), 粘土塊(1), 礫(3)	SB05 (P16)	
P1201	V-29	炭化種子(7)(炭化種子放射性年代測定 610±20BP)		
P1203	U-29	ウシ/ウマ(1)		
P1205	U-29	礫(1)	SB01 (P1)	
P1206	U-29	礫(2), ヤコウガイ(2)	SB01 (P12)	
P1208	U-28	ヤコウガイ(2)		
P1212	U-28	礫(1), ヤコウガイ(2)		
P1223	U-28	土器(1)		
P1251	M-11	粘土塊(1)		

第245表 包含層(Ⅲ層～Ⅴ層)出土遺物一覽(1)

	青磁	龍泉窯系青磁					白磁					カムイヤキ			褐釉陶器	須恵器	鉄製品		鉄滓	ガラス玉	滑石製石鍋	滑石二次加工品	滑石	土師器	兼久式土器	滑石混入土器	布目瓦痕土器	鞆の羽口	粘土塊	獸骨類	炭化種子	合計							
		皿Ⅳ類	盤Ⅱ類	椀Ⅲ類	椀Ⅳ類	椀Ⅴ類	坏Ⅴ類	不明	華南系	椀Ⅳ類	椀Ⅴ類	ビロースクⅢ	ビロースクⅣ	不明			A群	B群															不明	釘	鉄片				
Ⅲ層	a	1		4	1	7	2	2	5	1	5	1	1	6	118	6	15	1	2	1	1	1	1	59	1								308						
	b								1																							13							
	c	7	1	1		1	2		8					4	1	1	1	1	5										13	16		84							
	c・d					2							1																			3							
	d	1		1		1			13				1	1	2		4	2	1										1	8	13	56							
	g								4				1	1	1														3			10							
	j					2	1	1					1																		11	35							
k	3	1	1	1	1							5	10	1	40													9			88								
一括																															11								
Ⅳ層	a												3	19		42			5									9	73	8	189								
	b														3	1												21		1	30								
Ⅴ層	a											1	1															35			43								
	c																														0								
合計	12	1	2	6	1	2	14	4	2	32	1	14	2	2	2	22	155	8	103	4	8	6	2	1	2	126	1	2	3	24	4	3	23	1	35	177	62	1	870

第246表 包含層(Ⅲ層～Ⅴ層)出土遺物一覽(2)

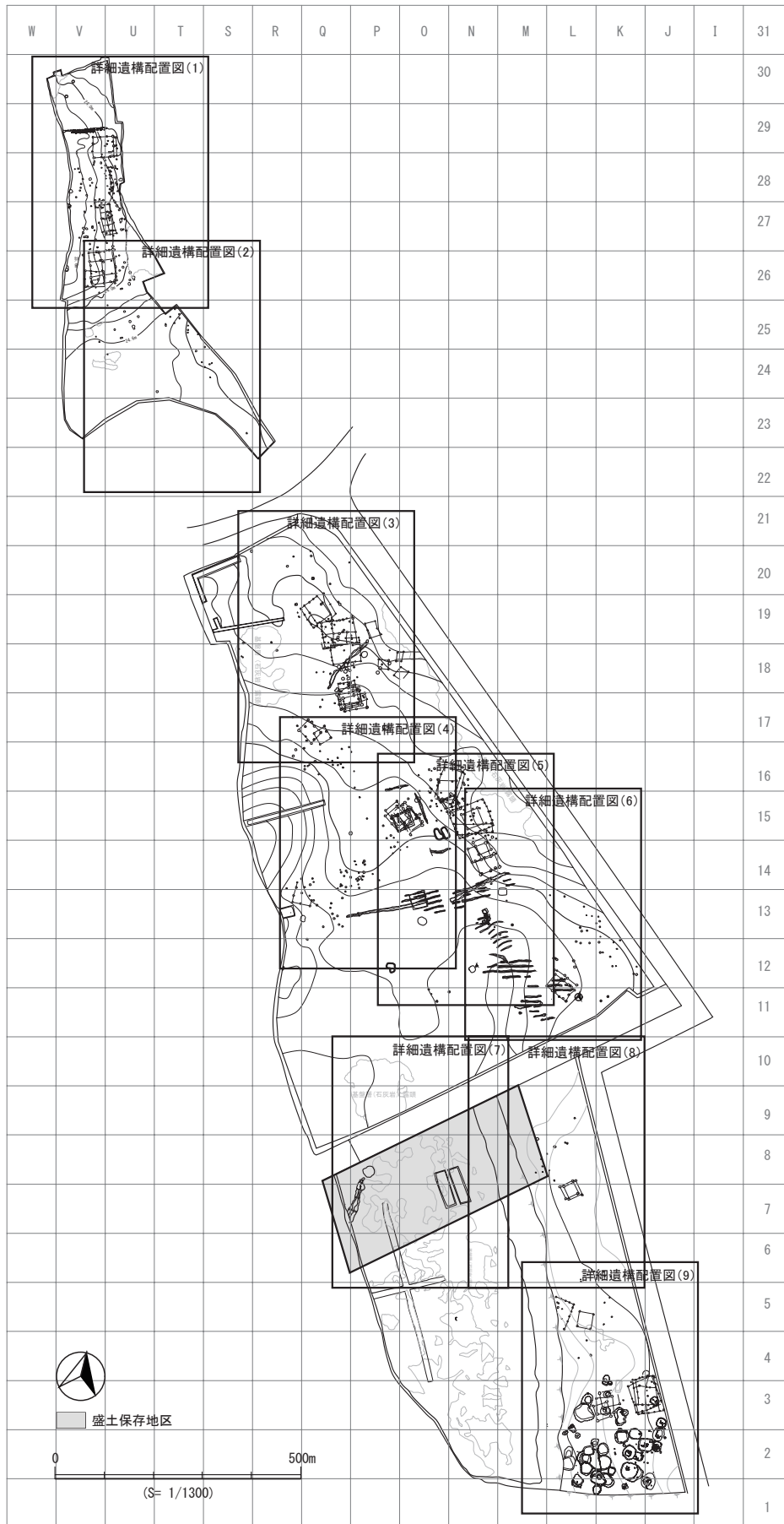
	土器		砂質土器	泥質土器	不明土器	石器										貝類															合計											
	Ⅱ-Ⅲ類	Ⅳ類				磨石	敲石	磨石	石斧	石鏃	有溝砥石	石核	棒状石製品	剥片	礫(滑石を除く)	螺蓋製打具	イタヤガイ科	イモガイ科	イモガイ科	ウラスジマイソデ	オオヌノメ	オキニシ	オニコブシ	ケマンガイ	コオニコブシ	サザエ科	サヤガイ科	サヤガイ科	シラコガイ	シラコガイ		シラコガイ	シラコガイ	タカラガイ	チヨウセンサザエ	ニシキルズガイ科	ハナマルユキ	ホソスジイナミガイ	マガキガイ	ヤクシマタカラ	ヤクシマガイ	リユウキユウマスオ
Ⅲ層	a			12	30	10			21	2				1	107	1		8	1		2			1	1	1	2	3	2					1	31	1			238			
	b																																					0				
	c							2							31					3	1					1	1	3	11		1			8	4			67				
	c・d																																					0				
	d			1	4			6		1					37	1	1	1	3	2		1				1	2	1	7	1				3	1	6		82				
	g														6			1	2								3	3						3	3	6		28				
	j														1	1		1		1									4				4				15					
k	1		3		21	1	1	1		1			3	30			1										5		2		3					75						
Ⅳ層	a			36	96	7	1	15	1	1		1		3	140											2	2		6	1	2	13				1	331					
	b	1	1	2	15	21	117	1	1					1	43																						203					
Ⅴ層	a			24	71			4							32																						131					
	c					1									3																						6					
合計	1	1	1	2	91	223	155	3	2	49	3	1	1	1	8	430	1	1	18	1	7	4	1	2	1	2	1	4	6	2	11	38	1	2	1	5	1	66	1	8	15	1176

第247表 包含層(Ⅵ層・Ⅶ層)出土遺物一覽(1)

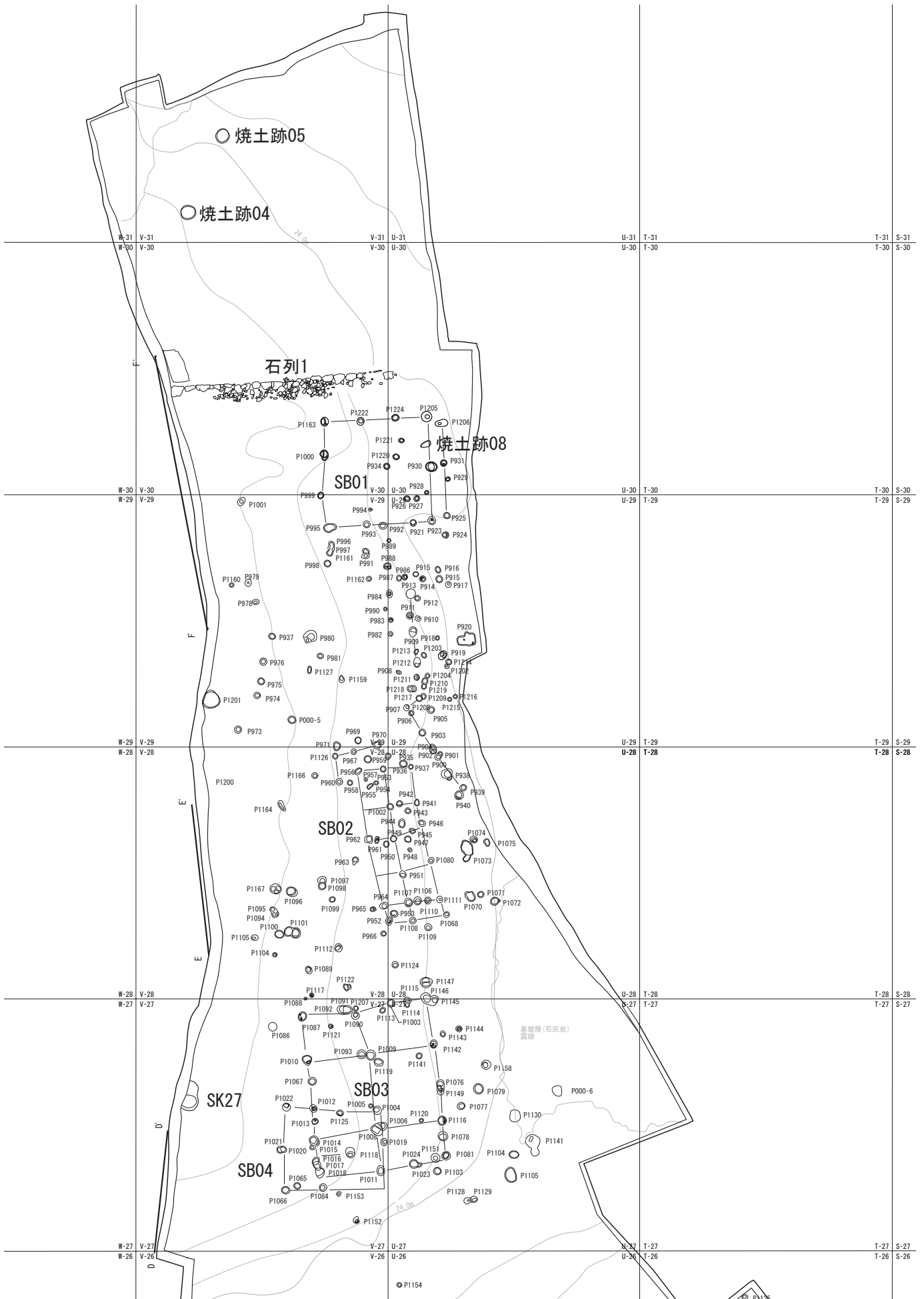
	土器												合計												
	I類	Ⅱ類			Ⅲ類	Ⅳ類			Ⅴ類			Ⅵ類		Ⅶ類		Ⅷ類	Ⅷ'類	細沈線文系	砂質土器	泥質土器	不明土器				
Ⅵ層	a	4		1									1	2					17	35		63			
	b	37		2		1	5	3	3	2	5	54	12	46		2	1	2	6	5	4	944	2102	66	3302
	c																		1						1
Ⅶ層	a	61	3	1	1		2	16	2	6	5	57	2	61	6			1	3	4	29	1215	1614		3089
	a・b																					9	15		24
b										1		82				1						3	12		99
合計	102	3	4	1	1	7	19	5	9	11	195	14	107	6	3	2	4	9	10	33	2189	3778	66	6578	

第248表 包含層(Ⅵ層・Ⅶ層)出土遺物一覽(2)

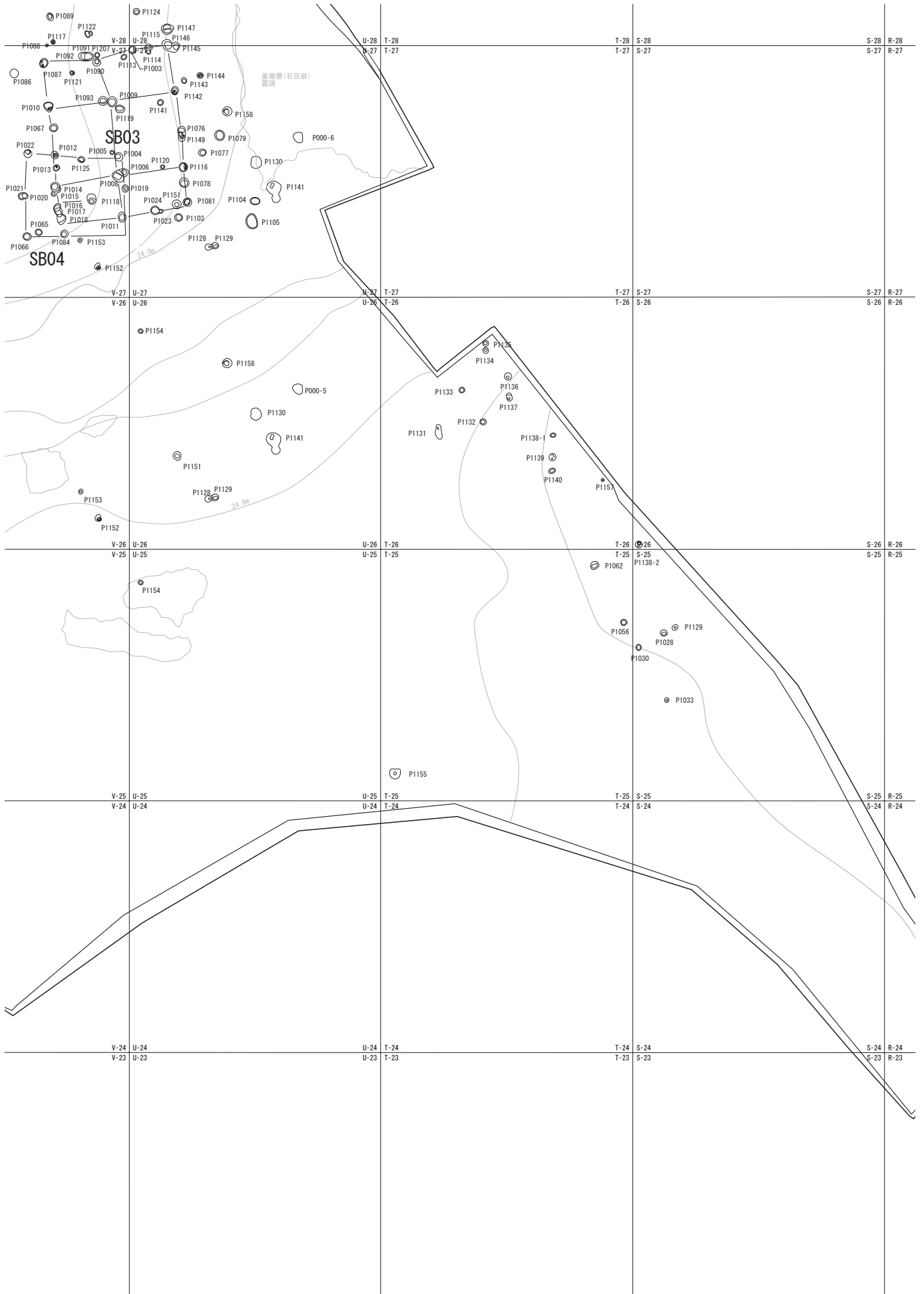
	貝類										石器										剥片	礫	獸骨	合計								
	アツキガイ科	イモガイ科	オニコブシ	シラコガイ	タカラガイ	チヨウセンサザエ	ハナピラタカラ	ハナマルユキ	マイマイ	マクラガイ科	ヤコウガイ	二枚貝	磨石	敲石	磨石	凹石	台石	石皿	石斧	砥石					有溝砥石	石器	スクレイパー状	石鏃	石核	石製品	棒状石製品	不明
Ⅵ層	a																												23	75		107
	b	1																											125	1552	15	1830
	c																															0
Ⅶ層	a	1	2	1	2		1	4		1	1	5		1	243	1	3	2	6		1				21	3	1	4	169	1632		2105
	a・b														5															20		25
b															3									1					9		13	
合計	1	3	1	2	1	1	6	1	1	1	9	3	1	3	347	1	3	3	11	1	2	1	2	44	4	2	4	317	3288	15	4080	



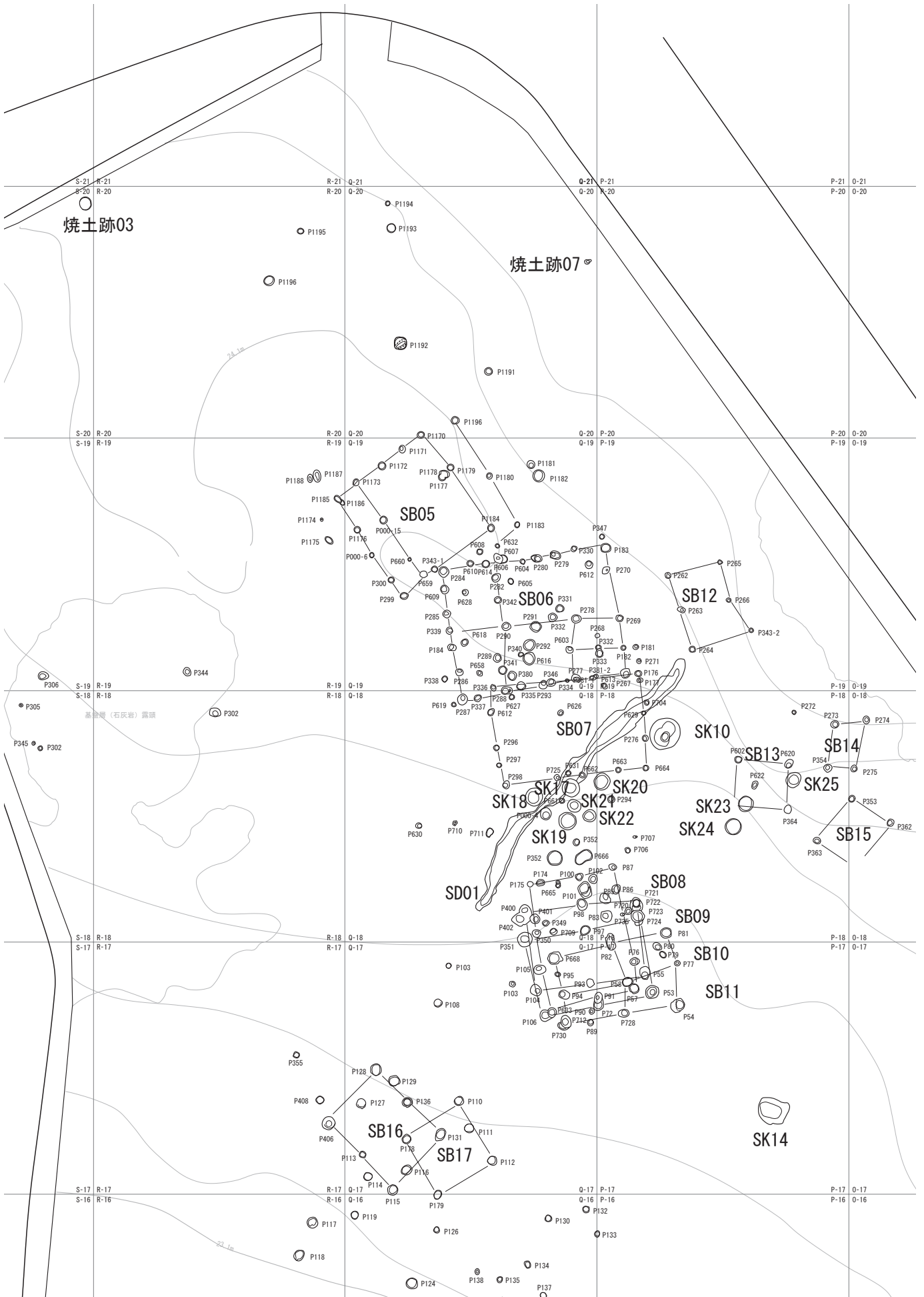
第283図 詳細遺構配置図全体図



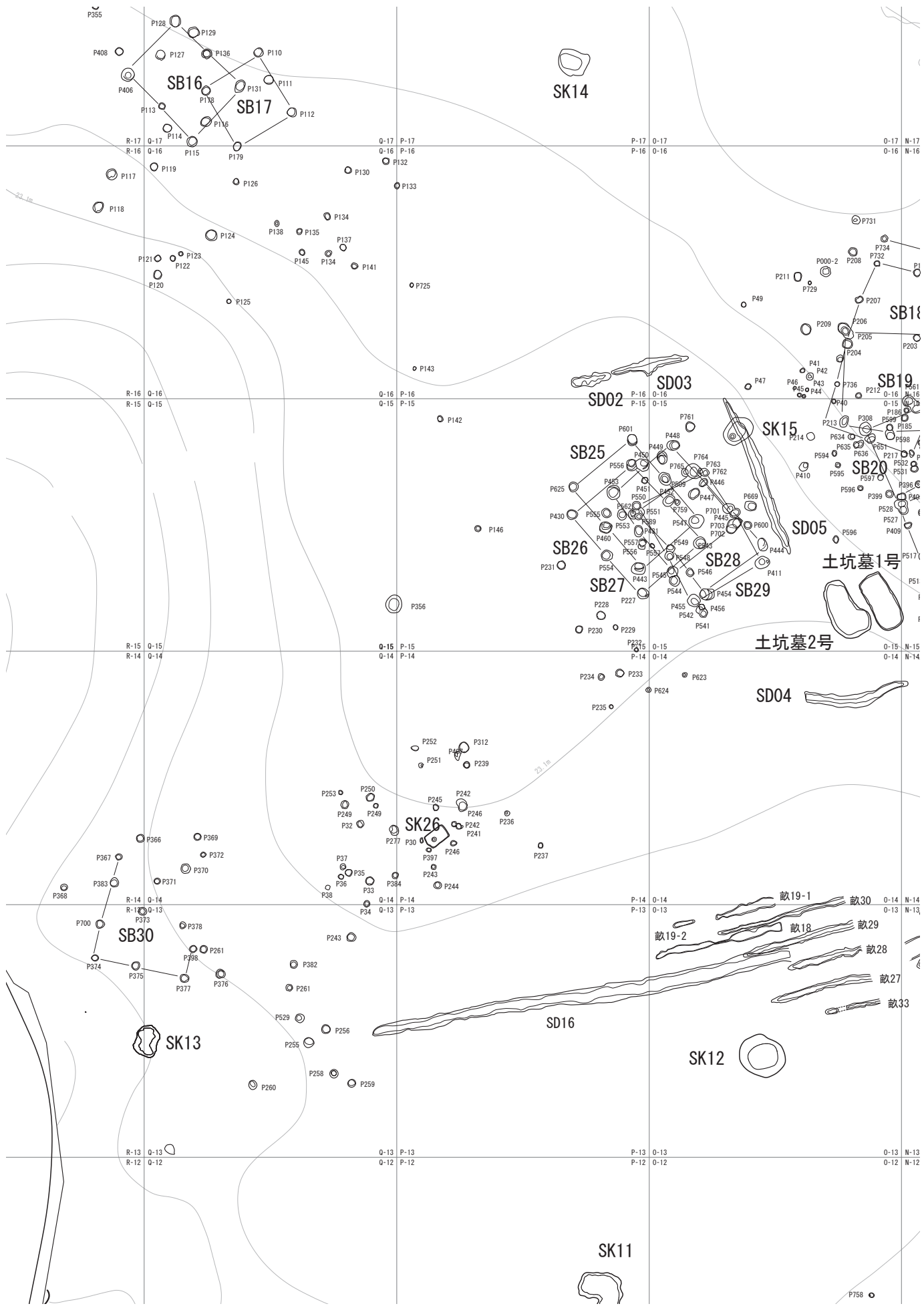
第284図 詳細遺構配置図(1)



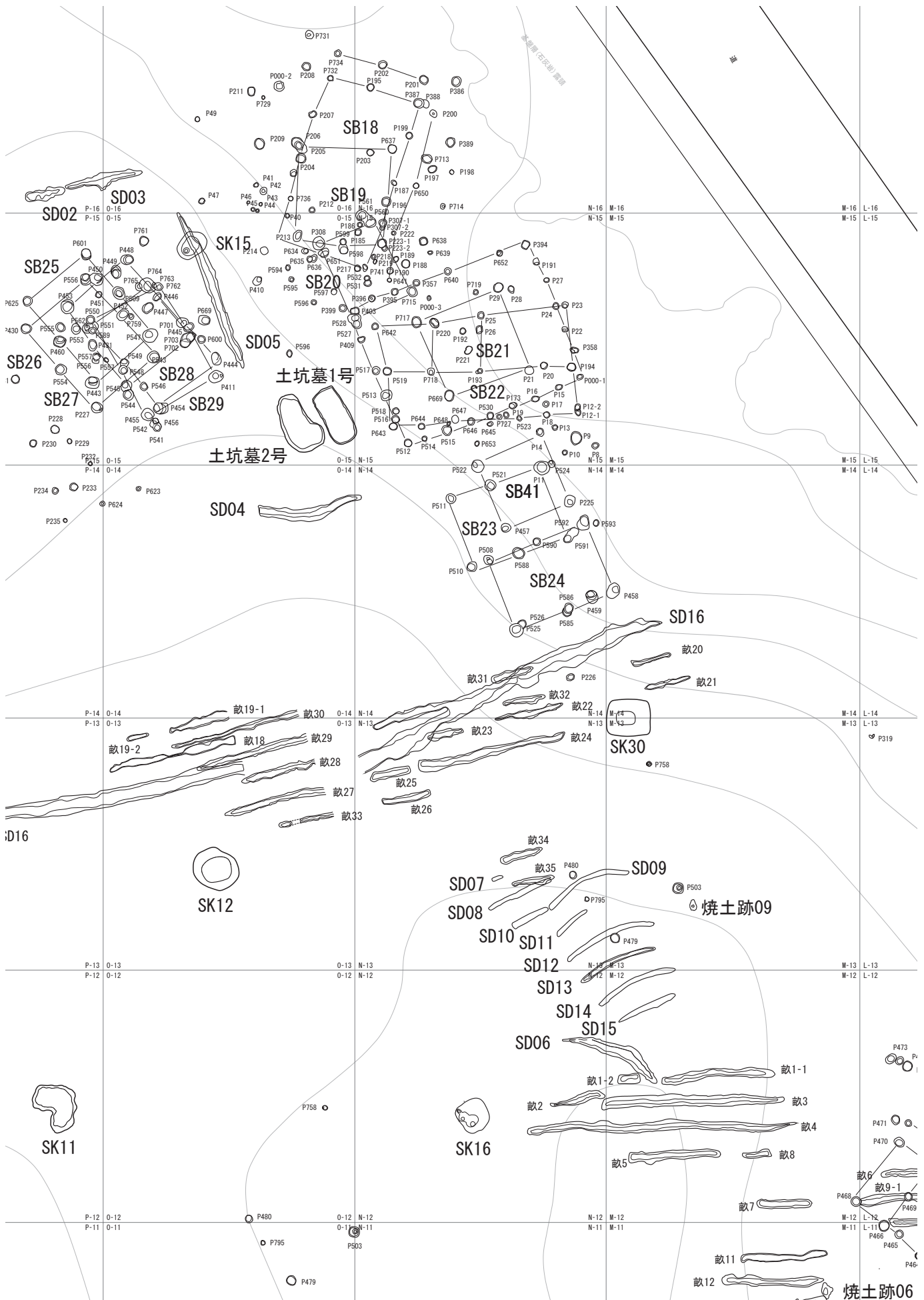
第285図 詳細遺構配置図(2)



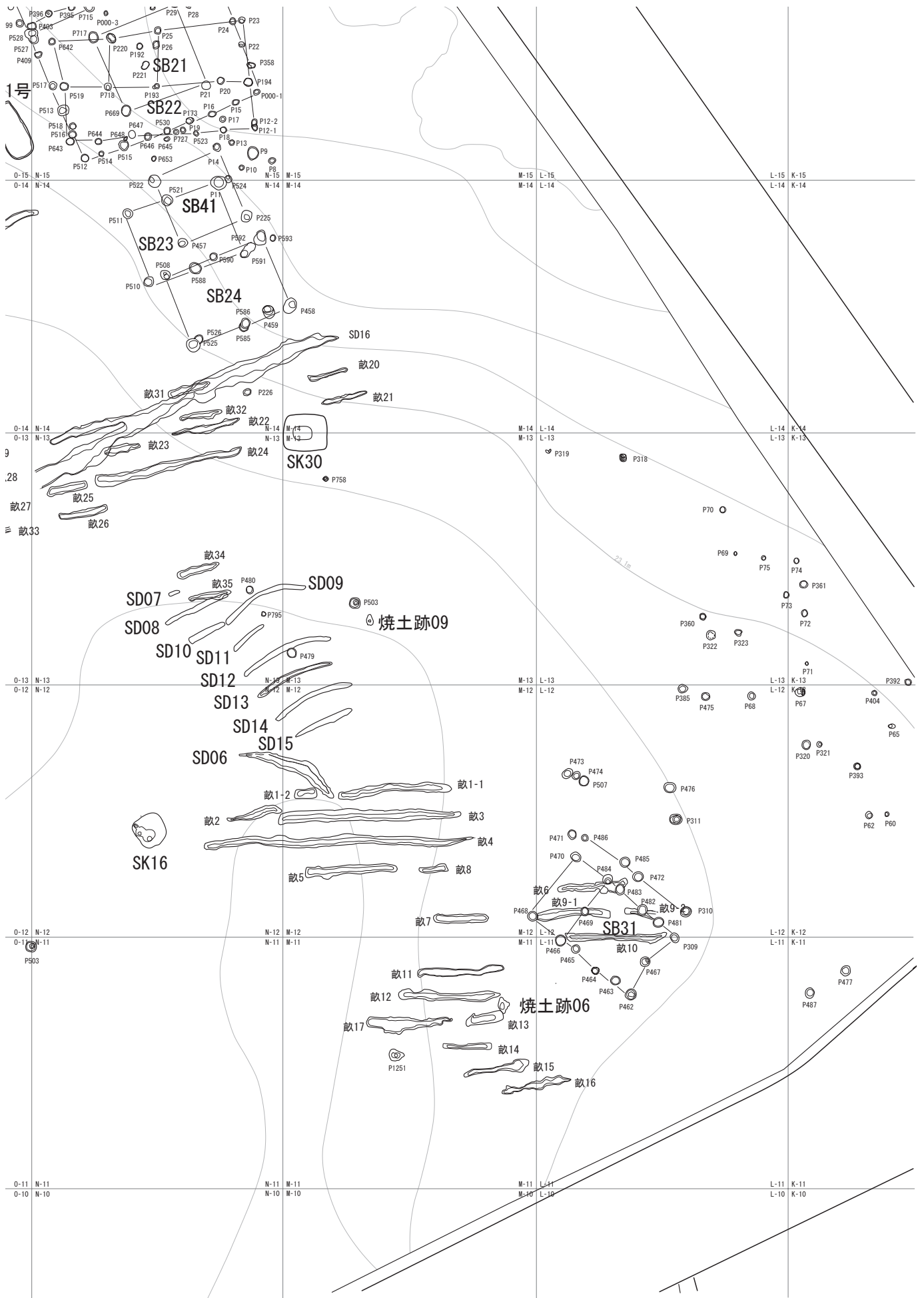
第286図 詳細遺構配置図(3)



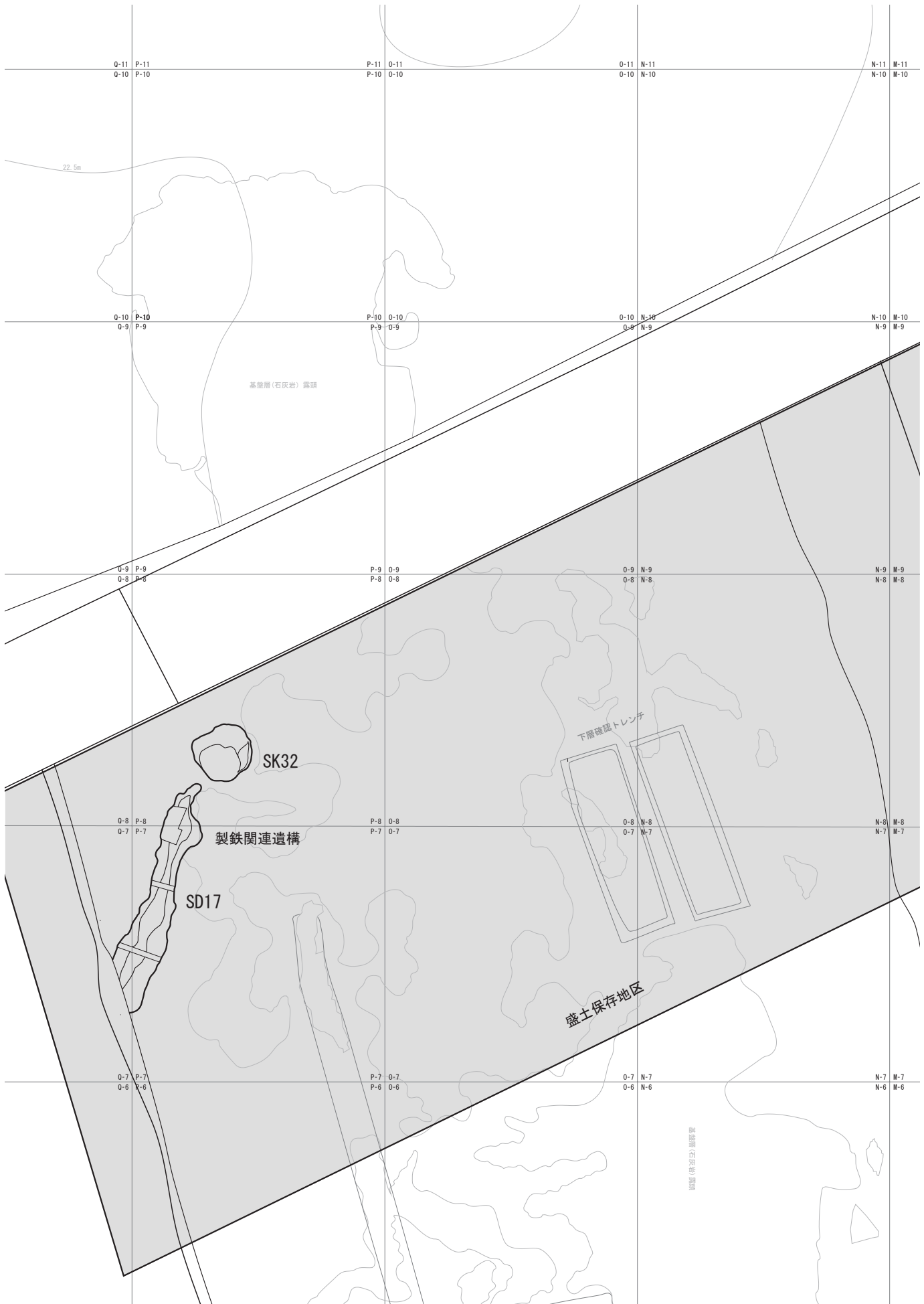
第287図 詳細遺構配置図(4)



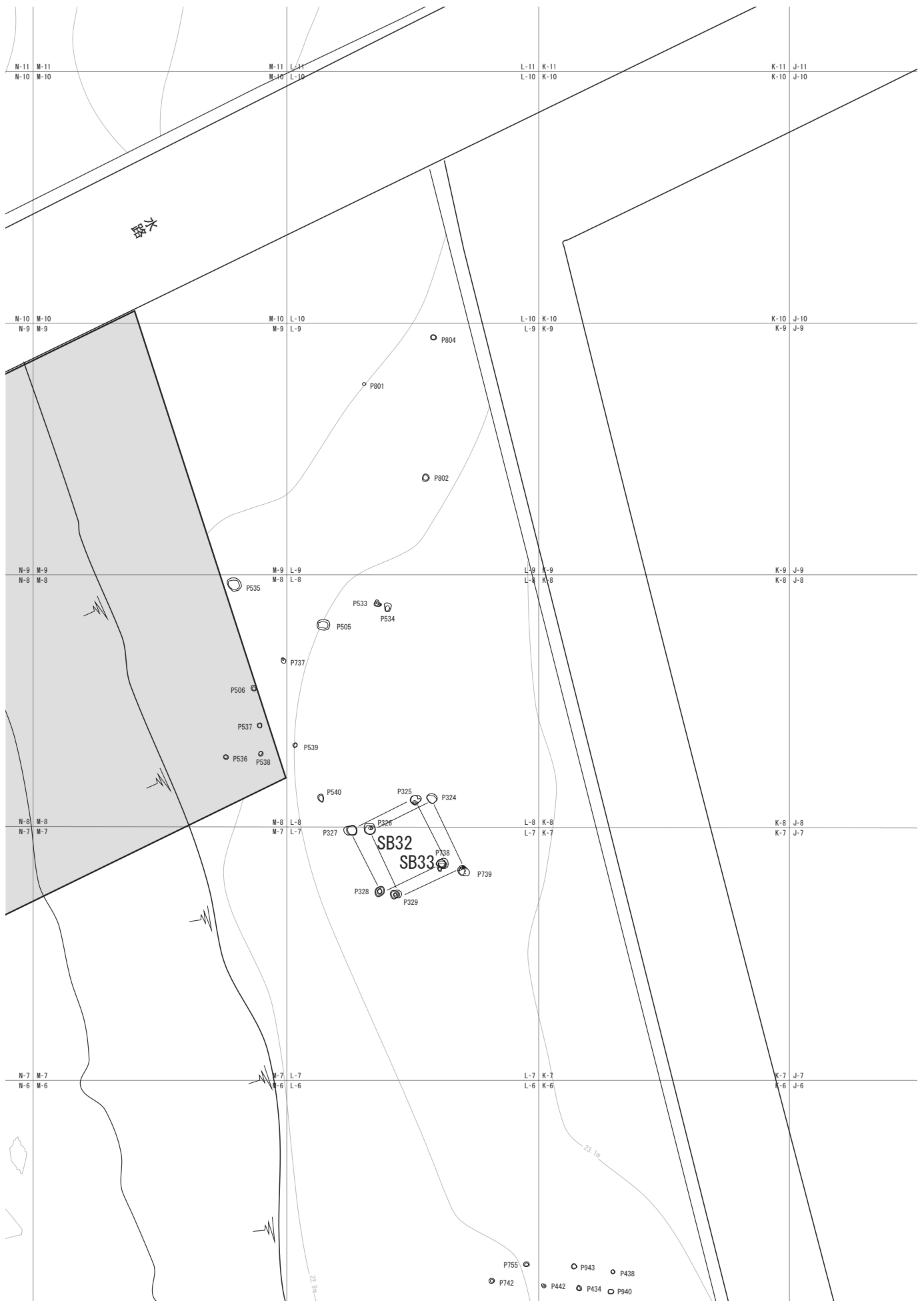
第288図 詳細遺構配置図(5)



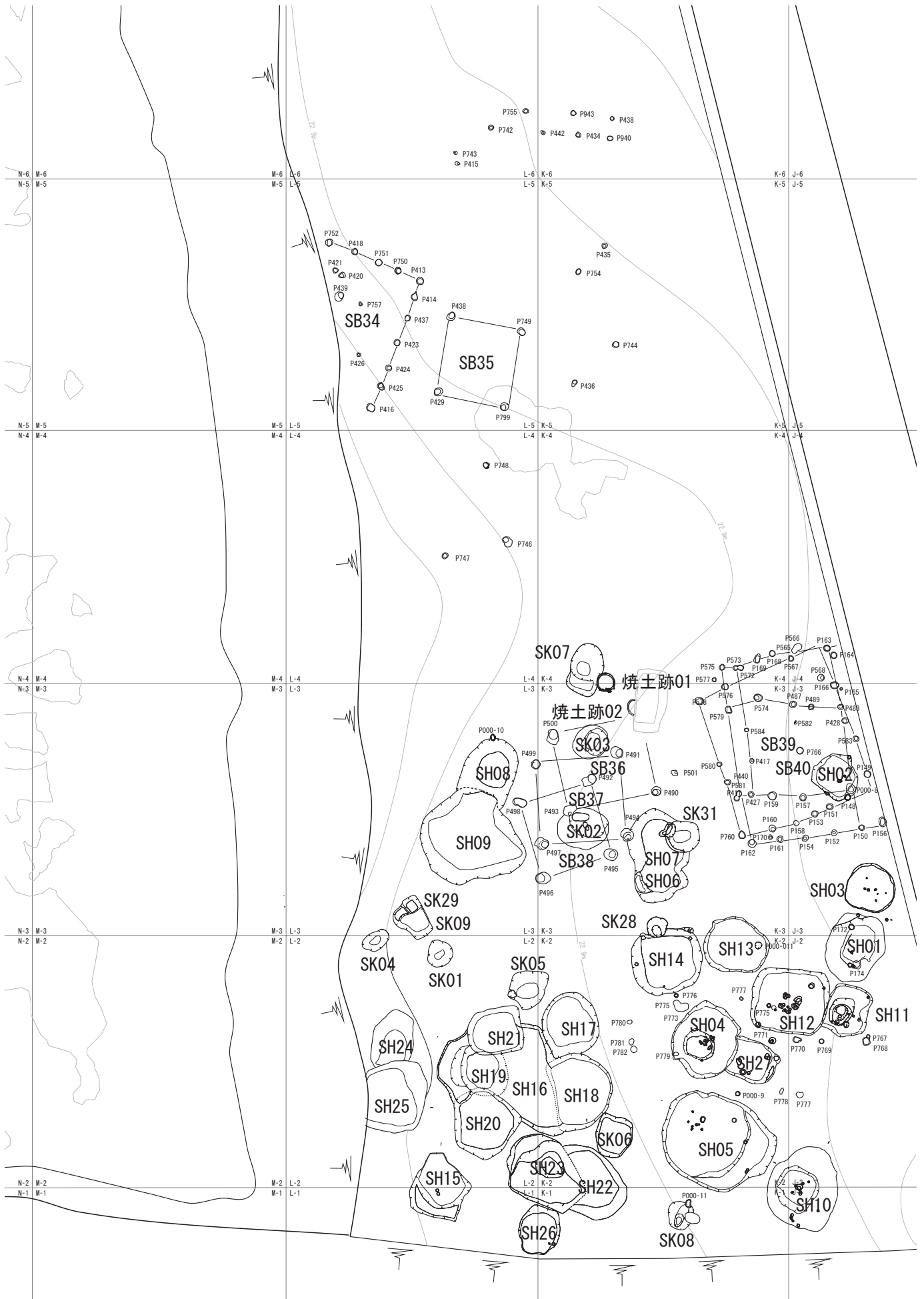
第289図 詳細遺構配置図(6)



第290図 詳細遺構配置図(7)



第291図 詳細遺構配置図(8)



第292図 詳細遺構配置図(9)

第VI章 まとめ

崩り遺跡は、畑地帯総合整備事業に伴い平成 23 年度から 24 年度まで本調査を行った。本調査では 13,806 m²を発掘し、遺跡南側からは縄文時代後期～晩期と考えられる竪穴状遺構が、また、北側と中央部からは中世の掘立柱建物跡や土坑墓などが検出された。

縄文時代の遺構は、竪穴状遺構 27 基、土坑 16 基、溝状遺構 15 条が検出された。遺構内からは主に、面縄東洞式や嘉徳 I A 式、嘉徳 II 式土器などの土器や磨礫石、有溝礫石などの石器が出土した。竪穴状遺構の調査に関しては、昭和 61 年に行われた熊本大学と本町教育委員会の合同調査であったハンタ遺跡発掘調査以来となった。これまで喜界町では、縄文時代の人々の生活をうかがい知ることのできる竪穴状遺構の調査には数に限りがあり、比較検討などを進めるための資料の増加が待たれているところであった。

中世の遺構に関しては、掘立柱建物跡 41 基、土坑墓 2 基、土坑 15 基、溝状遺構 1 基、畝状遺構 35 条、石列 1 基、製鉄関連遺構（土坑 1 基、溝状遺構 1 条）が検出された。遺構内からは白磁や青磁、滑石製品などが出土した。

製鉄関連遺構に関しては、出土遺物から 12 世紀頃の遺構と想定され、南西諸島での製鉄関連遺構の初見となった。また、その重要性からその周囲を含めた 879 m²を町保有地として保存することとなった。この保有地は、遺跡の保護と活用の両立を図るために公園化する計画であり、人々が歴史や文化に思いをはせ、語らい、また、活動する場として提供する予定である。

本遺跡の調査成果については、前章までに詳細を述べたが、本章では遺構・遺物について若干の考察を加えまとめた。

第 1 節 縄文時代の遺構・遺物

1 遺物について

(1) 土器

土器は、遺構内（SH・SK・SD）と包含層（VI層・VII層）を合わせて 24,709 点見つかった。出土した土器は第三章 2 節

(2) で説明したとおり、口縁・口唇形状と文様形態により、I～VIII類に分類した。口縁・口唇形状がわからない胴部片についてはこの分類にあてはめず、胴部の文様から押し文系／凹線文系／細沈線文系の 3 種類に分けた。

これら土器類の共伴状況については、第 249 表にまとめた。なお、表は一括遺物を含めず、遺構内の層ごとの共伴状況である。

また、遺構の土器出土全体傾向や石器との共伴関係をみるために出土傾向を確認したものが第 250 表である。表にある

出土傾向型の表記については、一番数が多く出土している土器分類を頭文字に入れ（I～V）、のち、その他に出土している土器の分類を正数にしたもの（例：II類→2）、という方法で表記している。なお、VI類とVII類土器は遺構から出土していない為、表には含めていない。また、分類可能な土器の出土のないものはNとし、押し文などの土器の出土パターンで 0～4 を設定した。



ただし、この傾向表は遺構内出土の総数でカウントしていることに注意したい。本遺跡の竪穴状遺構については床面直上などの下層からはほとんど遺物が出土しなかったこと、また、分類可能な文様を持つ口縁部の数に限りがあることから遺構内の層ごとではなく出土総数で傾向をみることにした。

I 類土器

I 類は、面縄前庭式土器である。口縁部やその下部に細かな刻み目や連点を施した貼付突帯を有する物が多かった。中には、突帯と突帯の間や胴部に細沈線を施しているものもあった。胎土は、雲母や石英などの鉱物の混入が目視で確認できる砂質の土器である。出土したものはほとんどが壺形と考えられる。

本遺跡では、SK10 の III 層のみで I 類だけが出土しているが（第 249 表）、しかし、遺構に関しては I 類が単独で出土する遺構は無く、II 類や III 類土器と共に出土した（第 250 表）。ただし、遺構内からの出土総数はわずか 5 点で、他の土器に比べ少量であった。

II 類土器

II 類は、松山式系の土器である。口縁部を外反させた深鉢形土器で、口縁部を断面三角形に肥厚させた独特の形状を持つ。三角形に肥厚させた口唇部分を文様帯とし、凹線や刻み目などで文様を施している。胎土は砂質である。II 類はその施文方法で a～c に細分した。

II-a 類は、一湊松山遺跡などで報告されているいわゆる「松山式土器」である。胴部に貝殻条痕などが見られるものもあるが基本的には口唇部文様帯以外は文様を持たないものとした。

II-b 及び II-c は、口唇部のほかに胴部にも沈線による文様などが見られるもので、奄美の在地的要素を示す可能性があると考えていることから細分した。特に II-c は施文方法を押し引きとし、面縄東洞式などの押し文系土器に関連する可能性が考えられる。

遺構内からは合わせて60点のⅡ類土器が出土し、その出土比率は、下表のとおりである。

Ⅱ-a	Ⅱ-b	Ⅱ-c
48%	27%	25%

Ⅱ-a類が約半数を占め、Ⅱ-b類やⅡ-c類は概ね同量が出土している。

Ⅱ類間の共伴関係は、遺構内でⅡ-a・b・c類がそれぞれ単独で出土する層があるが、混在して出土する層も見られる状況であった(第249図)。また、遺構としては、Ⅱ類のみが単独で出土する遺構は少なく、ほとんどがⅢ類やⅣ類と共に出土している(第250図)。Ⅱ類が単独で出土する遺構はSH08・

SH09・SH26があるが、SH09・SH26はⅣ-c類に属する可能性のある沈線文系土器胴部がわずかであるが出土していることに注意したい。

Ⅲ類土器

Ⅲ類は、その施文方法によって現行編年では市来式や面縄東洞式、嘉徳式に該当する土器類である。胎土は全て砂質で、わずかに壺形の土器が見られたが、ほとんどが深鉢形土器であった。これらⅢ類に共通する口縁・口唇形状は、口縁部を幅広く肥厚させて断面形状を「間延びした三角形」状にし、口唇部の断面が舌状となっている点である。間延びした部分を文様帯としており、連続爪型文や凹線文、押引文といった

第249表 遺構内出土土器の共伴状況一覧(遺構内層別) ※一括取り上げ遺物を除く。「●」は出土、「-」は未出土を示す。

	Ⅰ類	Ⅱ類			Ⅲ類					Ⅳ類					Ⅴ類			Ⅷ	Ⅷ'	該当遺構・層名								
		a	b	c	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e	a'	b	b'											
Ⅰ類系	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SK10(Ⅲ層)			
Ⅱ類系	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH08(Ⅰ層), SH09(Ⅰ層), SK06(Ⅰ層)			
	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	SH17(床直)			
	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	SH17(Ⅰ層)		
Ⅲ類系	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH17(Ⅰ・Ⅱ層)		
	-	●	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH04(Ⅱ層)		
	-	●	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SK02(Ⅰ層)		
	-	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH01(Ⅰ層)	
	-	-	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH01(Ⅴ層)	
	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH01(Ⅲ層), SH02(P2-2), SH03(Ⅲ層), SH14(Ⅱ・Ⅲ層), SK05(Ⅰ層)		
	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH10(Ⅰ層)		
Ⅳ類系	-	●	●	●	●	-	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SK03(Ⅰ層)		
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH12(Ⅱ層)		
	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH12(Ⅱ層)		
	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SK07(Ⅰ層)		
	-	●	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SK01(Ⅰ層)	
	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH05(Ⅲ層)	
	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH01(Ⅰ層)	
	-	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH16(Ⅰ層)	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH 20(Ⅳ層)	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH14(Ⅰ層)
	●	●	-	-	-	-	●	●	-	●	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH05(Ⅰ層)
	-	●	-	-	-	-	●	-	-	●	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH04(Ⅰ層)
	-	-	-	-	●	-	-	-	-	●	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH05(Ⅱ層)
	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SK04(Ⅰ層)
	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH03(Ⅱ層), SH11(Ⅰ層)
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH04(Ⅰ-a層)
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SK06(Ⅱ層)
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH13(Ⅱ層)
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH02(Ⅰ層), SH13(床直), SH21(Ⅰ層), SH18(床直)
	-	●	-	-	-	-	-	-	-	●	●	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH12(Ⅰ層)
-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH15(Ⅰ層)	
-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	●	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH14(Ⅱ層)	
-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH07(Ⅰ層)	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH24(Ⅰ層)	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	●	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH18(Ⅰ層)	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH23(Ⅰ層)	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH07(Ⅱ層), SH20(Ⅲ層), SH22(Ⅰ層), SH23(Ⅱ層), SH25(Ⅰ層), SK09(Ⅰ層)	
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH20(Ⅰ層)	
Ⅴ類系	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SK12(Ⅰ層), SK13(Ⅰ層)	
Ⅷ類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SH14(Ⅲ層), SH20(Ⅱ層)	
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	SK16(Ⅰ層)	

施文方法により a～e に細分した。

Ⅲ-a は凹線文や連続爪型文によって施文するもので、いわゆる「市来式土器」として星塚遺跡などの鹿児島本土をはじめ、松原遺跡などの種子島や屋久島の縄文時代後期の遺跡で広く報告されている土器である。本遺跡で出土したものは、胎土に金色の雲母が混入するなど、他の土器と胎土が異なるものが多く、これらは搬入品である可能性が高い。

Ⅲ-b は前述のⅢ-a に似るが、凹線文と押し引文を組み合わせたものである。市来式土器と面縄東洞式の間タイプと考えられ、「市来式+東洞式」とも呼称されることもある土器群である（笠利町教育委員会 1979, 伊藤 2000）。

Ⅲ-c とⅢ-d は面縄東洞式である。いずれも押し引文で施文しているもので、Ⅲ-c は直線的、または幾何学的な文様を施し、市来式的な文様要素を持つ。Ⅲ-d は、籠を編んだような文様（籠目文）を施し、空間的な隙間がほとんどなく文様で埋められている。

Ⅲ-e は現行編年では嘉徳Ⅱ式に入る土器群である。文様はⅢ-d と同じ籠目文を凹線で施した土器群である。

市来式と面縄東洞式の関係については、面縄東洞式が市来式との接触あるいは強い影響を受けて発展したものと広く認識されており（河口 1974, 伊藤 2008 など）、市来式の器形と文様形態が奄美の在り地の強い土器と合わさって面縄東洞式が展開してゆくと考えられている。Ⅲ類は器形的に市来式の様相を残している可能性があると考えていることから、同様の文様を持つものでも口唇部の断面形状が角型のもの（後述

のⅣ-a 類やⅣ-b 類土器）とは類を異にした。

遺構内からは、59 点のⅢ類土器が出土し、その出土比率は下表のとおりである。

Ⅲ-a	Ⅲ-b	Ⅲ-c	Ⅲ-d	Ⅲ-e
25%	2%	58%	5%	10%

比率としてはⅢ-c 類が半数以上を占め、次いでⅢ-a 類が多い。

Ⅲ類土器間の共伴関係については、Ⅲ-a・c・d 類がそれぞれ単独で出土する層があるが、Ⅲ-a・c・e 類の組み合わせや、Ⅲ-b・c 類の組み合わせ、Ⅲ-c・d 類の組み合わせなどが見られる層がある。しかし、Ⅲ-a とⅢ-b 類の組み合わせは見られなかった（第 249 表）。

遺構としては、Ⅲ類が単独で出土する遺構はなく、常にⅡ類やⅣ類と共に出土する傾向が見られた（第 250 表）。

Ⅳ類土器

Ⅳ類は、文様により面縄東洞式や嘉徳式に該当する。器形は深鉢形で、口縁部がやや外反する。胎土は砂質である。口縁から胴部にかけてわずかに肥厚させて文様帯を構成するものや肥厚させずに沈線や刺突文で文様帯を区画するものがある。口唇部の断面形状は角型で、口唇部に連点文や刻み目文を施すものが多い。施文方法から a～e に細分した。

Ⅳ-a 類は、面縄東洞式に該当する。Ⅲ-c・d 類と同様の文様を持つもので押し引きによる施文を有する。口唇部に連点文など施文されているものが 7 割程度みられた。

Ⅳ-b は、Ⅳ-a 類の文様を凹線で施したものである。現行編

第 250 表 遺構内共伴土器から見る土器出土傾向型

※一括取り上げ遺物を含む(ただしSH04・05・11・12・24・25を除く)。

出土傾向型	出土土器	出土土器(本報告書土器分類による)					該当SH					該当SK				
		I類	II類	III類	IV類	V類										
I	5	I類が多く、V類も出土。												10		
	2	II類のみ出土。					08	09	26							
II	1・3	II類が多く、I類・III類も出土												01	03	
	3	II類が多く、III類も出土。					17							2		
	4	II類が多く、III類も出土。					05-1									
III	2	III類が多く、II類も出土。					10									
	2・4	III類が多く、II・IV類も出土。					01									
	4	III類が多く、IV類も出土。					03							05		
IV	1	IV類が多く、I類も出土。												07		
	2	IV類が多く、II類も出土。					06	12-2	13	20						
	1・2・3	IV類が多く、I・II・III類も出土。					05-2									
	2・3	IV類が多く、II・III類も出土。					04-2	15						06		
	3	IV類が多く、III類も出土。					02	07	11-2	14	16	24-1	04			
4	IV類のみ出土。					12-1	18	21	22	23	25-1	09				
V	5	V類のみ出土。											12	13	16	
N	0	土器出土無し					04-1	11-1	24-2	25-2						
	1	分類可能土器無し。主体無し。					27						14	15		
	2	分類可能土器無し。沈線文主体。				押し引文										
	3	分類可能土器無し。凹線文主体。				凹線文										
4	分類可能土器無し。細沈線文主体。				細沈線文	19						08	11			

■ 出土土器
■ 出土土器のうち一番数量の多い土器類

※遺構番号の枝番は、遺構の1次・2次利用を示す。

年では嘉徳Ⅱ式に該当する。口唇部に連点などを施文するものが4割程度みられた。

IV-c は、細沈線によって施文するもので、嘉徳Ⅱ式に該当する。口唇部に連点などを施文するものが、5割程度みられた。

IV-d は、嘉徳ⅠA式である。平行に引かれた沈線で区画を作りその間を押し引きや連点で施文するものである。口唇部に連点文などを施文するものが4割程度みられた。

IV-e は、嘉徳ⅠB式である。平行に引かれた沈線で区画を作りその間を連続爪型文で施文するものである。文様的にはIV-d類に似ているが、器壁はIV-dに比べ概して厚い。

IV類土器は遺構からは221点出土した。その比率は、下表のとおりである

IV-a	IV-b	IV-c	IV-d	IV-e
16%	24%	18.5%	41%	0.5%

IV-d類が多く出土し、IV-e類はほとんど出土していない。

IV類土器間の共伴関係については、IV-a・b・c・d類がそれぞれ単独で出土する層があるが、IV-a・b類の組み合わせや、IV-a～c類の組み合わせ、IV-a～d類の組み合わせなどがあり、IV-a～d類が混在する。IV-e類に関しては、SH20のI層でIV-b・d類との共伴があるが、わずか1点のみの出土であり様相がつかめなかった(第249表)。

遺構としては、IV類土器のみが出土する遺構が6基(SH18・21～23・25, SK09)あるが、それ以外はI類～V類と共伴して出土する傾向がみられた(第250表)。

V類土器

V類は、連点や刻み目などを施した貼付突帯を有する土器群である。施文方法によりa・bに細分した。

V-a は、一条の横位の貼付突帯のみ有するもので、特に形式設定はされていない土器である。突帯の幅を一定の間隔で強弱をつけて文様とするものや、文様を有しない突帯をつけたものも出土した。壺形や浅鉢形が出土した。遺構から出土したものはわずか3点で(SK02・SK03)、すべて胎土の粒子が細かい泥質の土器であった。

V-b は、面縄西洞式である。横位の突帯を口縁部及びその下部に貼り付け、その間を沈線で鋸歯文状を施すものが多く、また、縦位の突帯を張り付けているものもあった。器形は壺形と深鉢形が出土しているが、前者はまれである。胎土は砂質のもの(V-b)と泥質のもの(V-b')があり、本調査で出土した総点数219点中で砂質が12点(5%)、泥質が207点(95%)と、ほとんどが泥質土器であった。出土状況としては、堅穴状遺構(SH12)から砂質のものが1点、土坑(SK10・11・13・16)から泥質のものが計7点出土したのみで、その他はすべて包含層からの出土であった。

V類全体としては、遺構と包含層から出土したものを合わせて227点あり、その出土状況は下表のとおりである(数字

は出土点数)。

V類出土状況	出土遺構	V-a'類	V-b類	V-b'類
	SH12	-	1	-
	SK10	-	-	1
	SK12	1	-	-
	SK13	2	-	4
	SK16	-	-	2
	包含層VI層	2	6	57
	包含層VII層	7	5	139

V類間の共伴関係についてはSK13でV-a'とV-b'共伴が見られるが、遺構内一括取り上げ資料である。

遺構としては、V-b類がⅡ類とⅣ類と共に出土している遺構(SH12)やV-b'がⅠ類と出土している遺構(SK10)があるが、その他はV類が単独で出土する傾向がみられた(第250表)。

VI類土器

VI類は、犬田布式である。口縁を肥厚させ、その下部に横位の貼付突帯や沈線文で施文する。出土したもので器形がわかるものは、全て深鉢形であった。胎土は、砂質のもの(VI-a)と泥質のもの(VI-b')があり、本調査で出土した総数122点のうち、砂質のものが15点(12%)、泥質のものが107点(88%)であり、大多数が泥質のものであった。

VI類土器は、遺構からの出土はなくすべて包含層からの出土であった。縄文時代の包含層からの出土状況は、次に記述するVII類の出土状況の表にまとめて記載している。

VII類土器

VII類は、仲原式である。口縁部から胴部にかけて肥厚させ、頸部を有段にする一群で、胎土が砂質のもの(VII-a)と泥質のもの(VII-a')が見られた。本調査では、砂質のものが2点と泥質のものが4点のみが出土している。遺構からの出土はなく、すべて包含層からの出土であった。出土状況は下表にまとめた(数字は出土点数)。

	VII-a類	VII-a'類	VII-b類	VII-b'類
包含層VI層	12	46	2	3
包含層VII層	2	61	-	1

VIII類土器

VIII類は、まとまりで出土せず、また、上記の分類に当てはまらない土器をすべてこの類とした。胎土によって、砂質のものをVIII類、泥質のものをVIII'と大分しているが、個別での検討が必要な土器類である。

これらの土器類は、胎土の違いや器形・施文方法などから搬入の可能性が高いもの(171や512など)や、III類の形状を持ちながら細沈線文を施すIII類とIV類の中間タイプのもの(311や494など)、IV類的な施文があるが部位や全体像が不明のもの(641や755など)、無文で時期などが特定できな

いもの(791や792など)があり、今後資料の増加を待ち、共伴関係などを含め検討をしてゆく必要がある。

底部

底部については、平底底部と尖底の2種類が出土した。遺構内からは482点出土し、平底が99%、尖底が1%であった。本調査では土器の完形品は出土しなかったが、Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類に相当する松山式や市来式、面縄東洞式や嘉徳式系の深鉢形土器は平底土器であり、また、Ⅰ類に相当する面縄前庭式が尖底の壺形であることから、本調査出土のものもこれらの土器に対応する底部と考えられる。

泥質土器

竪穴状遺構からⅡ類やⅢ類、Ⅳ類土器に混じって無文の泥質土器が出土している。泥質土器は、喜界島ではハンタ遺跡などで面縄西洞式といった縄文時代晩期相当の土器として出土していることから、当初は同様に面縄西洞式など(Ⅴ類～Ⅶ類)の流れ込みと想定していた。しかし、Ⅴ類～Ⅶ類などに見られる文様のある部分が1点も出土していないこと、また、床面付近の下層から出土するものもあること、器形のわかるものは壺形が多いこと、などの傾向がみられた。流れ込みである可能性も当然残るが、面縄東洞式や嘉徳ⅠA式、嘉徳Ⅱ式時期の特定の器種に用いられた土器である可能性も示唆され、今後の事例の増加を待ち検討を重ねてゆく必要がある。

出土土器まとめ

遺構内から出土した土器の出土傾向やその状況からは、Ⅱ類やⅣ類などが単独で出土する遺構もみられるが、Ⅱ類～Ⅳ類が共伴するものやⅢ類・Ⅳ類が共伴する遺構の数が多い状況が見られた。中でも、Ⅲ-c類とⅣ-d類などの共伴する遺構が多い。つまり、現行土器形式では、松山式や市来式、面縄東洞式、嘉徳ⅠA式、嘉徳Ⅱ式が様々な組み合わせで出土している状況であった。

奄美の土器編年については、河口貞徳氏(河口1974)によって面縄東洞式→嘉徳Ⅰ式→嘉徳Ⅱ式という編年順が示されているが、本遺跡ではその編年順が層位的には明確には見られず、むしろ、これらの土器と九州本土系の土器とが様々な組み合わせで出土している。本遺跡の出土状況は、Ⅱ類やⅢ類、Ⅳ類土器がそれぞれ独立して使用されていた期間が存在していたというよりは、これらの土器が同時期に使用されていた期間があることを示している可能性が高い。

(2) 石器

石器は、遺構内と包含層を合わせて1,133点(324kg)見つかっている。また、礫9,634点(216kg)や剥片945点(7kg)も出土した(以下、石器・礫・剥片を合わせたものを「石器類」と呼称する)。石材については、安山岩や花崗岩といった火成岩、砂岩や頁岩、チャートといった堆積岩、緑色岩やホ

ルンフェルスなどの変成岩等の様々な石材の利用が見られる。器種ごとの石材利用状況を第251表にまとめた。

まず、本遺跡で見つかった石器類の石材についてであるが、第Ⅱ章でみるように喜界島は、島尻層(未凝固の砂層と泥岩の互層)の上に琉球石灰岩が覆っているという地質からなる島である。ゆえに、本遺跡で見つかった石器類の石材は島内では産出しない。石材はすべて島外からの持ち込みであることが考えられ、この点から、本報告書では未加工の礫であっても人の手によって島内に持ち込まれた「遺物」として扱い集計を行った。遺跡からは、かなりの量の石器類が出土しており、海を介した人々の頻繁な交流がうかがえる。

石器類で一番多く見つかっている石材は、中粒砂岩3,796点(288kg)、次いで粗粒砂岩2,178点(155kg)であり、堆積岩の利用が目立つ。ただし、安山岩457点(26kg)や緑色岩771点(20kg)などの火成岩や変成岩の利用も多い。また、器種によっては、例えば凹石は中粒砂岩、円形状石器は緑色岩といった単一の石材を選んで使用している石器がある。琥珀を除いたこれらの石材は、奄美大島や奄美群島内で採取できるものである^{註1}。

石器の器種については、磨石や敲石、磨敲石などが多いが、本遺跡の特徴の一つとして有溝砥石が多く出土していることがあげられる。また、先に述べた、石材が緑色岩に限定されて出土した円形状石器、用途不明の棒状石製品や有孔石製品、琥珀が出土していることも特徴的である。これらの石器類について簡単にまとめてみたい。

有溝砥石

有溝砥石は、遺構と包含層出土のものを合わせて197点出土した。断面がU字型をした直線的な溝を1条から複数条持つ石器で、本遺跡では最大で34条の溝を持つものが見つかっている。溝の数は平均すると3～4条で、溝の幅はおおよそ0.5～0.6cmで深さ0.2cm前後のものが多いが、その幅や深さはそれぞれである。複数の溝を持つものは、溝が平行に走っているもの(185や520など)や十字(440や601など)、斜めに交差するもの(29や359など)等その様相もさまざまであった。宮下(宮下1983)は全国で出土する有溝砥石を形状や溝数で分類を試みているが、溝の数については石材の大きさや形に制約された可能性が高いと述べている。本遺跡出土の有溝砥石も同様の傾向が見られるが、小さな石材でも可能な限り使用しているもの(219・409)なども見られ、限りある資源を最大限に利用していることがうかがえる。

石材は、軽石製が4点、粗粒砂岩のものが1点あるが、その他の192点は全て中粒砂岩を利用している。遺構からの出土は195点で、竪穴状遺構に関しては、出土のない6基(SH06・8～10・21・27)を除き全て出土している状況である。共伴する他の石器に関しては、敲石や磨石、磨敲石が多く、また台石系や石皿などもあるが、これらの石器はもとも

と出土点数が多く、またほとんどの遺構で見つかる傾向があり特徴的な偏りは見られなかった(第242表)。また、土器との相伴関係については、IV-c類やIV-d類に伴って多く出土する傾向があるが、II-c類、III-a・c類なども出土しII類・III類・IV類全般と共に出土する状況が見られる(第252表)。

奄美諸島周辺では、本町のハンタ遺跡の住居址内から面縄西洞式土器と共に出土しているほか、ケジ遺跡や長浜金久第II遺跡、宇宿貝塚、手広遺跡、住吉貝塚、西原海岸遺跡で数点出土しており、主に奄美大島北東部に位置する笠利半島の東海岸周辺の遺跡に出土する傾向がみられる。

第251表 石器類の利用石材一覧 ※数字は出土点数

	火成岩							火山砕屑岩		堆積岩						変成岩				その他			合計					
	花崗岩	細粒閃緑岩	安山岩	玄武岩	斑状玄武岩	黒曜石	斑岩系	火成岩	凝灰岩	軽石	粗粒砂岩	中粒砂岩	細粒砂岩	砂岩	泥岩	頁岩	チャート	堆積岩	黒色泥質片岩	緑色岩	緑色片岩	ホルンフェルス		琥珀	石英	鉄マンガン粒	不明	
縄文遺構 (SH・SK・SD)	磨石									26	11			1	1				8								47	
	敲石			3						25	50			1	1				5							2	87	
	磨敲石		1	3	1	2		2			76	29		1	1				27	1						1	145	
	円形状石器																		10								10	
	凹石											15														1	16	
	台石			1							11	24																36
	台石系										2	9	1															13
	石皿										9	36	1	3														50
	石皿・敲石											2																2
	石斧		2								1					2				12		1					1	19
	砥石											4	1															5
	有溝砥石									4	1	188																193
	有溝砥石・敲石											2																2
	敲石・砥石										1																	1
	磨製石器													1	1	3												5
	打製石器															1												1
	棒状石製品											1								1								2
	石製品														2	1												3
	不明石器										1	7	18			2	2			1	8	2					2	43
	石核																	2				1						4
剥片			1							126	13		11	26	34	60			351		1					6	629	
原礫																			1								1	
礫	8		32	1	2					1353	1041	2091	5	167	463	795	238	1	7	308		21	1	1	1	42	6578	
縄文遺構 小計	8	3	40	2	4		2	2		1358	1326	2493	8	184	496	840	300	1	9	730	1	26	1	1	1	59	7895	
VI層	磨石											1															1	
	敲石									1	1																2	
	磨敲石			55						36	5					3											99	
	石核					1				2					2	20											25	
	石皿						1																				1	
	石鏃																			1							1	
	石斧									1						2				2							5	
	砥石											1															1	
	有溝砥石											1															1	
	スクレイパー状										1																	1
	棒状石製品					1																						1
	石製品															1												1
	磨製石器															2											2	
不明石器																										1		
剥片			6			5				35	19			4	30	47			2								148	
礫	11		103						6	48	414	593		62	273	43			2	6						4	1565	
VI層 小計	11		164		1	7	1		6	48	490	621		69	310	110			2	11						4	1855	
VII層	敲石									1																	1	
	磨敲石			148						72	26			2	2				1								251	
	凹石										1																1	
	台石									1	2																3	
	石皿									1	1																2	
	磨製石鏃															1											1	
	石斧			1		1				1						1				2							6	
	有溝砥石											1															1	
	棒状石製品															1											1	
	石製品																					1					2	
	磨製石器										1					2				1							4	
	不明石器										2	1				1	4				1						9	
	石核																	21									21	
剥片			13			2				29	37			1	32	48			5							1	168	
礫	5		91			4		4	29	254	613			239	127	96			20					2	7	1491		
VII層 小計	5		253		1	6		4	29	362	682			245	169	165			30		1			2	8	1962		
合計	24	3	457	2	6	13	3	2	10	1435	2178	3796	8	184	810	1319	575	1	11	771	1	27	1	3	1	71	11712	

その用途については、矢柄や玉類、骨角器の研磨など（宮下 1983, 本橋 1988）、また貝器の研磨（熊本大学文学部考古学研究室 1986, 喜界町教育委員会 1987）などの可能性がこれまで指摘されてきたが、本遺跡では有溝砥石を使用して研いだ可能性のある遺物が出土していないのが問題点と言える。用途や目的物の特定が難しい状況ではあるが、遺物として残らない植物性のものを研磨した可能性、あるいは、使用後の結果として溝が残っているのではなく、何かの目的で制作された石製品の可能性も考慮にいれ今後検討してゆく必要がある。

円形状石器

円形状石器は、円形または円形に近い形をし、片面は磨面、裏面が敲打により完全に剥離している石器である。磨面側にわずかな敲打痕が残るものもあり、当初は磨敲石として取り扱っていた。しかし、石材が緑色岩に限られている事や、307 や 443 などのように剥離面を意図的に作りあげているようなものもあることから磨敲石とは別にした。なお、「円形状石器」の名称はその形状から仮に付与したものである。

遺構からは 10 点出土し、共伴する他の石器については磨敲石や台石などがあるが有溝砥石と同様の傾向がうかがえ、土器についてはIV類全般と共伴して出土する傾向がみられた（第 252 表）。

出土事例としては嘉徳遺跡の未報告のもの^{註2}があり、また、類似のものとして嘉徳遺跡報告書で局部磨製石斧と報告されているものも 1 点あるが、その他に報告されている類例は少ない。

用途としてはやはり磨敲石的な使用方法が考えられるが、この形状が使用による結果なのか、あるいは意図して作られたものなのかの判断が難しい。名称を含め、今後の資料の増加を待ち検討が必要な石器である。

石製品

石製品には、用途不明の棒状の石製品（410・529・1037・1098）や有孔石製品（102・390・535・1095～1097）が出土した。棒状の石製品については、細長く鉛筆のような形状の物（1098）とある程度の厚みがあり、石棒状のもの（410・529・1037）がある。石棒状のものは、いずれも欠損しておりその形状や用途は不明である。鉛筆のような形状をしている 1098 は、石材は泥岩で、全面が研磨されている。包含層（VII 層）から出土しており、V類やVI類などの縄文時代晩期の土器とともに出土した。当初は有溝砥石との関連性も検討したが、遺物に縦に入る擦痕が明瞭でないことや有溝砥石が多く出土する堅穴状遺構からは同様の石製品が出土しなかった状況があり、結論付けには至っていない。奄美諸島周辺での出土事例を探しているが今のところ見当たらず、用途としては土器などの施文具等の可能性も考えられるが検討を要する石製品である。

有孔石製品については、形状は様々だがいずれも外面に擦

痕が見られるもので、加工したことが明瞭である石製品である。しかし、102 以外は穴をあけた痕跡が明瞭ではなく、石自体の自然の穴を利用した可能性が高い。装飾品などの可能性も考えられるが、紐ずれ痕等は確認できず、その用途は不明である。390・535 はIV類土器とともに堅穴状遺構から出土している。類似の石製品は、サモト遺跡の第III層からも面縄西洞式土器と共に出土しており、本遺構と若干の時期差があると考えられるが、本遺跡においては少なくとも嘉徳Ⅰ式や嘉徳Ⅱ式の時期に自然の穴を持つ石材を選び、石製品として利用していたことが考えられる。

これらの石製品のほか、比較的扁平で片面を刃部のように形成し、スクレイパーのあるいはナイフ的な形状を持つ磨製石器が 3 点出土している（42・230・608）。いずれも堅穴状遺構からで、磨敲石や有溝砥石などと出土している。共伴土器については、42 はⅢ-a・c 類及びⅣ-b・c 類土器、230 はⅡ-a 類土器、680 はⅣ-a・c・d 類土器と出土した。その形状から「擦り切り」を行うための道具の可能性も考えられるが、石材は頁岩や泥岩を利用しており、その用途に適した石材とは言い難い。形状からはナイフ的な用途も考えられるが、土器の施文具等の可能性もある。

琥珀

琥珀は、SK06 のⅢ層から出土した。未加工の自然礫であったが、喜界島ではこれまで琥珀の出土報告がなかったことからその産地同定を試みた。小片で劣化が進行していたが、結果は瑞浪市、奈義町、高梁市、三次市のものに比較的近い分子構造を持つ可能性がわかった。ただし、これらの産地と同じ地質時代で由来植物が同じであれば、同様の分子構造を持つ可能性が高いことが想定されており、瑞浪市などの琥珀を産する地質は日本各地で確認されていることからまだ琥珀が発見されていない産地、あるいは消滅した産地などの可能性も否定できず、その特定はできなかった。

本遺跡にもたらされたルートやその目的・用途など、不明な点ばかりであるが、これらを検討するためにも産地同定の基礎データの蓄積を待ち、その特定を試み続ける必要がある。

石器類まとめ

第 252 表は、堅穴状遺構ごとに出土石器の構成比率を出したものを、土器の傾向型別にあてはめたものである。

石器類の出土数が 10 点程度から 800 点を超えるものまであるが、構成比としては礫が 80%前後、剥片が 10%前後、石器が 10%前後の遺構が多い。また、SH09 は剥片と石器がそれぞれ 20%超、SH13・SH25-1 は石器が 20%超、SH02・SH11-2 は剥片が 20%を越えており、比率として若干の偏りが見られる。ただし、これらの遺構からは石核などの加工用の石材や特定の石器の偏り等は特に見られず、空間利用の特定までには至れなかった。また、土器の出土傾向と石器の構成比率の関係についても、特に特徴的な偏りは見られなかった。

この他、堅穴状遺構から出土した磨敲石や石皿などの13点の石器から残存デンプン粒の検出を試み、石器の用途等の検討を試みた。これらの石器のうち、4点から計8点の残存デンプン粒が検出されたが、そのうち6点は分解が進み原型をとどめておらず、残念ながら識別することができなかった。形状をとどめている2点だけでは、石器の用途の判断までは至らず、また検出したデンプン粒の植物種の同定までは至らなかった。しかし、そのうち1点が鱗茎・根茎類に由来するものの可能性があり、当時の食物利用状況の一端をうかがえる結果を得ることができた。

(3) 自然遺物

自然遺物は、魚骨や哺乳類などの脊椎動物、植物の種子などの植物遺体が出土した。

遺構から出土する脊椎動物については、魚類が70%~80%とその比率が高いが、ウミガメやイノシシなどの骨も10~20%程度出土した。魚類については、ブダイ科やハリセンボン科が多く、またベラ科やニザダイ科、ハタ科など、島の沿岸部に生息する魚類の利用が目立つ。その他、サメやクジラの骨も出土しているが、漂着した遺体を利用した可能性も考えられ、漁労活動の目的として取り扱われていたかは不明である。

第252表 土器の出土傾向別に見た堅穴状遺構出土石器の構成比率

土器出土傾向(型)	該当SH番号	(石器類出土総数)	石器類構成比率(%)																骨製品(点)	円盤状土製品(点)				
			礫(%)	剥片(%)	石器(%)	石器内訳(石器を100%とした時の比率)(%)																		
						磨石	敲石	磨敲石	円形状石器	凹石	台石・台石系	石皿	石斧	砥石	有溝砥石	スクレイパー状	棒状石器製品	石製品			石核	磨製石器	不明石器	
II	2	SH08	38	81%	-	19%	14	29	29	-	-	-	14	-	-	-	-	-	-	14	-	-	-	
		SH09	20	60%	20%	20%	-	25	75	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		SH26	31	71%	3%	26%	-	12	13	-	-	-	-	-	-	50	-	-	-	-	25	-	-	
	3	SH17	201	86%	6%	8%	12	19	13	-	6	6	-	-	19	-	6	-	-	-	19	-	-	
4	SH05-1	157	94%	-	6%	13	13	37	-	-	-	13	-	-	24	-	-	-	-	-	-	-		
III	2	SH10	118	83%	7%	10%	-	42	42	-	8	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	2・4	SH01	114	79%	8%	13%	-	20	13	-	-	-	27	7	-	13	-	-	-	13	7	-	-	
	4	SH03	251	73%	18%	9%	-	18	17	4	-	4	-	4	-	44	-	-	-	9	-	-	-	
IV	1・2・3	SH05-2	655	95%	2%	3%	16	6	27	-	-	6	6	-	-	33	-	-	6	-	-	-	-	
		SH06	45	91%	5%	4%	-	-	-	-	-	50	-	-	-	-	-	-	50	-	-	-	-	
		2	SH12-2	357	77%	8%	15%	4	25	22	-	-	2	14	-	2	31	-	-	-	-	-	-	1
	2	SH13	166	67%	7%	26%	7	12	26	-	-	19	10	2	-	24	-	-	-	-	-	-	-	
		SH20	436	89%	7%	4%	-	4	9	4	4	5	-	-	5	64	-	-	5	-	-	-	3	
		2・3	SH04-2	331	77%	12%	11%	6	3	37	-	-	3	20	6	-	25	-	-	-	-	-	-	-
	3	SH15	238	86%	6%	8%	17	11	5	-	5	-	6	-	-	39	-	-	6	-	-	11	-	-
		SH02	79	74%	23%	3%	-	-	-	-	-	-	34	-	33	33	-	-	-	-	-	-	-	-
		SH07	68	79%	10%	11%	-	15	-	-	-	14	-	14	-	43	-	-	-	14	-	-	-	-
		SH11-2	57	68%	21%	11%	-	67	33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		SH14	226	81%	10%	9%	5	9	14	-	-	19	10	-	-	43	-	-	-	-	-	-	-	-
		SH16	66	79%	-	21%	22	-	7	-	7	7	7	-	7	36	-	-	-	-	-	7	-	1
		SH24-1	11	73%	18%	9%	-	100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	4/4	SH12-1	63	60%	13%	27%	-	12	23	6	-	12	-	-	-	41	-	-	6	-	-	-	-	-
		SH18	213	85%	8%	7%	-	-	27	13	-	6	-	20	-	27	-	-	-	-	-	7	-	4
		SH21	153	87%	8%	5%	-	-	37	12	-	12	13	-	-	-	-	13	13	-	-	-	1	-
SH22		125	80%	10%	10%	-	-	38	-	-	8	-	-	-	54	-	-	-	-	-	-	-	-	
SH23		205	80%	8%	12%	18	9	18	-	-	4	-	4	-	26	4	-	-	-	4	13	-	-	
SH25-1	14	58%	7%	35%	-	40	-	20	-	-	-	-	-	40	-	-	-	-	-	-	-	-		
遺構内一括	SH04	74	82%	10%	8%	17	-	-	-	-	17	-	33	-	33	-	-	6	-	-	-	-	-	
	SH05	808	93%	1%	6%	11	11	32	-	5	2	9	5	-	21	-	-	2	-	-	2	-	-	
	SH11	17	76%	-	24%	-	-	-	-	-	-	-	25	-	75	-	-	-	-	-	-	-	-	
	SH12	131	67%	30%	3%	-	-	-	-	-	-	25	-	-	75	-	-	-	-	-	-	-	-	
	SH24	27	77%	15%	8%	-	-	50	-	-	-	-	-	-	50	-	-	-	-	-	-	-	-	
	SH25	70	44%	27%	29%	5	20	40	-	-	20	5	-	-	10	-	-	-	-	-	-	-	-	
N-0	SH04-1	65	73%	18%	9%	20	-	40	-	-	-	-	20	-	20	-	-	-	-	-	-	-	-	
	SH11-1	4	75%	25%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	SH24-2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	SH25-2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
N-1	SH27	13	69%	15%	16%	-	50	-	-	-	50	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
N-4	SH19	88	77%	5%	18%	12	13	19	-	6	6	6	-	-	38	-	-	-	-	-	-	-	-	
集計		5735点	83%	8%	9%	6	16	21	2	1	8	6	4	2	29	0	0	2	0	1	2	1点	9点	

※土器出土傾向(型)については第250表参照。

※「0」は1%に満たないものを示す。また、「-」は未出土を示す。

陸上の脊椎動物については、鳥類などもわずかに出土したが、イノシシの骨が多い。イノシシについては、骨の部位の偏りは見られず、また、全身の骨格が見つかる事から野生のものを狩猟していた可能性が高い。しかしながら、石器類の島外からの持ち込み等の海を介した交流状況を考慮すると、イノシシが持ち込まれた可能性も完全には否定できず、今後の検討課題といえる。本町でのイノシシの骨の報告については先山遺跡で兼久式土器と共に4点、和早地遺跡で中世(14~15C)と考えられるピットから1点と、わずかな報告しかない。また、先山遺跡に関しては、その地形や立地から自然攪乱の状況が報告されており(喜界町教育委員会 1987)、時代の特定が難しい。なお、喜界島には現在イノシシは生息していない。

植物の種子については、遺構から採取した土壌サンプルをフローテーションにかけ採取したもので、堅穴状遺構や土坑からシマサルナシとタブノキが見つかった。そのうち、SH12の床面土壌サンプルから検出したタブノキの子葉を放射性炭素年代測定にかけ、¹⁴C年代(yrBP) 3,380±20の値を得た。シマサルナシとタブノキは、いずれも実が食用であり、食物利用の一部として利用されていた状況がうかがえる。

貝類については、遺構内からほとんど出土せず、SK07に集中して出土した。出土数が多いのはマガキガイやタカラガイで、その他イガレイシやシャコガイなどイノーや干潮時の潮溜まり等に生息する比較的採取しやすい貝類である。また、ヤコウガイやチョウセンサザエ、サラサバティエなど外海に面する礁斜面に生息するものも少量であるが出土した。

これらの自然遺物や残存デンプン粒分析からは、縄文時代後期~晩期にかけての生業が、島の沿岸部での漁労や貝の採取を中心としながら、カメやイノシシなどの狩猟、果実や鱗茎・根茎類の採取といった様々な動植物を利用していることがうかがえる。

植物遺体については炭化していないものは残りにくい性質であること、炭化していても形状をととどめているものが少ないこと、また、獣骨や魚骨に関しても溶解などが進み同定が困難なものが多いことなどが今回の分析で見られた。しかし、これらの「自然遺物」は人の痕跡の一部であり、その分析・検討は遺跡の性格や当時の人々の生活を知る上で不可欠な情報として注意深く続け、データを蓄積してゆく必要がある。

2 遺構について

(1) 堅穴状遺構

検出した堅穴状遺構27基のうち、9基(SH06・08・16・18~23)は遺構内・外に柱穴や焼土跡が検出できなかったが、遺構の形状や大きさは柱穴や焼土跡の見つかっているものと類似していること、また、第III章(3)で記述したとおりピッ

トの検出漏れの可能性が高いことなどから、いずれの堅穴状遺構も住居跡と捉えた。出土する土器から縄文時代後期~晩期にかけての遺構と考えられる。床面積は、大きいものでは15.5㎡(SH16)や13.2㎡(SH05)があり、一番小さなもので2.5㎡(SH02)があるが、おおよそ5.0~6.0㎡のものが多く見られた(下表参照)。

遺構名	面積(㎡)	遺構名	面積(㎡)	遺構名	面積(㎡)
SH01	4.97	SH10	7.17	SH19	3.24
SH02	2.53	SH11	3.17	SH20	5.26
SH03	2.99	SH12	7.14	SH21	3.58
SH04	6.03	SH13	4.48	SH22	6.77
SH05	13.20	SH14	6.03	SH23	6.74
SH06	3.01	SH15	4.38	SH24	3.28
SH07	4.63	SH16	15.45	SH25	6.02
SH08	5.38	SH17	4.56	SH26	2.53
SH09	11.36	SH18	6.01	SH27	3.05

これらの堅穴状遺構の平面形状は次の4種類が見られた。

- ①円形
- ②楕円形
- ③隅丸長方形
- ④不定形

また、底面形状は下記の2種類が見られた。

- a) 1段掘り
- b) 2段掘り

平面形状と床面形状を組み合わせた遺構の分類は下表となる。

平面・床面		数	遺構名(SH番号)						
①	a	円形・1段	6基	03	13	14	17	18	19
	b	円形・2段	1基	04					
②	a	楕円形・1段	6基	07	08	09	22	24	26
	b	楕円形・2段	4基	01	05	06	10		
③	a	隅丸長方形・1段	6基	02	12	20	21	25	27
	b	隅丸長方形・2段	2基	11	23				
④	a	不定形・1段	1基	16					
	b	不定形・2段	1基	15					
計			27基						

本遺跡で一番多くみられる形状は3タイプあり、①-a型(円形1段)、②-a型(楕円形1段)、③-a型(隅丸長方形1段)である。いずれも6基ずつ検出されている。次いで多いのは②-b類(楕円形2段)で、4基検出している。

形状からみた切り合い関係は、以下の通りである(記号「<」は、いずれも古<新を表す)。

- ア) 隅丸長方形1段(③-a) < 円形2段(①-b)
(SH27<SH04)
- イ) 円形1段(①-a) < 隅丸長方形1段(③-a)
(SH19<SH20, SH19<21)
- ウ) 不定形1段(④-a) < 円形1段(①-a)
(SH16<SH17, SH16<SH18, SH16<SH19)

- エ) 円形1段 (①-a) < 円形1段 (①-a)
(SH17<SH18)
- オ) 隅丸長方形2段 (③-b) < 隅丸長方形型1段 (③-a)
(SH11<SH12)
- カ) 楕円形1段 (②-a) < 隅丸長方形2段 (③-b)
(SH22<SH23)
- キ) 楕円形1段 (②-a) < 隅丸長方形1段 (③-a)
(SH24<SH25)
- ク) 不定形1段 (④-a) < 隅丸長方形1段 (③-a)
(SH16<SH20, SH16<21)

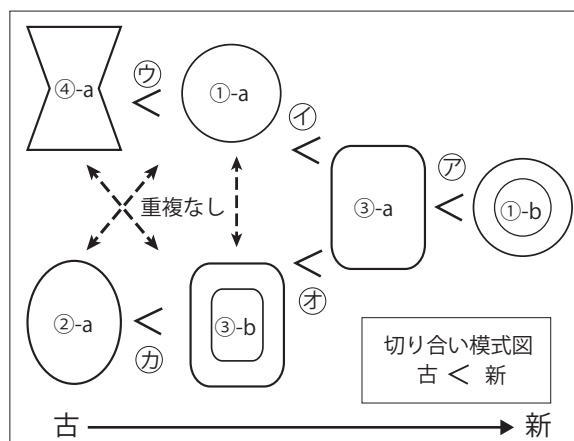
これらをまとめたものが第293図である。①-bが一番新しく、次いで③-aとなる。次に①-aと③-bとなるが、①-aと③-bの切り合いは検出しておらず、新旧関係は不明である。また、④-a<①-a, ②-a<③-bの関係も確認できる。

これらの形状に時期差があるのか、あるいは用途等の違いを示すものなのかを検討するために、土器の出土傾向と遺構形状の関係をまとめたものが下表になる。また出土傾向からは遺構を下記のA~Eの5つのグループに大きく分けることができる。

遺構形状 土器 出土傾向		①円形		②楕円形		③隅丸長方形		④不定形	
		a. 1段	b. 2段	a. 1段	b. 2段	a. 1段	b. 2段	a. 1段	b. 2段
Ⅱ 類 系	Ⅱ	2			SH08, SH09, SH26				
		3	SH17						
		4			SH05-1				
Ⅲ 類 系	Ⅲ	2			SH10				
		2・4			SH01				
		4	SH03						
Ⅳ-2 類 系	Ⅳ	2	SH13		SH06	SH20			
		2・3							SH15
Ⅳ-3 類 系	Ⅳ	3	SH14		SH07, SH24-1	SH02		SH16	
Ⅳ-4 類 系	Ⅳ	4	SH18		SH22	SH21, SH25-1, SH12-1	SH23		
N	N-0		SH04-1					SH11-1	
	N-1					SH27			
	N-4	SH19							

- A. Ⅱ類が多く出土するグループ (Ⅱ類系) (SH05-1・08・09・17・26)。
- B. Ⅲ類が多く出土するグループ (Ⅲ類系) (SH01・03・10)。
- C. Ⅳ類が多く出土し、Ⅱ類も出土するグループ (Ⅳ-2 類系) (SH04・2・05・2・06・12・2・13・15・20)。
- D. Ⅳ類が多く出土し、Ⅲ類も出土するグループ (Ⅳ-3 類系) (SH02・07・11・2・14・16・24・1)。
- E. Ⅳ類のみが出土するグループ (Ⅳ-4 類系) (SH12-1・18・21・22・23・25-1)。

このグループに基づき遺構を色分けしたものが第294図となる。なお、土層の堆積状況から2次利用の見られる遺構 (SH04・05・11・12・24・25) については、外側に1次利用時の



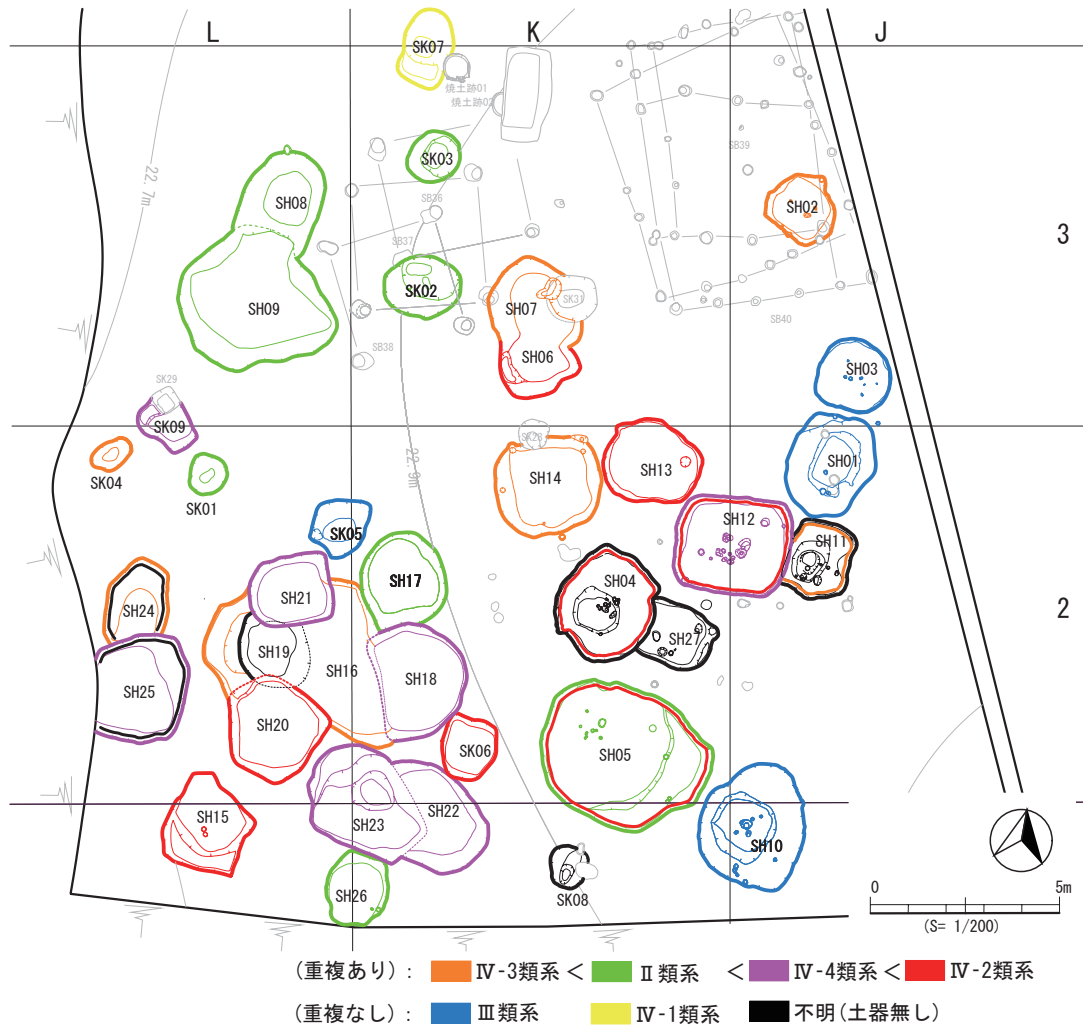
第293図 平面・底面形状の重複状況

出土状況の色、内側に2次利用時の出土状況の色で示している。床面直上などの下層からは遺物がほとんど出土しない状況であったため遺構内出土総数で大きく分けている点については注意を要するが、同じ出土傾向を持つグループ (同色) が少なくとも埋まった時期が同じと仮定した場合、これら5つの廃棄時期が想定できる。

まず、遺構の形状についてであるが、土器出土傾向のⅣ類が多く出土する遺構 (Ⅳ-2 類系, Ⅳ-3 類系, Ⅳ-4 類系) にはほぼすべての形状が見られるが、Ⅱ類系とⅢ類系については丸形と楕円形のみが見られる状況がある。つまり、円形や楕円形は本遺跡の堅穴状遺構の存続期間中に普遍的に作られる形状であるが、隅丸長方形と不定形についてはⅣ類の時期にのみ見られる形状と言える。遺構の重複関係から土器出土傾向の新旧を見た場合、Ⅲ類型系については重複関係が見られないため不明であるが、Ⅳ-3 類型系<Ⅱ類型系<Ⅳ-4 類型系<Ⅳ-2 類型系 (古<新) という状況が確認できる。これに照らし合わせた場合、遺構形状の全体の変遷としては、①Ⅳ-3 類系グループ期間に円形、楕円形、隅丸長方形、不定形と様々な形状で遺構を作り→②Ⅱ類系の期間に入り、隅丸長方形と不定形は作らず円形と楕円形のみで遺構を作り→③Ⅳ-4 類・Ⅳ-2 類時期には再び円形、楕円形、隅丸長方形や不定形で遺構を作成している、という流れが見受けられる。

それぞれの廃棄時期ごとでの遺構配置をみると、例えば「コの字型に遺構を配置する」といった特定の遺構配置形状は見られず、いずれのグループも任意に遺構が広がっている様子が見られた。このことは、本遺跡の人々が空間的配置に特別な意識を持ち合わせていなかったと考えられるが、ただし、これら出土傾向が同じもの (同色) すべてが同時に存在していたのか建て替えたのかは不明である。

さて、先に述べた遺構の切り合い状況からは、本遺跡の土器出土傾向が奄美の土器編年との若干の齟齬が生じる結果となっている。現行の奄美土器編年から想定される遺構の切り合い関係は、Ⅱ類型系<Ⅲ類型系<Ⅳ-2 類型系<Ⅳ-3 類型



第294図 土器の出土傾向による遺構の色分け（遺跡南側）

系<IV-4 類型系（古く新）となるが、本遺跡ではII類型系とIV-3 型系の逆転や、IV-4 類型とIV-2 類型の逆転がみられる。この点に関しては、土器のまとめに述べた通り、本遺跡の遺構からの土器出土状況はII類やIII類、IV類が様々な組み合わせで出土している状況があり、本遺跡をその過渡期の遺跡として評価した場合、編年順の逆転があっても特に問題がないと考えられる。例えば、II類型系のグループであってもIII類やIV類土器も出土しており、主流となる土器以外に他の土器類も少なからず出土している状況がある。このことを考慮すると、これらのグループの間に大きな時期差はない可能性が高く、さほど時期を置かず建て替え等を行っていたことが考えられる。さらに、床面から遺物がほとんど出土しない状況からは、遺構廃棄前後の清掃、または計画的な建て替えや廃棄といった習慣があった可能性も提示できるのではないだろうか。

ただし、近年では奄美の土器編年、特に面縄東洞式や嘉徳式系の序列の見直しの必要性（堂込 2004）やこれらの土器がある一定期間併存していた可能性（新里 2014）などの指摘が

あるように、本遺跡でみられるこの編年順の逆転や編年の併行関係が他の遺跡などでもみられる場合は、本遺跡の再評価や土器編年の再検討が必要となる。

遺構の形状や空間利用の状況なども合わせ、このような状況が本遺跡だけで見られるものか、あるいはこの時期の喜界島の特徴なのか、奄美群島の他の遺跡でも見られるものなのか等の検討を行うためには、今後の資料の増加を待たねばならない。

(2) 土坑

土坑は、円形や楕円形のものが多く見つかった。堅穴状遺構付近で見つかった SK01~09 は、獣骨類の出土も多く、堅穴状遺構に伴う廃棄土坑の可能性が高い。出土土器からその傾向をつかみ（第 250 表）、堅穴状遺構と同じ出土傾向を持つものを第 294 図に同色で示した。同色のものは同時期の可能性を示している。SK02・03 のように、堅穴状遺構に比較的近い位置に作られるものもあるが、ほとんどのものが少ななれた位置に作られる傾向がみられた。

その他の土坑 (SK10~16) は、その用途が不明である。SK10 と SK14 は同様の断面形状をしており、I 層が遺構直上の包含層Ⅶ層の土である点も同じで、時期や用途が同じ遺構と考えられる。落とし穴的な用途の可能性もあるが、SK10 については、中層より焼土面も検出し、その用途は依然不明である。なお、SK10・SK12・SK13・SK16 については、出土遺物は V 類であり、縄文時代晩期の遺構と考えられる。SK10 については、Ⅲ層から出土した炭化物を利用し放射性年代測定をかけた結果、 ^{14}C 年代 (yrBP) $3,215\pm 20$ の値を得た。

(3) 溝状遺構

検出された溝状遺構は、検出層位から縄文時代後晩期と考えられる。ただし、その用途は判然としない。特に、SD07~15 は、自然に出来た溝の可能性も否定できない。この時期の溝状遺構については、今回は事例の報告のみにとどめ、今後の資料の増加を待ち検討をしてゆきたい。

3 小結 (縄文時代の遺構・遺物)

崩り遺跡南側で集中して見つかった堅穴状遺構や土坑からは、土器や石器を中心として骨製品や未加工の琥珀、獣骨・魚骨・貝類・炭化種子・石器に付着していた残存デンプン粒など様々な自然遺物も見つかった。また、堅穴状遺構から採取した炭化物 4 点を放射性年代測定と樹種同定をかけた結果、一番古い値で、 ^{14}C 年代 (yrBP) $3,940\pm 20$ (SH05 第Ⅶ層・ツツジ属)、一番若い値で $3,380\pm 20$ (SH12 床面サンプル・タブノキの子葉) の値を得たが、その他は概ね 3,500 年前後の値を得た。

土器は、面縄東洞式や嘉徳式 I A 式、嘉徳 II 式などの奄美の在地的要素の強い土器と、松山式や市来式といった九州本土系の土器が様々な組み合わせで共伴する傾向が見られた。このことは、少なくともこれらの土器がほぼ同時期に使用されていたことを示しており、本遺跡がその移り変わりの過渡期の遺跡であるとも評価できるのではないだろうか。

石器に関しては、笠利半島東海岸で出土事例のある有溝砥石が大量に出土したことや、石材に限られて見つかった円形状石器など、特徴ある石器が出土している。石器類については、出土した総点数 11,712 点 (547kg) はすべて島外から持ち込まれたものである。

これらの遺物からは、当時の人々がすでに海を介してかなり頻繁な交流を行っていることをうかがい知ることができる。島と島、人と人とのつながりがすでにこの時代に密であったことが示され、本遺跡の人々が奄美諸島、特に笠利半島と同じ文化圏を共有しつつ、また本土との交わりも持ちながらも独自の文化を形成している様子をうかがうことができる。

堅穴状遺構については、本遺跡の人々が遺構の空間的配置について特別な意識を持っていたという状況は見られなかつ

たが、出土遺物の傾向から遺構を見た場合、大きく 5 期の廃棄時期を想定することができ、また、重複状況からその新旧も確認することができた。しかし、遺物の出土状況からはこれらの廃棄時期に大きな時期差は考えられず、むしろ、計画的な建て替えや廃棄などをさほど期間を置かずに行っていた可能性もみられた。

一方、本遺跡の調査だけでは結論付けられなかったことや不明なものも多かった。例えば、有溝砥石については砥ぐ「目的物」が不明であることやその用途が砥石ではなく「有溝石製品」という可能性を考慮する必要があること、円形石器や石製品の用途の検討、琥珀の産地や経路、またその目的の検討、Ⅷ類土器や泥質土器の取り扱い、デンプン粒などからの植物利用の状況、漁労道具や方法の検討などがあり、今後の課題は多岐にわたる。

本町では、現在でも畑地帯総合整備事業に伴い手久津久地区や荒木中央地区で調査を進めており、縄文時代後期から晩期の遺跡がいくつか見つかっている。現在、これらの報告書を作成するために整理作業を進めているところであり、今後事例の増加が見込まれる。土器の編年や遺構の形状、空間利用などを含め、今回の調査で確認できた状況が、本遺跡だけでみられるものなのか、喜界島の遺跡の特徴となるのか、奄美群島あるいは南西諸島の一部となるのかなど、他域を含め今後の調査結果や報告から検討してゆく必要がある。

第2節 中世の遺構・遺物

1 遺構について

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は41棟復元することができた。ここでは、床面積・構造・建物跡の主軸方向などを中心に、報告した地区ごとにその特徴をまとめることとした。

なお、建物を多く検出した中央部の建物主軸方向を基に分類を行い、主軸方向①～④を以下のように設定した。

主軸方向① (赤色) : N50°～70°W, N20°～40°E

主軸方向② (青色) : N30°～50°W, N40°～60°E

主軸方向③ (緑色) : N10°～30°W, N60°～80°E

主軸方向④ (紫色) : N 0°～10°W, N0°～10°E

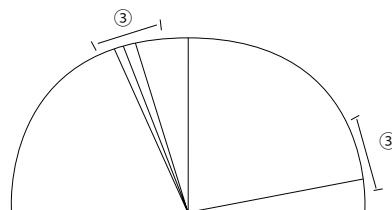
(ア) 北側

北側はV層上面で遺構を検出しており、SB01～SB04が相当する(第296図)。検出できた遺構はⅢ層に相当する埋土で構成されていた。Ⅲ層の包含層からは龍泉窯系青磁無文外反碗や無銘連弁文碗・坏、盤、褐釉陶器などが出土しており概ね14世紀後半頃～15世紀前半頃にかけての遺物が出土してい

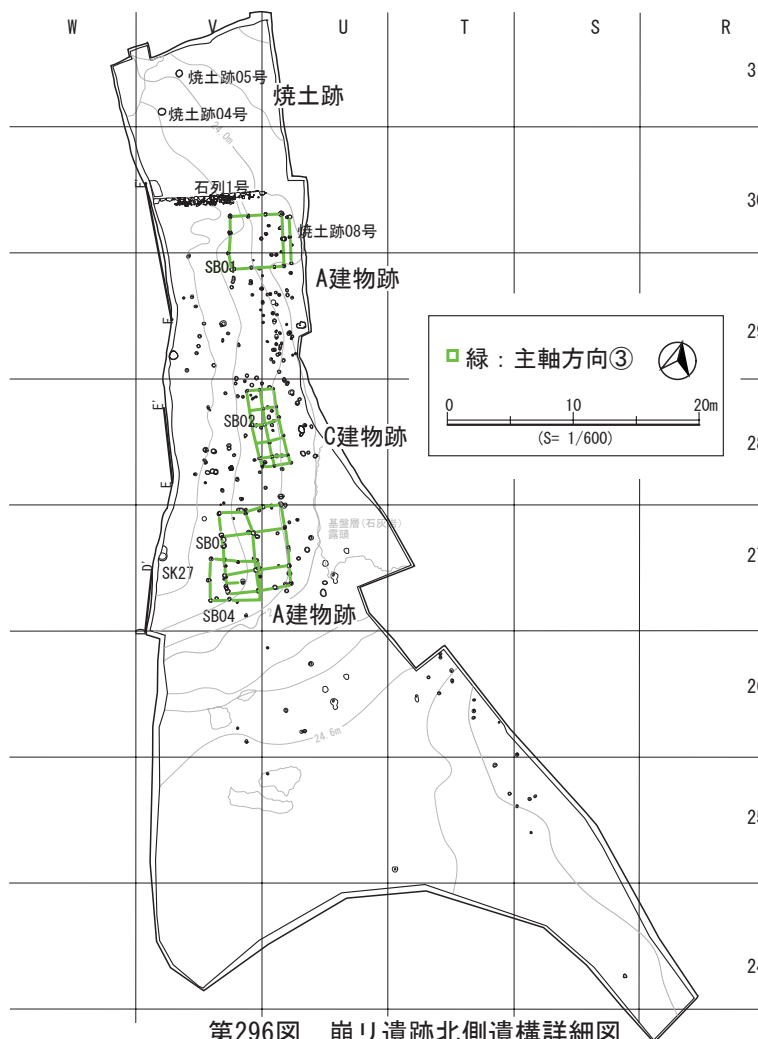
る。ピット内より採取された炭化物の放射性炭素年代測定値(第IV章第5節(3) 試料5～7参照)からも同様の結果が得られていることから、北側は14～15世紀頃に建築された遺構群であることが推定される。

北側で検出したSB01～04は30～40mの範囲内に比較的まとまって検出していることや、類似した建物の主軸方向(主軸方向③)を持つこと(第295図)から、ほぼ同時期に作られたものと考えられる。

SB03とSB04は重複していると想定しているが、SB03の建物の軸線状にSB04の柱が並んでいるところもあり、SB04の西側梁行を庇状に張り出した部分と捉えて1つの建物跡と考えることもできる。



第295図 掘立柱建物跡主軸方向(北側)



第296図 崩り遺跡北側遺構詳細図

(イ) 中央部

中央部はIV層上面で遺構を検出しており、SB05～SB31・41が該当する(第297図)。遺構が集中している範囲が北と中央の2か所に分かれており、それぞれの建物跡がセットになるものと考えられる。北側を範囲1・中央を範囲2と呼称する。

なお、SB31と畝状遺構はそれぞれV層とVI層の検出であり、上記範囲よりも下層から検出していることから遺構が集中する範囲よりも古いことが想定される。

範囲1

範囲1は、SB05～SB17が該当する。建物跡が重複し、前後関係が分かるものはSB06<SB07, SB09<SB10<SB08, SB11<SB08(いずれも古<新)である。

床面積の広さや柱間数などから、A:SB05～07, B:SB08～11・16・17, C:SB12～15の3グループに分けることが

きる(第300図)。

Aは側柱・総柱建物跡が見られ、面積も広いことから母屋と考えられる。

B・Cは付属屋だと考えられる。B建物跡は、1間×2間・1間×1間の建物跡が見られ、奄美・沖縄地方に現存する高倉の形状と類似しており、倉庫的な用途の建物跡と想起させられる。これらは繰り返し同じ場所に建築されており、C建物跡よりも面積が広い。

Cは柱穴径が小さいことや面積が狭い建物群であることから小屋的な用途を想定している。

これら建物跡の主軸方向は①SB05・15・16, ②SB12・17, ③SB06～11・13, ④SB14(第298図)に分けることができ、③軸の建物跡が多く見られる。母屋と考えられる建物の主軸方向が2方向あることから(SB05とSB06・07), 大きく分け



ると2時期に展開していたと考えられる。

AとB・Cの間にはSK17～24がつくられている。土坑内からは貝類が多量に出土しているため、廃棄土坑などとして利用されていたことが考えられる。

また、これら建物群の西側は遺構が無い部分を確認することができ、広場や庭などとして空間利用されていた可能性が考えられる。

範囲2

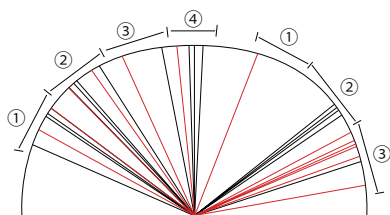
範囲2はSB18～29, 41が該当する。建物跡が重複し、前後関係が分かるものはSB29<SB28のみである。

床面積の広さや柱間数などから、A:SB18・21・22, B:SB19・20・23～29・41の2グループに分けられる(第301図)。範囲2の中でSB21に見られる四面庇状の平面形状を持つ建物跡は、本町城久遺跡で出土した四面庇状建物跡と類似点が多く(第297図)、城久遺跡の調査成果を考えると、この施設が本地区の中心的役割を果たした建物跡であったと推定される。

範囲2はいくつかの建物主軸方向が異なって重複しており、主軸方向から見られる組み合わせは①:SB25～27・29, ②:SB20・21・23・24・28・41, ③:SB19・22, ④:SB18である(第298図)。範囲2の主軸方向②は、SB21を中心施設とした一連の建物群である。主軸方向①は1間×2間の建物跡が多く、繰り返す同じ場所に作られ続けている。

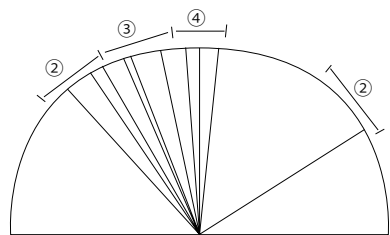
範囲2では範囲1で見られた土坑が見られず、SB21に隣接する部分に土坑墓1・2号が作られている。

SB21～24, SB25～29の隣接する範囲には遺構が無い範囲が15m前後にわたって見られ、範囲1と同様に広場や庭として利用されていた可能性が考えられる。



赤：範囲1，黒：範囲2

第298図 掘立柱建物跡主軸方向(中央部)



第299図 掘立柱建物跡主軸方向(南側)

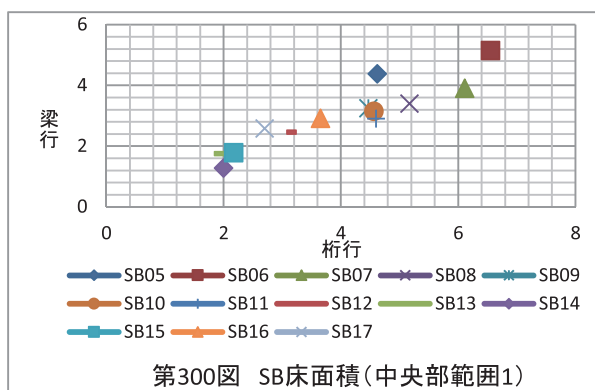
(ウ) 南側

南側は大部分が近世～近現代にかけての畑造成による掘削を受け消失している。遺構は表土直下の地山面で検出しており、点在した状況で出土している。SB32～40が該当する(第303図)。

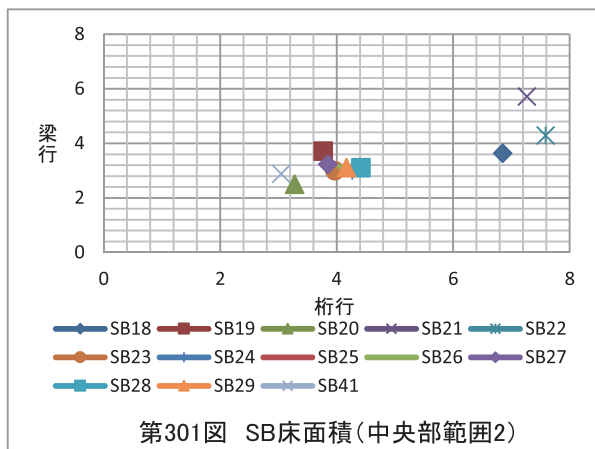
床面積の広さや柱間数などから、A:SB34・39・40, B:SB32・33・35～38の2グループに分けられる(第302図)。SB34とSB35, SB39・40とSB36～38が建物の組み合わせになると考えられる。

主軸方向からは②:SB32・36・38・39・40, ③:SB33・37・40, ④:SB34・35が見られる(第299図)。

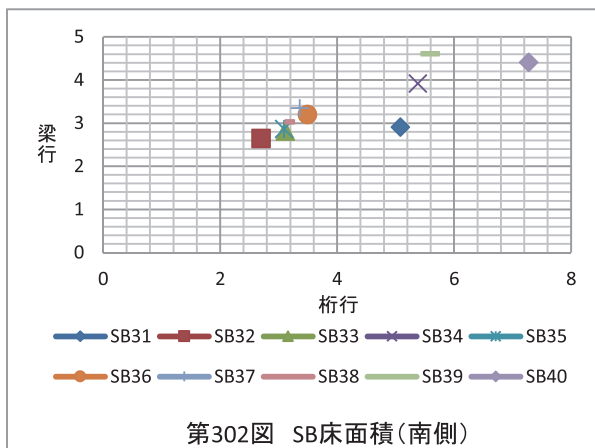
SB36～40の範囲では、SB36+40とSB37・38+39の2時



第300図 SB床面積(中央部範囲1)



第301図 SB床面積(中央部範囲2)



第302図 SB床面積(南側)

期に営まれていたと考えられる。周辺には中央部範囲 1 と類似するように土坑が建物の間に作られている。

南側全体では、SB32・33、SB34・35、SB36～40 のそれぞれ間に遺構がほとんど見られない部分が 10～15m 程度見られる。何らかしらの空間的間仕切りだと想定しているが、中央部分のような広場や庭・道などに当たる部分の可能性も考えられる。

(2) 土坑墓

墓は O-15 区、SB21 の隣接する範囲から 2 基並んで検出している。いずれも類似する大きさで、カムイヤキ壺・焼骨塊を伴っている。

土坑墓 1 号

土坑墓南側には炭化物層が敷かれている上にカムイヤキ壺が 2 個埋納されていた。いずれも上半部が破損していたが、器壁の厚さ・調整などからカムイヤキ A 群に相当すると考えられる。壺周辺には掘り込み面は確認できなかった。

カムイヤキ b の内部には焼骨と焼けてない骨が出土してい

るが、焼骨の表面が白色のものと黒色のものがあることから、火の廻りが悪く、白色の部分だけが高温まで達したと考えられる。カムイヤキを蔵骨器として使用した例は島内で初めての事例である。

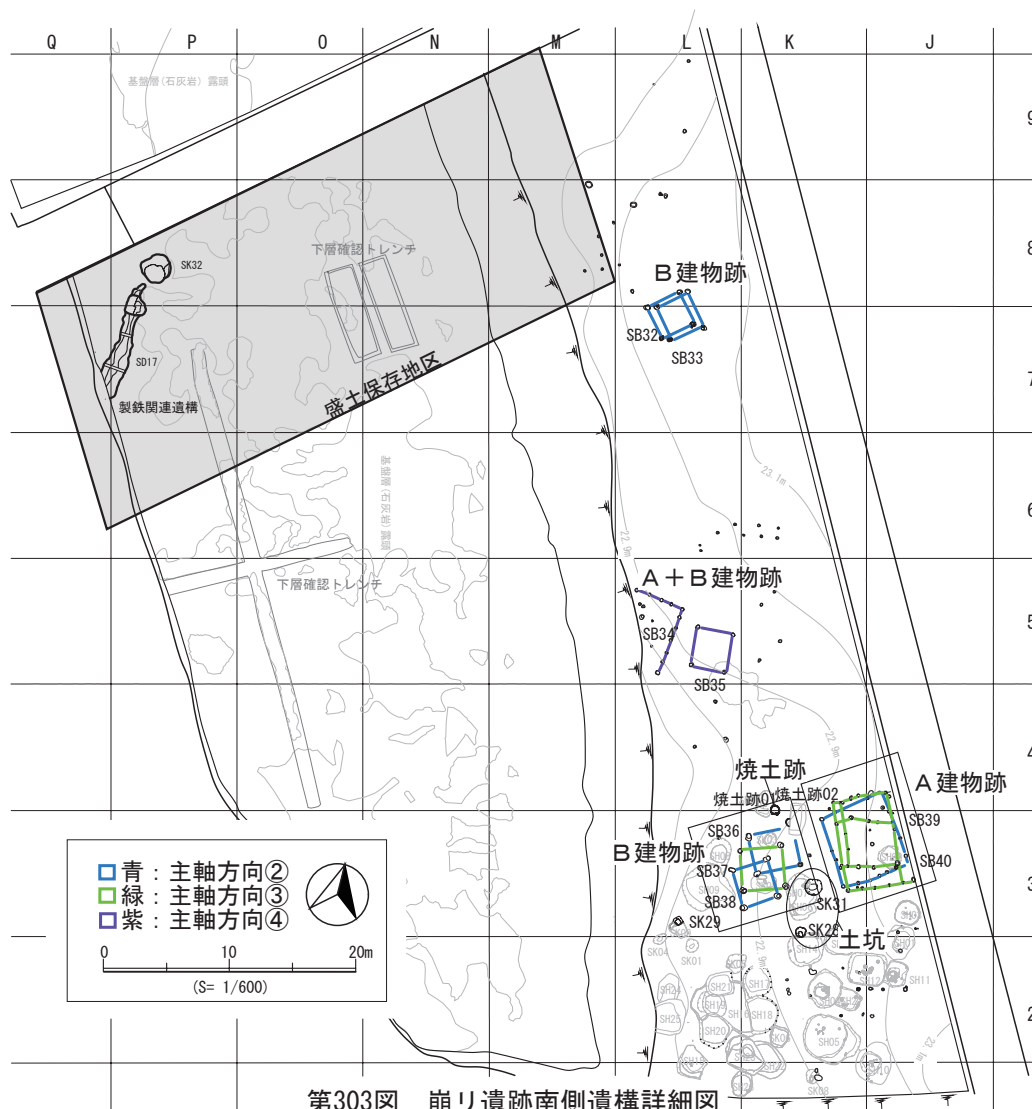
一方、北側には砂混じりの埋土の掘り込み面が見られ、3 体分の人骨片が出土している。2 号人骨は上顎骨のみ、3 号人骨は頭骨～上顎骨にかけて、4 号人骨は焼骨である。2・3 号人骨は土葬、4 号人骨は焼骨が見られることから、土葬と火葬が同時期に行われていたことが分かる資料である。

なお、南側カムイヤキ b の内部の埋土は北側の砂混じり土に酷似しており、埋納する際に砂混じりの土を使用した可能性が想定される。

土坑墓 2 号

土坑西端部に方形に近い不定形状に焼骨が広がっており、カムイヤキ壺・刀子・タカラガイ・ヤコウガイが埋納されていた。土坑墓 1 号とは異なり、こちらは追葬された痕跡は確認できなかった。

土坑墓内でカムイヤキ壺とともに貝類が埋納されているの



第303図 崩り遺跡南側遺構詳細図

は島内初の事例である。また、焼骨の南側にも魚骨と見られる細い骨が散在しており、埋葬された人が海と密接な関係を持っていたと想起させられる資料である。

土坑墓まとめ

崩り遺跡土坑墓 1・2 号はこれまで城久遺跡で見られた焼骨再葬墓と類似する形状・葬法であることから、手久津久地区でも同様の埋葬方法が行われていることが明らかになった。ただし、共通する副葬品はカムイヤキ・鉄製品のみである。白磁や銭貨等は見られないこと、貝類を副葬することや土葬と火葬が併存するという相違点が手久津久地区には認められる。喜界島の中央部（城久遺跡）と南部（手久津久地区周辺の遺跡群）では同じ文化圏ながらも墓に対する意識が異なっていた可能性が考えられる。

(3) 焼土跡

出土した焼土跡は以下の形状に分けることができる。

A：円形でほぼ垂直の掘り込み面を有し、下層に炭化物が堆積するもの（焼土跡 01～05）

B：不定形で焼土と炭化物が混ざるもの（焼土跡 06～08）

C：焼土面のみもの（焼土跡 09）

いずれも遺物がほとんど出土していないため、放射性炭素年代測定を実施した結果、焼土跡 05 で $340 \pm 20\text{BP}$ の測定値が得られている。焼土跡 05 周辺は周辺の状況と調和的であるが、他の A 類例は 11～12 世紀頃と推定している範囲にあり、同じ年代であればやや齟齬が生じる。同様の形状の焼土跡は隣接する川寺遺跡の調査区でも出土しているため、今後測定数を増やし検討していきたい。

(4) 製鉄関連遺構

SD17 から出土した鉄滓は製鉄炉の炉内残留滓・炉外流出滓であることが確認され、製鉄操業のすべての工程の鉄滓が揃っていることや、浸食の進んだ炉壁などから喜界島で製鉄操業を行っていたことが明らかになった。出土した炉壁から、炉の形態は熊本・宮崎・大分等の中世自立炉に系譜を持つと想定されているが、小型であることが指摘されている（第IV章第1節参照）。残念ながら炉本体は確認できなかったが、SD17 周辺にあったことが推察される。SD17 の遺物出土状況から製鉄炉は概ね 11 世紀～12 世紀代に操業されていたと考えられ、中世日本最南端の事例になる。

しかしながら、鉄の操業に必要な①砂鉄などの原料②木炭などの燃料③炉壁などに必要な耐火性の強い粘土などは、現在でも十分に手に入るものではなく、当時も同様であったと想定される。今後製鉄に必要なとされる資材に関する情報の収集を進め、これらの課題を検討していく必要がある。

(5) 畝状遺構

中央部南端のVI層上面で検出した。いずれも等間隔で並んだ状態で検出したが、非常に堆積が浅かった。サンプル土を持ち帰り、フローテーションを実施したが、植物遺体は確認できなかった（第IV章第4節参照）。この遺構が畑であったのかは不明であるが、検出できた部分は畝間にあたることも想定され、今後類例を含め検討していきたい。

2 遺物について

各地区の出土遺物についてグリッドが明らかなものについて集計した（第304図）。また、それぞれの遺物の内訳について第305～307図に示している。

崩り遺跡北側では龍泉窯系青磁が多く出土しているが、滑石がほとんど見られない。反対に中央部・南側では滑石が類似するような比率で出土し、中央部ではカムイヤキ、南側では鉄滓片が多く出土していることが特徴である。

北側

龍泉窯系青磁はIV類、白磁はピロースクタイプが見られることが特徴である。カムイヤキは少ないが、ややB群が多く出土している。出土物全般から報告書冒頭で記載した通り、北部は14世紀中頃～15世紀前半頃を主体とした時期に展開していると想定される。

中央

白磁II・IV・V類、滑石製石鍋、カムイヤキA群を主体とする時期に展開している。カムイヤキが多く消費されている。龍泉窯系青磁やピロースクタイプ白磁碗、カムイヤキB群なども出土しているが、ほとんどが遺構の集中しない辺縁部（Q・R-14・15, R-11・12, L-13区周辺）からの一括資料であるため、遺跡が埋没していく過程の中で混在したものと推定される。

南側

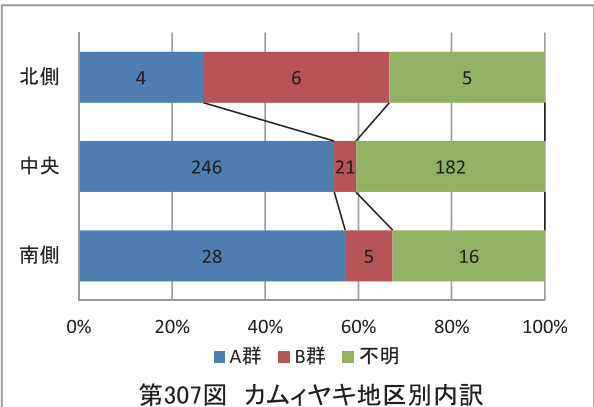
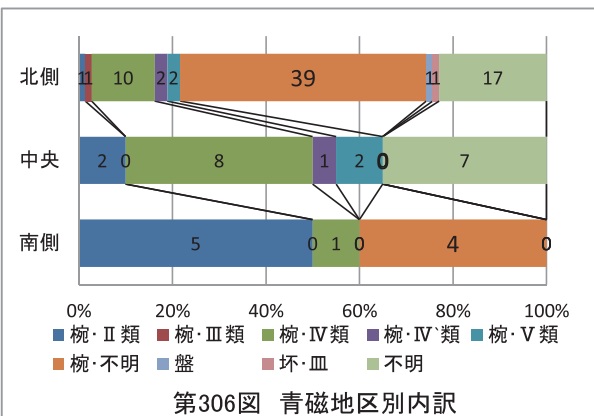
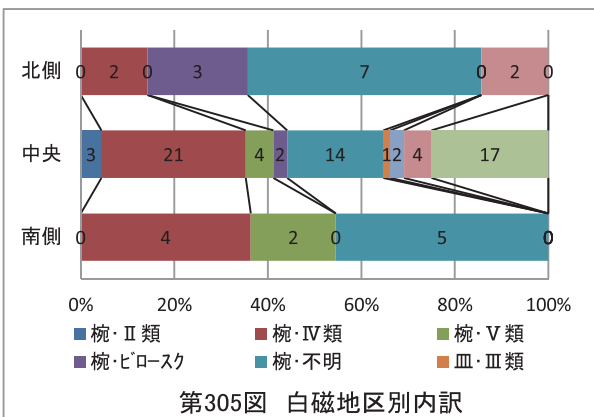
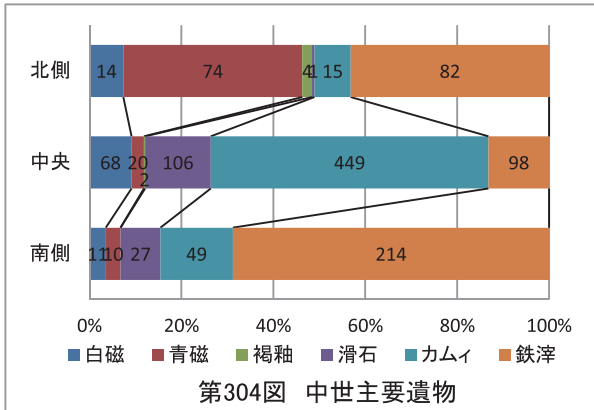
全体的に出土量は少なく、様相が判然としない部分も多いが、中央部と類似するような出土の傾向が見られる。龍泉窯系青磁II類やカムイヤキB群などはO-6・7, N-3・4, M-4区など遺構が残存していない部分に見られ、中央部と同様に埋没していく過程の中で堆積したものと推定される。

出土遺物まとめ

出土した陶磁器は碗類がほとんどで坏・皿・盤がわずかに組み合わさる状況であった。煮沸具は城久遺跡とは異なり土師器甕型土器はわずかにしか確認できないことから、滑石製石鍋や鉄鍋等を使用していたと想定される。カムイヤキは中央区で多用されている。そこでは、1間×1間、1間×2間の倉庫状の建物跡が多数つくられていることから、貯蔵容器などとして利用されていたと想定される。

崩り遺跡は中央・南側を中心とした11世紀後半～12世紀前半と北側の14世紀中頃～15世紀前半の2時期に主要な遺物

群が見られる。13世紀代の龍泉窯系青磁等は包含層中に散見されることから、周辺域に展開している可能性が考えられる。



3 小結 (中世の遺構・遺物)

遺構の変遷

出土遺物や年代測定の結果から、11世紀後半～12世紀前半は中央・南側を利用し、やや間を開けて14世紀後半頃～15世前半頃は遺跡北側を利用していたことが考えられる。今回の調査区では屋敷の組み合わせと思われる遺構のまとまりを検出したことが特徴である。

11～12世紀代の遺構は土層の堆積状況から、SB31が最も古い建物跡と推定される。したがって、同一の主軸方向を持つ建物群(主軸方向①)が若干先行する形で形成されていくことが考えられる。一方、範囲2には四面庇状建物跡が形成される。周辺には同一軸方向の建物跡群(主軸方向②)が展開している。四面庇状建物跡+4・6本柱建物跡の組み合わせは城久遺跡と共通項目が多く、密接な関連性を持った遺構群であると考えられる。

主軸方向②と③は中央部範囲2・南部で建物跡が重複していることから、時間差があることが想定される。SB19からは白磁皿Ⅲ類(太宰府D期(12世紀中頃)準標準磁器)が出土していることから、主軸方向③建物跡が若干後出する形で展開していくと考えられる。主軸方向④はわずかに見られ、具体的な位置づけは難しかった。

中央部の遺構群範囲1は広場+母屋+付属屋+焼土跡+土坑の組み合わせ、範囲2には広場+四面庇+付属屋+墓の組み合わせが見られる。いずれも遺構が無い範囲を中心とした約30m前後の範囲に逆L字状に囲むように展開しており、隣接する範囲に類似する機能を持った建物跡がつくられ続け、屋敷を形成していることがうかがえる。

範囲2は中央部範囲1や南側SB36～40周辺で見られた焼土跡と土坑が見られないことから、四面庇状建物跡周辺は恒常的に生活をする場ではなかった可能性も考えられる。また、墓は四面庇状建物跡群と類似する軸方向を有しており、この建物跡と関連する時期に展開していたと想定される。

南側でも類似する建物跡が作られ、母屋+付属屋+焼土跡+土坑の組み合わせを確認することができる。

母屋に複数の小型建物跡が組み合わせるような状況は、喜界島集落内で見られる屋敷構造と通じる部分も見られ、喜界島屋敷モデルの原型として捉えられる可能性がある(第308図)。

建物の集中範囲からやや外れたP-7・8区では中世日本最南端の製鉄炉が操業される。喜界島の製鉄炉でどれくらいの量の鉄塊ができるのか不明であるが、喜界島で作る意義は沖縄諸島を見据えた動きではなかったかと推察される。沖縄本島ではグスク時代に入ると農耕の普及により人口が増加したとされており、その農耕の普及を支えた背景の一つが鉄器の普及と考えられている(沖縄県教育委員会2003)。その鉄素材をどこから入手したかは不明であったが、喜界島で生産され

た鉄塊は有力な候補の1つと考えられる。沖縄のグスク時代を語る上で鉄は必要不可欠な要素であり、喜界島で製鉄関連遺物が出土した歴史的意義は非常に大きなものがあると考えられる。

14世紀後半頃～15世紀前半頃の遺構は北側に展開している。約40mの範囲内に遺構が多く見られる。11～12世紀に見られた遺構が無い範囲を逆L字状に囲むような遺構のまわりは確認できなかった。

北側は傾斜部分に立地しており、石列1号は地形を平坦にするための土留め的な用途で用いられた可能性も考えられる。この範囲では母屋+付属屋+焼土跡の組み合わせを確認することができる。

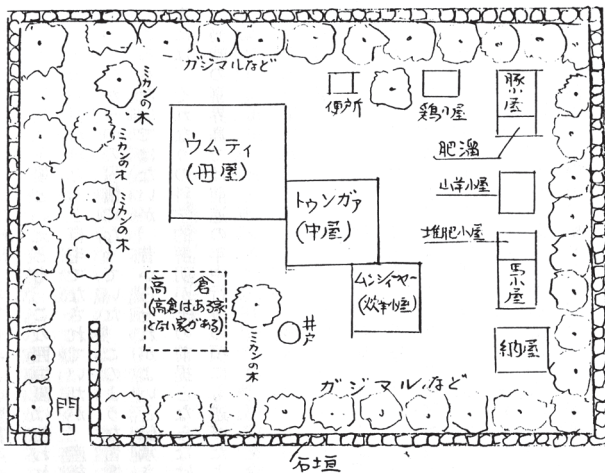
盛土保存範囲

南西諸島や喜界島においても歴史的に重要な成果である製鉄関連遺構を検出した周辺範囲について、該当する範囲を非農用地化して盛土保存を行い、遺跡の現地保存を行うことが協議の結果決定した。

保存を行った約879㎡は2017年3月に町有地として購入を行っている。今後は町有地化した部分を活用し、普及啓発に努めていきたい。

今後の課題

本報告書作成までに手久津久地区の本調査は終了した。この崩り遺跡に隣接する川寺・中増遺跡では中世の大規模な遺構群を確認しており、本報告書内で得られた情報も最終的には総合的に検討していく必要がある。特に鉄に関しては製鉄技術者の出自や技術体系、原料の供給方法、製品の流通方法などの課題が見られ、手久津久地区の遺跡群全体を見通した中で島の内の位置づけや南西諸島内での位置づけも同様に検討を進めていく必要がある。



当時の阿伝における平均的農家の家屋の配置 (作図・著者)

第308図 喜界島阿伝地区に見られる屋敷構造

梶嘉一郎 1990『喜界島風土記』p.195より抜粋

第3節 総括

本町では、平成14～21年度に畑地帯総合整備事業に伴って行われた城久遺跡発掘調査に引き続き、平成23～28年度に手久津久地区、平成25年度からは荒木中央地区の発掘調査が行われている。これまで年間調査面積が20,000㎡を超える大規模な調査が行われてきており、調査からはこれまであまり知られていなかった喜界島や奄美諸島の様相が明らかになりつつある。特に、城久遺跡の調査では、中世における南島の拠点集落ともいえる遺構群が検出され、県内外の研究者の注目を集めた。また、その重要性から、盛土保存区域の大部分が国指定史跡として今年度登録された。このように、本町の遺跡が注目を集めるなか、本遺跡の発掘調査では城久遺跡とほぼ同時期と考えられる中世の遺構や、これまで調査報告の少なかった縄文時代の遺構が見つかった。

本遺跡の発掘調査では、中世の遺構が11世紀末～12世紀と14世紀後半～15世紀前半の大きく2時期に分かれ、前者の遺構が中央部に、後者が北側に広がる様子が見られた。

検出された土坑墓や掘立柱建物跡の主軸方向などから検討を行い、建物のセット関係や変遷、空間利用といった当時の生活の様子を城久遺跡と比較することもでき、島内における中世の文化的様相の可能性のひとつを示すことができたことは大きな成果だと言える。また、製鉄関連遺構の検出については、今後喜界島の歴史的評価や奄美・沖縄の歴史理解に大きく関わる可能性のある重要な発見であった。

縄文時代後期～晩期の遺構は主に遺跡南側に集中して見られた。住居址と考えられる堅穴状遺構からは土器や石器が主に出土し、これらの遺物からは当時の人々の海を介した大きな動きが見えつつある。のちに、製鉄を行い、中世における南島の拠点と評価される城久遺跡が喜界島に築かれた歴史的な流れを理解するためには、それ以前の様相を理解することが必要不可欠である。しかし、これまで喜界島の中世以前の調査報告は少なく、「中世喜界島に“突然”南島の拠点が置かれた」という印象を与えかねない状況であった。本遺跡の縄文時代の出土遺物からは、喜界島が九州本島や近隣の島々との盛んな交流の様子が見受けられ、古くからよく知られた島であった可能性が見えつつある。

このように、本調査からは縄文・中世の喜界島の様相をうかがい知ることのできる様々な成果が上がった。しかしながら、縄文・中世ともに本遺跡の調査だけでは結論付けることができなかったことも多く、検討課題は多岐にわたる。冒頭に述べたとおり、現在でも喜界島では畑地帯総合整備事業に伴った大規模な発掘調査が続いている。調査が終了し、整理作業中である中増遺跡や川寺遺跡からは城久遺跡と同規模と考えられる中世集落跡、荒木中央地区の調査では縄文時代後期～晩期と考えられる大規模な集落跡も見つかっている。これらの遺跡は順次報告書を刊行してゆく予定であるが、本報

告書で提示した諸問題や検討課題の更なる検討、また、縄文時代から中世に至るまでの喜界島の歴史的流れや南西諸島における喜界島の位置付けと変遷等を、その可能性を踏まえながら検討を続けてゆく必要がある。

註1 今岡照喜氏のご教授による。

註2 「C-6 ぐい上包下」出土。資料の閲覧は瀬戸内町立図書館・郷土館鼎氏のご厚意による。

引用・参考文献

伊藤真二

2000 『琉球縄文文化の基礎的研究』 未完成考古学叢書2

2008 『琉球縄文土器（前期）』 『総覧 縄文土器』 小林達雄先生古稀記念企画 p.814-829

2011 「先史琉球社会の段階的展開とその要因—貝塚時代前I期仮説—」 『先史・原始時代の琉球列島—ヒトと景観—』 高宮広土・伊藤真二編 考古学リーダー19 p.43-60

沖縄県教育委員会 2003 『沖縄県史 各論編2 考古』

鹿児島県教育委員会

1984 『長浜金久遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (31)

1988 『下山田II遺跡・和野トフル墓』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (45)

1988 『長浜金久第II遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (46)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

1993 『星塚遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (7)

2008 『荒木貝塚・和早地遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (19)

笠利町教育委員会 1979 『宇宿貝塚』 鹿児島県笠利町文化財調査報告書

上屋久教育委員会 1981 『一湊松山遺跡』 上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告

河口貞徳 1974 「奄美における土器文化の編年について」、『琉大史学 第6号』 p.25-77

喜界町教育委員会

1987 『ハンタ遺跡』 喜界町文化財調査報告

1987 『先山遺跡』 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 (1)

2006~2011 『城久遺跡群』 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書 (8~14)

北野堪重郎・森幸一郎 2011 「和泊町西原海岸遺跡の概要」 『奄美考古』 第6号 p.59-68

熊本大学文学部考古学研究室

1983 『ケジ遺跡・コピロ遺跡・辺留窪遺跡』 研究室活動報告書 15

1986 『手広遺跡（概報）』 研究室活動報告書 20

拵嘉一郎 1990 『喜界島風土記』

瀬戸哲也ほか 2007 「沖縄における貿易陶磁研究」 『沖縄埋文研究 5』

新里亮人 2014 「前4期における奄美諸島の土器様相」 『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』 琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷にかかる実証的研究 研究論集第1集 p.73-83

住用村教育委員会 1984 『サモト遺跡 (2)』 住用村文化財調査報告 No.2

太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一』

知名町教育委員会 2006 『住吉貝塚』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書 (10)

堂込秀人 2004 「南九州・奄美・沖縄の旧石器から縄文時代の考古学の課題」 『20年の成果と今後の課題』 第5回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表資料 p.1-18

日本貿易陶磁研究会 2014 『琉球列島の貿易陶磁』 第35回日本貿易陶磁研究会（沖縄大会）発表要旨・資料集

本橋恵美子 1988 「八丈島倉和遺跡における条溝砥石について」 『史学研究集録第13号』 國學院大學日本史学専攻大学院会 p.31-58

南種子町教育委員会 1993 『松原遺跡』 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)

宮下健司 1983 「有溝砥石」 『縄文文化の研究7 道具と技術』 p.164-181